破戒

島崎藤村

青空文庫

この書の世に出づるにいたりたるは、函館にある秦慶治氏、及び信濃にある神津猛氏のたまものなり。労作終るの日にあたりて、このものがたりを二人の恩人のまへにさゝぐ。

第壹章

(一)

蓮華寺れんげじでは下宿を兼ねた。瀬川丑松うしまつが急に転宿やどがへを思ひ立つ

て、借りることにした部屋といふのは、其蔵裏くらつゞきにある二階の角のところ。寺は信州下しもみのちごほり水内郡飯山町二十何ヶ寺の一つ、真宗に附属する古刹こせつで、丁度其二階の窓に倚より凭かつて眺めると、銀杏いんげいの大木をへだ経て、飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の仏教の地、古代を眼め前のまへに見るやうな小都会、奇異な北国風の屋造やづくり、板葺の屋根、または冬期の雪除ゆきよけとして使用する特別の軒のきびさし庇ひさしから、ところ／＼に高くあは顕はれた寺院と樹木の梢まで――すべて旧めかしい町の光景ありさまが香の烟けぶりの中に包まれて見える。

たゞ一ひとときは際目立つて此窓から望まれるものと言へば、現に丑松が奉職して居る其小学校の白く塗つた建築物たてものであつた。

丑松がやどがへ転宿やどがへを思ひ立つたのは、実は甚だ不快に感ずることが

今の下宿に起つたからで、尤も賄でも安くなければ、誰も斯様な部屋に満足するものは無からう。壁は壁紙で張りつめて、それが煤けて茶色になつて居た。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、何となく世離れた、静寂な僧坊であつた。それがまた小学教師といふ丑松の今の境遇に映つて、妙に侘しい感想を起させもする。

今の下宿には斯ういふ事が起つた。半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て来た大日向といふ大尽、飯山病院へ入院の為とあつて、暫時腰掛に泊つて居たことがある。入院は間もなくであつた。もとより内証はよし、病室は第一等、看護婦の肩に懸つて長い廊下を往つたり来たりするうちには、自

然のづと豪奢がうしやが人の目にもついて、誰しつとが嫉妬うはさで噂うはさするともなく、
『彼あれは穢ゑた多ただ』といふことになつた。忽たちち多くの病室つたはへ伝つたつて、
患者しやは総そう立たち。『放逐しして了しまへ、今直いまぐ、それが出来ないとあら
ば吾われ儕し挙こつて御免ごめんを蒙まかる』と腕うで捲まくりして院長おびやを脅おびすといふ騒
動さわぎ。いかに金かね尽づくでも、この人種へんしゆの偏執へんしゆには勝かたれない。ある
日の暮くれ、籠かごに乗のせられて、夕闇ゆふぐらの空そらに紛まれて病院びやういんを出でた。籠かごは其そ
儘のままもとの下宿かどへ昇あぎ込まれて、院長いんちやうは毎まい日のやうに來きて診察しんさつす
る。さあ今度は下宿かどのものが承知じやうちしない。丁度つとめ丑松うしまつが一日いちにちの勤務くわむ
を終おつて、疲つかれて宿しゆくへ歸かへつた時は、一同いどう『主かみ婦さんを出だせ』と喚わめき
立てるところ。『不浄ふじやうだ、不浄ふじやうだ』の罵詈ののりは無遠慮むゑんりよな客きやくの口唇くちびる
を衝ついて出でた。『不浄ふじやうだとは何なにだ』と丑松うしまつは心こころに憤いつて、蔭かげなが

らあの大日向のふしあはせ不なげ幸いを憐んだり、道理いはれのないこの非人扱ひを慨なげいたりして、穢多の種族の悲惨な運命を思ひつゞけた——丑松もまた穢多なのである。

見たところ丑松は純粹な北部の信州人——佐久さくちひさがた小県あたりの岩石の間に成長したわかもの壯年わかものの一人とは誰の目にも受取れる。正教員といふ格につけられて、学力優等の卒業生として、長野の師範校を出たのは丁度二十二のとし年齢としの春。社よのなか会よのなかへ突出される、直に丑松はこの飯山へ来た。それから足掛三年目の今日、丑松はたゞ熱心な青年教師として、飯山の町の人に知られて居るのみで、實際穢多である、新平民であるといふことは、誰一人として知るものが無かつたのである。

『では、いつ引越していらつしやいますか。』

と声をかけて、入つて来たのは蓮華寺の住職の匹つれあひ偶。年の頃五十前後。茶色小紋の羽織を着て、瘦せた白い手に珠数ずずを持ち乍ながら、丑松の前に立つた。土地の習ならはし慣から『奥様』と尊敬あがめられて居る斯この有髪うはつの尼は、昔者として多少教育もあり、都会みやこの生活も万まんざら更知らないでも無いらしい口の利き振であつた。世話好きな性質を額にあらはして、微な声で口癖のやうに念仏して、対手あひての返事を待つて居る様子。

其時、丑松も考へた。明日あすにも、今夜にも、と言ひたい場合ではあるが、さて差当つて引越しするだけの金が無かつた。實際持合せは四十銭しかなかつた。四十銭で引越しの出来よう筈も無い。

今の下宿の払ひもしなければならぬ。月給は明後日あさつてでなければ渡らないとすると、否いやでも応でも其迄待つより外はなかつた。

『斯うしませう、明後日の午後ひるすぎといふことにしませう。』

『明後日?』と奥様は不思議さうに相手の顔を眺めた。

『明後日引越すのは其様そんなに可笑をかしいでせうか。』丑松の眼は急に輝いたのである。

『あれ——でも明後日は二十八日ぢやありませんか。別に可笑いといふことは御座ございませんがね、私はまた月が變つてから来いらつしやるかと思ひましてサ。』

『むゝ、これはおほきに左様さうでしたなあ。実は私も急に引越しを思ひ立つたものですから。』

と何気なく言消して、丑松は故意わざと話頭はなしを変へて了しまつた。下宿の出来事は烈しく胸の中を騒がせる。それを聞かれたり、話したりすることは、何となく心に恐しい。何か穢多いっに關したことになる、毎時いっもそれを避けるやうにするのが是男の癖である。

『なむあみだぶ。』

と口の中で唱へて、奥様は別に深く掘つて聞かうともしなかつた。

(二)

蓮華寺を出たのは五時であつた。学校の日課を終ると、直ぐ其

足で出掛けたので、丑松はまだ勤務つとめの儘みなりの服装で居る。白墨と塵ほこり埃こりとで汚れた着古しの洋服、書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇こわきに抱へて、それに下駄穿げたばき、腰弁当。多くの労働者が人中で感ずるやうな羞恥はぢ——そんな思を胸に浮べ乍ら、鷹たかしやう匠やう町の下宿の方へ歸つて行つた。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群つて居た。中には立ちとゞまつて丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそひそ立話をして居るのもある。

『彼処あそこへ行くのは、ありやあ何だ——むゝ、教員か』と言つたやうな顔付をして、酷はなはだしい軽蔑けいべつの色あらはを顕あらはして居るのもあつた。是あそこが自分等の預つて居る生徒の父兄であるかと考へると、浅猿あさましくもあり、腹立たしくもあり、遽にはかに不愉快になつてすたすた歩き初

めた。

本町の雑誌屋は近頃出来た店。其前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くやうに張出してあつた。かねて新聞の広告で見
て、出版の日を楽しみにして居た『懺悔録』——肩に猪子蓮太郎氏
著、定価までも書添へた広告が目につく。立ちどまつて、其人の
名を思出してさへ、丑松はもう胸の踊るやうな心地がしたのであ
る。見れば二三の青年が店頭みせさきに立つて、何か新しい雑誌でも獮あさ
つて居るらしい。丑松は色の褪あせたズボンの袖囊かきしの内へ手を突込
んで、人知れず銀貨を鳴らして見ながら、幾度か其雑誌屋の前を
往つたり来たりした。兎とに角かく、四十銭あれば本が手に入る。しか
し其を今茲こゝで買つて了へば、明日は一文無しで暮さなければなら

ぬ。転やどがへ宿の用意もしなければならぬ。斯ういふ思想かんがへに制せられて、一旦は往きかけて見たやうなものゝ、やがて、復また引返した。ぬつと暖簾のれんを潜つて入つて、手に取つて見ると——それはすこし臭気にほひのするやうな、粗悪な洋紙に印刷した、黄色い表紙に『懺悔録』としてある本。貧しい人の手にも触れさせたいといふ趣意から、わざと質素な体裁を拵えらんだのは、是このほん書の性質をよく表して居る。あゝ、多くの青年が読んで知るといふ今の世の中に、飽くことを知らない丑松のやうな年頃で、どうして読まず知らずに居ることが出来よう。智識は一種の饑渴ひもじさである。到頭四十銭を取出して、欲ほしいと思ふ其本を買求めた。なけなしの金とはいひ乍ながら、精神こゝろの慾には替へられなかつたのである。

『懺悔録』を抱いて——買つて反つて丑松は氣の衰頹おとろへを感じ乍ら、下宿をさして歸つて行くと、不図ふと、途中で学校の仲間に出逢であつた。一人は土屋銀之助と言つて、師範校時代からの同窓の友。一人は未だま極ごくく年若な、此頃準教員に成つたばかりの男。散歩とは二人のぶら〜やつて来る様子でも知れた。

『瀬川君、大層遅いぢやないか。』

と銀之助は洋杖ステッキを鳴し乍ちかづら近ちかづいた。

正直で、しかも友達思ひの銀之助は、直に丑松の顔色を見て取つた。深く澄んだ目付は以前の快活な色を失つて、言ふに言はれぬ不安の光を帯びて居たのである。『あゝ、必定きつと身体からだの具合でも悪いのだらう』と銀之助は心に考へて、丑松から下宿を探しに行

つた話を聞いた。

『下宿を？ 君はよく下宿を取替へる人だねえ——此頃あそこ
の家へ引越したばかりぢやないか。』

と毒の無い調子で、さも心から出たやうに笑つた。其時丑松の
持つて居る本が目についたので、銀之助は洋杖を小脇に挟んで、
見せろといふ言葉と一緒に右の手を差出した。

『是かね。』と丑松は微笑みながら出して見せる。

『むゝ、「懺悔録」か。』と準教員も銀之助の傍に倚添ひながら
眺めた。

『相変らず君は猪子先生のものが好きだ。』斯う銀之助は言つて、
黄色い本の表紙を眺めたり、一寸内部を開けて見たりして、『さ

うく新聞の広告にもあつたツけ——へえ、斯こん様な本かい——斯様な質素な本かい。まあ君のは愛読を通り越して崇拜の方だ。はゝゝゝ、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。嘸さぞかしました聞かせられることだらうなあ。』

『馬鹿言ひたまへ。』

と丑松も笑つて其本を受取つた。

夕ゆふもや靄あかりの群は低く集つて来て、あそこでも、こゝでも、最も早うち

らく灯あかりが点く。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すといふ話をして、この友達と別れたが、やがて少すこ許行つて振返つて見ると、

銀之助は往来の片隅に佇た立ずんだ儘ま、熟じつと是方こちを見送つて居た。半町ばかり行つて復た振返つて見ると、未だ友達は同じところに佇

立んで居るらしい。夕餐ゆふげの煙は町の空を籠めて、悄然しよんぼりとした友達の姿も黄昏たそがれて見えたのである。

(三)

鷹匠町の下宿近く来た頃には、鉦かねの音が遠近をちこちの空に響き渡つた。寺々の宵の勤行おつとめは始まつたのであらう。丁度下宿の前まで来ると、あたりを警いましめる人足の声も聞えて、提灯ちやうちんの光に宵闇の道を照し乍ら、一挺ちやうの籠が昇がれて出るところであつた。あゝ、大尽が忍んで出るのであらう、と丑松は憐あはんで、默然もくねんとして其処に突立つて見て居るうちに、いよく其とは附添の男で知れた。

同じ宿に居たとは言ひ乍ら、つひぞ丑松は大日向を見かけたことが無い。唯附添の男ばかりは、よく藁の纏びんなぞを提げて、出たり入つたりするところを見かけたのである。その雲を突くやうな大男が、今、尻端折りで、主人を保護したり、人足を指図したりする甲斐々々しき。穢多の中でも卑賤いやしい身分のものと見え、其処に立つて居る丑松を同じ種族やからとは夢にも知らないで、妙に人を憚はぶるやうな様子して、一寸会あ釈やくし乍ら側を通りぬけた。門口に主か婦みさん、『御機嫌よう』の声も聞える。見れば下宿の内は何となく騒々しい。人々は激昂したり、憤慨したりして、いづれも聞えよがしに罵つて居る。

『難ありがた有うぞんじます——そんなら御気をつけなすつて。』

とまた主婦は籠の側へ駈寄つて言つた。籠の内の人は何とも答へなかつた。丑松は黙つて立つた。見る／＼昇かつがれて出たのである。

『ざまあ見やがれ。』

これが下宿の人々の最後に揚げた凱歌であつた。

丑松がすこし蒼あをざめた顔をして、下宿の軒を潜つて入つた時は、未だ人々が長い廊下むらに群つて居た。いづれも感情を制おさへきれないといふ風で、肩を怒らして歩くもあり、板の間を踏み鳴らすもあり、中には塩を掴んで庭に蒔ま散らす弥次馬もある。主婦はひうちい燧し石しを取出して、清浄きよめの火と言つて、かち／＼音をさせて騒いだ。

哀憐あはれみ、恐怖おそれ、千々の思は烈しく丑松の胸中を往来した。病院

から追はれ、下宿から追はれ、其残酷な待遇と恥辱とをうけて、黙つて昇がれて行く彼の^あ大尽の運命を考へると、嘸籠^{さげ}の中^なの人は悲慨^{なげき}の血涙^{なんだ}に噎^{むせ}んだであらう。大日向の運命は臆^{やが}てすべ^たての穢多の運命である。思へば他^{ひたごと}事では無い。長野の師範校時代の^代から、この飯山に奉職の身となつたまで、よくまあ自分は平氣の平左で、普通の人と同じやうな量見で、危いとも恐しいとも思はずに通り越して来たものだ。斯^かうなると胸に浮ぶは父のことである。父といふのは今、牧夫をして、烏帽子^{えぼし}ヶ嶽^{だけ}の麓^{ふもと}に牛を飼つて、隱者のやうな寂しい生^{しやうがい}涯^{がい}を送つて居る。丑松はその西^{にし}乃^{いり}入^り牧場を思出した。その牧場の番小屋を思出した。

『阿爺^{おとつ}さん、阿爺^{おとつ}さん。』

と口の中で呼んで、自分の部屋をあちこちくと歩いて見た。
不^ふ図^と父の言葉を思出した。

はじめに丑松が親の膝^{しつか}下を離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるといふ風で、さま／＼な物語をして聞かせたのであった。其時だ——一族の祖先のことも言ひ聞かせたのは。東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のやうに、朝鮮人、支那人、露^{ロシア}西亞人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人の末とは違ひ、その血統は古^{むかし}の武士の落^{おちうど}人から伝つたもの、貧苦こそすれ、罪惡の為に穢れたやうな家族ではないと言ひ聞かせた。父はまた添^{つけた}付して、世に出て身を立てる穢多の子の秘訣——唯一つの希望^{のぞみ}、唯一つの方法^{てだて}、それは身の素性を隠すより外に

無い、『たとへいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅めぐりあはうと決して其とはうちあはうちあけるな、一旦の憤怒いかり悲哀かなしみに是戒このいましめを忘れたら、其時こそ社よのなか会から捨てられたものと思へ。』斯う父は教へたのである。

一生の秘訣とは斯の通り簡単なものであつた。『隠せ。』——
戒はこの一語ひとことで尽きた。しかし其頃はまだ無我夢中、『阿爺おやぢが何を言ふか』位に聞流して、唯もう勉強が出来るといふ嬉しさに家を飛出したのであつた。楽しい空想の時代は父の戒も忘れ勝ちに過ぎた。急に丑松は少年こどもから大人ちかづに近いたのである。急に自分のことが解つて来たのである。まあ、面白い隣の家から面白くない自分の家へ移つたやうに感ずるのである。今は自分から隠さう

と思ふやうになつた。

(四)

あふのけさまに畳の上へ倒れて、暫時しばらく丑松は身動きもせず
考へて居たが、臆やがて疲労つかれが出て眠ねて了しまつた。不図目が覚めて、部
屋の内を見廻した時は、点つけて置かなかつた筈の洋燈ランプが寂しさう
に照して、夕飯の膳も片隅に置いてある。自分は未だ洋服の儘ま。
丑松の心地には一時間余も眠つたらしい。戸の外には時雨しぐれの降り
そゞぐ音もする。起き直つて、買つて来た本の黄色い表紙を眺め
乍ら、膳を手前へ引寄せて食つた。飯櫃おはちの蓋を取つて、あつめ飯

の臭氣におひを嗅かいで見ると、丑松は最早もう嘆息して了つて、そこくにして膳おしやを押遣つたのである。『懺悔録』を披ひろげて置いて、先づ残りの卷煙草まきたばこに火を点けた。

この本の著者——猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社会の『新しい苦痛』を表白あらはすと言はれて居る。人によると、彼あのを男をとこほど自分を吹ふいちやう聴ちやうするものは無いと言つて、妙に毛嫌するやうな手合もある。成程なるほど、其筆にはいつも一種の神経質があつた。

到底蓮太郎は自分を離れて説話はなしをすることの出来ない人であつた。しかし思想が剛健で、しかも觀察の精緻せいじを兼ねて、人を吸引ひきつける力の壮さかんに溢あふれて居るといふことは、一度其著述を読んだもの、誰しも感ずる特色なのである。蓮太郎は貧民、労働者、または新

平民等の生活状態を研究して、社会の下層を流れる清水に掘りあ
 てる迄は倦まず撓まず努力めるばかりでなく、また其を読者の前
 に突着けて、右からも左からも説明して、吞込めないと思ふこ
 とは何度繰返しても、読者の腹の中に置かなければ承知しないと
 いふ遣方であつた。尤も蓮太郎のは哲学とか経済とかの方面か
 ら左様いふ問題を取扱はないで、寧ろ心理の研究に基礎を置い
 た。文章はたゞ岩石を並べたやうに思想を並べたもので、露骨
 などところに反つて人を動かす力があつたのである。

しかし丑松が蓮太郎の書いたものを愛読するのは唯其丈の理
 由からでは無い。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎
 といふ人物が穢多の中から産れたといふ事實は、丑松の心に深い

感動を与へたので——まあ、丑松の積りでは、ひそか隠に先輩として慕つて居るのである。同じ人間であり乍ら、自分等ばかり其そんな様に輕いべつ蔑される道理が無い、といふ烈しい意気込を持つやうになつたのも、実はこの先輩の感化であつた。斯ういふ訳から、蓮太郎の著述といへば必ず買つて読む。雑誌に名が出る、必ず目を通す。読めば読む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるやうな気がした。穢多としての悲しい自覚はいつの間にか其頭を擡もちあげたのである。

今度の新著述は、『我は穢多なり』といふ文句で始めてあつた。其中には同族の無智と零落とが活きた画のやうに描いてあつた。其中には多くの正直な男をとこ女をんなが、たゞ穢多の生れといふばかり

で、社会から捨てられて行く光景ありさまも写してあつた。其中には又、著者の煩悶の歴史、歎うれし哀かなしい過去の追おもひ想、精神の自由を求め、しかも其が得られないで、不調和な社会の為くるしに苦みぬいた懐うたがひたがひの昔むかし語がたりから、朝空を望むやうな新しい生涯に入る迄——
 疑うたがひの昔むかし語がたりから、朝空を望むやうな新しい生涯に入る迄——
 熱心な男性をとこの鳴すゝり咽なきが声を聞くやうに書きあらはしてあつた。

新しい生涯——それが蓮太郎には偶然な身をつまづきから開けたのである。生れは信州高遠の人。古い穢多の宗いへ族がらといふことは、丁度長野の師範校に心理学の講師として来て居た頃——丑松がまだ入学しない以前まへ——同じ南信の地方から出て来た二三の生徒の口から泄もれた。講師の中に賤民の子がある。是噂が全校へ播ひろつた時は、一同驚愕おどろきと疑うたがひ心とで動揺した。ある人は蓮太郎の

人物を、ある人はその容貌ようぼうを、ある人はその学識を、いづれも穢多の生れとは思はれないと言つて、どうしても虚言うそだと言張るのであつた。放逐、放逐、声は一部の教師仲間の嫉妬しつとから起つた。嗚呼、人種の偏執といふことが無いものなら、『キシネフ』で殺される猶太人ユダヤじんもなからうし、西洋で言囃いははやす黄禍の説もなからう。無理が通れば道理が引込むといふ斯世このの中に、誰が穢多の子の放逐を不当だと言ふものがあらう。いよく蓮太郎が身の素性を自白して、多くの校友に別離わかれを告げて行く時、この講師の為におもひやりなんだな同情的の涙を流すものは一人もなかつた。蓮太郎は師範校の門を出て、『学問の為の学問』を捨てたのである。

この当時の光景ありさまは『懺悔録』の中に精くはしく記載してあつた。

丑松は身につまされるかして、幾度か読みかけた本を閉ぢて、目を瞑つて、やがて其を読むのは苦しくなつて来た。同情は妙なもので、反つて底意を汲ませないやうなことがある。それに蓮太郎の筆は、面白く読ませるといふよりも、考へさせる方だ。終には丑松も書いてあることを離れて了つて、自分の一生ばかり思ひつゞけ乍ら読んだ。

今日まで丑松が平和な月日を送つて来たのは——主に少年時代からの境遇にある。そもくは小諸の向町（穢多町）の生れ。北佐久の高原に散布する新平民の種族の中でも、殊に四十戸ばかりの一族の『お頭』と言はれる家柄であつた。獄卒と捕吏とは、維新前まで、先祖代々の職務であつて、父はその監督の報酬

として、租税を免ぜられた上、別に俸米ふちをあてがはれた。それ程の男であるから、貧苦と零落との為め小県郡の方へ家を移した時にも、八歳の丑松を小学校へやることは忘れなかつた。丑松が根津村づむらの学校へ通ふやうになつてからは、もう普通の児童こどもで、誰もこの可憐な新入生を穢多の子と思ふものはなかつたのである。最後に父は姫子ひめこ沢の谷間たにあひに落着いて、叔父夫婦も一緒に移り住んだ。異かはつた土地で知るものは無し、強しひて是方こちらから言ふ必要もなし、といつたやうな訳で、終しまひには慣れて、少年の丑松は一番早く昔を忘れた。官費の教育を受ける為に長野へ出掛ける頃は、たゞ先祖の昔話としか考へて居なかつた位で。

斯ういふ過去の記憶は今丑松の胸の中に復活いきかへした。七つ八つ

の頃まで、よく他の小供に調戯からかはれたり、石を投げられたりした、其恐怖おそれの情はふたゝび起つて来た。朦朧おぼろげながらあの小諸の向町に居た頃のことを思出した。移住する前に死んだ母親のことなどを思出した。『我は穢多なり』——あゝ、どんなに是一句が丑松の若い心を搔かき乱みだしたらう。『懺悔録』を読んで、反かへつて丑松はせつない苦痛くるしみを感じずるやうになつた。

第貳章

(一)

毎月二十八日は月給の渡る日とあつて、学校では人々の顔付も殊ことに引立つて見えた。課業の終を告げる大鈴が鳴り渡ると、男をとこ

をんな

女の教員はいづれも早々に書物を片付けて、受持々々の教室を

出た。悪戯いたづら盛りの少年の群は、一時に溢れて、其騒しさ。弁当

草履を振廻し、『ズツク』の鞆を肩に掛けたり、風呂敷包を背負しよ

つたりして、声を揚げ乍ながら歸つて行つた。丑松もまた高等四年の

一組を済まして、左みぎ右ひだりに馳せちがふ生徒の中を職員室へと急

いだのである。

校長は応接室に居た。斯人このは郡視学が変ると一緒にこの飯山へ
転任して来たので、丑松や銀之助よりも後から入つた。学校の方

から言ふと、二人は校長の小舅こじうとにあたる。其日は郡視学と二三の町会議員とが参校して、校長の案内で、各教場の授業を少許すこしづゝ観た。郡視学が校長に与へた注意といふは、職員しやくいんの監督、日々に教案の整理、黒板机腰掛などの器具の修繕、又は学生の間に行する『トラホオム』の衛生法等、主に児童教育の形式に關した件ことであつた。応接室へ歸つてから、一同雑談で持切つて、室内に籠る煙草たばこの烟けぶりは丁度白い渦うづのやう。茶でも出すと見えて、小使は出たり入つたりして居た。

この斯校長に言はせると、教育は則ち規則であるのだ。郡視学の命令は上官の命令であるのだ。もとゞ軍隊風に児童を薰陶くんたうしたといふのが斯人の主義で、日にち々の挙動も生活も凡すべて其から割

出してあつた。時計のやうに正確に——これが座右の銘でもあり、生徒に説いて聞かせる教訓でもあり、また職員一同を指揮する時の精神でもある。世間を知らない青年教育者の口癖に言ふやうなことは、無用な人生の裝飾かざりとしか思はなかつた。是主義で押通して来たのが遂に成功して——まあすくなくとも校長の心地こころもちだけに成功して、功績表彰の文字を彫刻した名誉の金牌きんぱいを授与されたのである。

丁度その一生の記念が今応接室の机の上に置いてあつた。人々の視線は燦然さんぜんとした黄金の光輝ひかりに集つたのである。一人の町会議員は其金質を、一人は其重量めかたと直徑さしわたしとを、一人は其見積りの代価を、いづれも心に商量したり感嘆したりして眺めた。十八

金、直さしわたし徑まじ九分、重量めかた五匁、代価凡そ三十円——これが人々の終しまひに一致した評価で、別に添へてある表彰文の中には、よく教育の施設をなしたと書いてあつた。県下教育の上に貢献するところすくなからずと書いてあつた。『基金令第八条の趣旨に基き、金牌を授与し、之を表彰す』とも書いてあつた。

『実に今回のことは校長先生の御名誉ばかりぢや有ません、吾信州教育界の名誉です。』

と髯ひげの白い町会議員は改つて言つた。金縁眼鏡の議員は其尾に附いて、

『就きましては、有志の者が寄りまして御祝の印ばかりに粗酒を差上げたいと存じますが——いかゞでせう、今晚三浦屋迄おいで御出を

願へませうか。郡視学さんも、何卒^{どうか}まあ是非御同道を。』

『いや、左様^{さう}いふ御心配に預りましたは実に恐縮します。』と校長は倚^い子を離^すれて挨拶した。『今回のことは、教育者に取りましても此上もない名誉な次第で、非常に私も嬉^{うれ}敷^{しく}思つては居るのですが——考へて見ますと、是ぞと言つて功績のあつた私ではなし、実は斯ういふ金牌などを頂戴して、反^{かへ}つて身の不肖を恥づるやうな次第で。』

『校長先生、左様^{さう}仰つて下さつては、使に來た私共が困ります。』と瘦せぎすな議員が右から手を擦^もみ乍ら言つた。

『御辞退下さる程の御馳走は有ませんのですから。』

と白^{しら}髯^{ひげ}の議員は左から歎願した。

校長の眼は得意と喜よろこ悦びとで火のやうに輝いた。いかにも心中の感情を包みきれないといふ風で、胸を突出して見たり、肩ゆすを動つて見たりして、聽やがて郡視学の方へ向いて斯う尋ねた。

『どうですな、貴方あなたの御都合は。』

と言はれて、郡視学は鷹揚おうやうな微笑ほゑみを口元に湛たへ乍ら、

『折角せつかく皆さんが彼様あ言つて下さる。御厚意を無にするのは反つて失礼でせう。』

『御ごもつとも尤もつともです——いや、それではいづれ後刻御目に懸つて、御礼を申上げるといふことにしませう。何卒どうか皆さんへも宜敷よろしく仰つて下さい。』

と校長は丁寧ていねいに挨拶した。

實際、地方の事情に遠いものは斯校長の現在の位置を十分會得することが出来ないであらう。地方に入つて教育に従事するもの、第一の要件は——外でもない、斯校長のやうな凡俗な心づかひだ。曾て学校の窓で想像した種々さま／＼の高尚な事を左様さういつ迄も考へて、俗悪な趣味を嫌いとひ避けるやうでは、一日たりとも地方の学校の校長は勤まらない。有力者の家うちなぞに、悦よろこびもあり哀かなしみもあれば、人と同じやうに言ひ入れて、振舞の座には神主坊主と同席に座すゑられ、すこしは地酒の飲みやうも覚え、土地の言葉も可笑をかしくなく使用つかへる頃には、自然と學問を忘れて、無教育な人にも馴な染じむものである。賢いと言はれる教育者は、いづれも町會議員なぞに結托して、位置の堅固を計るのが普通だ。

帽子を執とつて歸つて行く人々の後に隨いて、校長はそこ迄見送つて出た。臆やがて玄関で挨拶して別れる時、互に斯ういふ言葉を取と替りかした。

『では、郡視学さんも御誘ひ下すつて、学校から直に御出を。』
『恐れ入りましたなあ。』

(二)

『小使。』

と呼ぶ校長の声は長い廊下に響き渡つた。

生徒はもう歸つて了つた。教場の窓は皆な閉つて、運動場うんどうばに

テニス
庭球する人の影も見えない。急に周囲そこいらは森閑しんかんとして、時々職員室に起る笑声の外には、寂さみしい静かな風琴の調しらべがとぎれ／＼に二階から聞えて来る位のものであつた。

『へい、何ぞ御用で御座ございますか。』と小使は上草履を鳴らして駈寄る。

『あ、ちよと、気の毒だがねえ、もう一度役場へ行つて催促して来て呉れないか。金銭おかねを受取つたら直に持つて来て呉れ——皆さんも御待兼だ。』

斯う命じて置いて、校長は応接室の戸を開けて入つた。見れば郡視学は巻煙草を燻ふかし乍ら、独りで新聞を読み耽ふけつて居る。『失礼しました。』と声を掛けて、其側そのわきへ自分の椅子を擦寄せた。

『見たまへ、まあ斯この信濃毎日を。』と郡視学は馴なれ々敷しく、『君が金牌を授与されたといふことから、教育者の亀鑑だといふこと迄、
委くは敷しく書いて有ますよ。表彰文は全部。それに、履歴までも。』
『いや、今度の受賞は大変な評判になつて了ひました。』と校長も喜ばしきうに、『何処へ行つても直に其話が出る。実に意外な人迄知つて居て、祝つて呉れるやうな訳で。』

『結構です。』

『これといふのも貴方あなたの御骨折から——』

『まあ其は言はずに置いて貰ひませう。』と郡視学は相手の言葉を遮さへぎつた。『御互様のことですからな。はゝゝゝ。しかし吾党およろこびの中から受賞者を出したのは名誉さ。君の御喜およろこび悦も御察し申す

。』

『勝野君も非常に喜んで呉れましてね。』

『甥をひがですか、あゝ左様さうでしたらう。私の許ところへも長い手紙をよこ

しましたよ。其を読んだ時は、彼あのをどこ男の喜ぶ顔付が目に見える

やうでした。實際、甥は貴方の為を思つて居るのですからな。』

郡視学が甥と言つたのは、検定試験を受けて、合格して、此頃新しく赴任して来た正教員。勝野文平といふのが其男の名である。割合に新参の校長は文平を引立てゝ、自分の味方に附けようとしたので。尤も席順もつとから言へば、丑松は首座。生徒の人望は反つて校長の上にある程。銀之助とても師範出の若手。いかに校長が文平を鼻顧ひいきだからと言つて、二人の位置を動かす訳にはいかない。

文平は第三席に着けられて出たのであつた。

『それに引換へて瀬川君の冷淡なことは。』と校長は一段声を低くした。

『瀬川君?』と郡視学も眉をひそめる。

『まあ聞いて下さい。万更まんざらの他人が受賞したではなし、定めし

瀬川君だつても私の為に喜んで居て呉れるだらう、と斯う貴方な

ぞは御考へでせう。ところが大違ひです。こりやあ、まあ、私が

直接ぢかに聞いたことでは無いのですけれど——又、私に面と向つて、

まさかに其様そんなことが言へもしますまいが——といふのは、教育

者が金牌などを貰つて鬼の首でも取つたやうに思ふのは大間違だ

と。そりやあ成程なるほど人爵の一つでせう。瀬川君なぞに言はせたら

価値ねうちの無いものでせう。然し金牌は表章しるしです。表章が何も難有ありがたくは無い。唯其意味に価値ねうちがある。はゝゝゝゝ、まあ左様さうぢや有ますまいか。』

『どうしてまた瀬川君は其様そんな思想かんがへを持つのだらう。』と郡視学は嘆息した。

『時代から言へば、あるひは吾儕われの方が多少後おくれて居るかも知れません。しかし新しいものが必ずしも好いとは限りませんからねえ。』と言つて校長は嘲あざけつたやうに笑つて、『なにしろ、瀬川君や土屋君が彼様あして居たんぢや、万事私も遣りにくゝて困る。同志の者ばかり集つて、一致して教育事業をやるんででもなけりやあ、到底面白くはいきませんさ。勝野君が首座でもあつて呉

れると、私も大きに安心なんですけれど。』

『そんなに君が面白くないものなら、何とか其処には方法も有さうなものですがあ。』と郡視学は意味ありげに相手の顔を眺めた。

『方法とは?』と校長も熱心に。

『他の学校へ移すとか、後あとがま釜へは——それ、君の気に入つた人を入れるとかサ。』

『そこです——同じ移すにしても、何か口実が無いと——余程そこは巧うまくやらないと——あれで瀬川君はなか／＼生徒間に人望が有ますから。』

『さうさ、過失の無いものに向つて、出て行けとも言はれん。は

ゝゝゝゝ、余りまた細工をしたやうに思はれるのも厭だ。』と言つて郡視学は氣を変へて、『まあ私の口から甥を褒めるでも有ませんが、貴方の為には必定きつと御役に立つだらうと思ひますよ。瀬川君に比べると、勝るとも劣ることは有るまいといふ積りだ。一体瀬川君は何処が好いでせう。どうして彼あ様な教師に生徒が大騒ぎをするんだか——私なんかには薩張さつぱり解らん。他の名譽ひとに思ふことを冷笑するなんて、奈何どういふことがそんならば瀬川君などには難ありがた有たいんです。』

『先づ猪子蓮太郎あたりの思想でせうよ。』

『むゝ——あの穢多か。』と郡視学は顔しかをし洩める。

『あゝ。』と校長も深く歎息した。『猪子のやうな男の書いたも

のが若いものに読まれるかと思へば恐しい。不健全、不健全——今日の新しい出版物は皆な青年の身をあやまる原因もとなんです。その為に畸形かたはの人間が出来て見たり、狂きちがひ見みたやうな男が飛出したりする。あゝ、あゝ、今の青年の思想ばかりは奈何どうしても吾われ儕いに解りません。』

(三)

不図応接室の戸を叩たたく音がした。急に二人は口を噤つぶんだ。復また叩く。『お入り』と声をかけて、校長は倚い子すを離れた。郡視学も振返つて、戸を開けに行く校長の後姿を眺め乍ら、誰、町会議員

からの使ででもあるか、斯う考へて、入つて来る人の様子を見ると——思ひの外な一人の教師、つゞいてあらはれたのが丑松であつた。校長は思はず郡視学と顔を見合せたのである。

『校長先生、何か御用談中ぢや有ませんか。』

と丑松は尋ねた。校長は一寸微笑ほくそんで、

『いえ、なに、別に用談でも有ません——今二人で御噂をして居たところです。』

『実はこの風間さんですが、是非郡視学さんに御目に懸つて、直接に御願ひしたいことがあるさうですから。』

斯かう言つて、丑松は一緒に来た同僚を薦すすめるやうにした。

風間敬けい之進のしんは、時世の為に置去にされた、老朽な小学教員の

一人。丑松や銀之助などの若手に比べると、阿爺おやぢにしてもよい程の年頃である。黒木綿の紋付羽織、垢染あかじみた着物、粗末な小倉の袴を着けて、兢おつく々々郡視学の前に進んだ。下り坂の人は氣の弱いもので、すこし郡視学に冷酷な態度やうすが顕あらはれると、もう妙に固くなつて思ふことを言ひかねる。

『何ですか、私に用事があると仰おつしやるのは。』斯う催促して、郡視学は威丈高あいたけだかになつた。あまり敬之進が躊躇ぐづぐづして居るので、終しまひには郡視学も氣を苛いらつて、時計を出して見たり、靴を鳴らして見たりして、

『奈何どういふ御話ですか。仰つて見て下さらなければ解りませんなあ。』

もどかしく思ひ乍ら椅子を離れて立上るのであつた。敬之進は猶々言ひかねるといふ様子で、

『実は——すこし御願ひしたい件が有まして。』

『ふむ。』

復た室の内は寂として暫時声がなくなつた。首を垂れ乍ら少許慄へて居る敬之進を見ると、丑松は哀憐の心を起さずに居られなかつた。郡視学は最早堪へかねるといふ風で、

『私は是で多忙しい身体です。何か仰ることがあるなら、ずん／＼仰つて下さい。』

丑松は見るに見かねた。

『風間さん、其様に遠慮しない方が可ぢや有ませんか。貴方は退

職後のことを御相談して頂きたいといふんでしたらう。』斯う言つて、やが聴て郡視学の方へ向いて、『私から伺ひます。まあ、風間さんのやうに退職となつた場合には、恩給を受けさして頂く訳に参りませんものでせうか。』

『無論です、そんなことは。』と郡視学は冷かに言放つた。『小學校令の施行規則を出して御覧なさい。』

『そりやあ規則は規則ですけれど。』

『規則に無いことが出来るものですか。身体が衰弱して、職務を執るに堪へないから退職する——其を是方こちらで止める権利は有ません。然し、恩給を受けられるといふ人は、満十五ヶ年以上在職したものに限つた話です。風間さんのは十四ヶ年と六ヶ月にしかな

らない。』

『でも有ませうが、僅か半歳のことで教育者を一人御救ひ下さるとしたら。』

『其そん様なことを言つて見た日にやあ際さいげん涯が無い。何ぞと言ふと風間さんは直に家の事情、家の事情だ。誰だつて家の事情のないものはありやしません。まあ、恩給のことなぞは絶あきら念めて、折せつか角く御静養なさるが可いでせう。』

斯はねつう撥付けられては最早取付く島が無いのであつた。丑松は氣の毒さうに敬之進の横顔を熟みまも視つて、

『どうです風間さん、貴方からも御願ひして見ては。』

『いえ、只今の御話を伺へば——別に——私から御願する迄も有

ません。御言葉に従つて、絶念あきらめるより外は無いと思ひます。』

其時小使が重たさうな風呂敷包を提げて役場から歸つて来た。

斯このしらせを機しほに、郡視学は帽子を執つて、校長に送られて出た。

(四)

男女の教員は広い職員室に集つて居た。其日は土曜日で、月給取の身にとつては反つて翌あすの日曜よりも楽しく思はれたのである。茲こゝに集る人々の多くは、日にち々の長い勤務つとめと、多数の生徒の取扱くたふとに疲れて、さして教育の事業に興味を感じずるでもなかつた。中には児童を忌み嫌ふやうなものもあつた。三種講習を済まして、

及第して、漸く煙草のむことを覚えた程の年若な準教員などは、まだ前途が長いところからして楽しさうにも見えるけれど、既に老朽と言はれて髭ばかり厳しく生えた手合なぞは、述懐したり、物羨みしたりして、外目にも可傷しく思ひやられる。一月の骨折の報酬を酒に代へる為、今茲に待つて居るやうな連中もあるのであつた。

丑松は敬之進と一緒に職員室へ行かうとして、廊下のところで小使に出逢つた。

『風間先生、笹屋の亭主が御目に懸りたいと言つて、先刻から来て待つて居りやす。』

不意を打たれて、敬之進はさも苦々しさうに笑つた。

『何？ 笹屋の亭主？』

笹屋とは飯山の町はづれにある飲食店、農夫の為に地酒を暖めるやうな家で、老朽な敬之進が浮世を忘れる隠れ家といふことは、疾とくに丑松も承知して居た。けふ月給の渡る日と聞いて、酒の貸の催促に來たか、とは敬之進の寂しい苦にが笑わらひで知れる。『ちよツ、学校まで取りに來なくてもよささうなものだ。』と敬之進は独ひとり語ごとのやうに言つた。『いゝから待たして置け。』と小使に言合めて、廳やがて二人して職員室へと急いだのである。

十月下旬の日の光は玻璃窓から射入つて、煙草の烟けぶりに交る室内の空氣を明く見せた。彼処あそこの掲示板の下に一群ひとむれ、是処の時間表わきの側わきに一団ひとかたまり、いづれも口から泡を飛ばして言ひのゝしつて

居る。丑松は室の入口に立つて眺めた。見れば郡視学の甥をひといふ勝野文平、灰色の壁に倚凭よりかかつて、銀之助と二人並んで話して居る様子。新しい艶のある洋服を着て、襟えり飾かざりの好みも煩うるさくなく、すべて適ふさわしい風俗ふうぞくの中に、人を吸引ひきつける敏捷すばしこいところがあつた。美しく撫付なでけた髪の色いろの黒さ。頬の若々やしさ。それには男の鋭い眼付は絶えず物を穿鑿せんさくするやうで、一時いつときも静息やすんでは居られないかのやう。これを銀之助の五分刈頭、顔の色赤々として、血肥りして、形なりも振ふりも閑うはず腕うで捲まくりし乍はなら、談はなしたり笑つたりする肌合はだあひに比べたら、其二人の相違ちがひは奈何どんなであらう。物見高い女教師連の視線はいづれも文平の身に集つた。

丑松は文平の瀟灑こざつぱりとした風采なりふりを見て、別に其を羨む氣に

もならなかつた。たゞ氣懸りなのは、彼あの新教員が自分と同じ地方から来たといふことである。小諸こもろ辺の地理にも委敷くはしい様子から押し考へると、何時いつ何処で瀬川せがわの家の話を聞かまいものでもなし、広いやうで狭い世間の悲しさ、あの『お頭』は今これ／＼だと言ふ人でもあつた日には——無論今となつて其様そのなことを言ふものも有るまいが——まあ万々——それこそ彼教員あのも聞捨てには為しまい。斯う丑松は猜疑うたがひぶか深く推量して、何となく油断がならないやうに思ふのであつた。不安な丑松まなこの眼には種々さまざまな心配の種が映つて来たのである。

聽て校長は役場から来た金の調べを終つた。それ／＼分配するばかりになつたので、丑松は校長を助けて、人々の机の上に十

月分の俸給を載せてやつた。

『土屋君、さあ御土産。』

と銀之助の前にも、五十錢づゝ封じた銅貨を幾本か並べて、外に銀貨の包と紙幣さつとを添へて出した。

『おやく、銅貨を沢山呉れるねえ。』と銀之助は笑つて、『斯こ様んなにあつては持上がりさうも無いぞ。はゝゝゝゝ。時に、瀬川君、けふは御引越が出来ますね。』

丑松は笑つて答へなかつた。傍そばに居た文平は引取つて、

『どちらへか御引越ですか。』

『瀬川君は今夜から精進料理さ。』

『はゝゝゝゝ。』

と笑ひ葬つて、丑松は素早く自分の机の方へ行つて了つた。

毎月のこととは言ひ乍ら、俸給を受取つた時の人々の顔付は又格別であつた。実に男女の教員の身にとつては、労働はたらいて得た収穫を眺めた時ほど愉快に感ずることは無いのである。ある人は紙の袋に封じた儘まの銀貨を鳴らして見る、ある人は風呂敷ふろしきに包んで重たさうに提ひげて見る、ある女教師は又、海老茶袴えびぢやばかまの紐ひもの上から撫なで、人知れず微笑んで見るのであつた。急に校長は椅子を離れて、用事ありげに立上つた。何事かと人々は聞耳を立てる。校長は一つ咳せき払ひして、さて器械的な改つた調子で、敬之進が退職の件ことを報告した。就いては来る十一月の三日、天長節の式の済んだ後あと、この老功な教育者の為に茶話会を開きたいと言出した。

賛成の声は起る。敬之進はすつくと立つて、一礼して、やが聴て拍子の抜けたやうに元の席へ復かへつた。

一同帰り仕度を始めたのは間も無くであつた。男女の教員が敬之進を取とり囲まいて、いろ／＼言ひ慰めて居る間に、ついと丑松は風呂敷包を提ひげさせて出た。銀之助が友達を尋さがして歩いた時は、職員室から廊下、廊下から応接室、小使部屋、昇降口まで来て見ても、もう何処にも丑松の姿は見えなかつたのである。

(五)

丑松は大急ぎで下宿へ歸つた。月給を受取つて来て妙に氣強い

やうな心地こころもちにもなつた。昨日は湯にも入らず、煙草も買はず、早く蓮華寺へ、と思ひあせるばかりで、暗い一日ひとひを過したのである。實際、懷ふとこころ中に一文の小使もなく、笑ふといふ氣には誰がならう。悉すつかり皆下宿の払ひを済まし、車さへ来れば直に出掛けられるばかりに用意して、さて巻煙草に火を点けた時は、言ふに言はれぬ愉快を感じるのであつた。

引越は成るべく目立たないやうに、といふ考へであつた。氣掛りなほ下宿の主婦かみさんの思惑おもほくで——まあ、この突だしぬけ然な転宿やどがへを何と思つて見て居るだらう。何か彼放逐あされた大尽と自分との間には一種の關係があつて、それで面白くなって引越すとも思はれたら奈何どうしよう。あの愚痴な性質から、根彫葉刻ねほりはほりきゝとが間咎とがめて、

何故なぜ引越す、斯う聞かれたら何と返事をしたものであらう。そこがそれ、引越さなくても可いものを無理に引越すのであるから、何となく妙に気が咎とがめる。下手なことを言出せば反つて藪蛇だ。

『都合があるから引越す。』理由は其で沢山だ。斯う種々いろくに考へて、疑つたり恐れたりして見たが、多くの客を相手にする主婦の様子は左様さう心配した程でも無い。さうかうする中に、頼んで置いた車も来る。荷物と言へば、本箱、机、柳行李やなぎがうり、それに蒲団の包があるだけで、道具は一切一台の車で間に合つた。丑松は洋燈ランプを手に持つて、主婦の聲に送られて出た。

斯うして車の後に随ついて、とぼくと二三町も歩いて来たかと思はれる頃、今迄の下宿の方を一寸振返つて見た時は、思はずホ

ツと深い溜息を吐いた。道路は悪し、車は遅し、丑松は静かに一生のうつりかはり変遷を考へて、自分で自分の運命を憐み乍ら歩いた。寂しいとも、悲しいとも、可笑しいとも、何ともかとも名の附けやうのない心地こころもちは烈しく胸の中を往来し始める。追憶おもひでの情は身に迫つて、無限の感慨を起させるのであつた。それは十一月の近いちかづたことを思はせるやうな蕭条せうでうとした日で、湿つた秋の空氣が薄けぶりい烟のやうに町々を引包んで居る。路傍みちばたに黄ばんだ柳の葉はぱら／＼と地に落ちた。

途中で紙の旗を押立てた少年のひとむれ群に出遇つた。音楽隊の物真似、唱歌の勇しさ、笛太鼓も入乱れ、足拍子揃へて面白可笑しく歌つて来るのは何処うちの家の子か——あゝ尋常科の生徒だ。見れ

ば其後に随いて、少年と一緒に歌ひ乍ら、人目も関はずやつて来る上機嫌の酔漢さけよひがある。蹣跚よろことした足元で直に退職の敬之進と知れた。

『瀬川君、一寸まあ見て呉れ給へ——是が我輩の音楽隊さ。』
と指し乍らゆびさ熟柿じゆくしくさ臭い呼吸いきを吹いた。敬之進は何処かで飲んで来たものと見える。指された少年の群は一度にどつと声を揚げて、自分達の可傷あはれな先生を笑つた。

『始めえ——』敬之進は戯れに指揮するやうな調子で言つた。

『諸君。まあ聞き給へ。今日こんにち迄我輩は諸君の先生だつた。明日あすからは最早もつ諸君の先生ぢや無い。そのかはり、諸君の音楽隊の指揮をしてやる。よしか。解つたかね。あはゝゝゝ。』と笑つたか

と思ふと、熱い涙なんだは其顔を伝つて流れ落ちた。

無邪気な音楽隊は、一斉に歓呼を揚げて、足拍子揃へて通過ぎた。敬之進は何か思出したやうに、熟じゅうと其少年の群を見送つて居たが、臆やがて心付いて歩き初めた。

『まあ、君と一緒に其処迄行かう。』と敬之進は身を慄ふるはせ乍ら、『時に瀬川君、まだ斯の通り日も暮れないのに、洋燈ランプを持つて歩くとは奈何どういふ訳だい。』

『私ですか。』と丑松は笑つて、『私は今引越をするところですよ。』

『あゝ引越か。それで君は何処へ引越すのかね。』

『蓮華寺へ。』

蓮華寺と聞いて、急に敬之進は無言になつて了つた。暫時しばらくの間、二人は互に別々のことを考へ乍ら歩いた。

『あゝ。』と敬之進はまた始めた。『実に瀬川君などは羨ましいよ。だつて君、左様さうぢやないか。君などは未だ若いんだもの。前途多望とは君等のことだ。何卒どうかして我輩も、もう一度君等のやうに若くなつて見たいなあ。あゝ、人間も我輩のやうに老込んで了つては駄目だねえ。』

(六)

車は遅かつた。丑松敬之進の二人は互に並んで話しく随いて

行つた。とある町へ差掛かつた頃、急に車夫は車を停めて、冷々とした空気を呼吸し乍ら、額に流れる汗を押拭つた。見れば町の空は灰色の水蒸気に包まれて了つて、僅に西の一方に黄な光が深く輝いて居る。いつもより早く日は暮れるらしい。遽に道路も薄暗くなつた。まだ灯を点ける時刻でもあるまいに、もう一軒点けた家さへある。其軒先には三浦屋の文字が明白と読まれるのであつた。

盛な歓楽の声は二階に湧上つて、屋外に居る二人の心に一層の不愉快と寂寥とを添へた。丁度人々は酒宴の最中。灯影花やかに映つて歌舞の巷とは知れた。三味は幾挺かおもしろい音を合せて、障子に響いて媚びるやうに聞える。急に勇しい太鼓も入つ

た。時々唄に交つて叫ぶやうに聞えるは、はやしかた 方はやしかたの娘の声であらう。これも亦また、招よばれて行く妓こと見え、箱屋一人連れ、つま 棲つま高く取つて、いそくと二人の前を通過とぎた。

客の笑声は手に取るやうに聞えた。其中には校長や郡視学の声も聞えた。人々は飲んだり食つたりして時の移るのも知らないやうな様子。

『瀬川君、大層陽気ぢやないか。』と敬之進は声ひそを潜めて、『や、おほいちぢ 大一座だ。一体こんや今宵は何があるんだらう。』

『まだ風間さんには解らないんですか。』と丑松も聞耳を立て乍ら言つた。

『解らないさ。だつて我輩は何なんにも知らないんだもの。』

『ホラ、校長先生の御祝でさあね。』

『むゝ——むゝ——むゝ、左様さうですかい。』

一曲の唄が済んで、盛な拍手が起つた。また盃の交換やりとりが始つたらしい。若い女の声で、『姉さん、お銚子』などと呼び騒ぐのを聞捨てゝ、丑松敬之進の二人は三浦屋の側わきを横ぎつた。

車は知らない中に前さきへ行つて了つた。次第に歌舞の巷を離れると、太鼓の音も遠く聞えなくなる。敬之進は嘆息したり、沈吟したりして、時々絶望した人のやうに唐突だしぬけに大きな声を出して笑つた。『浮世夢のごとし』——それに勝手な節を付けて、低声に長く吟じた時は、聞いて居る丑松も沈んで了つて、妙に悲しいやうな、可痛いたましいやうな心地こころもちになつた。

『吟声調てうを成さず——あゝ、あゝ、折角せつかくの酒も醒めて了つた。』

と敬之進は嘆息して、獸の呻吟うなるやうな声を出し乍ら歩く。丑松も憐んで、聽て斯う尋ねて見た。

『風間さん、貴方は何処迄行くんですか。』

『我輩かね。我輩は君を送つて、蓮華寺の門前まで行くのさ。』

『門前迄？』

『何故なぜ我輩が門前迄送つて行くのか、其は君には解るまい。しかし其を今君に説明しようとも思はないのさ。御互ひに長く顔を見せて居ても、斯うして親ちかしくするのは昨今だ。まあ、いつか一度、君とゆつくり話して見たいもんだねえ。』

やがて蓮華寺の山門の前まで来ると、ぷいと敬之進は別れて行

つて了つた。奥様は蔵裏くらの外まで出迎へて喜ぶ。車はもうとつくに。荷物は寺男の庄太が二階の部屋へ持運んで呉れた。台所で焼く魚のほひは、蔵裏迄も通つて来て、香の煙に交つて、住慣れすみなない丑松の心に一種異様の感想かんじを与へる。仏に物を供へる為か、本堂の方へ通ふ子坊主もあつた。二階の部屋も窓の障子も新しく張替へて、前に見たよりはずつと心地こころもちが好い。薬湯と言つて、大根の乾葉ひばを入れた風呂なども立てゝ呉れる。新しい膳に向つて、うまさうな味噌汁にほひの香を嗅いで見た時は、第一この寂しげな精しやう舎じやの古壁の内に意外な家庭の温あたゝかさ暖あたたかさを看付けたのであつた。

第参章

(一)

もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校に居る頃から、極く好く気性の合つた友達で、丑松が佐久さくちひ小県さがたあたりの灰色の景色を説き出すと、銀之助は諏訪湖すはこほとりの畔の生れ故郷の物語を始める、丑松が好きな歴史の話をするれば、銀之助は植物採集の興味を、と言つたやうな風に、互ひに語り合つた寄宿舎の窓は二人の心を結びつけた。同窓の記憶はいつまでも若く青々として居る。銀之助は丑松のことを思ふ度に昔を思出して、

何となく時の変遷うつりかはりを忍ばずには居られなかつた。同じ寄宿舎の食堂に同じ引割飯にほひの香を嗅いだ其友達に思ひ比べると、実に丑松の様子の変つて来たことは。あの憂鬱いゆううつ——丑松が以前の快活な性質を失つた証拠は、眼付で解る、歩き方で解る、談話はなしをする声でも解る。一体、何が原因もとで、あんなに深く沈んで行くのだらう。とんと銀之助には合点が行かない。『何かある——必ず何か訳がある。』斯う考へて、どうかして友達に忠告したいと思ふのであつた。

丑松が蓮華寺へ引越した翌日あくるひ、丁度日曜、午後から銀之助は尋ねて行つた。途中で文平と一緒にこけむなつて、二人して苔蒸した石の階段を上ると、咲残る秋草の径みちの突当つたところに本堂、左は

鐘楼、右が蔵裏であつた。六角形に出来た経堂の建築物たてもものもあつて、勾配のついた瓦屋根や、大陸風の柱や、白壁や、すべて過去の壮大と衰頹すゐたいとを語るかのやうに見える。黄ばんだ銀杏いんげいふの樹の下に腰こしを曲め乍ら、余念もなく落葉を掃いて居たのは、寺男の庄太。

『瀬川君は居りますか。』と言はれて、馬鹿丁寧な挨拶。やがて庄太は箒はうきをそこに打捨て、置いて、跣足すあしの儘まで蔵裏の方へ見に行つた。

急に丑松の声がした。あふむいて見ると、銀杏いんげいふに近い二階の窓の障子を開けて、顔を差出して呼ぶのであつた。

『まあ、上りたまへ。』

と復た呼んだ。

(二)

銀之助文平の二人は丑松に導かれて暗い楼はしごだん梯はしごを上つて行つた。秋の日は銀杏の葉を通して、部屋の内へ射しこんで居たので、変色した壁紙、掛けてある軸、床の間に置並べた書物ほんと雑誌たぐひの類まで、すべて黄に反射して見える。冷ひや々々とした空気は窓から入つて来て、斯の古い僧坊の内にも何となく涼爽さはやかな思を送るのであつた。机の上には例の『懺悔録』、読伏せて置いた其本に気がついたと見え、急に丑松は片隅へ押隠すやうにして、白い毛布を座蒲団がはりに出して薦すめた。

『よく君は引越して歩く人さ。』と銀之助は身辺あたりを眺め廻し乍ら言つた。『一度瀬川君のやうに引越す癖が着くと、何度でも引越したくなるものと見える。まあ、部屋の具合などは、先の下宿の方が好きさうぢやないか。』

『何故御引越になつたんですか。』と文平も尋ねて見る。

『どうも彼処あそこの家は喧うちしくつて——』斯かう答へて丑松は平氣を装はうとした。争はれないもので、困つたといふ氣色けしきはもう顔に表れたのである。

『そりやあ寺の方が静は静だ。』と銀之助は一向頓着なく、『何ださうだねえ、先の下宿では穢多おひだが逐出されたさうだねえ。』

『さうく、左様さういふ話ですなあ。』と文平も相槌あひづちを打つた。

『だから僕は斯う思つたのさ。』と銀之助は引取つて、『何か其様な一寸したつまらん事にでも感じて、それで彼下宿あのが嫌に成つたんぢやないかと。』

『どうして?』と丑松は問ひ反した。

『そこがそれ、君と僕と違ふところさ。』と銀之助は笑ひ乍ら、

『実は此頃こなひだ或雑誌を読んだところが、其中に精神病患者のことが書いてあつた。斯うさ。或人が其男の住居すまひの側わきに猫を捨てた。

さあ、其猫の捨ててあつたのが氣になつて、妻君にも相談しないで、其日の中にぶいと他へ引越して了つた。斯ういふ病的な頭脳あたまの人になると、捨てられた猫を見たのが移ひっこし転の動機になるなぞは珍しくも無い、といふ話があつたのさ。はゝゝゝゝ——僕は瀬

川君を精神病患者だと言ふ訳では無いよ。しかし君の様子を見るのに、何処か身体の具合でも悪いやうだ。まあ、君は左様は思はないかね。だから穢多の逐出された話を聞くと、直に僕は彼の猫のことを思出したのさ。それで君が引越したくなつたのかと思つたのさ。』

『馬鹿なことを言ひたまへ。』と丑松は反返つて笑つた。笑ふには笑つたが、然しそれは可笑くて笑つたやうにも聞えなかつたのである。

『いや、戯言ぢやない。』と銀之助は丑松の顔を熟視つた。

『實際、君の顔色は好くない——診て貰つては奈何かね。』

『僕は君、其様な病人ぢや無いよ。』と丑松は微笑み乍ら答へた。

『しかし。』と銀之助は真面目まじめになつて、『自分で知らないで居る病人はいくらも有る。君の身体は変調を来して居るに相違ない。夜寝られないなんて言ふところを見ても、どうしても生理的に異常がある——まあ僕は左様さう見た。』

『左様さうかねえ、左様見えるかねえ。』

『見えるともサ。妄想まうさう、妄想——今の患者の眼に映つた猫も、

君の眼に映つた新平民も、皆みんなな衰弱した神経の見せる幻まぼろし像ささ。

猫が捨てられたつて何だ——下らない。穢多おひだが逐出おひだされたつて何

だ——あたりまへ当然あたりまへ然ぜんぢや無いか。』

『だから土屋君は困るよ。』と丑松は対手あひての言葉ことばを遮さへぎつた。『何い

時つでも君は早呑込だ。自分で斯うだと決めて了ふと、もう他の事

は耳に入らないんだから。』

『すこし左様さういふ気味も有ますなあ。』と文平は如才なく。

『だつて引越し方があんまり唐突だしぬけだからさ。』と言つて、銀之

助は氣を変へて、『しかし、寺の方が反つて勉強は出来るだらう。
』

『以前まへから僕は寺の生活といふものに興味を持つて居た。』と丑

松は言出した。丁度下女の袈裟けさぢ治ぢ（北信に多くある女の名）が湯ゆ
沸わかしを持つて入つて来た。

信州人ほど茶を嗜む手合も鮮少からう。斯ういふ飲料を好むのは寒い山国に住む人々の性来の特色で、日に四五回づゝ集つて飲むことを楽しみにする家族が多いのである。丑松も矢張茶好の仲間には泄れなかつた。茶器を引寄せ、無造作に入れて、濃く熱いやつを二人の客にも勧め、自分も亦茶碗を口唇に押宛て乍ら、香ばしく焙られた茶の葉のほひを嗅いで見ると、急に気分が清々する。まあ蘇生つたやうな心地になる。やがて丑松は茶碗を下に置いて、寺住の新しい経験を語り始めた。

『聞いて呉れ給へ。昨日の夕方、僕はこの寺の風呂に入つて見た。一日働いて疲労れて居るところだつたから、入つた心地は格別さ。明窓の障子を開けて見ると紫苑の花などが咲いてるぢやない

あかりまど

明窓

の障子を開けて見ると紫苑の花などが咲いてるぢやない

か。其時僕は左様思つたねえ。風呂に入り乍ら蟋蟀を聴くな
 んて、成程寺らしい趣味だと思つたねえ。今迄の下宿とは全然
 様子が違ふ——まあ僕は自分の家へでも歸つたやうな心地がした
 よ。』

『左様さなあ、普通の下宿ほど無趣味なものはないからなあ。』
 と銀之助は新しい巻煙草に火を点けた。

『それから君、種々なことがある。』と丑松は言葉を継いで、
 『第一、鼠の多いには僕も驚いた。』

『鼠?』と文平も膝を進める。

『昨夜は僕の枕頭へも来た。慣れなければ、鼠だつて気味が
 悪いぢやないか。あまり不思議だから、今朝其話をしたら、奥様

の言草が面白い。猫を飼つて鼠を捕らせるよりか、自然に任せて養つてやるのが慈悲だ。なあに、食物くひものさへ宛行あてがつて遣やれば、其そ様に悪戯いたづらする動物ぢや無い。吾寺うちの鼠は温順おとなしいから御覽ごらんなさいツて。成程さう左様言はれて見ると、少許すこしも人を懼おそれない。白昼ひるまですら出て遊あそんで居る。はゝゝゝ、寺なかの内の光景けしきは違つたものだと思つたよ。』

『そいつは妙だ。』と銀之助は笑つて、『余程奥様といふ人は變つた婦人をんなと見えるね。』

『なに、それほど變つても居ないが、普通の人よりは宗教的などころがあるさ。さうかと思ふと、吾儕わたしたちだつて高砂たかさごで一緒になつたんです、なんて、其様そのなことを言出す。だから、尼僧あまともつか

ず、大黒だいこくともつかず、と言つて普通の家の細君うちでもなし——ま

あ、門徒寺もんどうでらに日を送る女といふものは僕も初めて見た。』

『外にはどんな人が居るのかい。』斯う銀之助は尋ねた。

『子坊主が一人。下女。それに庄太といふ寺男。ホラ、君等の入つて来た時、庭を掃いて居た男があつたらう。彼あれが左様さうだあね。

誰も彼あのを男とこを庄太と言ふものは無い——皆みんなな「庄馬鹿」と言つ

てる。日に五度ごたびづつ、払あけがた暁、朝八時、十二時、入いりあひ相、夜の十

時、これだけの鐘を撞つくのが彼あのを男とこの勤務つとめなんださうだ。』

『それから、あの何は。住職は。』とまた銀之助が聞いた。

『住職は今留守さ。』

斯う丑松は見たり聞いたりしたことを取交せて話したのであつ

た。しまひ終に、敬之進の娘で、是寺へ貰はれて来て居るといふ、そのお志保の話も出た。

『へえ、風間さんの娘なんですか。』と文平は巻煙草の灰を落し乍ら言つた。『此頃こなひだ一度校友会に出て来た——ホラ、あの人でせう?』

『さうく。』と丑松も思出したやうに、『たしか僕等の来る前の年に卒業して出た人です。土屋君、左様さうだつたねえ。』
『たしか左様だ。』

(四)

其日蓮華寺の台所では、先住の命日と言つて、精進しやうじんもの物を作
 るので多忙いそがしかつた。月々の持齋ぢさいには経を上げ膳を出す習慣ならはしで
 あるが、殊に其日は三十三回忌とやらで、好物の栗飯を炊たいて、
 仏にも供へ、下宿人にも振舞ひたいと言ふ。寺内の若僧の妻まで
 も来て手伝つた。用意の調とつた頃、奥様は台所を他ひとに任せて置い
 て、丑松の部屋へ上つて来た。丑松も、銀之助も、文平も、この
 話好きな奥様の目には、三人の子のやうに映つたのである。昔者
 とは言ひ乍ら、書生の談話はなしも解つて、よく種々いろくなことを知つて居
 た。時々宗教をしへの話なども持出した。奥様はまた十二月二十七日の
 御週忌の光景ありさまを語り聞かせた。其冬の日をとこをんなは男女の檀徒が仏
 の前に集つて、記念の一夜を送るといふ昔からの習慣を語り聞か

せた。説教もあり、読経もあり、御伝抄おでんせうの朗読もあり、十二時には男女一同御夜食の膳に就くなぞ、其御通夜の儀式のさま／＼を語り聞かせた。

『なむあみだぶ。』

と奥様は独語のやうに繰返して、やがて敬之進の退職のことを尋ねる。

奥様に言はせると、今の住職が敬之進の為に尽したことは一通りで無い。あの酒を断つたらば、とは克よく住職の言ふことで、禁酒の証文を入れる迄に敬之進が後悔する時はあつても、またく縊よりが元へ戻つて了ふ。飲めば窮こまるといふことは知りつゝ、どうしても持つた病には勝てないらしい。その為に敷居が高くなつて、

今では寺へも来られないやうな仕末。あの不^{ふしあはせ}幸な父親の為には、どんなにかお志保も泣いて居るとのことであつた。

『左様^{さよう}ですか——いよく退職になりましたか。』

斯う言つて奥様は嘆息した。

『道理で。』と丑松は思出したやうに、『昨日私が是方^{こちら}へ引越して来る時に、風間さんは門の前まで随いて来ましたよ。何故斯うして門の前まで一緒に来たか、それは今説明しようとも思はない、なんて、左様^{さよう}言つて、それからふいと別れて行つて了ひました。随分酔つて居ましたツけ。』

『へえ、吾寺^{うち}の前まで？ 酔つて居ても娘のことは忘れないんでせうねえ——まあ、それが親子の情ですから。』

と奥様は復また深い溜息を吐ついた。

斯はういふ談話はなしに妨さまたげられて、銀之助は思ふことを尽さなかつた。折せ角かく言ふ積りで来て、それを尽さずに帰るのも残念だし、栗飯が出来たからと引留められもするし、夜にでもなつたらば、と斯う考へて、心の中では友達のことばかり案じつゞけて居た。

夕飯は例になく蔵裏くらの下座敷であつた。宵の勤行おつとめも済んだと見えて、給仕は白い着物を着た子坊主がして呉れた。五分心ごぶしんの灯は香の煙に交る夜の空気を照らして、高い天井の下をおもしろく見せる。古壁に懸けてある黄な法衣ころもは多分住職の着るものであらう。変つた室内の光景ありさまは三人の注意を引いた。就中わけても、銀之助は克よく笑つて、其高い声が台所迄も響くので、奥様は若い人達の

話を聞かずに居られなかつた。終にはお志保までも来て、奥様の傍に倚添よりそひ乍ら聞いた。

急に文平は快活らしくなつた。妙に婦人の居る席では熱心になるのが是男の性分で、二階に三人で話した時から見ると、この下座敷へ来てからは声の調子が違つた。天性愛嬌あいけうのある上に、清すいしい艶のある眸ひとみを輝かし乍ら、興に乗つてよもやまの話を初めた時は、確に面白い人だと思はせた。文平はまた、時々お志保の方を注意して見た。お志保は着物の前を搔合せたり、垂れ下る髪の毛を撫付けたりして、人々の物語に耳を傾けて居たのである。

銀之助はそんなことに頓着やがなしで、聽やがて思出したやうに、
『たしか吾儕わたしどもの来る前の年でしたなあ、貴方あなた等の卒業は。』

斯う言つてお志保の顔を眺めた。奥様も娘の方へ振向いた。

『はあ。』と答へた時は若々しい血潮が遽にはかにお志保の頬に上つた。

そのすこし羞恥はぢを含んだ色は一層容貌ひとしほおもばせを娘らしくして見せた。

『卒業生の写真が学校に有ますがね、』と銀之助は笑つて、『彼あのころ

頃から見ると、皆みんなな立派な姉さんに成りましたなあ——どうし

て吾儕わたしどもが来た時分には、まだ鼻涙はなを垂らしてるやうな連中もあつ

たツけが。』

楽しい笑声は座敷の内に溢あふれた。お志保は紅あかくなつた。斯うい

ふ間にも、独り丑松は洋燈ランプの火影ほかげに横になつて、何か深く物を考

へて居たのである。

(五)

『ねえ、奥様。』と銀之助が言つた。『瀬川君は非常に沈んで居ますねえ。』

『左様さ——』と奥様は小首を傾げる。

『一昨々さきをと日、』と銀之助は丑松の方を見て、『君が斯のお寺へ部屋を捜しに来た日だ——ホラ、僕が散歩していると、丁度本町で君に遭遇でつくはしたらう。彼時あのとの君の考へ込んで居る様子と言つたら——僕は暫時しばらくそこに突立つて、君の後姿を見送つて、何とも言ひ様の無い心地こころもちがしたねえ。君は猪子先生の「懺悔録」を持つて居た。其時僕は左様さう思つた。あゝ、また彼の先生あの書いたものな

ぞを読んで、神経を痛めなければ可いがなあと。彼様あいふ本を読むのは、君、可くないよ。』

『何故?』と丑松は身を起した。

『だつて、君、あまり感化を受けるのは可くないからサ。』

『感化を受けたつても可いぢやないか。』

『そりやああい感化なら可いけれども、悪い感化だから困る。見たまへ、君の性質が變つて来たのは、彼の先生のものを読み出してからだ。猪子先生は穢多だから、彼様あいふ風に考へるのも無理は無い。普通の人間に生れたものが、なにも彼の真似あを為なくてもよからう——彼程あ極端に悲まなくてもよからう。』

『では、貧民とか労働者とか言ふやうなものに同情を寄せるのは

不可いかんと言ふのかね。』

『不可と言ふ訳では無いよ。僕だつても、美しい思想だとは思ふさ。しかし、君のやうに、左様考へ込んで了つても困る。何故君は彼様あついふものばかり読むのかね、何故君は沈んでばかり居るのかね——一体、君は今何を考へて居るのかね。』

『僕かい？ 別に左様深さうく考へても居ないさ。君等の考へるやうな事しか考へて居ないさ。』

『でも何かあるだらう。』

『何かとは？』

『何か原因がなければ、そんなに性質の変る筈が無い。』

『僕は是で變つたかねえ。』

『変つたとも。全然まるで師範校時代の瀬川君とは違ふ。彼のあ時分は君、
ずつと快活な人だつたあね。だから僕は斯う思ふんだ——元來君
は鬱ふさいでばかり居る人ぢや無い。唯あまり考へ過ぎる。もうすこ
し他の方面へ心を向けるとか、何とかして、自分の性質を伸ばす
やうに為たら奈何どうかね。此頃こゝなひだから僕は言はう／＼と思つて居た。
實際、君の為に心配して居るんだ。まあ身体の具合でも悪いやう
なら、早く医者に診せて、自分で自分を救ふやうに為るが可いぢや
ないか。』

暫時しばらく座敷の中は寂しんとして話声が絶えた。丑松は何か思出した
ことがあると見え、急に喪心した人のやうに成つて、茫ぼう然ぜんとし
て居たが。やがて気が付いて我に歸つた頃は、顔色がすこし蒼あざざ

めて見えた。

『どうしたい、君は。』と銀之助は不思議さうに丑松の顔を眺めて、『はゝゝゝゝ、妙に黙つて了つたねえ。』

『はゝゝゝゝ。はゝゝゝゝ。』

と丑松は笑ひまぎらは紛して了つた。銀之助も一緒になつて笑つた。奥様とお志保は二人の顔を見比べて、熱心に聞き惚れて居たのである。

『土屋君は「懺悔録」を御読みでしたか。』と文平は談話はなしを引取つた。

『否いゝえ、未だ読まんで見ません。』斯う銀之助は答へた。

『何か彼の猪子といふ先生の書いたものを御覧でしたか——私は

未だ何にも読んで見ないんですが。』

『左様ですなあ、僕の読んだのは「労働」といふものと、それから「現代の思潮と下層社会」——あれを瀬川君から借りて見ました。なかなか好いところが有ますよ、力のある深刻な筆で。』

『一体彼の先生は何処を出た人なんですか。』

『たしか高等師範でしたらう。』

『斯ういふ話を聞いたことが有ましたツけ。彼の先生が長野に居た時分、郷里の方でも兎に角彼様いふ人を穢多の中から出したのは名誉だと言つて、講習に頼んださうです。そこで彼の先生が出掛けて行つた。すると宿屋で断られて、泊る所が無かつたとか。其様なことが面白くなくて長野を去るやうになつた、なんて——』

まあ、師範校を辞めてから、彼の先生も勉強したんでせう。妙な人物が新平民なぞの中から飛出したものですか。

『僕も其は不思議に思つてる。』

『彼様な下等人種の中から、兎に角思想界へ頭を出したなんて、奈何しても私には其理由が解らない。』

『しかし、彼の先生は肺病だと言ふから、あるひは其病氣の為に、彼処まで到つたものかも知れません。』

『へえ、肺病ですか。』

『實際病人は真面目ですからなあ。「死」といふ奴を眼前めのまへに置いて、平素考へて居るんですからなあ。彼の先生の書いたものを見て、何となく斯う人に迫るやうなところがある。あれが

肺病患者の特色です。まあ彼の病気の御蔭で豪く成つた人はいくらもある。』

『はゝゝゝ、土屋君の観察は何処迄も生理的だ。』

『いや、左様笑つたものでも無い。見たまへ、病気は一種の哲学者だから。』

『して見ると、穢多が彼様いふものを書くんぢや無い、病気が書かせるんだ——斯う成りますね。』

『だつて、君、左様釈るより外に考へ様は無いぢやないか——唯新平民が美しい思想を持つとは思はれないぢやないか——はゝゝゝ。』

斯ういふ話を銀之助と文平とが為して居る間、丑松は黙つて、

ランブ洋燈の火を熟視^{みつ}めて居た。自然^{おのづ}と外部^{そと}に表れる苦悶の情は、頬の色^{おも}の若々しさに交つて、一層その男らしい容貌^{おも}を沈鬱^{ちんうつ}にして見せたのである。

茶が出てから、三人は別の話頭^{はなし}に移つた。奥様は旅先の住職の樽^{うはさ}なぞを始めて、客の心を慰める。子坊主は隣の部屋の柱^{もた}に凭^{もた}れて、独りで舟を漕いで居た。台所の庭の方から、遠く寂しく地響^ふのやうに聞えるは、庄馬鹿が米を舂^つく音であらう。夜も更^ふけた。

(六)

友達が歸つた後、丑松は心の激昂^{おき}を制^{おさ}へきれないといふ風で、

自分の部屋の内を歩いて見た。其日の物語、あの二人の言つた言葉、あの二人の顔に表れた微細な感情まで思出して見ると、何となく胸肉むなじの戦慄ふるへるやうな心地がする。先輩の侮辱されたといふことは、第一口惜くやしかつた。賤民だから取るに足らん。斯かういふ無法な言草は、唯考へて見たばかりでも、腹立たしい。あゝ、種族の相違といふ屏わだかまりの前には、いかなる熱い涙も、いかなる至情の言葉も、いかなる鉄槌てつみのやうな猛烈な思想も、それを動かす力は無いのであらう。多くの善良な新平民は斯うして世に知られずに葬り去らるゝのである。

斯この思想かんがへに刺激されて、寢床に入つてからも丑松は眠らなかつた。目を開いて、頭を枕につけて、種々さまざまに自分の一生を考

へた。鼠が復た頭れた。畳の上を通る其足音に妨げられては、猶な々ほく夢を結ばない。一旦吹消した洋燈を細目に点つけて、枕まくらもと頭ちひさを明くして見た。暗い部屋の隅の方に影のやうに動く小な動物の敏捷はしこさ、人を人とも思はず、長い尻尾を振り乍ら、出たり入つたりする其有様は、憎らしくもあり、をかしくもあり、『き、き』と鳴く声は斯の古い壁の内に秋の夜の寂寥さびしさを添へるのであつた。

それからそれへと丑松は考へた。一つとして不安に思はれないものはなかつた。深く注意した積りの自分の行おこなひ為ひとが、反つて他に疑はれるやうなことに成らうとは——まあ、考へれば考へるほど用意が無さ過ぎた。何故なぜ、あの大日向が鷹匠町の宿から放逐された時に、自分は静止じつとして居なかつたらう。何故なぜ、彼様あんなに泡を

食つて、斯の蓮華寺へ引越して来たらう。何故、あの猪子蓮太郎の著述が出る度に、自分は其を誇り顔に吹聴ふいちやうしたらう。何故、彼様に先輩の弁護をして、何か斯う彼の先輩と自分との間には一種の關係でもあるやうに他に思はせたらう。何故、彼の先輩の名前を彼様他の前あゝひとで口に出したらう。何故、内証で先輩の書いたものを買はなかつたらう。何故、独りで部屋の内うちに隠れて、読みたい時に密そつと出して読むといふ智慧が出なかつたらう。

思ひ疲れるばかりで、結局まとまりは着かなかつた。

一夜は斯ういふ風に、褥しとねの上で慄ふるへたり、煩悶はんもんしたりして、暗いところを彷徨さまよつたのである。翌日あくるひになつて、いよく丑松は深く意こゝろを配くわるやうに成つた。過去すぎさつた事は最早もう仕方が無いとし

て、是これから将来さきを用心しよう。蓮太郎の名——人物——著述——
一切、彼の先輩あに關したことは決して他の前ひとで口に出すまい。斯
う用心するやうに成つた。

さあ、父の与へた戒いましめは身に染しみ々々と徹こたへて来る。『隠せ』——
——実にそれは生いき死しにの問題だ。あの仏弟子が墨染の衣に守りやつ窶やつれ
る多くの戒も、是この一戒に比べては、寧いっそ何でもない。祖師を捨
てた仏弟子は、墮落と言はれて済む。親を捨てた穢多の子は、墮
落でなくて、零落である。『決してそれとは告白うちあけるな』とは堅
く父も言ひ聞かせた。これから世に出て身を立てようとするもの
が、誰が好んで告白うちあけるやうな真似を為よう。

丑松も漸やうやく二十四だ。思へば好い年とし齡だ。

噫。^{あゝ}いつまでも斯うして生きたい。と願へば願ふほど、余計に穢多としての切ない自覚が湧き上るのである。現世の歡樂は美しく丑松の眼に映じて来た。たとへ奈何^{いか}なる場合があらうと、大切な戒ばかりは破るまいと考へた。

第四章

(一)

郊外は収穫^{とりのいれ}の為に忙しい^{せは}時節であつた。農夫の群はいづれも

小屋を出て、午後の労働に従事して居た。田の面の稲は最早悉もうすつか皆刈り乾して、すでに麦さへ蒔付けたところもあつた。一年ひととせの骨折の報酬むくいを収めるのは今である。雪の来ない内に早く。斯うして千曲川の下流に添ふ一面の平野は、宛然あだかも、戦場の光景ありさまであつた。

其日、丑松は学校から帰ると直に蓮華寺を出て、平素ふだんの勇氣をとりかへ回復す積りで、何処へ行くといふ目的めあても無しに歩いた。新町の町はづれから、枯々な桑畠の間を通つて、思はず斯この郊外の一角へ出たのである。積上げた『藁わらによ』の片蔭よりかゝに倚凭よりかゝつて、霜枯れた雑草の上に足を投出し乍ら、肺の底までも深く野の空氣を吸入れた時は、僅に蘇生いきかへつたやうな心地こゝろもちになつた。見れば男女の

農夫。そこに親子、こゝに夫婦、黄に揚る塵埃ほこりを満身に浴びながら、我劣らじと奮闘をつゞけて居た。粃もみを打つ槌つちの音は地に響いて、稲扱いねこく音に交つて勇しく聞える。立ちのぼる白い煙もところ／＼。雀の群は時々空に舞揚つて、騒しく鳴いて、軋やがてまたぱつと田の面に散乱れるのであつた。

秋の日は烈しく照りつけて、人々には言ふに言はれぬ労苦を与へた。男は皆な頬ほつかぶ冠かぶり、女は皆な編あみがさ笠がさであつた。それはめづらしく乾燥はしやいだ、風の無い日で、汗は人々の身体を流れたのである。野に満ちた光を通して、丑松は斯の労働の光景ありさまを眺めて居ると、不ふと図と、倚よりかゝ凭かゝつた『藁わらによ』の側わきを十五ばかりの一人の少年が通る。日に焼けた額と、柔嫩やはらかな目付とで、直に敬之進せがれの悴

と知れた。省吾しやうごといふのが其少年の名で、丁度丑松が受持の高
等四年の生徒なのである。丑松は其容貌かほつきを見る度に、彼の老朽な
教育者を思出さずには居られなかつた。

『風間さん、何処どちらへ？』

斯う声を掛けて見る。

『あの、』と省吾は言淀いひよどんで、『母さんが沖（野外）に居やす
から。』

『母さん？』

『あれ彼処に——先生、あれが吾家うちの母さんでござす。』

と省吾は指差して見せて、すこし顔を紅あかくした。同僚の細君の
噂うはさ、それを丑松も聞かないでは無かつたが、然し眼前めのまへに働いて

居る女が其人とはすこしも知らなかつた。古びた上被、茶色の帯、盲目縞の手甲、編笠に日を避けて、身体を前後に動かし乍ら、々と稲の穂を扱落して居る。信州北部の女はいづれも強健い氣象のものばかり。克く働くことに掛けては男子にも勝る程であるが、教員の細君で野面にまで出て、烈しい氣候を相手に精出すものも鮮少い。是も境遇からであらう、と憐んで見て居るうちに、省吾はまた指差して、彼の槌を振上げて粃を打つ男、彼は手伝ひに來た旧からの出入のもので、音作といふ百姓であると話した。母と彼男との間に、箕を高く頭の上に載せ、少許づつ粃を振ひ落して居る女、彼は音作の『おかた』（女房）であると話した。丁度其女房が箕を振る度に、空殼の塵が舞揚つて、

人々は黄色い烟を浴びるやうに見えた。省吾はまた、母の傍わきに居る小娘を指差して、彼が異はらちがひ母の妹のお作であると話した。

『君の兄弟は幾いくたり人あるのかね。』と丑松は省吾の顔を熟視まもり乍ら尋ねた。

『七人。』といふ省吾の返事。

『随分多勢だねえ、七人とは。君に、姉さんに、尋常科の進さんに、あの妹に——それから？』

『まだ下に妹が一人と弟が一人。一番年長うへの兄さんは兵隊に行つて死にやした。』

『む、左様さうですか。』

『其中で、死んだ兄さんと、蓮華寺へ貰はれて行きやした姉さん

と、私わしと——これだけ母さんが違ちがひやす。』

『そんなら、君やお志保さんの真ほん実たうの母さんは？』

『最早も居うやせん。』

斯ふういふ話をして居ると、不ふ図と継ま母はの呼よ声こゑを聞きつつけて、ぷいと省吾は駈か出でして行いつつて了しまつた。

(二)

『省吾や。お前めはまあ幾いく歳つに成なつたら御手伝おんてでんひする積たりだよ。』
と言いふ細君こずみの声は手に取るやうに聞きえた。省吾は継母おそを懼おそれると
いふ様子ようすして、おづおくくと其前そのまへに立たつたのである。

『考へて見な、もう十五ぢやねえか。』と怒を含んだ細君の聲は復た聞えた。『今日は音さんまで御頼申して、斯うして塵埃だらけに成つて働^{かま}けて居るのに、それがお前の目には見えねえかよ。母さんが言はねえだつて、さつさと学校から歸つて来て、直に御手伝ひするのが当^{あたりまへ}然^だ。高等四年にも成つて、未^まだ^{いなごと} 蠱^{いなごと}捕りに夢中に成つてるなんて、其^{そん}様なものが何処にある——与太坊主め。』

見れば細君は稻^{いねこ}扱^こく手を休めた。音作の女房も振返つて、氣の毒さうに省吾の顔を眺め乍ら、前掛を^{しめなほ}直したり、身体^{ほこり}の塵埃を掃つたりして、^{やが}廳^がて顔に流れる^{あぶらあせ}膏^{あぶらあせ}汗^{あぶらあせ}を拭いた。^{むしろ}蕙^{むしろ}の上の粉は黄な山を成して居る。音作も亦た槌の長柄に身を支へて、うんと

働いた腰を延ばして、濃く青い空気を呼吸した。

『これ、お作や。』と細君の児を叱る声が出た。『どうして其様な悪戯するんだい。女の児は女の児らしくするもんだぞ。真個に、どいつもこいつも碌なものはありやあしねえ。自分の子ながら愛想が尽きた。見ろ、まあ、進を。お前達二人より余程御手伝ひする。』

『あれ、進だつて遊んで居やすよ。』といふのは省吾の声。

『なに、遊んでる？』と細君はすこし声を震はせて、『遊んでるものか。先刻から御子守をして居やす。其様なお前のやうな役に立たずぢやねえよ。ちよつ、何ぞと言ふと、直に口答へだ。父さんが過多甘やかすもんだから、母さんの言ふことなぞ少許も聞き

やしねえ。真個ほんとに凶太づない口の利きやうを為る。だから省吾は嫌ひさ。すこし是方こちらが遠慮して居れば、何処迄いゝ氣に成るか知れやしねえ。あゝ必定きつとまた蓮華寺へ寄つて、姉さんに何か言付けて来たんだらう。それで斯様こんなに遅くなつたんだらう。内証で隠れて行つて見る——酷いぞ。』

『奥様。』と音作は見兼ねたらしい。『何卒どうかまあ、今日こんにちのところは、私わしに免じて許して下さるやうに。ない（なあと同じ農夫の言葉）、省吾さん、貴方あんたもそれぢやいけやせん。母さんの言ふことを聞かねえやうなものなら、私だつて提棒さげぼう（仲裁）に出るのはもう御免だから。』

音作の女房も省吾の側へ寄つて、軽く背を叩たいて私語さぐやいた。臙

て女房は其手に槌の長柄を握らせて、『さあ、御手伝ひしやすよ。』と亭主の方へ連れて行つた。『どれ、始めずか（始めようか）』と音作は省吾を相手にし、槌を振つて粃を打ち始めた。

『ふむ、よう。』の掛声も起る。細君も、音作の女房も、復た仕事に取懸つた。

因はからず丑松は敬之進の家族を見たのである。彼の可憐な少年も、お志保も、細君の真ほんたう実の子では無いといふことが解つた。夫の貧を養ふといふ心から、斯うして細君が労苦して居るといふことも解つた。五人の子の重荷と、不幸な夫の境遇とは、細君の心を怒り易く感じ易くさせたといふことも解つた。斯う解つて見ると、猶なほ々丑松は敬之進を憐むといふ心を起したのである。

今はすこし勇氣を回復した。明に見、明に考へることが出来るやうに成つた。眼前めのまへに展る郊外の景色を眺めると、種々さま／＼のおもひで追憶は丑松の胸の中を往つたり来たりする。丁度斯うして、田圃たんぼの側わきに寝そべり乍ら、収穫とりのいれの光景さまを眺めた彼の無邪気な少年の時代を憶出した。烏帽子ゑぼし一帯の山脈の傾斜を憶出した。其傾斜に連なる田畠と石垣とを憶出した。茅萱ちがや、野菊、其他種々な雑草が霜葉を垂れる畦道あぜみちを憶出した。秋風が田の面を渡つて黄な波を揚げる頃は、蝨いなごを捕つたり、野鼠を追出したりして、夜はまた炉辺ろべたで狐むじなと貉ななが人を化かした話、山家で言ひはやす幽霊の伝説、放縦ほしいまゝな農夫の男をとこ女をんなの物語などを聞いて、余念もなく笑ひ興じたことを憶出した。あゝ、穢多の子といふ辛い自覺の

味を知らなかつた頃——思へば一昔——其頃と今とは全く世を隔てたかの心地がする。丑松はまた、あの長野の師範校で勉強した時代のことを憶出した。未だ世の中を知らなかつたところからして、疑ひもせず、疑はれもせず、他ひとと自分とを同じやうに考へて、笑つたり騒いだりしたことを憶出した。あの寄宿舎の楽しい窓を憶出した。舎監の赤い髭を憶出した。食堂の麦飯にほひの香を憶出した。よく阿弥陀あみだのくじに当つて、買ひに行つた門前の菓子屋の婆さんの顔を憶出した。夜の休息やすみを知らせる鐘が鳴り渡つて、廳やがて見廻りに来る舎監の靴の音が遠く廊下に響くといふ頃は、沈まりかへつて居た朋輩が復またた起出して、暗い寢室の内うちで雑談に耽たづなつたことを憶出した。終しまひには往生寺の山の上に登つて、苺かるかや萱ほとりの墓の畔ほとりに立

ち乍ら、おほき 大な声を出して呼び叫んだ時代のことを憶出して見ると
 ——ありさま 実に一生の光景は変りはてた。楽しい過去の追憶おもひでは今の
かなしみ 悲傷を二重にして感じさせる。『あゝ、あゝ、奈何どうして俺は斯
んな 様に猜疑深うたがひぶかくなつたらう。』斯う天を仰いで歎息した。急に、
 意外なところになる綿のやうな雲を見つけて、しばらく丑松はそ
 れを眺め乍ら考へて居たが、思はず知らず疲労つかれが出て、『藁によ』
 に倚凭よりかつたまゝ寝て了つた。

(三)

ふと眼を覚まして四辺そこいらを見廻した時は、暮色が最早もう迫つて来

た。向ふの田の中の畦道あぜみちを歸つて行く人々も見える。荒くれた男女の農夫は幾群か丑松の側わきを通り抜けた。鍬くはを担いで行くものもあり、俵を背負つて行くものもあり、中には乳呑児ちのみごを抱擁だきかへ乍ら足早に家路をさして急ぐものもあつた。秋の一日ひとひの烈しい労働は漸やうやく終を告げたのである。

まだ働いて居るものもあつた。敬之進の家族も急いで働いて居た。音作は腰こしを曲め、足に力を入れ、重い俵たはらを家の方へ運んで行く。後には女二人と省吾ばかり残つて、粃もみを振ふるつたり、それを俵へ詰めたりして居た。急に『かあさん、かあさん。』と呼ぶ声がる。見れば省吾の弟、泣いて反そりかへ返る児を背負おぶひ乍ら、一人の妹を連れて母親の方へ駈寄つた。『おゝ、おゝ。』と細君は抱取

つて、乳房を出して銜くはへさせて、

『進や。父さんは何してるか、お前め知らねえかや。』

『俺おら知んねえよ。』

『あゝ。』と細君は襦じゆばん袢まぶちの袖口で睨まぶちを押拭おしふやうに見えた。

『父さんのことを考へると、働く気もなにも失くなつて了ふ——』

『母さん、作ちやんが。』と進は妹の方を指差し乍ら叫んだ。

『あれ。』と細君は振返つて、『誰だたい其袋を開けたものは——』

誰だたい母さんに黙つて其袋を開けたものは。』

『作ちやんは取つて食ひやした。』と進の声で。

『真ほん実に仕方が無いぞい——彼娘あのこは。』と細君は怒気を含んで、

『其袋こいを茲こゝへ持つて来な——これ、早く持つて来ねえかよ。』

お作は八歳やっつばかりの女の児。麻の袋を手に提げた儘、母の権幕を畏おそれて進みかねる。『母さん、お呉くんな。』と進も他の子供も強せ請がみ付く。省吾も其と見て、母の傍へ駈寄つた。細君はお作の手から袋を奪取るやうにして、

『どれ、見せな——そいつたツても、まあ、情ない。道理で先刻さつきから穏順おとなしいと思つた。すこし母さんが見て居ないと、直に斯様こんな真似を為る。黙つて取つて食ふやうなものは、泥棒だぞい——ぬすツと盗人だぞい——ちよツ、何処へでも勝手に行つて了へ、其様そんな根性こんじやうの奴は最早母さんの子ぢやねえから。』

斯う言つて、袋の中に残る冷つめたい焼餅おやきらしいものを取出して、細君は三人の児に分けて呉れた。

『母さん、俺おんにも。』とお作は手を出した。

『何だ、お前は。自分で取つて食つて置き乍ら。』

『母さん、もう一つお呉くんな。』と省吾は訴へるやうに、『進には二つ呉れて、私わしには一つしか呉ねえだもの。』

『お前は兄さんぢやねえか。』

『進には彼あん様な大いのを呉れて。』

『嫌なら、廃よしな、さあ返しな——機嫌よ克くして母さんの呉れるものを貰つた例ためしはねえ。』

進は一つ頬張り乍ら、臆やがて一つの焼餅おやきを見せびらかすやうにして、『省吾の馬鹿——やい、やい。』と呼んだ。省吾は忌々いまくしい敷といふ様子。いきなり駈寄つて、弟の頭を握にぎりこぶし拳こぶしで打つ。弟も利

かない氣。兄の耳の辺あたりを打ち返した。二人の兄弟は怒の為に身を忘れて、互に肩を聳して、丁度野獸けもののやうに格闘あらそひを始める。音作の女房が周章あわて、二人を引分けた時は、兄弟ともに大な声を揚げ、泣叫ぶのであつた。

『どうしてまあ兄弟喧嘩きやうだいげんくわを為るんだねえ。』と細君は怒つて、『左様さうお前達はたに側で騒さわがれると、母さんは最早も氣が狂ちがひさうに成る。』

斯ありさまの光景を丑松は『藁わらによ』の蔭に隠れ乍ら見て居た。様子を聞けば聞くほど不幸な家族を憐あはれまずには居られなくなる。急に暮鐘の音に驚かされて、丑松は其処を離れた。

寂しい秋晩の空に響いて、また蓮華寺の鐘の音が起つた。それ

は多くの農夫の為に、一日の疲労を犒ふやうにも、楽しい休息を促すやうにも聞える。まだ野に残つて働いて居る人々は、いづれも仕事を急ぎ初めた。今は夕靄の群が千曲川の対岸を籠めて、高社山一帯の山脈も暗く沈んだ。西の空は急に深い焦茶色に変つたかと思ふと、やがて落ちて行く秋の日が最後の反射を田面に投げた。向ふに見える杜も、村落も、遠く暮色に包まれて了つたのである。あゝ、何の煩ひも思ひ傷むことも無くて、斯ういふ田園の景色を賞することが出来たなら、どんなにか青春の時代も楽しいものであらう。丑松が胸の中に戦ふ懊悩を感じれば感ずる程、余計に他界の自然は活々として、身に染みるやうに思はるゝ。南の空には星一つ顕れた。その青々とした美しい姿は、

一層夕暮の眺望を森巖おごそかにして見せる。丑松は眺め入り乍ら、自分の一生を考へて歩いた。

『しかし、其が奈何どうした。』と丑松は豆畠の間の細道へさしかゝつた時、自分で自分を激厲はげますやうに言つた。『自分だつて社会の一員ひとりだ。自分だつて他ひとと同じやうに生きて居る権利があるのだ。』

斯の思想かんがへに力を得て、馳かて帰りかけて振返つて見た時は、まだ敬之進の家族が働いて居た。二人の女が冠つた手拭は夕闇に仄ほのしろ白く、槌の音は冷ひや々とした空氣に響いて、『藁を集めろ』などゝいふ声も幽かすかに聞える。立つて是方こちらを向いたのは省吾か。今は唯動いて居る暗い影かとばかり、人々の顔も姿も判らない程に

暮れた。

(四)

『おつかれ』（今晚は）と逢ふ人毎に声を掛けるのは山家の黄たそが昏れの習ならはし慣である。丁度新町の町はづれへ出て、帰つて行く農夫に出逢ふ度に、丑松は斯この挨拶を交換とりかはした。一ぜんめし、御休所、笹屋、としてある家の前うちで、また『おつかれ』を繰返したが、其は他の人でもない、例の敬之進であつた。

『おゝ、瀬川君か。』と敬之進は丑松を押留めるやうにして、
『好い処で逢つた。何時か一度君とゆつくり話したいと思つて居

た。まあ、左様急がんでもよからう。今夜は我輩に交際つて呉れ
てもよからう。斯ういふ処で話すのも亦た一興だ。是非、君に聞
いて貰ひたいこともあるんだから——』

斯う慾憑されて、丑松は敬之進と一緒に笹屋の入口の敷居を
跨いで入った。昼は行商、夜は農夫などが疲労を忘れるのは茲で、
大な炉には『ぼや』（雑木の枝）の火が赤々と燃上った。壁に寄
せて古甕ふるがめのいくつか並べてあるは、地酒が溢れて居るのであら
う。今は農家は忙しい時季で、長く御輿みこしを座すゑるものも無い。一
人の農夫が草鞋穿わらぢばきの儘ま、ぐいと『てツぱ』（こつぷ酒）を引掛
けて居たが、聽やがて其男の姿も見えなくなつて、炉辺ろべたは唯二人の専も
有となつた。

『今晚は何にいたしやせう。』と主婦かみさんは炉の鍵に大鍋を懸け乍ら尋ねた。『油けんちん汁なら出来やすが、其ぢやいけやせんか。河で捕れた鰯かじかもごはす。鰯でも上げやせうかなあ。』

『鰯?』と敬之進は舌なめずりして、『鰯、結構——それに、油汁と来ては堪こたへられない。斯ういふ晩は暖い物に限りますからね。』

敬之進は酒慾の為に慄へて居た。素面しらふで居る時は、からもう元気の無い人で、言葉もすくなく、病人のやうに見える。五十の上を一つか二つも越したらうか、年の割合には老たふけといふでも無く、まだ髪は黒かつた。丑松は『藁わらによ』の蔭で見たり聞いたりした家族のことを思ひ浮べて、一層斯このひと人に親しくなつたやうな心地

がした。『ぼや』の火も盛んに燃えた。大鍋の中の油汁けんちんは沸ふつ々々と煮立つて来て、甘さうな香にほひが炉辺いりべに満溢みちあふれる。主婦かみさんは其を小こどんぶり井いに盛つて出し、酒は熱爛あつかんにして、一本づゝ古風な徳利を二人の膳の上に置いた。

『瀬川君。』と敬之進は手酌でちびりゝゝ始め乍ら、『君が飯山へ来たのは何時でしたつけねえ。』

『私わたしですか。私が来てから最早もう足掛三年に成ります。』と丑松は答へた。

『へえ、其様そんなに成るかねえ。つい此頃こなひだのやうにしか思はれないがなあ。実に月日の経つのは早いものさ。いや、我輩なぞが老込む筈だよ。君等がずんゝゝ進歩するんだもの。我輩だつて、君、

一度は君等のやうな時代もあつたよ。明日は、明日は、明日はと
 思つて居る内に、もう五十といふ声を聞くやうに成つた。我輩の
 家うちと言ふのはね、もと飯山の藩士で、少年の時分から君侯の御側
 に勤めて、それから江戸表へ——丁度御維新ごいっしんに成る迄。考へて
 見れば時勢は還りうつ變つたものさねえ。變遷、變遷——見たまへ、
 千曲川の岸にある城跡を。彼の名残あの石垣が君等の目にはどう見
 えるね。斯う蔦つたや莓いちごなどの纏絡まとひついたところを見ると、我輩はも
 う言ふに言はれないやうな心地こころもちになる。何処の城跡へ行つても、
 大抵は桑くはばたけ 畠はたけ。士族といふ士族は皆な零落して了つた。今日迄
 踏ふみこた堪へて、どうにかかうにか遣つて来たものは、と言へば、役
 場へ出るとか、学校へ勤めるとか、それ位のものさ。まあ、士族

ほど役に立たないものは無い——実は我輩も其一人だがね。はゝゝゝ。』

と敬之進は寂しさうに笑つた。やがて盃の酒を飲乾して、一寸舌打ちして、それを丑松へ差し乍ら、

『一つ交換といふことに願ひませうか。』

『まあ、御酌おしやくませう。』と丑松は徳利を持添へて勧めた。

『それは不可いかん。上げるものは上げる、頂くものは頂くサ。え——君は斯の方は遣やらないのかと思つたが、なか〜いけますねえ。

君の御手並を拝見するのは今夜始めてだ。』

『なに、私のは三さん盃ばい上じやうご戸こといふ奴なんです。』

『兎とに角かく、斯盃は差上げます。それから君のを頂きませう。まあ

君だから斯こん様なことを御話するんだが、我輩などは二十年も——
左さやう様さ、小学教員の資格が出来てから足掛十五年に成るがね、其
間唯同じやうなことを繰返して来た。と言つたら、また君等に笑
はれるかも知れないが、終しまひには教場へ出て、何を生徒に教へて居
るのか、自分乍ら感覚が無くなつて了つた。はゝゝゝ。いや、
全くの話が、長く教員を勤めたものは、皆な斯ういふ経験がある
だらうと思ふよ。實際、我輩などは教育をして居るとは思はな
かつたね。羽はおり織はかま袴はかまで、唯月給を貰ふ為に、働いて居るとしか思は
なかつた。だつて君、左さやう様ぢやないか、尋常科の教員などと言ふ
ものは、学問のある労働者も同じことぢやないか。毎日、毎日——
騒さわしい教場の整理、大勢の生徒の監督、僅わづか少の月給で、長い時

間を働いて、克よくまあ今日迄自分でも身体が続いたと思ふ位だ。あるひは君等の目から見たら、今茲こゝで我輩が退職するのは智慧ちゑの無い話だと思ふだらう。そりやあ我輩だつて、もう六ヶ月踏ふみこた堪へさへすれば、仮令たとへわづか僅少でも恩給さかの下る位は承知して居るさ。承知して居ながら、其が我輩には出来ないから情ない。是から以後我輩に働けと言ふのは、死ねといふも同じだ。家内はまた家内心配して、教員を休やめて了しまつたら、奈何どうして活計くわしが立つ、銀行へ出て帳面でもつけて呉れると言ふんだけれど、どうして君、其そん様な真似が我輩に出来るものか。二十年来慣れたことすら出来ないものを、是から新規に何が出来よう。根気も、精分も、我輩の身体の内にあるものは悉すつかり皆もう尽きて了つた。あゝ、生きて、働

いて、仆たふれるまで鞭撻むちうたれるのは、馬車馬の末路だ——丁度我輩は其馬車馬さ。はゝゝゝゝ。』

(五)

急に入つて来た少年に妨げられて、敬之進は口を噤つぶんだ。流ながし許もとに主婦かみさん、暗い洋燈ランプの下で、かちやくと皿小鉢を鳴らして居たが、其と見て少年の側へ駈寄つた。

『あれ、省吾さんでやすかい。』

と言はれて、省吾は用事ありげな顔付。

『吾家うちの父さんは居りやすか。』

『あゝ居なさりやすよ。』と主婦は答へた。

敬之進は顔を洩めた。入口の庭の薄暗いところに佇立たぐずんで居る

省吾を炉辺ろべたまで連れて来て、つく／＼其可憐な様子を眺ながめ乍ながら、

『奈何どうした——何か用か。』

『あの、』と省吾は言淀いひよどんで、『母さんがねえ、今夜は早く父

さんに御帰りなさいツて。』

『むゝ、また呼びによこしたのか——ちよツ、極きまりを遣やつてら。』

と敬之進は独ひとりごと語のやうに言つた。

『そんなら父さんは帰りなさらないんですか。』と省吾はおづ／＼

尋ねて見る。

『帰るサ——御話が済すめば帰るサ。母さんに斯う言へ、父さんは

学校の先生と御話して居ますから、其が済めば帰りますツて。』
と言つて、敬之進は一段声を低くして、『省吾、母さんは今何し
てる？』

『もみ粳を片付けて居りやす。』

『さう左様か、まだ働いてるか。それから彼あの……何か……母さんは
また例いっものやうに怒つてやしなかつたか。』

省吾は答へなかつた。子供心にも、父を憐むといふ目付して、
黙つて敬之進の顔を熟視みまもつたのである。

『つめたまあ、冷さうな手をしてるぢやないか。』と敬之進は省吾の手
を握つて、『おあしそれ金錢を呉れる。柿でも買へ。母さんや進には内
証だぞ。さあ最早もそれで可いから、早く歸つて——父さんが今言つ

た通りに——よしか。解つたか。』

省吾は首を垂れて、萎しをれ乍ら出て行つた。

『まあ聞いて呉れたまへ。』と敬之進は復また述懐を始めた。『ホ

ラ、君が彼の蓮華寺へ引越す時、我輩も門前まで行きましたらう

——実は、君だから斯こん様なこと迄も御話するんだが、彼寺には不

義理なことがしてあつて、住職は非常に怒つて居る。我輩が飲む

間は、交際つきあはぬといふ。情ないとは思ふけれど、其そん様な関係で、

今では娘の顔を見に行くことも出来ないやうな仕末。まあ、彼寺

へ呉れて了つたお志保と、省吾と、それから亡くなつた総領と、

斯う三人は今の家内の子では無いのさ。前せんの家内といふのは、矢や

張飯山はりの藩士の娘でね、我輩うちの家の楽うちな時代に嫁かたづいて来て、未だ

今のやうに零落しない内に亡なくなつた。だから我輩は彼女あいつのことを考へる度に、一生のうちで一番樂しかつた時代を思出さずには居られない。一いっばい盃やると、きつと其時代のことを思出すのが我輩の癖で——だつて君、年を取れば、思出すより外に歡たのしみ樂が無いのだもの。あゝ、前せんの家内は反かへつて好い時に死んだ。人間といふものは妙なもので、若い時に貰つた奴がどうしても一番好いやうな氣がするね。それに、性質が、今の家内のやうに利きかん氣では無かつたが、そのかはり昔風に亭主に便たよるといふ風で、何処迄どこまでも我輩を信じて居た。蓮華寺へ行つたお志保——彼娘あのこがまた母親に克よく似て居て、眼付などはもう彷彿そつくりさ。彼娘の顔を見ると、直せんに前の家内が我輩の眼に映る。我輩ばかりぢやない、他ひとが克く

其を言つて、昔話などを始めるものだから、さあ今の家内は面白くないと見えるんだねえ。正直御話すると、我輩も蓮華寺なぞへ彼娘を呉れたくは無かつた。然し吾家に置けば、彼娘の為にならない。第一、其では可愛さうだ。まあ、蓮華寺では非常に欲がるし、奥様も子は無し、それに他の土地とは違つて寺院を第一とする飯山ではあり、するところからして、お志保を手放して遣つたやうな訳さ。』

聞けば聞くほど、丑松は氣の毒に成つて来た。成程、左様言はれて見れば、落魄らくはくの画像えすがた其儘そのまゝの様子のうちにも、どうやら武士らしい威厳を具へて居るやうに思はるゝ。

『丁度、それは彼娘の十三の時。』と敬之進は附和つけたして言つた。

(六)

『噫^{あゝ}。我輩の生涯^{しやうがい}などは実に碌々^{ろくろく}たるものだ。』と敬之進は更に嘆息した。『しかし瀬川君、考へて見て呉れたまへ。君は碌々といふ言葉の内に、どれほどの酸苦が入つて居ると考へる。斯^かうして我輩は飲むから貧乏する、と言ふ人もあるけれど、我輩に言はせると、貧乏するから飲むんだ。一日たりとも飲まずには居られない。まあ、我輩も、始の内は苦痛^{くるしみ}を忘れる為に飲んだのさ。今では左様^{さよう}ぢや無い、反つて苦痛を感じる為に飲む。はゝゝゝ。と言ふと可笑^{をか}しく聞えるかも知れないが、一晩でも酒の気が無からうものなら、寂しくて、寂しくて、身体は最早^もがたノ

震ふるへて来る。寝ても寝られない。左様さうなると殆ほとんど精神は無感
覚だ。察して呉れたまへ——飲んで苦しく思ふ時が、一番我輩に
取つては生きてるやうな心地こころもちがするからねえ。恥を御話すればい
ろくだが、我輩も飯山学校へ奉職する前には、下高井の在で長
く勤めたよ。今の家内を貰つたのは、丁度その下高井に居た時の
ことさ。そこはそれ、在に生れた女だけあつて、働くことは家内
も克よく働く。霜を掴つかんで稲を刈るやうなことは到底我輩には出来
ないが——我輩がまた其様そんな真似をして見給へ、直に病氣だ——
ところが彼女あいつには堪へられる。貧苦を忍ぶといふ力は家内の方が
反つて我輩より強いね。だから君、最早も斯う成つた日にやあ、恥
も外聞もあつたものぢや無い、私は私でお百姓する、なんて言出

して、馬鹿な、女の手で作なぞを始めた。我輩の家に旧もとから出入りする百姓の音作、あの夫婦が先代の恩返しだと言つて、手伝つては呉れるがね、どうせ左様さううまく行きツこはないさ。それを我輩が言ふんだけれど、どうしても家内は聞入れない。尤もつとも、我輩は士族だから、一反歩は何坪あるのか、一束つかに何斗の年貢を納めるのか、一升まき蒔で何俵の粃もみが取れるのか、一体年ねんに肥料が何どの位要いるものか、其様そんなことは薩張さつぱり解らん。現に我輩は家内が何坪借りて作つて居るかといふことも知らない。まあ、家内の量見では、子供に耕作さくでも見習はせて、行く／＼は百姓に成つて了ふ積りらしいんだ。そこで毎時いっつでも我輩と衝突が起る。どうせ彼様あんな無学な女は子供の教育なんか出来よう筈も無い。實際、我輩の家

庭で衝突の起因おこりと言へば必ず子供のとき。子供がある為に夫婦喧嘩もするやうなものだが、又、その夫婦喧嘩をした為に子供が出来たりする。あゝ、もう沢山たくさんだ、是上出来たら奈何どうしよう、一人子供が増れば其それだけ丈貧苦を増すのだと思つても、出来るものは君どうも仕方が無いぢやないか。今の家内が三番目の女の児を産んだ時、えゝお末と命つけてやれ、お末とでも命おしまひけたら終おしまひに成るか、斯う思つたら——どうでせう、君、直にまた四番目サ。仕方が無いから、今度は留吉とした。まあ、五人の子供に側で泣き立てられて見たまへ。なか／＼遣やりきれた訳のものでは無いよ。惨苦、惨苦——我輩は子供の多い貧乏な家庭を見る度に、つく／＼其惨苦を思ひやるねえ。五人の子供ですら食はせるのは容易ぢ

やない、若^もしまた是上^{じやう}に出来でもしたら、我輩^{わがはい}の家なぞでは最早^{もつう}奈何^{どう}していゝか解らん。』

斯^かう言つて、敬之進は笑つた。熱い涙は思はず知らず流れ落ちて、零落^{おちぶ}れた袖を湿^{ぬら}したのである。

『我輩は君、これでも真面目なんだよ。』と敬之進は、額^{ぬか}と言はず、頬^ほと言はず、腮^{あご}と言はず、両手で自分の顔を撫で廻した。

『どうでせう、省吾の奴も君の御厄介^{ごやくけい}に成つてるが、彼^あ様な風で物に成りませうか。もう少許^{すこし}活潑^{かつせき}だと好いがねえ。どうも女のやうな気分の奴で、泣易^{なみやす}くて困^{しよ}る。平素^{しよ}弟^{ちゆう}に苦^いめられ通^{ちゆう}した。同じ自分の子で、どれが可愛くて、どれが憎いといふことは有さうも無ささうなものだが、それがそれ、妙なもので、我輩は彼の省吾

が可愛さうでならない。彼の通り弱いものだから、それだけあはれみ其丈哀憐も増すのだらうと思ふね。家内はまた弟の進びいき。何ぞといふと、省吾の方を邪魔にして、無暗むやみに叱るやうなことを為る。そこへ我輩が口を出すと、前妻せんさいの子ばかり可愛がつて進の方は少許ちつとも関つて呉れんなんて——直に邪推だ。だからもう我輩は何にも言はん。家内の為る通りに為せて、黙つて見て居るのさ。成るべく家内には遠ざかるやうにして、密そつと家を抜け出して来ては、独りで飲むのが何よりの慰藉たのしみだ。稀たまに我輩が何か言はうものなら、私は斯様こんなに裸体はだかで嫁に來やしなかつたなんて、其を言はれると一言いちごも無い。實際、彼奴あいつが持つて來た衣類ものは、皆な我輩が飲んで了つたのだから——はゝゝゝ。まあ、君等の目から見たら、さ

ぞ我輩の生涯などは馬鹿らしく見えるだらうねえ。』

述懐は反つて敬之進の胸の中を軽くさせた。其晩は割合に早く酔つて、次第に物の言ひ様も煩く、終には呂律も廻らないやうに成つて了つたのである。

臆て二人は斯の炬辺を離れた。勘定は丑松が払つた。笹屋を出たのは八時過とも思はれる頃。夜の空気は暗く町々を包んで、往來の人通りもすくない。気が狂つて独語を言ひ乍ら歩く女、酔つて家を忘れたやうな男、そんな手合が時々二人に突當つた。敬之進は覺束ない足許で、やゝともすれば往來の真中へ倒れさうに成る。酔眼朦朧、星の光すら其瞳には映りさうにも見えなかつた。抛なく丑松は送り届けることにして、ある時は右の腕で

敬之進の身体からだを支へるやうにしたり、ある時は肩へ取とり継すらせて
背負おぶふやうにしたり、ある時は抱だき擁かへて一緒に釣合を取り乍ら
歩いた。

漸やつとの思で、敬之進を家まで連れて行つた時は、まだ細君も音作
夫婦も働いて居た。人々は夜露を浴び乍ら、屋外そとで仕事を為て居
るのであつた。丑松ちかつが近くと、それと見た細君は直に斯う声を掛
けた。

『あちや、まあ、御困りなすつたでござせう。』

第五章

(一)

十一月三日はめづらしい大霜。長いく山国の冬が次第ちかづに近いことを思はせるのは是これ。其朝、丑松の部屋の窓の外は白い煙に掩おほはれたやうであつた。丑松は二十四年目の天長節を飯山の学校で祝ふといふ為に、柳行李やなぎがうりの中から羽織袴を出して着て、去年の外ぐわいたう套ぐわいたうに今年もまた身を包んだ。

暗い楼はしごだん梯はしごだんを下りて、北向の廊下のところへ出ると、朝の光がうつくしく射して来た。溶けかゝる霜と一緒に、日にあたる裏庭このはの木葉は多く枝を離れた。就わけても中もろ、脆いのは銀杏いてふで、梢こずゑには最も

早一葉うひとはの黄もとゞめない。丁度其霜葉しもばの舞ひ落ちる光景ありさまを眺め乍ら、廊下の古壁に倚凭よりかつて立つて居るのは、お志保であつた。丑松は敬之進のことを思出して、つく／＼あ彼の落魄らくはくの生しやうが涯いを憐むと同時に、亦また斯この人を注意して見るといふ氣にも成つたのである。

『お志保さん。』と丑松は声を掛けた。『奥様に左様さう言つて呉れませんか——今日は宿直の当番ですから何卒どうか晩の弁当をこしらへて下さるやうに——後で学校の小使を取りによこしますからツて——ネ。』

と言はれて、お志保は壁を離れた。娘の時代には克よくある一種の恐怖心から、何となく丑松を憚はづかつて居るやうにも見える。何処

か敬之進に似たところでもあるか、斯う丑松は考へて、其となく
梯おもかげがを捜して見ると、若々しい髪のかたち、額つき——まあ、どち
らかと言へば、彼の省吾は父親似、斯この人はまた亡なくなつたとい
ふ母親の方にも似たのであらう。『眼付なぞはもう彷彿そっくりさ』
と敬之進も言つた。

『あの、』とお志保はすこし顔を紅あかくし乍ら、『此頃こなひだの晩は、
大層父が御厄介に成りましたさうで。』

『いや、私の方で反かへつて失礼しましたよ。』と丑松は淡泊さつぱりした
調子で答へた。

『昨日、弟が参りましたして、其話をいたしました。』
『むゝ、左様さうでしたか。』

『さぞ御困りで御座ましたらう——父が彼様いふ風ですから、皆さんの御厄介にばかり成りまして。』

敬之進のことは一時もお志保の小さな胸を離れないらしい。柔嫩な黒眸の底には深い憂愁のひかりを帯びて、頬も紅く泣腫れたやうに見える。臆て斯ういふ言葉を取交した後、丑松は外套の襟で耳を包んで、帽子を冠つて蓮華寺を出た。

とある町の曲り角で、外套の袖袋に手を入れて見ると、古い皺だらけに成つた手袋が其内から出て来た。黒の莫大小の裏毛の付いたやつで、皺を延ばして填めた具合は少許細く緊り過ぎたが、握つた心地は暖かであつた。其手袋を鼻の先へ押当て、紛とした湿気くさい臭気を嗅いで見ると、急に過去つた天長節のことが

丑松の胸の中に浮んで来る。去年——一昨年——一昨々年——噫、
 未だ世の中を其程それほど深く思ひ知らなかつた頃は、噴飯ふきだしたくなる
 やうな、気楽なことばかり考へて、この大祭日を祝つて居た。手
 袋は旧もとの儘まゝ、色は褪さめたが変らずにある。それから見ると人の精こ
 神ろの内部なかの光景ありさまの移り変ることは。これから将来さきの自分の生涯
 は畢竟つまりどう奈何なる——誰が知らう。来年の天長節は——いや、来年
 のことは措おいて、明日のことですらも。斯う考へて、丑松の心は
 幾度いくたびか明くなつたり暗くなつたりした。

さすがに大祭日だ。町々の軒は高く国旗を掲げ渡して、いづれ
 の家も静肅に斯の記念ひとひの一日を送ると見える。少年の群は喜ばし
 さうな声を揚げ乍ら、霜に濡れた道路を学校の方へと急ぐのであ

つた。悪戯いたづら盛りの男の生徒、今日は何時にならない大人びた様子をして、羽織袴でかしまつた顔付のをかしさ。女生徒は新しい海え老茶袴びちやばかま、紫袴であつた。

(一一)

国のみかどの誕生の日を祝ふために、男女の生徒は足拍子揃へて、二階の式場へ通ふ階段を上つた。銀之助は高等二年を、文平は高等一年を、丑松は高等四年を、いづれも受持々々の組の生徒を引連れて居た。退職の敬之進は最早も客分ながら、何となく名残が惜まるゝといふ風で、旧もとの生徒の後に随ついて同じやうに階段を

上るのであつた。

斯の大祭の歡喜よろこびの中にも、丑松の心を驚かして、突然新しい

悲痛かなしみを感じさせたことがあつた。といふは、猪子蓮太郎の病氣

が重くなつたと、ある東京の新聞に出て居たからで。尤も丑松の

目に触れたは、式の始まるといふ前、審くはしく読む暇も無かつたか

ら、其儘そのまゝ懷中ふところへ押込んで来たのであつた。世には短い月日の

間に長い生涯を送つて、あわただしく通り過ぎるやうに生れて来

た人がある。恐らく蓮太郎も其一人であらう。新聞には最早もうむつ

かしいやうに書いてあつた。あゝ、先輩の胸中に燃える火は、世

を焼くよりも前さきに、自分の身体を焚やき尽して了しまふのであらう。斯

ういふ同おもひやり情いつときは一時も丑松の胸を離れない。猶なほ繰返し読んで

見たさは山々、しかし左様さうは今の場合が許さなかつた。

其日は赤十字社の社員の祝賀をも兼ねた。式場しきばに集る人々の胸の上には、赤い織色の綬きれ、銀の章しるしの輝いたのも面白く見渡される。東の壁のところところに、二十余人の寺々の住職、今年にかぎつて蓮華寺一人欠けたのも物足りないとは、流石さすがに土地柄も思はれてをかしかつた。殊に風采の人目を引いたのは、高柳利三郎といふ新進政事家、すでに檜舞台ひのきぶたいをも踏んで来た男で、今年もまた代議士の候補者に立つといふ。銀之助、文平を始め、男女の教員は一同風琴の側に集つた。

『気をつけ。』

と呼ぶ丑松の凜りんとした声こゑが起つた。式は始つたのである。

主座教員としての丑松は反つて校長よりも男女の少年に慕はれて居た。丑松が『最敬礼』の一声は言ふに言はれぬ震動を幼いもの、胸に伝へるのであつた。聴やがて、『君が代』の歌の中に、校長は御影みえいを奉開して、それから勅語を朗読した。万歳、万歳と人々の唱へる声は雷らういのやうに響き渡る。其日校長の演説は忠孝を題に取つたもので、例の金きんぱい牌は胸の上に懸つて、一ひとしほ層其風采を教育者らしくして見せた。『天長節』の歌が済む、来賓だいきを代表した高柳の挨拶もあつたが、是はまた場慣れて居る丈だけに手に入つたもの。雄弁を喜ぶのは信州人の特色で、斯ういふ一場の挨拶ですらも、人々の心を酔はせたのである。

平和と喜よろこ悦びとは式場に満ち溢れた。

閉会の後、高等四年の生徒はかはる／＼、丑松に取^{とり}絶^ずつて、種々物を尋ねるやら、跳^はねるやら。あるものは手を引いたり、あるものは袖の下を潜り抜けたりして、戯れて、避^よけて行かうとする丑松を放すまいとした。仙太と言つて、三年の生徒で、新平民の少年がある。平素^{ふだん}から退^のけ者にされるのは其生徒。けふも寂しさうに壁に倚^{より}凭^かつて、皆^{みんな}の歡^{よろこ}び戯れる光景^{ありさま}を眺め乍ら立つて居た。可愛さうに、仙太は斯^この天長節ですらも、他の少年と同じやうには祝ひ得ないのである。丑松は人知れず口唇^{くちびる}を噛みぬ《しめ》て、『勇氣を出せ、懼^{おそ}れるな』と励ますやうに言つて遣りたかつた。丁度他の教師が見て居たので、丑松は遁^にげるやうにして、少年の群を離れた。

今朝の大霜で、学校の裏庭にある樹木は大概落葉してしまつたが、桜ばかりは未だ秋の名残をとゞめて居た。丑松は其葉蔭を選んで、時々私語くやうに枝を渡る微風の音にも胸を踊らせ乍ら、懐中から例の新聞を取出して展げて見ると——蓮太郎の容体は余程危いやうに書いてあつた。記者は蓮太郎の思想に一々同意するものでは無いが、兎も角も新平民の中から身を起して飽くまで奮闘して居る其意気を愛せずには居られないと書いてあつた。惜まれて逝く多くの有望な人々と同じやうに、今また斯の人が同じ病苦に呻吟すると聞いては、うたゝ同情の念に堪へないと書いてあつた。思ひあたる事が無いでもない、人に迫るやうな渠の筆の真面目は斯うした悲哀が伴ふからであらう、斯ういふ記者も亦た

その為に薬籠やくろうに親しむ一人であると書いてあつた。

動揺する地上の影は幾度か丑松を驚かした。日の光は秋風に送られて、かれ／＼な桜の霜葉をうつくしくして見せる。蕭条せうてうとした草木の凋落てうらくは一層先輩の薄命を冥想めいさうさせる種となつた。

(三)

敬之進の為に開いた茶話会は十一時頃からあつた。其日の朝、蓮華寺を出る時、丑松は廊下のところでお志保に逢つて、この不幸な父親を思出したが、斯うして会場の正面に座すゑられた敬之進を見ると、今度は反対あべこべに彼の古壁に倚凭つた娘のことを思出し

たのである。敬之進の挨拶は長い身の上の述懐であつた。憐むといふ心があればこそ、丑松ばかりは首を垂れて聞いて居たやうなものゝ、さもなくて、誰が老の繰おい言くりごとなぞに耳を傾けよう。

茶話会の済んだ後のことであつた。丁度庭球テニスの遊戯あそびを為るために出て行かうとする文平を呼留めて、一緒に校長はある室の戸を開けて入つた。差向ひに椅子に腰掛けたは運動場近くにある窓のところ、庭球狂テニスマチガひの銀之助ぎんのすけなぞが呼び騒ぐ声も、玻璃ガラスに響いて面白さうに聞えたのである。

『まあ、勝野君、左様運動さようにばかり夢中にならないで、すこし話したまへ。』と校長は忸々敷なれくしく、『時に、奈何どうでした、今日の演説は？』

『先生の御演説ですか。』と文平が打球板ラケットを膝の上に載せて、

『いや、非常に面白く拝聴うかがしました。』

『左様さようですかねえ——少許すこしは聞きごたへが有ましたかねえ。』

『御世辞でも何でも無いんですが、今迄私が拝聴うかがつた中うちでは、先づ第一等の出来でしたらう。』

『左様さよう言つて呉れる人があると難ありがた有い。』と校長は微笑み乍ら、

『実は彼の演説あをするために、昨夜一晩かゝつて準備したくしましたよ。

忠孝といふ字義の解釈は奈何聞どうえました。我輩の積りでは、あれでも余程頭脳あたまを痛めたのさ。種々いろくな字典を参考するやら、何やら

——そりやあもう、君。』

『どうしても調べたものは調べた丈のことが有ます。』

『しかし、真ほんたう実に聞いて呉れた人は君くらゐのものだ。町の人などは空々寂々——いや、實際、耳を持たないんだからねえ。中には、高柳の話に酷ひどく感服してゐる人がある。彼あ様な演説屋の話と、吾われ儕くの言ふことゝを、一緒にして聞かれて堪たまるものかね。』

『どうせ解らない人には解らないんですから。』

と文平に言はれて、不平らしい校長の顔付は幾分いくぶんか和やはいで来た。

其時迄、校長は何か言ひたいことがあつて、それを言はないで、反かへつて斯かういふ談話はなしをして居るといふ風であつたが、軈やがて思ふことを切出した。わざ／＼文平を呼留めて斯室へ連れて来たのは、どうかして丑松を退ける工夫は無いか、それを相談したい下心であつたのである。『と云ふのはねえ、』と校長は一段声を低くし

た。『瀨川君だの、土屋君だの、彼あ様いふ異分子が居ると、どうも学校の統一がつかなくて困る。尤もも土屋君の方は、農科大学の助手といふことになつて、遠からず出掛けたいやうな話ですから——まあ斯このひと人は黙つて居ても出て行く。難物は瀨川君です。瀨川君さへ居なくなつて了へば、後は君、もう吾われ儕くの天下さ。どうかして瀨川君を廢よして、是非其後へは君に座すわつて頂きたい。実は君の叔父さんからも種いろく々御話が有ましたがね、叔父さんも矢張り左さう様いふ意見なんです。何とか君、巧うまい工夫はあるまいかねえ。』

『左さう様ですなあ。』と文平は返事に困つた。

『生徒を御覧なさい——瀨川先生、瀨川先生と言つて、瀨川君ば

かり大騒ぎしてる。彼あんな様に大騒ぎするのは、瀬川君の方で生徒の機嫌を取るからでせう？ 生徒の機嫌を取るといふのは、何か其処そこに訳があるからでせう？ 勝野君、まあ君は奈何どう思ひます。』

『今の御話は私に克よくく解りません。』

『では、君、斯ごとう言つたら——これはまあ是これ限りの御話なんですがね、必定きつと瀬川君は斯ごとの学校を取らうといふ野心があるに相違ちがひないんです。』

『はゝゝゝ、まさか其程にも思つて居ないでせう。』と笑つて、文平は校長の顔おもてを熟視みまもつた。

『でせうか？』と校長は疑深く、『思つて居ないでせうか？』

『だつて、未だま其様そんなことを考へるやうな年とし齡れいぢや有ありません——

瀬川君にしろ、土屋君にしろ、未だ若いんですもの。』

この『若いんですもの』が校長を嘆息させた。庭で遊ぶ庭球テニスの音はおもしろく窓の玻璃ガラスに響いた。また一勝負始まつたらしい。思はず文平は聞耳を立てた。その文平の若々しい顔付を眺めると、校長は更に嘆息して、

『一体、瀬川君などは奈何どういふことを考へて居るんでせう。』

『奈何いふことゝは？』と文平は不思議さうに。

『まあ、近頃の瀬川君の様子を見るのに、非常に沈んで居る——何か斯う深く考へて居る——新しい時代といふものは彼あ様物ゝを考へさせるんでせうか。どうも我輩には不思議でならない。』

『しかし、瀬川君の考へて居るのは、何か別の事でせう——今、

先生の仰つたやうな、其様な事ぢや無いでせう。』

『左様なると、猶々我輩には解釈が付かなくなる。どうも我輩の時代に比べると、瀬川君なぞの考へて居ることは全く違ふやうだ。我輩の面白いと思ふことを、瀬川君なぞは一向詰らないやうな顔してる。我輩の詰らないと思ふことを、反つて瀬川君なぞは非常に面白がつてる。畢竟一緒に事業が出来ないといふは、時代が違ふからでせうか——新しい時代の人と、吾儕とは、其様に思想が合はないものなんでせうか。』

『ですけど、私なぞは左様思ひません。』

『そこが君の頼母しいところさ。何卒、君、彼様いふ悪い風潮に染まないやうにして呉れたまへ。及ばずながら君のことに就いて

は、我輩も出来るだけの力を尽すつもりだ。世の中のこと御互ひに助けたり助けられたりさ——まあ、勝野君、左様ぢや有ませんか。今茲こゝで直に異分予を奈何どうするといふ訳にもいかない。ですから、何か好い工夫でも有つたら、考へて置いて呉れたまへ——瀬川君のことに就いて何か聞込むやうな場合でも有つたら、是非それを我輩に知らせて呉れたまへ。』

(四)

盛んな遊戯の聲がまた窓の外に起つた。文平は打球ラケット板を提げて出て行つた。校長は椅子を離れて玻璃ガラスの戸を上げた。丁度運動

場では庭球テニスの最中。大人びた風の校長は、まだ筋骨の衰頹おとろへを感ずる程の年頃でも無いが、妙に遊戯の嫌ひな人で、殊に若いものゝ好な庭球などゝ来ては、昔の東洋風の輕蔑けいべつを起すのが癖。だから、『何を、児戯こどもらしいことを』と言つたやうな目付して、夢中になつて遊ぶ人々の光景ありさまを眺めた。

地は日の光の為に乾き、人は運動の熱の為に燃えた。いつの間にか文平は庭へ出て、遊戯の仲間に加つた。銀之助は今、文平の組を相手にして、一戦を試みるころ。流石さすがの庭球テニス狂きちがひもさん／＼に敗北して、臆やがて仲間の生徒と一緒に、打球板ラケットを捨て、退いた。敵方の揚げる『勝負有ゲエム』の声は、拍手の音に交つて、屋そと外の空氣に響いておもしろさうに聞える。東よりの教室の窓から

顔を出した二三の女教師も、一緒になつて手を叩いて居た。其時、幾組かに別れて見物した生徒の群は互ひに先を争つたが、中に一人、素早く打球板ラケットを拾つた少年があつた。新平民の仙太と見て、他の生徒が其側へ馳寄つて、無理無体に手に持つ打球板ラケットを奪ひ取らうとする。仙太は堅く握つた儘ま、そんな無法なことがあるものかといふ顔付。それはよかつたが、何時まで待つて居ても組のものが出て来ない。『さあ、誰か出ないか』と敵方は怒つて催促する。少年の群は互ひに顔を見合せて、困つて立つて居る仙太を冷笑して喜んだ。誰も斯この穢多の子と一緒に庭球の遊戯あそびをしようといふものは無かつたのである。

急に、羽織を脱ぎ捨て、そこにある打球板ラケットを拾つたは丑松

だ。それと見た人々は意味もなく笑つた。見物して居る女教師も微笑ほゝゑんだ。文平びいぎ聶顧の校長は、丑松の組に勝たせたくないと思ふかして、熱心になつて窓から眺ながめて居た。丁度午後の日を背後うしろにしたので、位置の利は始めから文平の組の方にあつた。

『壺ワン、零ゼロ。』

と呼ぶのは、網の傍に立つ審判官の銀之助である。丑松仙太は先づ第一の敗を取つた。見物して居る生徒は、いづれも冷笑を口くちびる唇ちびるにあらはして、仙太の敗を喜ぶやうに見えた。

『壺ツウ、零ゼロ。』

と銀之助は高く呼んだ。丑松の組は第二の敗を取つたのである。『壺ツウ、零ゼロ。』と見物の生徒は聞えよがしに繰返した。

敵方といふのは、年若な準教員——それ、丑松が蓮華寺へ明間あきまを捜しに行つた時、帰路かへりに遭遇であつた彼男と、それから文平と、斯う二人の組で、丑松に取つては侮りあなどり難い相手であつた。それに、敵方の力は揃つて居るに引替へ、味方の仙太はまだ一向に練習が足りない。

『スリイゼロ
参、零。』

と呼ぶ声を聞いた時は、丑松もすこし気を苛いらつた。人種と人種の競争——それに敗ひけを取るまいといふ丑松の意気が、何となく斯様な遊戯の中にも頭あはれるやうで、『敗まけるな、敗けるな』と弱い仙太を激厲はげますのであつた。丑松は撃手サアブ。最後の球を打つ為に、そとぐるわ外廊の線の一角に立つた。『さあ、来い』と言はぬばかりの

身構へして、窺^{うかが}ひ澄ま^どして居る文平を目がけて、打込んだ球はかすかに網に触れた。『触^{タッチ}』と銀之助の一声。丑松は二度目の球を試みた。力あまつて線を越えた。ああ、『落^{フオウル}』だ。丑松も今は怒気を含んで、満身の力を右の腕に籠め乍ら、勝つも負けるも運は是球一つにあると、打込む勢は獅子奮進。青年の時代に克^よくある一種の迷想から、丁度一生の運命を一時の戯^{たはむれ}に占ふやうに見える。『内^{イン}』と受けた文平もさるもの。故意^{わざ}と丑松の方角を避けて、うろくする仙太の虚^{すき}を衝^ついた。烈しい日の光は真正面^{まとも}に射して、飛んで来る球のかたちすら仙太の目には見えなかつたのである。

『勝負^{ゲエム}有^ム。』

と人々は一音に叫んだ。仙太の手から打球板^{ラケット}を奪ひ取らうと

した少年などは、手を拍つて、雀躍こをどりして、喜んだ。思はず校長も声を揚げて、文平の勝利を祝ふといふ風であつた。

『瀬川君、零敗ゼロまけとはあんまりぢやないか。』

といふ銀之助の言葉を聞捨て、丑松はそこに置いた羽織を取上げながら、すごくと退いた。やがて斯この運動場うんどうばから裏庭の方へ廻つて、誰も見て居ないところへ来ると、不図何か思出したやうに立留つた。さあ、丑松は自分で自分を責めずに居られなかつたのである。蓮太郎——大日向——それから仙太、斯う聯想した時は、猜疑うたがひと恐怖おそれとで戦慄ふるへるやうになつた。噫あゝ、意地の悪い智慧ちゑはいつでも後から出て来る。

第六章

(一)

天長節の夜は宿直の当番であつたので、丑松銀之助の二人は学校に残つた。敬之進は急に心細く、名残惜しくなつて、いつまでも此処を去り兼ねる様子。夕飯の後、まだ宿直室に話しこんで、例の愚痴の多い性質から、生おひさき先長い二人に笑はれて居るうちに、壁の上の時計は八時打ち、九時打つた。それは翌朝よくあさの霜の烈しさを思はせるやうな晩で、日中とは違つて、めつきり寒かつた。

丑松が見廻りの為に出て行つた後、まだ敬之進は火鉢の傍に齧り付いて、銀之助を相手に搔口説いて居た。

臆やがて二十分ばかり経つて丑松は歸つて来た。手提洋燈てきげランプを吹消して、急いで火鉢の側わきに倚添よきひ乍ら、『いや、もう屋外そとは寒い寒いの寒くないのツて、手も何も凍かじかんで了ふ——今夜のやうに酷烈きびしいことは今歳ことしになつて始めてだ。どうだ、君、是通りだ。』と丑松は氷のやうに成つた手を出して、銀之助に触つた。『まあ、何といふ冷い手だらう。』斯かう言つて、自分の手を引込まして、銀之助は不思議さうに丑松の顔を眺めたのである。

『顔色が悪いねえ、君は——奈何どうかしやしないか。』

と思はず其を口に出した。敬之進も同じやうに不審を打つて、

『我輩も今、其を言はうかと思つて居たところさ。』

丑松は何か思出したやうに慄へて、話さうか、話すまいか、と
しばらくちうちよ
 暫時躊躇する様子にも見えたが、あまり二人が熱心に自分の顔
みまも
 を熟視るので、ついで打明けずには居られなく成つて来た。

『実はねえ——まあ、不思議なことがあるんだ。』

『不思議なとは？』と銀之助も眉をひそめる。

『斯ういふ訳さ——僕が手提洋燈てさげランプを持つて、校舎の外を一廻りし

て、あの運動場の木馬のところまで行くと、誰か斯う僕を呼ぶや
 うな声でした。見れば君、誰も居ないぢやないか。はてな、聞い
 たやうな声だと思つて、考へて見ると、其そのはず筈さ——僕おやぢの阿爺の

声なんだもの。』

『へえ、妙なことが有れば有るものだ。』と敬之進も不審しさうに、『それで、何ですか、奈何な風どんに君を呼びましたか、其声は』

『「丑松、丑松」とつゞけざまに。』

『フウ、君の名前を？』と敬之進はもう目を円まるくして了しまつた。

『はゝゝゝ。』と銀之助は笑出して、『馬鹿なことを言ひたまへ。瀬川君も余程よつほど奈何かして居るんだ。』

『いや、確かに呼んだ。』と丑松は熱心に。

『其様な事そんがあつて堪るものか。何かまた間違へでも為たんだらう。』

『土屋君、君は左様さう笑ふけれど、確かに僕の名を呼んだに相違な

いよ。風が呻吟うなつたでも無ければ、鳥が啼ないたでも無い。そんな声を、まさかに僕だつて間違へる筈も無からうぢやないか。どうしても阿爺あぢやうだ。』

『君、眞実ほんたうかい——戯語じやうだんぢや無いのかい——また欺かつぐんだらう。』

『土屋君は其だから困る。僕は君これでも眞面目まじめなんだよ。確かに僕は斯この耳で聞いて来た。』

『其耳あてが宛あてに成らないサ。君の父上おとつさんは西乃入にしりのいりの牧場に居るんだらう。あの烏帽子ゑぼしヶ嶽だけの谷間たにあひに居るんだらう。それ、見給へ。其父上おとつさんが斯様こんな隔絶かけはなれた処ところに居る君の名前を呼ぶなんて——馬鹿らしい。』

『だから不思議ぢやないか。』

『不思議？ ちよツ、不思議といふのは昔の人のおとぎばなし伽話だ。

はゝゝゝ、智識の進んで来た今日、そんな馬鹿らしいことの有るべき筈が無い。』

『しかし、土屋君。』と敬之進は引取つて、『左様君さうのやうに一概に言つたものでもないよ。』

『はゝゝゝ、旧弊な人は是だから困る。』と銀之助あざけは嘲るやうに笑つた。

急に丑松は聞耳を立てた。復またた何か聞きつけたといふ風で、すこし顔色を変へて、言ふに言はれぬ恐怖おそれを表したのである。戯れて居るので無いといふことは、其真面目な眼付を見ても知れた。

『や——復た呼ぶ声がする。何だか斯う窓の外の方で。』と丑松は耳を澄まして、『しかし、あまり不思議だ。一寸、僕は失敬するよ——もう一度行つて見て来るから。』

ぷいと丑松は駈出して行つた。

さあ、銀之助は友達のことを案じられる。敬之進はもう心に驚いて了つて、何かの前兆では有るまいか——第一、父親の呼ぶといふのが不思議だ、と斯う考へつゞけたのである。

『それはさうと、』と敬之進は思付いたやうに、『斯うして吾儕ばかり火鉢にあたつて居るのも氣懸りだ。奈何でせう、二人で行つて見てやつては。』

『むゝ、左様しませうか。』と銀之助も火鉢を離れて立上つた。

『瀬川君はすこし奈何かしてゐるんでせうよ。まあ、僕に言はせると、何か神経の作用なんですなえ——兎に角、それでは一寸待つて下さい。僕が今、手提洋燈を点けますから。』

(二)

深い思に沈み乍ら、丑松は声のする方へ辿つて行つた。見れば宿直室の窓を泄れる灯が、僅に庭の一部分を照して居るばかり。校舎も、樹木も、形を潜めた。何もかも今は夜の空氣に包まれて、沈まり返つて、闇に隠れて居るやうに見える。それは少許も風の無い、闇とした晩で、寒威は骨に透徹るかのやう。恐らく山国

の氣候の烈しさを知らないものは、斯うした信濃の夜を想像することが出来ないであらう。

父の呼ぶ声が復た聞えた。急に丑松は立留つて、星明りに周^{そこい}囲^らを透^{すか}して視^みたが、別に人の影らしいものが目に入るでも無かつた。すべては皆な無言である。犬一つ啼いて通らない斯の寒い夜に、何が音を出して丑松の耳を欺かう。

『丑松、丑松。』

とまた呼んだ。さあ、丑松は畏^{おそ}れず慄^{ふる}へずに居られなかつた。心はもう底の底までも搔^{かき}乱^{みだ}されて了^{しま}つたのである。たしかに其は父の声で——皺^{しやが}枯^がれた中にも威嚴のある父の声で、あの深い烏^ゑ帽子^{ぼし}ヶ嶽^{だけ}の谷^{たに}間^{あひ}から、遠^こく斯の飯山に居る丑松を呼ぶやうに聞

えた。目をあげて見れば、空とても矢張地やはりの上と同じやうに、音も無ければ声も無い。風は死に、鳥は隠れ、清すゞしい星の姿ところ／＼。銀河の光は薄い煙のやうに遠く莊嚴おごそかな天を流れて、深大な感動を人の心に与へる。さすがに幽かすかな反射はあつて、仰げば仰ぐほど暗い藍色の海のやうなは、そこに他界を望むやうな心地もせらるゝのであつた。声——あの父の呼ぶ声は、斯の星夜の寒空を伝つて、丑松の耳の底に響いて来るかのやう。子の靈魂たましひを捜すやうな親の声は確かに聞えた。しかし其意味は。斯う思ひ迷つて、丑松はあちこちくくと庭の内を歩いて見た。

あゝ、何を其様そんなに呼ぶのであらう。丑松は一生の戒を思出した。あの父の言葉を思出した。自分の精神の内部なかの苦痛くるしみが、子を思

ふ親の情からして、自然と父にも通じたのであらうか。飽くまでも素性を隠せ、今日までの親の苦心を忘れるな、といふ意味であらうか。それで彼の牧場の番小屋を出て、自分のことを思ひ乍ら呼ぶ其声が谿谷たにから谿谷へ響いて居るのであらうか。それとも、また、自分の心の迷ひであらうか。といろ／＼に想像して見て、終しまひには恐怖おそれと疑うたがひ心とで夢中になつて、『阿爺おとつさん、阿爺さん。』と自分の方から目的あてどもなく呼び返した。

『やあ、君は其処ちかづに居たのか。』

と声を掛けて近ちかづいたのは銀之助。つゞいて敬之進も。二人はしきりに手提洋燈てさげランプをさしつけて、先づ丑松の顔を調べ、身の周囲まはりを調べ、それから闇うかゞを窺うかがふやうにして見て、さて丑松からまた／＼

父の呼声のしたことを聞取つた。

『土屋君、それ見たまへ。』

敬之進は寒さと恐怖おそれとで慄へ乍ら言つた。銀之助は笑つて、

『どうしても其様そんななことは理窟に合はん。必定きつと神経の故だせぬ。一体、

瀬川君は妙に猜疑うたがひぶか深く成つた。だから其様そんなな下らないものが耳

に聞えるんだ。』

『左様さうかなあ、神経の故せぬかなあ。』斯う丑松は反省するやうな調

子で言つた。

『だつて君、考へて見たまへ。形の無いところに形が見えたり、

声の無いところに声が聞えたりするなんて、それそこが君の猜うたが

疑ひぶか深く成つた証拠さ。声も、形も、其は皆な君が自分の疑心か

ら産出した幻だ。』

『幻？』

『所謂疑心暗鬼といふ奴だ。耳に聞える幻——といふのも少許変な言葉だがね、まあ左様いふことも言へるとしたら、其が今夜君の聞いたやうな声なんだ。』

『あるひは左様かも知れない。』

暫時、三人は無言になつた。天も地も闇として、声が無かつた。急に是の星夜の寂寞を破つて、父の呼ぶ声が丑松の耳の底に響いたのである。

『丑松、丑松。』

と次第に幽になつて、啼いて空を渡る夜の鳥のやうに、終には

遠く細く消えて聞えなくなつて了つた。

『瀬川君。』と銀之助は手提洋燈をさしつけて、顔色を変へた丑松の様子を不思議さうに眺め乍ら、『どうしたい——君は。』

『今、また阿爺おやぢの声がした。』

『今？ 何にも聞えやしなかつたぢやないか。』

『ホウ、左様さうかねえ。』

『左様かねえもないもんだ。何も声なんになぞは聞えやしないよ。』と言つて、銀之助は敬之進の方へ向いて、『風間さん、奈何どうでした——何か貴方には聞えましたか。』

『いゝえ。』と敬之進も力を入れた。

『ホウラ。風間さんにも聞えなければ、僕にも聞えない。聞いた

のは、唯君ばかりだ。神経、神経——どうしても其に相違ない。』

斯う言つて、廳で銀之助はあちこちと闇を照らして見た。天は今僅かに星の映る鏡、地は今大な暗い影のやう。一つとして声のありさうなものが、手提洋燈の光に入るでもなかつた。『はゝゝゝ。』と銀之助は笑ひ出して、『まあ、僕は耳に聞いたつて信じられない。目に見たつて信じられない。手に取つて、^{さは}触つて見て、それからでなければ其^{そん}様なことは信じられない。いよくこりやあ、僕の觀察の通りだ。生理的に其様な声が聞えたんだ。はゝゝゝ。それはさうと、馬鹿に寒く成つて来たぢやないか。僕は最早^も斯うして立つて居られなくなつた——行かう。』

(三)

其晩、寢床へ入つてからも、丑松は父と先輩とのことを考へて、
 寝られなかつた。銀之助は直にもう高たかい 鼾びき。どんなに丑松は傍
 に枕を並べて居る友達の寝顔を熟視みまもつて、その平穩おだやかな、安静しづかな
 睡眠ねむりを羨ねむりんだらう。夜も更ふけた頃、むつくと寢床から跳はね起きて、
 一旦細こくした洋燈ランプを復た明あくしながら、蓮太郎に宛あてた手紙を書
 いて見た。今はこの病氣見舞はなすら人目を憚はぶつて認しめる程に用心し
 たのである。時々丑松は書きかけた筆を止めて、洋燈の光に友達
 の寝顔を窺のぞつて見ると、銀之助は死んだ魚のやうに大な口を開い
 て、前後も知らず熟睡して居た。

全く丑松は蓮太郎を知らないでも無かつた。人の紹介で逢つて見たことも有るし、今歳ことしになつて二三度手紙の往復とりやりもしたので、幾分いくらか互ひの心こころもち情は通じた。然し、蓮太郎は篤志な知己として丑松のことを考へて居るばかり、同じ素性の青年とは夢にも思はなかつた。丑松もまた、其秘密ばかりは言ふことを躊躇ちうちよして居る。だから何となく奥歯に物が挟まつて居るやうで、其晩書いた丑松の手紙にも十分に思つたことが表れない。何故なぜ是程これほどに慕つて居るか、其さへ書けば、他の事はもう書かなくても済すむ。あゝ——書けるものなら丑松も書く。其を書けないといふのは、丑松の弱点で、とう／＼普通の病氣見舞と同じものに成つて了つた。

『東京にて、猪子蓮太郎先生、瀬川丑松より』と認め終つた時は、

深くく良心を偽るやうな気がした。筆を投つて、嘆息して、復た冷い寢床に潜り込んだが、少許とろくとしたかと思ふと、直に恐しい夢ばかり見つゞけたのである。

翌朝のことであつた。蓮華寺の庄馬鹿が学校へやつて来て、是非丑松に逢ひたいと言ふ。『何の用か』を小使に言はせると、

『御目に懸つて御渡ししたいものが御座ます』とか。出て行つて玄関のところでは逢へば、庄馬鹿は一通の電報を手渡しした。不

取敢^{へず}開封して読下して見ると、片仮名の文字も簡短に、父の死去したといふ報知^{しらせ}が書いてあつた。突然のことに驚いて了つて、半信半疑で繰返した。確かに死去の報知には相違なかつた。発信人は根津の叔父。『直ぐ帰れ』としてある。

『それはどうも飛んだことで、嘸御力落しで御座ませう——はい、早速帰りまして、奥様にも申上げますので御座ます。』

斯う庄馬鹿が言つた。小児のやうに死を畏れるといふ様子は、其愚しい目付に頭はれるのであつた。

丑松の父といふは、日頃極めて壮健な方で、激烈しい氣候に遭遇つても風邪一つ引かず、巖畳な体軀は反つて壯夫を凌ぐ程の隠居であつた。牧夫の生涯といへばいかにも面白さうに聞えるが、其實普通の人に堪へられる職業では無いのであつて、就中

西乃入の牧場の牛飼などと来ては、『彼の隠居だから勤まる』

と人にも言はれる程。牛の性質を克く暗記して居るといふ丈では、所詮あの烏帽子ヶ嶽の深い谿谷に長く住むことは出来ない。氣

候には堪へられても、寂寥さびしきには堪へられない。温暖あたたかい日の下に産れて忍耐の力に乏しい南国の人なぞは、到底斯かういふ山の上の牧夫に適しないのである。そこはそれ、北部の信州人、殊に丑松の父は素朴な、勤勉な、剛健な気象で、労苦を労苦とも思はない上に、別に人の知らない隠遁の理由をも持つて居た。思慮の深い父は丑松に一生の戒を教へたばかりで無く、自分も亦た成るべく人目につかないやうに、と斯う用心して、子の出世を祈るより外にもう希望のぞみもなければ慰藉なぐさめもないのであつた。丑松のため——其を思ふ親の情からして、人里遠い山の奥に浮世を離れ、朝夕炭焼の煙りを眺め、牛の群を相手に寂すきしい月日を送つて来たので。月々丑松から送る金の中から好すきな地酒を買ふといふことが、何より

この斯牧夫のたのしみ。労苦も寂寥さびしきも其の為に忘れると言つて居た。斯ういふ阿爺おやぢが——まあ、鋼鉄のやうに強いとも言ひたい阿爺が、病氣の前まへ触ふれも無くて、突然死去したと言つてよこしたとは。

電報は簡短で亡くなつた事情も解らなかつた。それに、父が牧場の番小屋に上るのは、春雪の溶け初める頃で、また谷々が白く降り埋うづめられる頃になると、根津村の家へ下りて来る毎年まいとしの習慣である。もうそろく冬籠りの時節。考へて見れば、亡くなつた場処は、西乃入か、根津か、其すら斯電報では解らない。

しかし、其時になつて、丑松は昨夜ゆうべの出来事を思出した。あの父の呼声を思出した。あの呼声が次第に遠く細くなつて、別離わかれを

告げるやうに聞えたことを思出した。

斯の電報を銀之助に見せた時は、流石さすがの友達も意外なといふ感か想んじに打たれて、暫時しばらくほんやり茫然として突立つた儘まゝ、丑松の顔を眺めたり、死去の報告しらせを繰返して見たりした。臆やがて銀之助は思ひついたやうに、

『むゝ、根津には君の叔父さんがあると云つたツけねえ。左様さういふ叔父さんが有れば、万事見ては呉れたらう。しかし氣の毒なことをした。なにしろ、まあ早速帰る仕度をしたまへ。学校の方は、君、奈何どうにでも都合するから。』

斯う言つて呉れる友達あふの顔には眞実が輝き溢あふれて居た。たゞ銀之助は一語ひとことも昨夜のことを言出さなかつたのである。『死は事

実だ——不思議でも何でも無い』と斯この若い植物学者は眼で言つた。

校長は時刻を違たがへず出勤したので、早速この報知しらせを話した。丑松は直にこれから出掛けて行きたいと話した。留守中何分宜敷よろしく、受持の授業のことは万事銀之助に頼んで置いたと話した。

『奈何どんなにか君も吃驚びつくりなすつたでせう。』と校長は忸々敷なれくしい調子で言つた。『学校の方は君、土屋君も居るし、勝野君も居るし、其そ様なことはもう少許すこしも御心配なく。実に我輩も意外だつた、君のお上おとつさんが亡なくならうとは。何卒どうか、まあ、彼方あちらの御用も済み、忌服ぶくでも明けることになつたら、また学校の為に十分御尽力を願ひませう。吾儕われの事業しごとが是これだけ丈に揚つて来たのも、一つは君の御

骨折からだ。斯うして君が居て下さるんで、奈何にか我輩も心強
 いか知れない。此頃こなひだも或処で君の評判を聞いて来たが、何だか
 斯う我輩は自分を褒められたやうな心地こころもちがした。實際、我輩は君
 を頼りにして居るのだから。』と言つて氣を変へて、『それにし
 ても、出掛けるとなると、思つたよりは要かるものだ。少許すこしぐらゐ位は
 持合せも有ますから、立替へて上げてても可いのですが、どうです少す
 許こし御持ちなさらんか。もし御入用おいりようなら遠慮なく言つて下さい。
 足りないと、また困りますよ。』

と言ふ校長の言葉はいかにも巧みであつた。しかし丑松の耳に
 は唯わざとらしく聞えたのである。

『瀬川君、それでは届を忘れずに出して行つて下さい——何も規

則ですから。』

斯う校長は添加つけたして言つた。

(四)

丑松が急いで蓮華寺へ歸つた時は、奥様も、お志保も飛んで出て来て、電報の様子を問ひ尋ねた。奈何どんなに二人は丑松の顔を眺めて、この可傷いたましい報知しらせの事実を想像したらう。奈何に二人は昨夜の不思議な出来事を聞取つて、女心に恐しくあさましく考へたらう。奈何に二人は世にある多くの例ためしを思出して、死を告げる前兆しらせ、逢ひに来る面影、または闇を飛ぶといふ人魂ひとだまの迷信なぞに事寄

せて、この暗合した事実^{じじつ}に胸を騒^{さわ}がせたらう。

『それはさうと、』と奥様は急に思付いたやうに、『まだ貴方は朝飯前でせう。』

『あれ、左様^{さよう}でしたねえ。』とお志保も言葉を添へた。

『瀬川さん。そんなら準備^{じゆんび}して御出^{おいで}なすつて下さい。今直に御飯にいたしますから。是^{これ}から御出掛なさるといふのに、生^{あいにく}憎何にも無くて御氣の毒ですなえ——塩^{しほ}鮭^{ぎき}でも焼いて上げませうか。』

奥様はもう涙ぐんで、蔵裏^{くらり}の内をぐる／＼廻つて歩いた。長い年月の精^{しやうじや}舎^{しゃ}の生活は、この女の性質を感じ易く気短くさせたのである。

『なむあみだぶ。』

と斯この有髪うはつの尼あまは独ひとりごと語ことのやうに唱へて居た。

丑松は二階へ上つて大急ぎで旅の仕度をした。場合が場合、土産も買はず、荷物も持たず、成るべく身軽なりな装なりをして、叔母の手織かの綿入かうりを行李かの底から出して着た。丁度そこへ足を投出して、脚絆きやはんを着けて居るところへ、下女の袈裟治かに膳めしびつを運ばせて、つゞいて入つて来たのはお志保である。いつも飯櫃めしびつは出し放し、三度が三度手盛りでやるに引きかへ、斯うして人に給仕して貰ふといふは、嬉うれ敷しくもあり、窮屈くわでもあり、無造作むに膳めしびつを引寄せて、丑松はお志保につけて貰つて食つた。其日はお志保もすこし打解けて居た。いつものやうに丑松を恐れる様子も見えなかつた。敬お之も進はの境涯きやうを深く憐むといふ丑松の真実まことが知れてから、自然おと思も

惑を憚る心も薄らいで、斯うして給仕して居る間にも種々なことを尋ねた。お志保はまた丑松の母のことを尋ねた。

『母ですか。』と丑松は淡泊とした男らしい調子で、『亡くなつたのは丁度私が八歳の時でしたよ。八歳といへば未だほんの小供ですからねえ。まあ、私は母のことを克く覚えても居ない位なんです——實際母親といふものゝ味を眞実に知らないやうなものなんです。父親だつても、矢張左様で、この六七年の間は一緒に長く居て見たことは有ません。いつでも親子はなれ／＼。実は父親も最早好い年でしたからね——左様ですなあ貴方の父上さんよりは少許年長でしたらう——彼様いふ風に平素壮健な人は、反つて病氣なぞに罹ると弱いのかも知れませんよ。私なぞは、で

すから、親に縁の薄い方の人間なんでせう。と言へば、まあお志保さん、貴方だつても其御仲間ぢや有ませんか。』

斯この言葉はお志保の涙を誘ふ種となつた。あの父親とは——十三の春に是寺へ貰はれて来て、それぎり最早も一緒に住んだことがない。それから、あの生うみの母親とは——是はまた子供の時分に死別れて了つた。親に縁の薄いとは、丁度お志保の身の上でもある。お志保は自分の家の零落を思出したといふ風で、すこし顔を紅あかくして、黙つて首を垂れて了つた。

そのお志保の姿を注意して見ると、亡くなつた母親といふ人も大凡おほよそ想像がつく。『彼娘あのこの容貌かほつきを見ると直すぐに前せんの家内が我輩の眼に映る』と言つた敬之進の言葉を思出して見ると、『昔風に亭

主に便たよるといふ風で、どこまでも我輩を信じて居た』といふ女の若い時は——いづれこのお志保と同じやうに、情の深い、涙なみだ脆もろい、見る度に別の人のやうな心地こころもちのする、姿ありさまの種々いろくに変わるやうな人であつたに相違ない。いづれこのお志保と同じやうに、醜くも見え、美しくも見え、ある時は蒼く黄ばんで死んだやうな顔付をして居るかと思ふと、またある時は花のやうに白い中うちにも自然と紅味あかみを含んで、若く、清く、活々とした顔付をして居るやうな人であつたに相違ない。まあ、お志保を通して想像した母親の若い時の倣おもかげは斯かうであつた。快活な、自然な信州北部の女の美質と特色とは、矢張丑松のやうな信州北部の男子をとこの眼に一番よく映るのである。

旅の仕度が出来た後、丑松はこの二階を下りて、蔵裏くりの広間のところで皆みんなと一緒に茶を飲んだ。新しい木製の珠数じゆず、それが奥様からの餞別であつた。やがて丑松は庄馬鹿の手作りにしたといふ草鞋わらぢを穿はいて、人々のなさけに見送られて蓮華寺の山門を出た。

第七章

(一)

それは忘れることの出来ないほど寂しい旅であつた。一をと、し年の

夏帰省した時に比べると、斯うして千曲川ちくまがはの岸に添ふて、可懐なつかしい故郷の方へ歸つて行く丑松は、まあ自分で自分ながら、殆んど別の人のやうな心地がする。足掛三年、と言へば其程長い月日とも聞えないが、丑松の身に取つては一生のうつりかはり変遷の始つた時代で——尤ももつと、人の境遇によつては何時變つたといふことも無しに、自然に世を隔てたやうな感想かんじのするものもあらうけれど——其精神こころの内部なかの革命が丑松には猛烈に起つて来て、しかも其を殊に深く感ずるのである。今は誰を憚はぶるでも無い身。乾燥はしやいだ空気を自由に呼吸して、自分のあやしい運命を悲しんだり、生涯の変転に驚いたりして、無限の感慨に沈み乍ながら歩いて行つた。千曲川の水は黄緑の色に濁つて、声も無く流れて遠い海の方へ——其岸

うづくまに蹲るやうな低い楊柳やなぎの枯々となつた光景さま——あゝ、依然として
 旧もとの通りな山河の眺望は、一層丑松の目を傷いたましめた。時々丑松
 は立留つて、人目の無い路みち傍ばたの枯草の上に倒れて、声を揚げて
 慟どう哭こくしたいとも思つた。あるひは、其を為したら、堪へがたい胸
 の苦痛いたみが少許すこしは減つて軽く成るかとも考へた。奈何いかにんせん、哭なきた
 くも哭くことの出来ない程、心は重く暗く閉とぢ塞ふさつて了つたの
 である。

漂泊する旅人は幾群か丑松の傍わきを通りぬけた。落魄の涙に顔を
 濡して、餓うゑた犬のやうに歩いて行くものもあつた。何か職業を
 尋ね顔に、垢染あかじみた着物を身に絡まとひ乍ら、素足の儘まで土を踏んで
 行くものもあつた。あはれげな歌を歌ひ、鈴振鳴らし、長途の艱

難を修行の生命いのちにして、日に焼けて罪滅つみほろぼし顔な巡礼の親子もあつた。または自墮落な編笠姿あみがさすがた、流石さすがに世を忍ぶ風情ふぜいもしをらしく、放肆ほしいまゝに恋慕の一曲を弾じて、錢を乞ふやうな卑いやしい芸人の一組もあつた。丑松は眺め入つた。眺め入り乍ら、自分の身の上と思ひ比べた。奈何どんなに丑松は今の境涯やるせの遺瀨なさを考へて、自在に漂泊する旅人の群を羨んだらう。

飯山を離れて行けば行く程、次第に丑松は自由な天地へ出て来たやうな心地こころもちがした。北国街道の灰色な土を踏んで、花やかな日の光を浴び乍ら、時には岡に上り時には桑畠の間を歩み、時にはまた街道の両側に並ぶ町々を通過ぎて、汗も流れ口も乾き、足袋たびも脚絆ほこりも塵埃まみに汚れて白く成つた頃は、反つてかへ少許蘇生すこしの思に帰

つたのである。路傍みちばたの柿の樹は枝も撓たわむばかりに黄な珠を見せ、粟は穂を垂れ、豆は莢さやに満ち、既に刈取つた田畠には浅々と麦の萌もえ初めたところもあつた。遠近をちこちに聞える農夫の歌、鳥の声――あゝ、山家でいふ『小六月』だ。其日は高社山一帯の山脈も面白く容かたちを顕あらはして、山と山との間の深い谷蔭には、青々と炭焼の煙の立登るのも見えた。

蟹かに沢ざの出はづれで、当世風の紳士を乗せた一台の人力車くるまが丑松に追付いた。見れば天長節の朝、式場で演説した高柳利三郎。代議士の候補者に立つものは、そろ／＼政見を発表する為に忙しくなる時節。いづれ是人も、選挙の準備したくとして、地方廻りに出掛けるのであらう。と見る丑松の側わきを、高柳は意気揚々として、す

こし人を尻目にかけて、挨拶も為^せずに通過^せぎた。二三町離れて、車の上の人は急に何か思付いたやうに、是方^{こち}を振返つて見たが、別に丑松の方では気にも留めなかつた。

日は次第に高くなつた。水内^{みのち}の平野は丑松の眼^{めのまへ}前に展けた。

それは広^{ひろ}濶とした千曲川の流域で、川上から押流す泥砂の一面に盛上つたところを見ても、氾^{はんらん}濫^{すさま}の凄じさが思ひやられる。

見渡す限り田畠は遠く連ねて、櫟^{けやき}の杜^{もり}もところ／＼。今は野も

山も濃く青い十一月の空気を呼吸するやうで、うら枯れた中にも

活^{いき}々とした自然の風^{おもむき}趣^よを克く表して居る。早く斯^この川の上流

へ——小^{ちひさ}県^{がた}の谷へ——根津の村へ、斯う考へて、光の海を望

むやうな可^{なつか}懐しい故郷の空をさして急いだ。

豊野と言つて汽車に乗るべきところへ着いたは、午後の二時頃。車で駈付けた高柳も、同じ列車を待合せて居たと見え、発車時間の近い頃には休茶屋からやつて来た。『何処どこへ行くのだらう、彼男は。』斯う思ひ乍ら、丑松は其となく高柳の様子を窺うかがふやうにして見ると、先方さきも同じやうに丑松を注意して見るらしい。それに、不思議なことには、何となく丑松を避けるといふ風で、成るべく顔を合すまいと勉めて居た。唯互ひに顔を知つて居るといふ丈、つひぞ名乗合つたことが有るではなし、二人は言葉を交さうともしなかつた。

臆おそて発車を報せる鈴の音が鳴つた。乗客はいづれも埒らちの中へと急いいだ。盛さかんな黒くろけぶり烟けぶりを揚げて直江津の方角から上つて来た列車

は豊野停車場ステーションの前で停つた。高柳は逸いちはや早く群集ひとごみの中を擦抜すりぬけて、一室の扉とを開けて入る。丑松はまた機関車よ近邇よりの一室を扱えらんで乗つた。思はず其処に腰掛けて居た一人の紳士と顔を見合せた時は、あまりの奇遇に胸を打たれたのである。

『やあ——猪子先生。』

と丑松は帽子を脱いで挨拶した。紳士も、意外な処で、といふ驚喜した顔付。

『おゝ、瀬川君でしたか。』

(二)

夢寐にも忘れなかつた其人の前に、丑松は今偶然にも腰掛けたのである。壮年の発達に驚いたやうな目付をして、可懐しさうになつかの方を眺めたは、蓮太郎。敬慕の表情を満面に輝かし乍ら、帰省の由緒を物語るのは、丑松。實に是邂逅の唐突で、意外で、しかも偽りも飾りも無い心の底の外面に流露れた光景は、男性と男性との間に稀に見られる美しさであつた。

蓮太郎の右側に腰掛けて居た、背の高い、すこし顔色の蒼い女は、丁度読みさしの新聞を休めて、丑松の方を眺めた。玻璃越しに山々の風景を望んで居た一人の肥大な老紳士、是も窓のところガラスに倚凭つて、振返つて二人の様子を見比べた。

新聞で蓮太郎のことを読んで見舞状まで書いた丑松は、この先

輩の案外元氣のよいのを眼め前まへに見て、喜びもすれば不思議にも
 思つた。かねて心配したり想像したりした程に身体からだの衰弱おとろへが目
 につくでも無い。強い意志を刻んだやうな其大な額——いよこ
 高く隆起とびだした其頬の骨——殊に其眼は一種の神経質な光を帯びて、
 悲壯な精神こころの内部なかを明あ白りくと映して見せた。時として顔の色いろつや沢
 なぞを好く見せるのは彼の病氣あの習ひ、あるひは其その故せみかとも思
 はれるが、まあ想像したと見たとは大違ひで、血を吐く程の苦くるし
 痛みをする重い病人のやうには受取れなかつた。早速丑松は其事
 を言出して、『実は新聞で見ました』から、『東京の御宅へ宛て、
 手紙を上げました』まで、眞実を顔に表して話した。

『へえ、新聞に其様そんなことが出て居ましたか。』と蓮太郎は微笑ほくそ

んで、『間違へでせう——不良かつたといふのを、今不良といふ風に、間違へて書いたんでせう。よく新聞には左様いふ間違ひが出て来ますよ。まあ御覧の通り、斯うして旅行が出来る位ですから安心して下さい。誰がまた其様な大袈裟なことを書いたか——はゝゝゝゝ。』

聞いて見ると、蓮太郎は赤倉の温泉へ身体を養ひに行つて、今其帰途であるとのこと。其時同伴の人々をも丑松に紹介した。右側に居る、何となく人格の奥床しい女は、先輩の細君であつた。肥大な老紳士は、かねて噂に聞いた信州の政客、この冬打つて出ようとして居る代議士の候補者の一人、雄弁と俠氣とで人に知られた弁護士であつた。

『あゝ、瀬川君と仰おつしやるんですか。』と弁護士は愛嬌あいけうのある微笑ほゝゑを満面に湛へ乍ら、快活な、磊落らいらくな調子で言つた。『私は

市村です——只今長野に居ります——何卒どうかまあ以後御心易く。』

『市村君と僕とは、』蓮太郎は丑松の顔を眺めて、『偶然なことから斯こん様に御懇意にするやうになつて、今では非常な御世話に成つて居ります。僕の著述のことでは、殊にこの市村君が心配して居て下さるんです。』

『いや。』と弁護士は肥大な身体を動ゆすつた。『我輩こそ反かへつて種いろく々御世話に成つて居るので——まあ、年だけは猪子君の方がずつと若い、はゝゝゝ、しかし其他のことにかけては、我輩の先輩です。』斯う言つて、何か思出したやうに嘆息して、『近頃の

人物を数へると、いづれも年少気鋭の士ですね。我輩などは斯の年齢としに成つても、未だ碌々ろくろくとして居るやうな訳で、考へて見れば実に御恥しい。』

斯かういふ言葉の中には、真に自身の老大を悲むといふ情こころが表れて、創意のあるものを忌むやうな悪い癖すこしは少許も見えなかつた。

そもくは佐渡の生れ、斯の山国に落着いたは今から十年程前にあたる。善にも強ければ悪にも強いと言つたやうな猛烈な氣象から、種々さまざまな人の世の艱難、長い政治上の経験、権勢の争奪、党派の栄枯の夢、または国事犯としての牢獄の痛苦、其他多くの訴訟人と罪人との弁護、およそありとあらゆる社会の酸いと甘いなとを嘗め尽して、今は弱いもの貧しいもの、味方になるやうな、

涙脆い人と成つたのである。天の配剤ほど不思議なものはない——この政客が晩年に成つて、学もあり才もある穢多を友人に持たうとは。

猶なほ深く聞いて見ると、これから市村弁護士は上田を始めとして、小諸、岩村田、臼田などの地方を遊説する為、政見発表の途みちに上るのであるとのこと。親しく佐久小県地方の有権者を訪問して草わ鞋らぢばき穿主義で選挙を争ふ意気込であるとのこと。蓮太郎はまた、この友人の応援の為、一つには自分の研究の為、しばらく可懐なつかしい信州に踏止まりたいといふ考へで、今宵は上田に一泊、いづれ二三日の内には弁護士と同道して、丑松の故郷といふ根津村へも出掛けて行つて見たいとのことであつた。この『根津村へも』が

丑松の心を悦ばせたのである。

『そんなら、瀬川さんは今飯山に御奉職おいでですな。』と弁護士は丑松に尋ねて見た。

『飯山——彼処からは候補者が出ませう？ 御存じですか、あの

高柳利三郎といふ男を。』

蛇じやの道は蛇へびだ。弁護士は直に其を言つた。丑松は豊野の停車ステーション

場ヨシで落合つたことから、今この同じ列車に乗込んで居るといふことを話した。何か思当ることが有るかして、弁護士は不思議さうに首を傾かしげ乍ながら、『何処へ行くのだらう』を幾度となく繰返した。

『しかし、是だから汽車の旅は面白い。同じ列車の内に乗合せて

居ても、それで互ひに知らずに居るのですからなあ。』

斯う言つて弁護士は笑つた。

病のある身ほど、人の情の真まと偽いつはりとを烈しく感ずるものは無い。心にも無いことを言つて慰めて呉れる健たつしや康しあはせものな幸福者の多い中に、斯ういふ人々ばかりで取囲とりまかれる蓮太郎の嬉うれしき。殊に丑松の同おもひやり情は言葉の節々にも表れて、それがまた蓮太郎の身に取つては、奈何どんなにか胸こたに徹へるといふ様子であつた。其時細君は籠の中に入れてある柿を取出した。それは汽車の窓から買取つたもので、其色の赤々としてさも甘さうに熟したやつを、扱よつて丑松にも薦すすめ、弁護士にも薦めた。蓮太郎も一つ受取つて、秋の果実このみのほびを嗅かいで見乍みながら、さて種さま々／＼な赤倉温泉の物語をした。

越後の海岸まで旅したことを話した。蓮太郎は又、東京の市場で売られる果実くだものなぞに比較して、この信濃路の柿の新しいこと、甘いことを賞めちぎつて話した。

駅々で車の停る毎に、農夫の乗客が幾群か入込んだ。今は室内も放ほしま肆しまな笑声と無遠慮な雑談とで満さるゝやうに成つた。

それに、東海道沿岸などの鉄道とは違ひ、この荒くわうれう寥れうとした信

濃路のは、汽車までも旧式で、粗造で、山家風だ。其列車が山へ

上るにつれて、窓の玻璃ガラスに響いて烈しく動揺する。終しまひには談話はなしも

能く聞取れないことがある。油のやうに飯山あたりの岸を浸す千

曲川の水も、見れば大な谿流の勢に變つて、白波を揚げて谷底を下るのであつた。濃く青く清々とした山気は窓から流込んで、次

第に高原へ近ちかづいたことを感ぜさせる。

驪やがて、汽車は上田へ着いた。旅人は多くこの停車場ステーションで下りた。蓮太郎も、妻君も、弁護士も。『瀨川君、いづれそれでは根津で御目に懸ります——失敬。』斯かう言つて、再会を約して行く先輩の後姿を、丑松は可懐なつかしさうに見送つた。

急に室の内は寂しくなつたので、丑松は冷たい鉄の柱に靠もたれ乍ら、眼を瞑つむつて斯この意外めぐりあひな邂逅を思ひ浮べて見た。慾を言へば、何となく丑松は物足りなかつた。彼程あれほど打解けて呉れて、彼程隔ての無い言葉を掛けられても、まだ丑松は何処かに冷淡よそくしい他人行儀などころがあるかと考へて、奈何どうして是程の敬慕の情が彼の先輩の心に通じないのであらう、と斯う悲しくも情なくも思つたので

ある。嫉むねたでは無いが、彼の老紳士の親しくするのが羨ましくも思はれた。

其時になつて丑松も明あきらかに自分の位置を認めることが出来た。敬慕も、同情も、すべて彼の先輩に対して起る心の中のやるせなさは——自分も亦た同じやうに、『穢多である』といふ切ない事実から湧上るので。其秘密を蔵かくして居る以上は、仮令たとひ口の酸くなるほど他の事を話したところで、自分の真情が先輩の胸に徹こたへる時は無いのである。無理もない。あゝ、あゝ、其を告白うちあけて了つたなら、奈何どんなに是胸の重荷が軽くなるであらう。奈何に先輩は驚いて、自分の手を執つて、『君も左様さうか』と喜んで呉れるであらう。奈何に二人の心と心とがハタと顔を合せて、互ひに同じ運命を憐

むといふ其深い交際まじはりに入るであらう。

左様さようだ——せめて彼の先輩だけには話さう。斯う考へて、丑松は楽しい再会の日を想像して見た。

(三)

田中の停車場ステーションへ着いた頃は日暮に近かつた。根津村へ行かうとするものは、こゝで下りて、一里あまり小ちひさがた県の傾斜を上らなければならぬ。

丑松が汽車から下りた時、高柳も矢張同じやうに下りた。流石さすがが代議士の候補者と名乗る丈あつて、風采おしだしは堂々とした立派なもの。

権勢と奢侈とで饑^うゑたやうな其姿の中には、何処^{どこ}となく斯^かう沈んだところもあつて、時々盗むやうに是方^{こちら}を振返つて見た。成るべく丑松を避けるといふ風で、顔を合すまいと勉めて居ることは、いよ／＼其素振^{そぶり}で読めた。『何処^{いく}へ行のだらう、彼男は。』と見ると、高柳は素早く埒^{らち}を通り抜けて、引隠れる場処を欲しいと言つたやうな具合に、旅人の群に交つたのである。深く外套に身を包んで、人目を忍んで居るさへあるに、出迎への人々に取^{とり}囲かれて、自分と同じ方角を指して出掛けるとは。

北国街道を左へ折れて、桑^{くはばたけ} 畠^{はたけ}の中の細道へ出ると、最早高柳の一行は見えなかつた。石垣で積上げた田圃と田圃との間の坂路を上るにつれて、烏帽子^{ゑぼし}山脈の大傾斜が眼前^{めのまへ}に展けて来る。

広野、湯の丸、籠の塔、または三峯さんぼう、浅間の山々、其他ところ
 /＼に散布する村落、松林——一つとして回想おもひでの種と成らな
 いものはない。千曲川ちくまがはは遠く谷底を流れて、日をうけておもし
 ろく光るのであつた。

其日は灰紫色の雲が西の空に群むらつて、飛驒ひだの山脈を望むことは
 出来なかつた。あの千古人跡の到らないところ、もし夕雲の隔へだて
 さへ無くば、定めし最早もう皚がいく々とした白雪が夕日を帯びて、天地
 の壯観は心を驚かすばかりであらうと想像せられる。山を愛する
 のは丑松の性分で、斯うして斯の大傾斜大谿谷の光景ありさまを眺めた
 り、又は斯の山間に住む信州人の素朴な風俗と生活とを考へたり
 して、岩石の多い凸凹でこぼこした道を踏んで行つた時は、若々しい総

身の血潮が胸を衝いて湧上るやうに感じた。今は飯山の空も遠く隔つた。どんなに丑松は山の吐く空気を呼吸して、暫時しばらく自分を忘れるといふ其楽しい心地に歸つたであらう。

山上の日没も美しく丑松の眼に映つた。次第に薄れて行く夕暮の反射を受けて、山々の色も幾度いくたびか變つたのである。赤は紫に、紫は灰色に。終には野も岡も暮れ、影は暗く谷から谷へ拡つて、最後の日の光は山の巔いたゞきにばかり輝くやうになつた。丁度天空の一角にあたつて、黄ばんで燃える灰色の雲のやうなは、浅間の煙の靡なびいたのであらう。

斯かういふ楽しい心地こころもちは、とは言へ、長く続かなかつた。荒谷あらかやのはづれ迄行けば、向ふの山腹に連なる一村の眺望、暮色に包まれ

た白壁土壁のさま、其山家風の屋根と屋根との間に黒ずんで見えるのは柿の梢か——あゝ根津だ。帰つて行く農夫の歌を聞いてすら、丑松はもう胸を騒がせるのであつた。小諸の向町からは是処へ来て隠れた父の生涯、それを考へると、黄昏の景氣を眺める氣も何も無くなつて了ふ。切なさは可懐しさに交つて、足もおのづから慄へて来た。あゝ、自然の胸懷も一時の慰藉に過ぎなかつた。根津に近ければ近くほど、自分が穢多である、調里（新平民の異名）である、と其心地が次第に深く襲ひ迫つて来たので。

暗くなつて第二の故郷へ入つた。もとゝ父が家族を引連れて、この片田舎に移つたのは、牧場へ通ふ便利を考へたばかりで無く、僅少ばかりの土地を極く安く借受けるやうな都合もあつたからで。

現に叔父が耕して居るのは其畠である。流石さすがに用心深い父は人目につかない村はづれを択えらんだので、根津の西町から八町程離れて、とある小高い丘の裾すそのところに住んだ。

長野県小県郡根津村大字姫子沢——丑松が第二の故郷とは、其五十戸ばかりの小部落を言ふのである。

(四)

父の死去した場処は、斯この根津村の家ではなくて、西にし乃の入い牧り場の番小屋の方であつた。叔父は丑松の帰村を待受けて、一いっ緒しょに牧場へ出掛ける心算つもりであつたので、兎も角も丑松を炉ろ辺ばたに座すゑ、

旅の疲労つかれを休めさせ、例の無慾な、心の好ささうな声で、亡くなつた人の物語を始めた。炉の火は盛さかんに燃えた。叔母も啜すり上げ乍ながら耳を傾けた。聞いて見ると、父の死去は、老の為でもなく、病の為でも無かつた。まあ、言はず、職業の為に突然な最後を遂げたのであつた。一体、父が家畜を愛する心は天性に近かつたので、随つて牧夫としての経験も深く、人にも頼まれ、牧場の持主にも信ぜられた位。牛の性質なぞはなかくよく暗記して居たもの。よもや彼あの老練な人が其道に手ぬかりなどの有らうとは思はれない。そこがそれ人の一生の測りがたさで、不図ふとある種牛を預つた為に、意外な出来事を引起したのであつた。種牛といふのは性質たちが悪かつた。尤もつとも、多くの牝牛めうしの群の中へ、一頭の牝牛をうしを放つ

であるから、普通の温順おとなしい種牛ですら荒くなる。時としては性質が激変する。まして始めから氣象の荒い雑種と来たから堪たまらない。広ひろ潤／＼とした牧場の自由と、誘ふやうな牝牛の鳴声とは、其種牛を狂ふばかりにさせた。終しまひには家養の習慣も忘れ、荒々しい野獸の本ほん性しやうに歸つて、行衛ゆくへが知れなくなつて了しまつたのである。三日経たつても来ない。四日経たつても歸らない。さあ、父は其を心配して、毎日水草の中を捜さがして歩いて、ある時は深い沢を分けて日の暮れる迄も尋ねて見たり、ある時は山から山を獵あさつて高い声で呼んで見たりしたが、何処にも影は見えなかつた。昨日の朝、父はまた捜しに出た。いつも遠く行く時には、必ず昼飯ひるを用意して、例の『山猫』（鎌かま、鉈なた、鋸のこぎりなどの入物）に入れて背負しよつ

て出掛ける。ところが昨日に限つては持たなかつた。時刻に成つても帰らない。手伝ひの男も不思議に思ひ乍ら、塩を与へる為に牛小屋のあるところへ上つて行くと、牝牛の群が喜ばしさうに集まつて来る。丁度其中には、例の種牛も恍^{とほ}げ顔^{がほ}に交つて居た。見れば角は紅く血に染つた。驚きもし、呆^{あき}れもして、来合せた人々と一緒になつて取押へたが、其時はもう疲れて居た故^{せめ}か、別に抵^て抗^{むかひ}も為なかつた。さて男は其^{そこ}処^{こゝ}此^{こゝ}処^{こゝ}と父を探して歩いた。漸^{やうや}く岡の蔭の熊笹の中に呻^{うめ}吟^めき倒れて居るところを尋ね当て、肩に掛けて番小屋迄連れ歸つて見ると、手当も何も届かない程の深傷^{ふかで}。叔父が聞いて駈^い付けた時は、まだ父は確^{しつかり}乎^かして居た。最後に氣息^きを引取つたのが昨夜の十時頃。今日は人々も牧場に集つて、番

小屋で通夜と極めて、いづれも丑松の帰るのを待受けて居るとのことであつた。

『といふ訳で、』と叔父は丑松の顔を眺めた。『私が阿兄あにきに、何か言つて置くことはねえか、と尋ねたら、苦しい中にも氣象はしやんとしたもので、「俺も牧夫だから、牛の為に倒れるのは本望だ。今となつては他に何にも言ふことはねえ。唯気にかゝるのは丑松のこと。俺が今日迄の苦勞は、皆な彼奴あいつの為を思ふから。日頃俺は彼奴に堅く言聞かせて置いたことがある。何卒どうか丑松が歸つて来たら、忘れるな、と一言左様さう言つてお呉れ。』』

丑松は首を垂れて、黙つて父の遺言を聞いて居た。叔父は猶言なほ葉を継いで、

『「それから、俺は斯の牧場の土と成りたいから、葬式は根津の御寺でしねえやうに、成るなら斯の山でやつてお呉れ。俺が亡くなつたとは、小諸の向町へ知らせずに置いてお呉れ——頼む。」と斯う言ふから、其時私が「むゝ、解つた、解つた」と言つてやつたよ。すると阿兄は其が嬉しかつたと見え、につこり笑つて、臆て私の顔を眺め乍らボロ／＼と涙を零した。それぎりもう阿兄は口を利かなかつた。』

斯ういふ父の臨終の物語は、言ふに言はれぬ感激を丑松の心にと与へたのである。牧場の土と成りたいと言ふのも、山で葬式をして呉れと言ふのも、小諸の向町へ知らせずに置いて呉れと言ふのも、畢竟るところは丑松の為を思ふからで。丑松は其精神を酌取

つて、父の用意の深いことを感ずると同時に、又、一旦斯うと思ひ立つたことは飽くまで貫かずには置かないといふ父のたましひ氣魄の烈しさを感じた。實際、父が丑松に対する時は、嚴格を通り越して、残酷な位であつた。亡くなつた後までも、猶なほ丑松は父を畏おそれたのである。

やがて丑松は叔父と一緒に、西乃入牧場を指して出掛けることになつた。万事は叔父の計らひで、検屍けんしも済み、棺も間に合ひ、通夜の僧は根津のじやうしんあん定津院の長老を頼んで、既に番小屋の方へ登つて行つたとのこと。明日の葬式の用意は一切叔父が吞込んで居た。丑松は唯出掛けさへすればよかつた。此処から烏帽子ゑぼしヶ獄だけの麓まで二十町あまり。其間、田沢の峠なぞを越して、寂しい山

道を辿らなければならぬ。其晩は鼻を掴まゝれる程の闇で、足あ許しもとさへも覺束なかつた。丑松は先に立つて、提灯の光に夜路を照らし乍ら、山深く叔父を導いて行つた。人里を離れて行けば行くほど、次第に路は細く、落ち朽ちた木葉を踏分けて僅かに一ひとす条ぢの足跡があるばかり。こゝは丑松が少年の時代に、克よく父に連れられて、往つたり来たりしたところである。牛小屋のある高原の上へ出る前に、二人はいくつか小山を越えた。

(五)

谷を下ると其処がもう番小屋で、人々は狭い部屋の内に集つて

居た。灯は明々あかくと壁を泄もれ、木魚もくぎよの音も山の空氣に響き渡つて、流れ下る細谷川の私語さやくぎに交つて、一層の寂しさあはれさを添へる。家の構造つくりは、唯雨露あめつゆを凌ぐといふばかりに、葺ふきもし圍かざひもしてある一軒屋。たまさか殿城山の間道を越えて鹿沢温泉へ通ふ旅人が立寄るより外には、訪とふ人も絶えて無いやうな世離れたところ。炭焼、山番、それから斯の牛飼の生活——いづれも荒くれた山住の光景ありさまである。丑松は提ちやうちん灯を吹消して、叔父と一緒に小屋の戸を開けて入つた。

定津院の長老、世話人と言つて姫子沢の組合、其他父が生前懇意にした農家の男をとこ女をんな——それらの人々から丑松は親切な弔辞くやみを受けた。仏前の燈明は線香の烟けぶりに交る夜の空氣を照らして、何

となく部屋の内も混雑して居るやうに見える。父の遺骸なきがらを納め
 たといふは、極ごく粗末な棺。其周圍まはりを白い布で巻いて、前には新
 しい位牌みはいを置き、水、団子、外には菊、櫛しきみの緑葉みどりばなどを供へて
 あつた。読経も一きりになつた頃、僧の注意で、年老いた牧夫の
 見納めの為に、かはる／＼棺の前に立つた。死別の泪なみだは人々の
 顔を流れたのである。丑松も叔父に導かれ、すこし腰こしを曲め、薄
 暗い蠟燭ろうそくの灯影に是世の最後の別離わかれを告げた。見れば父は孤独
 な牧夫の生涯を終つて、牧場の土深く横はる時を待つかのやう。
 死顔は冷かに蒼あをめて、血の色も無く変りはてた。叔父は例の昔むかし
 氣質かたぎから、他界あのよの旅の便りにもと、編笠、草鞋わらぢ、竹の輪などを
 取添へ、別に魔除まよけと言つて、刃物を棺の蓋の上に載せた。廳やがて復ま

た読^{どきやう}経が始まる、木魚の音が起る、追懐の雑談は無邪気な笑聲に交つて、物食ふ音と一緒になつて、哀しくもあり、騒^{さわ}がしくもあり、人々に妨げられて丑松は旅の疲労^{つかれ}を休めることも出来なかつた。

一夜は斯ういふ風に語り明した。小諸の向町へは通知して呉れるなどいふ遺言もあるし、それに移^{ひっこし}住^{このかた}以來十七年あまりも打絶えて了つたし、是方^{こちら}からも知らせてやらなければ、向ふからも来なかつた。昔の『お頭』が亡くなつたと聞伝へて、下手なものにやつて来られては反つて迷惑すると、叔父は唯そればかり心配して居た。斯の叔父に言はせると、墓を牧場に択んだのは、かねて父が考へて居たことで。といふは、もし根津の寺なぞへ持込ん

で、普通の農家の葬式で通ればよし、さも無かつた日には、断然謝絶ことわられるやうな浅猿あひましい目に逢ふから。習慣の哀しさには、穢多は普通の墓地に葬る権利が無いとしてある。父は克く其を承知して居た。父は生前も子の為に斯ういふ山奥に辛抱して居た。死後もまた子の為に斯の牧場に眠るのを本望としたのである。

『どうかして斯の「おじやんぼん」（葬式）は無事に済ませたい——なあ、丑松、俺はこれでも気が気ぢやねえぞよ。』

斯ういふ心配は叔父ばかりでは無かつた。

翌あくるひ日の午後は、会葬の男をとこ女をんなが番小屋の内うち外そとに集つた。

牧場の持主を始め、日頃牝牛を預けて置く牛乳屋なども、其と聞伝へたかぎりは弔ひにやつて来た。父の墓地は岡の上の小松わきの側

と定まつて、やが聽ていよいよ野辺送りを為ることになつた時は、住み慣れた小屋の軒を昇かつがれて出た。棺の後には定津院の長老、つゞいて腕白顔な二人の子坊主、丑松は叔父と一緒にわらざうりばき藁草履穿、女はいづれも白の綿帽子を冠つた。人々は思ひくゝの風俗、紋付もあれば手織ておりしま縞の羽織もあり、山家の習ひとして多くは袴も着けなかつた。斯の飾りの無い一行の光景ありさまは、素朴な牛飼の生涯に克よく似合つて居たので、順序も無く、礼儀も無く、唯真まごゝろ、心こもる情一つに送られて、静かに山を越えた。

式まも亦た簡短であつた。単調な鈺かね、太鼓、饒ねうはち鉞はちの音、回おもひ想での多い耳には其も悲哀な音楽と聞え、器械的な回向と読経との声、悲嘆なげきのある胸には其もあはれの深い挽歌ばんかのやうに響いた。

礼^{らいはい}拝し、合掌し、焼香して、廳て歸つて行く人々も多かつた。棺は間もなく墓と定めた場処へ移されたので、そこには掘起された『のつぺい』（土の名）が堆^{うづたか}高く盛上げられ、咲残る野菊の花も土足に踏散らされてあつた。人々は土を掴^{つか}んで、穴をめがけて投入れる。叔父も丑松も一^{ひとかたまり}塊^{くわい}づゝ投入れた。最後に鋏^{くは}で掻落した時は、崖崩れのやうな音して烈しく棺の蓋を打つ。それさへあるに、土氣の囊^{のぼ}上^{にほひ}る臭^{におひ}気^がは紛^{ぶん}と鼻^びを衝^ついて、堪へ難い思をさせるのであつた。次第に葬られて、小山の形の土饅頭が其処に出來上るまで、丑松は考深く眺め入つた。叔父も無言であつた。あゝ、父は丑松の為に『忘れるな』の一^{ひとこと}語^{ことば}を残して置いて、最後の呼吸にまで其精神を言ひ伝へて、斯うして牧場の土深く埋もれ

て了つた——もう斯世このよの人では無かつたのである。

(六)

兎とも角かくも葬式は無事に済すんだ。後の事は牧場の持主に頼み、番小屋は手伝ひの男に預けて、一同姫子沢へ引取ることになつた。斯この小屋に飼かひ養やしなはれて居る一匹の黒猫、それも父の形見であるからと、しきりに丑松は連歸らうとして見たが、住慣すみなれた場処ぢやうに就く家畜の習ひとして、離れて行くことを好まない。物を呉れども食はず、呼んでも姿を見せず、唯縁の下をあちこちと鳴き悲む声のあはれさ。畜生なまこ乍らに、亡くなつた主人を慕ふかと、人々

も憐んで、是これから雪の降る時節にでも成らうものなら何を食つて山籠りする、と各自てんでに言ひ合つた。『可愛さうに、山猫にでも成るだらう。』斯う叔父は言つたのである。

やがて人々は思ひくくに出掛けた。番小屋を預かる男は塩を持つて、岡の上まで見送り乍ら随ついて来た。十一月上旬の日の光は淋しく照して、この西乃入牧場に一層荒くわうれう寥とした風趣おもむきを添へる。見れば小松はところ／＼。山躑躅やまつしは、多くの草木の中に、牛の食はないものとして、反かへつて一面に繁茂して居るのであるが、それも今は霜枯れて見る影が無い。何もかも父の死を冥想させる種と成る。愁うれひつゝ、丑松は小山の間の細道を歩いた。父を斯この牧場に訪れたは、丁度足掛三年前の五月の下旬であつたこと

を思出した。それは牛の角の癢かゆくなるといふ頃で、斯の枯々な山躑躅が黄や赤に咲乱れて居たことを思出した。そここゝわらびとに蕨わらびを采る子供の群を思出した。山鳩の啼なく声を思出した。其時は心こころも地ちの好い微風そよかぜが鈴蘭（君影草とも、谷間の姫百合とも）の花を渡つて、初夏の空気を匂はせたことを思出した。父は又、岡の上の新緑を指して見せて、斯の西乃入には柴草が多いから牛の為に好いと言つたことを思出した。其青葉なほを食ひ、塩なを嘗め、谷川の水を飲めば、牛の病は多く癒なほると言つたことを思出した。父はまた附和つけたして、さま／＼な牧畜の経験、類を以て集る牛の性質、初めて仲間入する時の角押ししのの試験、畜生とは言ひ乍ら仲間同志を制裁する力、其他女王のやうに牧場を支配する一頭の牝牛なぞ

の物語をして、それがいかにも面白く思はれたことを思出した。

父は斯この烏帽ゑぼし子だけヶ嶽だけの麓だけに隠れたが、功名を夢見る心は一生火のやうに燃えた人であつた。そこは無欲な叔父と大に違ふところで、その制おさへきれないやうな烈しい性質の為に、世に立つて働くことが出来ないやうな身分なら、寧いっそ山奥ひっこへ高踏ひっこめ、といふ憤慨の絶える時が無かつた。自分で思ふやうに成らない、だから、せめて子孫は思ふやうにしてやりたい。自分が夢見ることは、何卒どうか子孫に行はせたい。よしや日は西から出て東へ入る時があらうとも、斯この志こばかりは堅く執とつて変るな。行け、戦へ、身を立てよ——父の精神はそこに在つた。今は丑松も父の孤独な生涯を追懐して、彼あの遺言に籠る希望と熱情とを一層力強く感ずるやうに成つ

た。忘れるなどいふ一生の教訓をしへの其生命いのち——喘ぐやうな男性をとこの靈たま魂ましひの其呼吸——子の胸に流れ伝はる親の其血潮——それは父の亡くなつたと一緒にいよく深い震動を丑松の心に与へた。あゝ、死は無言である。しかし丑松の今の身に取つては、千百の言葉を聞くよりも、一層もつと深く自分の一生のことを考へさせるのであつた。

牛小屋のあるところまで行くと、父の残した事業が丑松の眼に映じた。一ひとまはり週しゅうすれば二里半にあまるといふ天然の大牧場、そここゝの小松わきの傍わきには臥ねたり起きたりして居る牝牛の群も見える。牛小屋は高原の東の隅に在つて、粗造そまつな柵の内には未まだ角の無い犢こうしも幾頭か飼つてあつた。例の番小屋を預かる男は人々を款待もてなし顔がほに、枯草を焚いて、猶なほさま／＼の燃料たきつけを掻集めて呉れる。

丁度そこには叔父も丑松も待合せて居た。男も、女も、斯の焚火の周囲まはりに集つたかぎりは、昨夜一晚寝なかつた人々、かてゝ加へて今日の骨折——中にはもう烈しい疲労つかれが出て、半分眠り乍ら落葉の焼ける香を嗅いで居るものもあつた。叔父は、牛の群に振舞ふと言つて、あちこちの石の上に二合ばかりの塩を分けてやる。父の飼ひ慣れたものかと思へば、丑松も可懐なつかしいやうな氣になつて眺ながめた。それと見た一頭の黒い牝牛は尻毛を動かして、塩の方へ近ちかづいて来る。眉間みけんと下腹と白くて、他はすべて茶褐色な一頭も耳を振つて近いた。咩もつと鳴いて犢ごうしの斑ふちも。さすがに見慣れない人々を憚おそるかして、いづれも鼻をうごめかして、塩の周囲まはりを遠廻りするものばかり。嘗なめたさは嘗めたし、烏散うさんな奴は見て居るし、

といふ顔付をして、じり／＼寄りに寄つて来るのもあつた。

斯の光景ありさまを見た時は、叔父も笑へば、丑松も笑つた。斯ういふ可愛らしい相手があればこそ、寂しい山奥に住まはれもするのだと、人々も一緒になつて笑つた。やがて一同暇乞ひして、斯の父の永眠の地に別離わかれを告げて出掛けた。烏帽子、角間かくま、四阿あづまや、白根の山々も、今は後に隠れる。富士神社を通過とほりす過ぎた頃、丑松は振返つて、父の墓のある方を眺めたが、其時はもう牛小屋も見えなかつた——唯、蕭条せうでうとした高原のかなたに当つて、細々と立登るひとすぢ一条の煙の末が望まれるばかりであつた。

第八章

(一)

西乃入に葬られた老牧夫の噂は、直に根津の村中へ伝播つた。

尾鱈をひれを付けて人は物を言ふのが常、まして種牛の為に傷けられた

といふ事實は、些少すくなからず好ものずき奇さきな手合の心を驚かして、到いたる処

に茶話の種となる。定めし前さきの世には恐しい罪を作つたことも有

つたらう、と迷信の深い者は直に其を言つた。牧夫の来歴に就

ても、南佐久の牧場から引移つて来た者だの、甲州生れだの、い

や会津の武士の果で有るのと、種さま々々な臆測を言ひ触らす。唯たゞ、

小諸こもろの穢多町の『お頭かしら』であつたといふことは、誰一人として知るものが無かつたのである。

『御苦勞招よび』(手伝あくるひひに来て呉れた近所の人々を招く習慣)の

あつた翌あくるひ日、丑松は会葬者への礼廻りに出掛けた。叔父も。姫

子沢の家には叔母一人留守居。御茶漬すぎ後(昼飯後)は殊更あたゝか温暖く、

日の光が裏庭の葱ねぎ畠ばたけから南かぼ瓜ちやを乾し並べた縁側へ射し込ん

で、いかにも長閑のどかな思をさせる。追ふものが無ければ鶏も遠慮な

く、垣根の傍に花を啄つむもあり、鳴くもあり、座敷の畳の上つて

遊ぶのもあつた。丁度叔母が表に出て、流のところこゝに腰を曲め乍

ら、鍋なべを洗つて居ると、そこへ立つて丁寧ていねいに物を尋ねる一人の紳

士がある。『瀬川さんの御宅は』と聞かれて、叔母は不思議さう

な顔付。つひぞ見掛けぬ人と思ひ乍ら、冠つて居る手拭を脱つて
 挨拶して見た。

『はい、瀬川は手前でごはすよ——失礼乍ら貴方は何方様で？』
 『私ですか。私は猪子といふものです。』

蓮太郎は丑松の留守に尋ねて来たのであつた。『もう追付け帰
 つて参じやせう』を言はれて、折角来たものを、兎も角も其で
 は御邪魔して、暫時休ませて頂かう、といふことに極め、驪て
 叔母に導かれ乍ら、草葺の軒を潜つて入つた。日頃農夫の生活
 に興を寄せる蓮太郎、斯うして炉辺で話すのが何より嬉敷といふ
 風で、煤けた屋根の下を可懐しさうに眺めた。農家の習ひとして、
 表から裏口へ通り抜けの庭。そこには炭俵、漬物桶、又は耕作の

道具なぞがごちやく雑然置き並べてある。片隅には泥の儘の『かびた芋』（馬鈴薯）山のやうに。炉は直ぐ上り端あがはなにあつて、焚火の煙のほひも楽しい感想かんじを与へるのであつた。年々の曆と一緒に、壁に貼はりつけた錦絵の古く変色したのも目につく。

『生憎あいにくと今日は留守こんちにいたしやして——まあ吾家うちに不幸がごはしたもんだで、その礼廻りに出掛けやしてなあ。』

斯かう言つて、叔母は丑松の父の最後を蓮太郎に語り聞かせた。

炉の火はよく燃えた。木製の自在鍵に掛けた鉄瓶てつびんの湯も沸ふっ々と煮立つて来たので、叔母は茶を入れて款待もてなさうとして、急に—

—まあ、記憶といふものは妙なもので、長く／＼忘れて居た昔の習慣を思出した。一体普通の客に茶を出さないのは、穢多の家の

作法としてある。煙草たばこの火ですら遠慮する。瀬川の家も昔は斯う
 いふ風であつたので其を破つて普通の交際を始めたのは、斯この姫
 子沢へ移住ひっこしてから以このかた来もつと。尤も長い月日の間には、斯の新しい
 交際に慣れ、自然おのづと出入りする人々に馴染なじみ、茶はおろか、物の
 遣り取りもして、春は草餅を贈り、秋は蕎麦粉そばこを貰ひ、是方こちらで何
 とも思はなければ、他ひとも怪みはしなかつたのである。叔母が斯こん様
 な昔こころもちの心地に歸つたは近頃無いこと——それも其そのはず筈、姫子沢
 の百姓とは違つて気恥しい珍客——しかも突だしぬけ然に——昔者の叔
 母は、だから、自分で茶を汲む手の慄へに心付いた程。蓮太郎は
 其そん様なことゝも知らないで、さもくうま甘さうに乾いた咽喉のどを濡うるほし
 て、さて種さま々／＼な談話はなしに笑ひ興じた。就わけても中、丑松がまだ紙鳶たこ

を揚げたり独樂こまを廻したりして遊んだ頃の物語に。

『時に、』と蓮太郎は何か深く考へることが有るらしく、『つかんことを伺ふやうですが、斯この根津の向町に六左衛門といふ御おだい大尽じんがあるさうですね。』

『はあ、ごはすよ。』と叔母は客の顔を眺めた。

『奈何どうでせう、御聞きでしたか、その家うちについて此頃婚礼のあつたとかいふ話を。』

斯う蓮太郎は何気なく尋ねて見た。向町は斯の根津村にもある穢多の一部落。姫子沢とは八町程離れて、西町の町はづれにあたる。其処に住む六左衛門といふは音に聞えた穢多の富ものもち豪ごうなので。『あれ、少許ちつとも其様そんな話は聞きやせんでしたよ。そんなら賀むこさん

が出来やしたかいなあ——長いこと彼処あそこの家の娘も独身ひとりで居りやしたつけ。』

『御存じですか、貴方は、その娘といふのを。』

『評判な美しい女でござはすもの。色の白い、背のすらりとした——まあ、彼様あんな身分のものには惜しいやうな娘こだつて、克よく他ひとが其を言ひやすよ。へえもう二十四五にも成るだらう。若く装つくつて、十九か二十位にしか見せやせんがなあ。』

斯ういふ話をして居る間にも、蓮太郎は何か思ひ当ることがあるといふ風であつた。待つてもく、丑松が帰つて来ないので、臆おそて蓮太郎はすこし其そこ辺いを散歩して来るからと、田圃たんぼの方へ山の景色を見に行つた——是非丑松に逢ひたい、といふ言こと伝づを呉々

も叔母に残して置いて。

(二)

『これ、丑松や、猪子といふ御客様がお前を尋ねて来たぞい。』
斯う言つて叔母は駈寄つた。

『猪子先生？』丑松の目は喜悦の色で輝いたのである。

『多時待つて居なすつたが、お前が歸らねえもんだで。』と叔

母は丑松の様子を眺め乍ら、『今々其処へ出て行きなすつた——

ちよつくら、田圃の方へ行つて見て来るツて。』斯う言つて、気

を変へて、『一体彼の御客様は奈何いふ方だえ。』

『私の先生でさ。』と丑松は答へた。

『あれ、左様さようかつちや。』と叔母は呆れて、『そんならそのやうに、御礼を言ふだつたに。俺はへえ、唯お前の知つてる人かと思つた——だつて、御友達のやうにばかり言ひなさるから。』

丑松は蓮太郎の跡を追つて、直に田圃の方へ出掛けようとしたが、丁度そこへ叔父も歸つて来たので、暫時しばらくあが上り端はなのところにに腰掛けて休んだ。叔父は酷ひどく疲れたといふ風、家の内へ入るが早いか、『先づ、よかつた』を幾度と無く繰返した。何もかも今は無事に済んだ。葬式も。礼廻りも。斯ういふ思想かんがへは奈何どんなに叔父の心を悦よろこばせたらう。『ああ——これまでに漕こぎ付ける俺の心配といふものは。』斯う言つて、また思出したやうに安心の溜息を吐

くのであつた。『全く、天の助けだぞよ。』と叔父は附加して言つた。

平和な姫子沢の家の光景ありさまと、世の変遷うつりかはりも知らずに居る叔

父夫婦の昔気質むかしかたぎとは、丑松の心に懐旧の情を催さした。裏庭で

鳴き交す鶏の声は、午後の乾燥はしやいだ空気に響き渡つて、一層長閑のどか

な思を与へる。働好な、壮健たつしやな、人の好い、しかも子の無い叔

母は、いつまでも児童こどものやうに丑松を考へて居るので、其児童こども

扱つかひが又、些少すくなからず丑松を笑はせた。『御覧やれ、まあ、あ

の手付なぞの阿爺おやぢさんに克く似てゐることは。』と言つて笑つた時

は、思はず叔母も涙が出た。叔父も一緒に成つて笑つた。其時叔

母が汲んで呉れた渋茶の味の甘かつたことは。款待振もてなしぶりの田舎あなかも

饅頭あんぢゆう、その黒砂糖あんの餡あんの食くひ慣なれたのも、可な懐つかしい少年時代を思おもひ出ださせる。故郷こきやうに帰かへつたといふ心地こころもちは、何なによりも深く斯ごとういふ場合に、丑松うしむねの胸むねを衝ついて湧わきあ上あるのであつた。

『どれ、それでは行いつて見みて来きます。』

と言いつて家いへを出でる。叔父おじいも直ただぐに随まいて出でた。何か用事ようじありげに呼留よどめたので、丑松うしむねは行いかうとして振返かへつて見みると、霜葉しもばの落おちた柿かきの樹きの下したのところで、叔父おじいは声こゑを低ひくして

『他事ほかぢやねえが、猪子ぶらで俺おれは思おもひ出だした。以も前と師範校しはんがうの先生せんせいで猪子ぶらといふ人が有あつた。今日けふの御客おんきやく様さまは彼かの人ひととは違ちがふか。』

『それですよ、その猪子ぶら先生せんせいですよ。』と丑松うしむねは叔父おじいの顔かほを眺ながめ乍はら答こたへる。

『むゝ、左様さうかい、彼人かい。』と叔父は周囲あたりを眺め廻して、やがて一寸親指を出して見せて、『彼人は是これだつて言ふぢやねえか——気を注つけろよ。』

『はゝゝゝゝ。』と丑松は快活らしく笑つて、『叔父さん、其様そのんなことは大丈夫です。』

斯う言つて急いだ。

(三)

『大丈夫です』とは言つたものゝ、其实丑松は蓮太郎だけに話す気で居る。先輩と自分と、唯二人——二度とは無い、斯かういふ好

い機会は。と其を考へると、丑松の胸はもう烈しく踊るのであつた。

枯々とした草土手のところで、丑松は蓮太郎と一緒に成つた。

聞いて見ると、先輩は細君を上田に残して置いて、其日の朝根津村へ入つたとのこと。連つれは市村弁護士一人。尤ももつと弁護士は有権者を訪問する為せはに忙しいので、旅舎やどやで別れて、蓮太郎ばかり斯の姫子沢へ丑松を尋ねにやつて来た。都合あつて演説会は催さない。随つて斯の村で弁護士の政論を聞くことは出来ないが、そのかはり蓮太郎は丑松とゆつくり話せる。まあ、斯ういふ信濃の山の上で、温暖あたくかな小春の半日を語り暮したいとのことである。

其日のやうな楽しい経験——恐らく斯こころもちの心地は、丑松の身にと

つて、さう幾度もあらうとは思はれなかつた程。日頃敬慕する先輩の傍に居て、其人の声を聞き、其人の笑顔を見、其人と一緒に自分も亦た同じ故郷の空気を呼吸するとは。丑松は唯話すばかりが愉快では無かつた。沈黙だまつて居る間にも亦た言ふに言はれぬ愉快を感じるのであつた。まして、蓮太郎は——書いたものゝ上に表れたより、話して見ると又別のおもしろみの有る人で、容貌かほつきは厳やかましいやうでも、存外情の篤あつい、優しい、言はず極く平民的な氣象を持つて居る。左様さういふ風だから、後進の丑松に対しても城郭へだてを構へない。放ほし肆いまに笑つたり、嘆息したりして、日あたりの好い草土手のところへ足を投出し乍ら、自分の病氣の話などを為た。一度車に乗せられて、病院へ運ばれた時は、堪へがたい虚からせ

咳きの後で、刻むやうにして咯かくけつ血けつしたことを話した。今は胸も痛まず、其程の病苦も感ぜず、身体の上のことは忘れる位に元氣づいて居る——しかし彼あ様いいふ咯血かくけつが幾回もあれば、其時こそ最も早う駄目だといふことを話した。

斯ういふ風に親しく言葉を交へて居る間にも、とは言へ、全く丑松は自分を忘れることが出来なかつた。『何時いつ例れいのことを切出さう。』その煩はん悶もんが胸の中を往つたり来たりして、一いつ時ときも心を静やす息すませない。『あゝ、伝うつ染せんりはすまいか。』どうかすると其そ様なことを考へて、先輩の病氣を恐しく思ふことも有る。幾度か丑松は自分で自分を嘲あざけつた。

千曲ちくまがは川沿岸の民情、風俗、武士道と仏教とがところ／＼に

遺した中世の古蹟、信越線の鉄道に伴ふ山上の都会の盛衰、昔の
 北国街道の栄花、今の死駅の零落——およそ信濃路のさま／＼
 、それらのことは今二人の談話に上つた。眼前には蓼科、
 八つが嶽、保福寺、又は御射山、和田、大門などの山々が連つて、
 其山腹に横はる大傾斜の眺望は西東に展けて居た。青白く光
 る谷底に、遠く流れて行くは千曲川の水。丑松は少年の時代から
 感化を享けた自然のこと、土地の案内にも委しいところからして、
 一々指差して語り聞かせる。蓮太郎は其話に耳を傾けて、熱心に
 眺め入つた。対岸に見える八重原の高原、そこに人家の煙の立ち
 登る光景は、殊に蓮太郎の注意を引いたやうであつた。丑松は又、
 谷底の平地に日のあつたところを指差して見せて、水に添ふて

散布するは、依田窪、長瀬、丸子などの村落であるといふことを話した。濃く青い空気に包まれて居る谷の蔭は、靈泉寺、田沢、別所などの温泉の湧くところ、農夫が群れ集る山の上の歡樂の地、よく蕎麦そばの花の咲く頃には斯このへん辺からも労苦を忘れる為に出掛けるものがあるといふことを話した。

蓮太郎に言はせると、彼も一度は斯ういふ山の風景に無感覺な時代があつた。信州の景色は『パノラマ』として見るべきで、大自然が描いた多くの絵画の中では恐らく平凡といふ側におと眩される程のものであらう——成程なるほど、大きくはある。然し深い風趣おもむきに乏しい——起きたり伏したりして居る波濤なみのやうな山々は、不安と混雑とより外に何の感想かんじをも与へない——それに対むかへば唯心が搔か

乱きみだされるばかりである。斯う蓮太郎は考へた時代もあつた。不思議にも斯の思想かんがへは今度の旅行で破壊ぶちこはされて了しまつて、始めて山といふものを見る目が開あいた。新しい自然は別に彼の眼前めのまへに展ひらけて来た。蒸むし煙けぶる傾斜けいさの氣息いき、遠く深く潜む谷の声、活いききもし枯かわれもする杜もりの呼吸、其間にはまた暗影と光と熱とを帯びた雲の群の出没するのも目に注ついて、『平野は自然の静息、山嶽は自然の活動』といふ言葉の意味も今更のやうに思ひあたる。一概に平凡と擯しりぞ斥ぞけた信州の風景は、『山氣』を通して反かへつて深く面白く眺められるやうになつた。

斯ういふ蓮太郎の觀察は、山を愛する丑松の心を悦よろこばせた。其日は西の空が開けて、飛驒ひだの山脈を望むことも出来たのである。

見れば斯の大谿谷のかなたに当つて、畳み重なる山と山との上に、更に遠く連なる一列の白壁。今年の雪も早や幾度か降り添ふたのであらう。その山々は午後の日をうけて、青空に映り輝いて、殆んど人の気魄たましひを奪ふばかりの勢であつた。活々とした力のある山塊の輪郭と、深い鉛紫えんしの色を帯びた谷々の影とは、一層その眺望に崇高な趣を添へる。針木嶺、白馬嶽、焼嶽、鎗が嶽、または乗鞍嶽のりくらがたけ、蝶が嶽、其他多くの山嶽の峻けはしく競きそひ立つのは其処だ。梓川、大白川なぞの源を発するのは其処だ。雷鳥の寂しく飛びかふといふのは其処だ。氷河の跡の見られるといふのは其処だ。千古人跡の到らないといふのは其処だ。あゝ、無言にして聳そびえ立つ飛驒の山脈の姿、長久とこしへに莊嚴おごそかな自然の殿堂——見れば

見る程、蓮太郎も、丑松も、高い氣象を感じずには居られなかつたのである。殊に其日の空氣はすこし黄に濁つて、十一月上旬の光に交つて、斯の広濶ひろい谿谷たにあひを盛んに煙けふるやうに見せた。長い間、二人は眺め入つた。眺め入り乍ら、互に山のことを語り合つた。

(四)

噫あゝ。幾度丑松は蓮太郎に自分の素性を話さうと思つたらう。昨夜などは遅くまで洋燈ランプの下で其事を考へて、もし先輩と二人ぎりに成るやうな場合があつたなら、彼様あゝ言はうか、此様かう言はうかと、さま／＼の想像ふけに耽つたのであつた。蓮太郎は今、丑松の傍に

居る。さて逢つて見ると、言出しかねるもので、風景なぞのことばかり話して、肝心の思ふことは未だ話さなかつた。丑松は既に種々なことを話して居乍ら、未だ何も蓮太郎に話さないやうな気がした。

夕飯の用意を命じて置いて来たからと、蓮太郎に誘はれて、丑松は一緒に根津の旅舎の方へ出掛けて行つた。道々丑松は話しかけて、正直なところを言はうくとして見た。それを言つたら、自分の真情が深く先輩の心に通ずるであらう、自分は一層先輩に親むことが出来るであらう、斯う考へて、其を言はうとして、言ひ得ないで、時々立止つては溜息を吐くのであつた。秘密——生い死きにも関はる真ほん実たうの秘密——仮令たとひ先方さきが同じ素性であるとは

言ひ乍ら、奈何して左様容易く告白けることが出来よう。言はう
 としては躊躇した。躊躇しては自分で自分を責めた。丑松は心の
 内部で、懼れたり、迷つたり、悶えたりしたのである。

聽て二人は根津の西町の町はづれへ出た。石地藏の佇立むあたりは、向町——所謂穢多町で、草葺の屋造が日あたりの

好い傾斜に添ふて不規則に並んで居る。中にも人目を引く城のやうな一郭、白壁高く日に輝くは、例の六左衛門の住家と知れた。農業と麻裏製造とは、斯の部落に住む人々の職業で、彼の小諸の穢多町のやうに、靴、三味線、太鼓、其他獣皮に關したものの製造、または斃馬の売買なぞに従事して居るやうな手合は一人も無い。麻裏はどの穢多の家でも作るので、『中抜き』と言つ

て、草履の表に用つかふ美しい藁がところ／＼の垣根の傍に乾してあつた。丑松は其を見ると、瀬川の家の昔を思出した。小諸時代を思出した。亡くなつた母も、今の叔母も、克よく其の『中抜き』を編んで居たことを思出した。自分も亦また少年の頃には、戸隠から来る『かはそ』（草履裏の麻）などを玩具おもちゃにして、父の傍で麻裏造る真似をして遊んだことを思出した。

六左衛門のことは、其時、二人の噂うはさに上つた。蓮太郎はしきりに彼の穢多の性質や行おこなひ為なを問ひ尋ねる。聞かれた丑松とても委くはしく敷は無いが、知つて居る丈だけを話したのは斯うであつた。六左衛門の富は彼が一代に作つたもの。今日のやうな俄にはかぶげんしや分限者と成つたに就いては、甚はなはだ悪しざまに罵るものがある。慾深い上

に、虚栄心の強い男で、金の力で成ることなら奈何どんな事でもして、
 何卒どうかして『紳士』の尊称を得たいと思つて居る程。恐らく上流社
 会の華はなやかな交際は、彼が見て居る毎日の夢であらう。孔雀の真
 似すを為する鴉からすの六左衛門が東京に別荘を置くのも其為である。赤十
 字社の特別社員に成つたのも其為である。慈善事業に賛成するの
 も其為である。書画骨こつとう董まはりで身の辺まはりを飾るのも亦た其為である。
 彼あれほど程かれほど學問が無くて、彼程蔵書の多いものも鮮すくな少なからう、とは斯
 界のかいわい限がいでの一つ話に成つて居る。

斯ういふことを語り乍ら歩いて行くうちに、二人は六左衛門の
 家の前へ出て来た。丁度午後の日を真面まともにうけて、宏壯おほきな白壁は
 燃える火のやうに見える。建物幾いくむね棟ねかあつて、長い堀へいは其周圍まはり

を厳いかめしく取とり繞かこんだ。新平民の子らしいのが、七つ八つを頭かしらにして、何か『めんこ』の遊びでもして、其塀の外に群り集つて居た。中には頬あかの紅い、眼付の愛らしい子もあつて、普通の家の小供と些すこ少も相違の無いのがある。中には又、卑しい、愚鈍おろかしい、どう見ても日蔭者の子らしいのがある。是れを眺めても、穢多の部落が幾通りかの階級に別れて居ることは知れた。親らしい男は馬を牽ひいて、其小供の群に声を掛けて通り、姉らしい若い女は細帯を巻付けた儘まで、いそくと二人の側を影のやうに擦すりぬ抜けた。斯うして無智と零落とを知らずに居る穢多町の空気を呼吸するといふことは、可傷いたましいとも、恥かしいとも、腹立たしいとも、名のつけやうの無い思をさせる。『吾われ儕くを誰だと思ふ。』と丑松は心

に憐んで、一時いつときも早く是処を通過しぎて了しまひたいと考へた。

『先生——行かうぢや有ませんか。』

と丑松はそこに佇立たぐずみ眺ながめて居る蓮太郎を誘ふやうにした。

『見たまへ、まあ、斯の六左衛門の家うちを。』と蓮太郎は振返つて、

『何処どこから何処まで主人公の性質を好く表してゐるぢや無いか。つ

い二三日前、是の家に婚礼が有つたといふ話だが、君は其様そのような噂を聞かなかつたかね。』

『婚礼?』と丑松は聞き咎とがめる。

『その婚礼が一通りの婚礼ぢや無い——多分彼様あいふのが政治的結婚とでも言ふんだらう。はゝゝゝゝ。政事家の為することは違つたものさね。』

『先生の仰おつしやることは私に能よく解りません。』

『花嫁は君、斯このの家の娘さ。御おむこ賀さんは又、代議士の候補者だから面白いぢやないか——』

『ホウ、代議士の候補者？ まさか彼の一緒に汽車に乗つて来た男ぢや有ますまい。』

『それさ、その紳士さ。』

『へえ——』と丑松は眼を円くして、『左さう様ですかねえ——意外なことが有れば有るものですねえ——』

『全く、僕も意外さ。』といふ蓮太郎の顔は輝いて居たのである。

『しかし何処で先生は其そん様なことを御聞きでしたか。』

『まあ、君、宿屋へ行つて話さう。』

第九章

(一一)

一軒、根津の塚窪つかくぼといふところに、未まだ会葬の礼に泄もれた家が有つて、丁度序ついでだからと、丑松は途中で蓮太郎と別れた。蓮太郎は旅舎やどやへ。直に後から行く約束して、丑松は畠中の裏道を辿たどつた。塚窪の坂の下まで行くと、とある農家の前に一人の飴屋あめや、面白をかく唐たうじんぶえ人笛を吹立て、幼稚をさない客を呼集めて居る。御得

意と見えて、声を揚げて飛んで来る男をどこをんなの少年もあつた——
 彼あすこ処こからも、是こゝ処こゝからも。あゝ、少年の空想を誘ふやうな飴屋の
 笛の調子は、どんなに頑ぐわんぜ是こゝはないものゝ耳を楽ませるであらう。
 いや、買ひに集る子供ばかりでは無い、丑松ですら思はず立止つ
 て聞いた。妙な癖で、其笛を聞く度に、丑松は自分の少年時代を
 思出さずに居られないのである。

何を隠さう——丑松が今指して行く塚窪の家には、幼をさななじみ馴染なが
 嫁かたづいて居る。お妻といふのが其女の名である。お妻の生家さとは姫子
 沢に在つて、林檎畠へだ一つ隔へだてゝ、丑松の家の隣に住んだ。丑松が
 お妻と遊んだのは、九こゝのつ歳つに成る頃で、まだ瀬川の一家族が移住
 して来て間も無い当時のことであつた。もとゝお妻の父といふ

は、上田の在から養子に來た男、根が苦勞人ではあり、他所者よそものでもあり、するところからして、自然おのづと瀬川の家にも後見うしろみと成つて呉れた。それに、丑松を鼻顧ひいきにして、伊勢詣いせまうでに出掛けた歸かへり途みちなぞには、必ず何か買つて來て呉れるといふ風であつた。斯ういふ隣同志の家の子供が、互ひに遊友達と成つたは不思議でも何でも無い。のみならず、二人は丁度同い年であつたのである。

楽しい追憶おもひでの情は、唐人笛の音を聞くと同時に、丑松の胸の中に湧上わきあがつて來た。朦朧おぼろげながら丑松は幼いお妻の俤おもかけを忘れずに居る。はじめで自分の眼に映つた少女の愛らしさを忘れずに居る。あの林檎畠が花ざかりの頃は、其枝の低く垂下つたところをさまよ彷徨つて、互ひに無邪氣な初恋の私語さくやきを取交したことを忘れずに

居る。僅かに九歳こゝのつの昔、まだ夢のやうなお伽ときばなし話の時代――

他のことは多く記憶にも残らない程であるが、彼の無垢むくな情こゝろも

緒ちばかりは忘れずに居る。尤もつとも、幼い二人の交際まじはりは長く続かな

かつた。不図ふと丑松はお妻の兄と親しくするやうに成つて、それぎ

り最早もうお妻とは遊ばなかつた。

お妻が斯この塚窪かたづへ嫁かたづいて来たは、十六の春のこと。夫といふの

も丑松が小学校時代の友達で、年齢としは三人同じであつた。田舎あなの

習ならはし慣はとは言ひ乍ことら、殊ことに彼の夫婦は早く結婚した。まだ丑松が

師範校の窓の下で歴史や語学の研究に余念も無い頃に、もう彼の

若い夫婦は幼いものに絡まとひ付かれ、朝に晩に『父さん、母さん』

と呼ばれて居たのであつた。

斯^かういふ過去の歴史を繰返したり、胸を踊らせたりして、丑松は坂を上つて行つた。山の方から溢^{あふ}れて来る根津川の支流は、清く、浅く、家々の前を奔^{はし}り流れて居る。路^{みち}傍^{ばた}の栗^{こずえ}の梢^{こずえ}なぞ、早や、枯れ／＼。柿も一葉を留めない程。水草ばかりは未だ青々として、根を浸すありさまも心地よく見られる。冬^{ふゆ}籠^{こもり}の用意に多^い忙^{そが}しい頃で、人々はいづれも流のところ^{ところ}に集つて居た。余念も無く蕪^{かぶな}菜^なを洗ふ女の群の中に、手拭に日^よを避け、白い手をあらはし、甲^か斐^ひ々々しく働^{たす}く櫛^か掛^かけの一人——声を掛けて見ると、それがお妻で、丑松は斯の幼馴染の様子の変つたのに驚^{しま}いて了つた。お妻も亦た驚いたやうであつた。

其日はお妻の夫^{しうと}も舅^{しうと}も留守で、家に居るのは唯^{しうと}姑^{とめ}ばかり。五人

も子供が有ると聞いたが、年嵩としかさなのが見えないは、大方遊びにでも行つたものであらう。五歳いついばかりを頭かしらに、三人の女の児は母親よりそに倚添よりそつて、恥かしがつて碌ろくに御辞儀おじぎも為なかつた。珍めづしさうに客の顔を眺めるもあり、母親の蔭に隠れるもあり、漸やうやく歩むばかりの末の児は、見慣みなれぬ丑松を怖れたものか、臆やがてしく／＼やり出すのであつた。是光景ありさまに、姑も笑へば、お妻も笑つて、『まあ、可笑をかしな児だよ、斯の児は。』と乳房を出して見せる。それを咬くはへて、泣吃なきじやつくり逆さかをし乍ながら、密そつと丑松の方を振向いて見て居る児童こどもの様子も愛らしかつた。

話好きな姑は一人で喋舌しゃべつた。お妻は茶を入れて丑松を款待もてなして居たが、流石さすがに思出したことも有ると見えて、

『そいつても、まあ、丑松さんの大きく御成おなんなすつたこと。』

と言つて、客の顔を眺ながめた時は、思はず紅あかくなつた。

会葬の礼を述べた後、丑松はそこくにして斯の家を出た。姑

と一緒に、お妻も亦また門口に出て、客の後姿を見送るといふ様子。

今更のやうに丑松は自われひと他の変遷うつりかはりを考へて、塚窪の坂を上つ

て行つた。彼の世帯染みた、心の好きさうな、何処どこやら床ゆかしいと

ころのあるお妻は——まあ、忘れずに居る其倅に比べて見ると、

全く別の人のやうな心地こころもちもする。自分と同一年で、しかも五人子

持——あれが幼馴染をさななじみのお妻であつたかしらん、と時々立止つて

嘆息した。

斯ういふ追懐おもひでの情は、とは言へ、深く丑松の心を傷けた。平し

よつちゆう　素　もう　疑　惧　の念を抱いて　苦　痛　の為に刺激き廻されて居る
 自分の今に思ひ比べると、あの少年の昔の楽しかつたことは。噫、
 何にも自分のことを知らないで、愛らしい少女と一緒をとめに林檎畠を
 彷徨つたやうな、楽しい時代は往つて了つた。もう一度丑松は左
 様いふ時代の心地こころもちに帰りたと思つた。もう一度丑松は自分うが穢
 多であるといふことを忘れて見たいと思つた。もう一度丑松は彼
 の少年の昔と同じやうに、自由に、現世このよの歡樂たのしみの香を嗅いで見
 たいと思つた。斯う考へると、切ない慾望のぞみは胸を衝いて春の潮の
 やうに湧き上る。穢多としての悲しい絶望、愛といふ楽しい思かんが
 想へ、そんなこんなが一緒に交つて、若い生命いのちを一層ひとしほ美しくし
 て見せた。終しまひには、あの蓮華寺のお志保のことまでも思ひやつた。

活々とした情の為に燃え乍ら、丑松は蓮太郎の旅舎やどやを指して急いだのである。

(二)

御泊宿、吉田屋、と軒行燈のきあんどんに記してあるは、流石さすがに古い街道の名残なごり。諸国商人の往来もすくなく、昔の宿はいづれも農家となつて、今はこの根津村に二三軒しか旅籠屋はたごやらしいものが残つて居ない。吉田屋は其一つ、兎角とかく商売も休み勝ち、客間で秋蚕飼しうこふ程の時世と変りはてた。とは言ひ乍ら、寂れた中にも風情ふぜいのあるは田舎あなかの古い旅舎やどやで、門口に豆を乾並べ、庭では鶏も鳴き、水を昇かつ

いで風呂場へ通ふ男の腰付もをかしいもの。炉ろで焚たく『ぼや』の火は盛んに燃え上つて、無邪気な笑聲が其周圍まはりに起るのであつた。『左様さうだ——例のことを話さう。』

と丑松は自分で自分に言つた。吉田屋の門口へ入つた時は、其思想かんがへが復また胸の中を往来したのである。

案内されて奥の方の座敷へ通ると、蓮太郎一人で、弁護士は未だ歸らなかつた。額、唐紙、すべて昔の風を残して、古びた室内の光景さまとは言ひ乍ら、談話はなしを為するには至極静かで好かつた。火鉢に炭を加へ、其側に座蒲団を敷いて、相さしむかひ対ひに成つた時の心こころ地もちは珍敷めづらしくもあり、嬉敷うれしくもあり、蓮太郎が手づから入れて呉れる茶の味は又格別に思はれたのである。其時丑松は日頃愛読

する先輩の著述を数へて、始めて手にしたのが彼の大作、『現代の思潮と下層社会』であつたことを話した。『貧しきものゝなぐさめ』、『労働』、『平凡なる人』、『とり／＼に面白く味つた』、ことを話した。丑松は又、『懺悔録』の広告を見つけた時の喜よろこ悦びから、飯山の雑誌屋で一冊を買取つて、其を抱いて内容なかみを想像し乍ら下宿へ歸つた時の心地こころもち、読み耽つて心に深い感動を受けたこと、社会よのなかといふものゝ威力ちからを知つたこと、さては其著述に頭あははれた思想かんがへの新しく思はれたことなぞを話した。

蓮太郎の喜悦よろこびは一通りで無かつた。聽て風呂が湧いたといふ案内をうけて、二人して一緒に入りに行つた時も、蓮太郎は其を胸むねに浮べて、かねて知己とは思つて居たが、斯かう迄自分の書いた

ものを読んで呉れるとは思はなかつたと、丑松の熱心を頼母たのもしく考へて居たらしいのである。病が病だから、蓮太郎の方では遠慮する気味で、其様そんなことで迷惑を掛けたく無い、と健康たつしやなもの、知らない心配は絶えず様子に表はれる。斯うなると丑松の方では反かへつて気の毒になつて、病の為に先輩を恐れるといふ心は何処へか行つて了つた。話せば話すほど、哀憐あはれみは恐怖おそれに變つたのである。

風呂場の窓の外には、石を越して流下る水の声もおもしろく聞えた。透すき澄とほるばかりの沸わかし湯ゆに身体を浸し温めて、しばらく清流の響に耳を翳なぶらせる其楽しさ。夕暮近い日の光は窓からさし入つて、蒸むし烟けふる風呂場の内を朦朧もうろうとして見せた。一ぱい浴びて流

しのところへ出た蓮太郎は、湯気に包まれて燃えるかのやう。丑松も紅あかくなつて、顔を伝ふ汗の熱さに暫しばらく時世わづらの煩わづらひを忘れた。『先生、一つ流しませう。』と丑松は小桶こをけを擁かへて蓮太郎の背後うしろへ廻る。

『え、流して下さい？』と蓮太郎は嬉しさに、『ぢやあ、願ひませうか。まあ君、ざつと遣つて呉れたまへ。』

斯うして丑松は、日頃慕つて居る其人に近い、奈何どういふ風ふうに考へ、奈何いふ風ふうに言ひ、奈何いふ風ふうに行ふかと、すこしでも蓮太郎の平生を見るのが楽しいといふ様子であつた。急に二人は親し密たしみを増したやうな心地こころもちもしたのである。

『さあ、今度は僕の番だ。』

と蓮太郎は湯を汲出して言った。幾度か丑松は辞退して見た。

『いえ、私は沢山です。昨日入ったばかりですから。』と復た辞退した。

『昨日は昨日、今日は今日さ。』と蓮太郎は笑つて、『まあ、左様遠慮しないで、僕にも一つ流させて呉れたまへ。』

『恐れ入りましたなあ。』

『どうです、瀬川君、僕の三助もなか／＼巧いものでせう——は／＼／＼。』と戯れて、やがて蓮太郎はそこに在る石鹼シャボンを溶いて丑松の背中へつけて遣り乍ら、『僕がまだ長野に居る時分、丁度修学旅行が有つて、生徒と一緒に上州の方へ出掛けたことが有りましたツけ。まだ覚えて居るが、彼の時の投票は、僕がそれ大

食家さ。しかし大食家と言はれる位に、彼の頃は^{たつしや}壮健でしたよ。それからの僕の生涯は、実に種々^{いろく}なことが有ましたねえ。克^よくまあ僕のやうな人間が斯うして今日迄生きながらへて来たやうなものさ。』

『先生、もう沢山です。』

『何だねえ、今始めたばかりぢや無いか。まだ、君、垢^{ちつと}が些少も落ちやしない。』

と蓮太郎は丁寧^{しんべい}に丑松の背中を洗つて、終^{しまひ}に小桶の中の温い湯を掛けてやつた。遣ひ捨ての湯水は石鹼の泡に交つて、白くゆるく板敷の上を流れて行つた。

『君だから斯^{こん}様なことを御話するんだが、』と蓮太郎は思出した

やうに、『僕は仲間のことを考へる度に、実に情ないといふ心こころ地もちを起さずには居られない。御恥しい話だが、思想の世界といふものは、未だ僕等の仲間には開けて居ないのだね。僕があゝの師範校を出た頃には、それを考へて、随分暗い月日を送つたことも有ましたよ。病氣になつたのも、実は其結果さ。しかし病氣の為に、反つて僕かへは救はれた。それから君、考へてばかり居ないで、働くといふ氣になつた。ホラ、君の読んで下すつたといふ「現代の思潮と下層社会」——あれを書く頃などは、健康たつしやだといふ日は一日も無い位だつた。まあ、後日新平民のなかに面白い人物でも生れて来て、あゝ猪子といふ男は斯こん様なものを書いたかと、見て呉れるやうな時が有つたら、それでも僕などは満足するんだ

ねえ。むゝ、その踏台さ——それが僕の生涯しやうがいでもあり、又希の望ぞみでもあるのだから。』

(三)

言はうくと思ひ乍ら、何か斯かう引止められるやうな気がして、丑松は言はずに風呂を出た。まだ弁護士は帰らなかつた。夕飯の用意にと、蓮太郎が宿へ命じて置いたは千曲川の鮠はや、それは上田から来る途中で買取つたとやらで、魚田楽ぎよでんにこしらへさせて、一緒に初冬の河魚の味を試みたいとのこと。仕度すると見え、摺鉢すりばちを鳴らす音は台所の方から聞える。炬辺ろばたで鮠の焼ける香は、

ぢり／＼落ちて燃える魚膏あぶらの煙に交つて、斯の座敷うままでも甘さうに通つて来た。

蓮太郎は鞆かばんの中から持薬を取出した。殊に湯上りの顔色は病気のやうにも見えなかつた。嗅ぐともなしに『ケレオソオト』のほひを嗅いで見て、臆やがて高柳のことを言出す。

『して見ると、瀬川君はあの男と一緒に飯山を御出掛でしたね。』

『どうも不思議だとは思ひましたよ。』と丑松は笑つて、『妙に是方こちらを避よけるといふやうな風でしたから。』

『そこがそれ、心に疚やましいところの有る証拠さ。』

『今考へても、彼の外ぐわいたう套で身体を包んで、隠れて行くやうな有様が、目に見えるやうです。』

『はゝゝゝ。だから、君、悪いことは出来ないものさ。』

と言つて、それから蓮太郎は聞いて来た一伍いちぶしじゆう一什を丑松に話した。高柳が秘密に六左衛門の娘を貰つたといふ事實は、妙なところから出たとのこと。すこし調べることがあつて、信州で一番古い秋葉村の穢多町（上田の在にある）、彼処へ蓮太郎が尋ねて行くと、あの六左衛門の親戚で加しかも讐敵かたきのやうに仲の悪いとかいふ男から斯の話が泄もれたとのこと。蓮太郎が弁護士と一緒に、今朝この根津村へ入つた時は、折も折、丁度高柳夫婦が新婚旅行にでも出掛けようとするところ。無論先方さきでは知るまいが、確こに是方ちからでは後姿を見届けたとのことであつた。

『実に驚くぢやないか。』と蓮太郎は嘆息した。『瀬川君、君は

まあ奈何どう思ふうね、彼の男の心地こころもちを。これから君が飯山へ歸つて見たまへ——必定きつとあの男は平氣な顔して結婚の披露を為るだらうから——何処どこか遠方の豪家からでも細君を迎へたやうに細工こしらへるから——そりやあもう新平民の娘だとは言ふもんぢやないから。』

斯ういふ話を始めたところへ、下女が膳を持運んで来た。皿の上の鮓はやは焼きたての香を放つて、空腹すきばらで居る二人の鼻を打つ。

銀色の背、樺かばと白との腹、その鮮あたらしい魚が茶色に焼け焦げて、ところまんだら味噌の能よく付かないのも有つた。いづれも肥あぶらえ膏あぶらついて、竹の串に突きさされてある。流石さすがに嗅かぎつけて来たと思へ、一匹の小猫、下女の背後うしろに様子を窺うかがふのも可笑をかしかつた。御給仕には及ばないを言はれて、下女は小猫を連れて出て行く。

『さあ、先生、つけませう。』と丑松は飯櫃めしびつを引取つて、氣いきの出るやつを盛り始めた。

『どうも濟すみません。各自勝手めいくにやることにしようぢや有ませんか。まあ、斯かうして膳に向つて見ると、あの師範校の食堂を思出さずには居られないねえ。』

と笑つて、蓮太郎は話しく／＼食つた。丑松も骨ほね離ばなれの好よい鮓はやの肉を取つて、香ばしく焼けた味噌の香を嗅ぎ乍ら話した。

『あゝ。』と蓮太郎は箸持つ手を膝の上に載せて、『どうも当世紳士えらの豪えらいには驚おどいて了しまふ——金といふものゝ為なら、奈何なんなことででも忍ぶのだから。瀬川君、まあ、聞いて呉れたまへ。彼の通り高柳が体裁を飾つて居ても、実は非常に内輪の苦しいといふこ

とは、僕も聞いて居た。借財に借財を重ね、高利貸には責められる、世間への不義理は嵩む、到底今年選挙を争ふ見込などは立つまいといふことは、聞いて居た。しかし君、いくら窮境に陥つたからと言つて、金を目的めあてに結婚する氣に成るなんて——あんまり根性が見え透すいて浅猿あさましいぢやないか。あるひは、彼男に言はせたら、六左衛門だつて立派な公民だ、其娘を貰ふのに何の不思議が有る、親子の間柄で選挙の時なぞに助けて貰ふのは至あたりまへ当ぢやないか——斯う言ふかも知れない。それならそれで可いさ。階級を打破して迄までも、氣に入つた女を貰ふ位の心意氣が有るなら、又面白い。何故そんなら、狐鼠こそ々と祝しうげん言げんなぞを為るんだらう。何故そんなら、隠れてやつて来て、また隠れて行くやうな、男ら

しくない真似を為るんだらう。苟くも君、堂々たる代議士の候補者だ。天下の政治を料理するなど長広舌を振ひ乍ら、其人の生涯を見れば奈何だらう。誰やらの言草では無いが、全然紳士の面を冠つた小人の遣方だ——情ないぢやないか。成程なるほど世間には、金に成ることなら何でもやる、買手が有るなら自分の一生でも売る、斯ういふ量見の人はいくらも有るさ。しかし、彼男のは、売つて置いて知らん顔をして居よう、といふのだから酷しい。まあ、君、僕等の側に立つて考へて見て呉れたまへ——是程これほど新平民といふものを侮辱した話は無からう。』

暫時二人は言葉を交さないで食つた。聴てまた蓮太郎は感慨に堪へないと言ふ風で、病氣のことなどはもう忘れて居るかのや

うに、

『あのをとこ彼 男 も彼男なら、六左衛門も六左衛門だ。そんなところへ娘を呉れたところでは何が面白からう。是これから東京へでも出掛けた時に、自分の聲は政事家だと言つて、吹聴する積りなんだらうが、あまり寢覚の好い話でも無からう。虚栄心にも程が有るさ。ちつたあ娘のことも考へさうなものだがなあ。』

斯う言つて蓮太郎は考深い目付をして、孤ひとり思に沈むといふ様子であつた。

聞いて見れば聞いて見るほど、彼の政事家の内幕にも驚かれるが、又、この先輩の同族を思ふ熱情にも驚かれる。丑松は、弱かい体軀からだの内に燃える先輩の精神の烈しさを考へて、一種の悲壯な感か

想んじを起さずには居られなかつた。實際、蓮太郎の談話はなしの中には丑松の心を動かす力が籠つて居たのである。尤もつとも、病のある人ででも無ければ、彼様あゝは心を傷めまい、と思はれるやうな節々が時々其言葉に交つて聞えたので。

(四)

到頭丑松は言はうと思ふことを言はなかつた。吉田屋を出たのは宵過ぎよひる頃であつたが、途々それを考へると、泣きたいと思ふ程に悲しかつた。何故、言はなかつたらう。丑松は歩き乍ら、自分で自分に尋ねて見る。亡父おやぢの言葉も有るから——叔父も彼様あゝ忠

告したから——一旦秘密が自分の口から泄れた以上は、それが何時誰の耳へ伝はらないとも限らない、先輩が細君へ話す、細君はまた女のことだから到底秘密を守つては呉れまい、斯ういふことに成ると、それこそ最早回復が付かない——第一、今の場合、自分分は穢多であると考へたく無い、是迄も普通の人間で通つて来た、是から将来とても無論普通の人間で通りたい、それが至当な道理であるから——

いろいろいひわけ
種々弁解を考へて見た。

しかし、斯ういふ弁解は、いづれも後から造へて押付けたことで、それだから言へなかつたとは奈何しても思はれない。残念乍ら、丑松は自分で自分を欺いて居るやうに感じて来た。蓮太郎に

まで隠して居るといふことは、実は丑松の良心が許さなかつたのである。

あゝ、何を思ひ、何を煩ふ。決して他の人に告白うちあけるのでは無い。唯あの先輩だけに告白あけるのだ。日頃自分が慕つて居る、加しかも自分と同じ新平民の、其人だけに告白あけるのに、危い、恐しいやうなことが何処にあらう。

『どうしても言はないのは虚偽うそだ。』

と丑松は心に羞はぢたり悲はんだりした。

そればかりでは無い。勇み立つ青春の意気も亦また丑松の心に強い刺激を与へた。譬たとへば、丑松は雪霜の下に萌もえる若草である。春待つ心は有ながらも、猜うたがひ疑ぎと恐怖おそれとに閉しぢられて了しまつて、内な

部の生命いのちは発達のびすることが出来なかつた。あゝ、雪霜が日にあたつて、溶けるといふに、何の不思議があらう。青年が敬慕の情を心ゆく先輩の前に捧げて、生きて進むといふに、何の不思議があらう。見れば見るほど、聞けば聞くほど、丑松は蓮太郎の感化を享うけて、精神の自由を慕はずには居られなかつたのである。言ふべし、言ふべし、それが自分の進む道路みちでは有るまいか。斯う若々しい生命が丑松を励ますのであつた。

『よし、明日は先生に逢つて、何もかも打開ぶちまけて了はう。』
と決心して、姫子沢の家をさして急いだ。

其晩はお妻の父親おやちがやつて来て、遅くまで炉辺ろべたで話した。叔父は蓮太郎のことに就いて別に深く掘つて聞かうとも為なかつた。

唯丑松が寢床の方へ行かうとした時、斯ういふ問を掛けた。

『丑松——お前は今日めへの御客様おきやくさんに、何にも自分のことを話しやしねえだらうなあ。』

と言はれて、丑松は叔父の顔を眺めて、

『誰そんが其様なことを言ふもんですか。』

と答へるには答へたが、それは本心から出た言葉では無いのであつた。

寢床に入つてからも、丑松は長いこと眠られなかつた。不思議な夢は来て、眼前めのまへを通る。其人は見納めの時の父の死顔であるかと思ふと、蓮太郎のやうでもあり、病の為に蒼あをざめた蓮太郎の顔であるかと思ふと、お妻のやうでもあつた。あの艶もを帯もつた清すゞ

しい^{ひとみ}眸、物言ふ毎にあらはれる皓^{しろは}齒、直に紅^{あか}くなる頬——その真
 情の外部^{そと}に輝き溢^{あふ}れて居る女らしさを考へると、何時の間にか丑
 松はお志保の^{おもかげ}梯を描いて居たのである。尤^{もつと}もこの幻^{まぼろし}影は長く後
 まで残らなかつた。払^{あけがた}暁になると最早^{もつと}忘れて了つて、何の夢を
 見たかも覚えて居ない位であつた。

第拾章

(一)

いよ／＼苦痛くるしみの重荷を下す時が来た。

丁度蓮太郎は弁護士と一緒に、上田を指して帰るといふので、丑松も同行の約束した。それは父を傷きずつけた種牛が上田の屠牛場とぎうばへ送られる朝のこと。叔父も、丑松も其立会として出掛ける筈になつて居たので。昨夜の丑松の決心——あれを實行するには是上このうへも無い好い機会しほ。復た逢あはれるのは何時のことやら覚おぼ束つかない。どうかして叔父や弁護士の聞いて居ないところで——唯先輩と二人ぎりに成つた時に——斯う考へて、丑松は叔父と一緒に出掛ける仕度をしたのであつた。

上田街道へ出ようとする角のところ、そこに待合せて居る二人と一緒になつた。丑松は叔父を弁護士に紹介し、それから蓮太

郎にも紹介した。

『先生、これが私の叔父です。』

と言はれて、叔父は百姓らしい大な手を擦み乍ら、

『丑松の奴がいろく御世話様に成りますさうで——昨日はま

た御出下すつたさうでしたが、生憎と留守にいたしやして。』

斯ういふ挨拶をすると、蓮太郎は丁寧に亡くなつた人の弔辞を

述べた。

四人は早く発つた。朝じめりのした街道の土を踏んで、深い霧

の中を辿つて行つた時は、遠近に鶏の鳴き交す声も聞える。其

日は春先のやうに温暖で、路傍の枯草も蘇生るかと思はれる程。

灰色の水蒸気は低く集つて来て、僅かに離れた杜の梢も遠く深く

烟けづるやうに見える。四人は後になり前になり、互に言葉を取交し乍ら歩いた。就わけても中、弁護士の快活な笑声は朝の空氣に響き渡る。思はず足も軽く道も果取はかどつたのである。

東上田へ差懸つた頃、蓮太郎と丑松の二人は少許連すこしつれに後おくれた。

次第に道路みちは明くなつて、ところ／＼に青空も望まれるやうに成つた。白い光を帯び乍ら、頭の上を急いだは、朝雲の群。行先ゆくてにあたる村落も形を顕あらはして、草葺くさぶきの屋根からは煙の立ち登る光さ景まも見えた。霧の眺めは、今、おもしろく晴れて行くのである。

蓮太郎は苦しい様子も見せなかつた。この石塊いしころの多い歩き難い道を彼様あ、して徒歩ひろつても可い、のかしらん、と丑松はそれを案じつゞけて、時々蓮太郎を待合せては、一緒に遅く歩くやうに為たが、

まあ素人目しろうとめで眺めたところでは格別い氣息いきの切れるでも無いらしい。
 漸やうやく安心して、聽やがて話しく行く連の二人の後姿は、と見ると其時は凡およそ一町程も離れたらう。急に日があたつて、湿しめつた道路も輝き初めた。温やはらか和こころよに快暢い朝の光は小ちひさがた 泉の野に満ち溢あふれて来た。

あゝ、告白うちあけるなら、今だ。

丑松に言はせると、自分は決して一生の戒を破るのには無い。
 是これが若もし世間の人に話すといふ場合でも有つたら、それこそ今迄の苦心も水の泡であらう。唯斯このひと人だけに告白けるのだ。親兄弟に話すも同じことだ。一向差支が無い。斯う自分で自分に弁いひほ解どいて見た。丑松も思慮の無い男では無し、彼程あれほど堅い父の言

葉を忘れて了つて、好んで死地に陥るやうな、其様な愚な真似を為る積りは無かつたのである。

『隠せ。』

といふ厳肅な声は、其時、心の底の方で聞えた。急に冷い戦慄が全身を伝つて流れ下る。さあ、丑松もすこし躊躇はずには居られなかつた。『先生、先生』と口の中で呼んで、どう其を切出したものかと悶いて居ると、何か目に見えない力が背後に在つて、妙に自分の無法を押し止めるやうな気がした。

『忘れるな』とまた心の底の方で。

『瀬川君、君は恐しく考へ込んだねえ。』と蓮太郎は丑松の方を振返つて見た。『時に、大分後れましたよ。奈何ですか、少許急がうぢや有ませんか。』

斯う言はれて、丑松も其後に随つて急いだ。

間も無く二人は連に追付いた。鳥のやうに逃げ易い機会は捕まらなかつた。いづれ未だ先輩と二人ぎりに成る時は有るであらう、と其を丑松は頼みに思ふのである。

日は次第に高くなつた。空は濃く青く透き澄るやうになつた。

南の方に当つて、ちぎれくくな雲の群も起る。今は温暖い光の為に蒸されて、野も煙り、岡も呼吸し、踏んで行く街道の土の灰色

に乾く臭気も心地が好い。浅々と萌初めた麦畠は、両側に連つて、
 奈何どんなに春待つ心の烈しさを思はせたらう。斯かうして眺めく行く
 間にも、四人の眼に映る田舎あなが四色で有つたのはをかしかつた。
 弁護士は小作人と地主との争闘あらしひを、蓮太郎は労働者の苦痛くるしみと
 慰藉なぐさめとを、叔父は『えご』、『山牛蒡やまごぼう』、『天王草てんわうぐさ』、又
 は『水沢瀉みづおもだか』等の雑草に苦しめられる耕作の経験から、収穫とりのいれ
 に関係の深い土質の比較、さては上州地方の平野に住む農夫に比
 べて斯の山の上の人々の粗懶なげやりな習慣なぞを——流石さすがに三人の話
 は、生活といふことを離れなかつたが、同じ田舎を心に描いても、
 丑松のは若々しい思想かんがへから割出して、働くばかりが田舎ではな
 いと言つたやうな風に観察する。斯かういふ思ひくの話に身が入

つて、四人は疲労つかれを忘れ乍ら上田の町へ入つた。

上田には弁護士の出張所も設けて有る。そこには蓮太郎の細君が根津から帰る夫を待受けて居たので。蓮太郎と弁護士とは、一寸立寄つて用事を済すました上、また屠牛場で一緒に成るといふことにしよう、其種牛の最後をも見よう——斯かういふ約束で別れた。丑松は叔父と連立つて一歩ひとあし先へ出掛けた。

屠牛場近く行けば行く程、亡くなつた牧夫のことが烈しく二人の胸に浮んで来た。二人の話は其追懷おもひでで持切つた。他人が居なければ遠慮も要いらず、今は何を話さうと好自由すきじゆうである。

『なあ、丑松。』と叔父は歩き乍ら嘆息して、『へえ、もう今日で六日目だぞよ。兄貴が亡くなる、お前めへがやつて来る。おじゃんぽん葬おじゃんぽん式』

を出す、御苦勞招びから、礼廻りと、丁度今日で六日目だ。あゝ、明日は最早初七日だ。日数の早く経つには魂消て了ふ。兄貴に別れたのは、つい未だ昨日のやうにしか思はれねえがなあ。』

丑松は黙つて考へ乍ら随いて行つた。叔父は言葉を継いで、

『真ほんたう実に世の中は思ふやうに行かねえものさ。兄貴も、是から

樂をしようといふところで、彼あんな様な災難に罹るなんて。まあ、金

を遺のこすぢや無し、名を遺すぢや無し、一生苦勞を為つゞけて、其

苦勞が誰の為かと言へば——畢竟つまり、お前や俺の為だ。俺も若え時

は、克よく兄貴と喧嘩して、擲なぐられたり、泣かせられたりしたもの

だが、今となつて考へて見ると、親兄弟程難ありがた有いものは無えぞ

よ。仮令たとひ世界中の人が見放しても、親兄弟は捨てねえからなあ。

兄貴を忘れちやならねえと言ふのは——其処だはサ。』

暫時しばらく二人は無言で歩いた。

『忘れるなよ。』と叔父は復た初めた。『何程どのくれえ まあ兄貴もお

前の為に心配して居たものだか。ある時、俺に、「丑松も今が一番危え時だ。斯うして山の中で考へたと、世間へ出て見たとは違

ふから、そこを俺が思つてやる。なか／＼他人の中へ突出されて、

内兜うちかぶとを見透みすかさねえやうに遂行やりとげるのは容易ぢやねえ。何ど

卒うかしてうまく行つて呉れ、ば可いが——下手に学問なぞをして、つ

まらねえ思想かんがへを起さなければ可いが——まあ、三十に成つて見ね

え内は、安心が出来ねえ。」と斯ういふから、「なあに、大丈夫

——丑松のことなら俺が保証する。」と言つてやつたよ。すると、

兄貴は首を振つて、「どうも不可いかねえもので、親の悪いところばかり子に伝はる。丑松も用心深いのは好いが、然し又、あんまり用心深過ぎて反つて疑はれるやうな事が出来やすまいか。」としきりに其を言ふ。其時俺が、「左さう様心配した日には際限きりが無え。」と笑つたことサ。はゝゝゝゝ。』と思出したやうに慾の無い声で笑つて、臆て氣を変へて、『しかし、能くまあ、お前も是迄に漕付けて来た。最早大丈夫だ。全くお前には其丈の徳そなが具はつて居るのだ。なにしろ用心するに越したことはねえぞよ。奈何どんな先生だらうが、同じ身分の人だらうが、決して氣は許せねえ——そりやあ、もう、他人と親兄弟とは違ふからなあ。あゝ、兄貴の生きてる時分には、牧場から下つて来る、俺や婆さんの顔を見る、直にお前

の樽うはぎだつた。もう兄貴は居ねえ。是からは俺と婆さんと二人ぎり
 で、お前の樽をして楽むんだ。考へて見て呉れよ、俺も子は無し
 サ——お前より外に便りにするものは無えのだから。』

(三)

例の種牛は朝のうちに屠牛場とぎうばへ送られた。種牛の持主は早くか
 ら詰掛けて、叔父と丑松とを待受けて居た。二人は、空車引いて
 馳かけて行く肉屋の丁稚でつちの後に随まいて、聽きて屠牛場の前迄行くと、
 門の外に持主、先まづ見るより、克よく来て呉まれたを言いひ継つげる。心
 から老牧夫の最後を傷いたむといふ情じやうあひ合あは、斯持主の顔色に表れ

るのであつた。『いえ。』と叔父は相手の言葉を遮つて、『全く
 是方こちらの不注意てぬかりから起つた事なんで、貴方あんたを恨うらみる筋は些少ちつともごは
 せん。』とそれを言へば、先方さきは猶なほ々々痛み入る様子。『私はへ
 え、面目なくて、斯かうして貴方等あんたがたに合せる顔も無いのでやす——
 まあ畜生の為したことだからせえて（せえては、しての訛なまり、農夫の
 間に用ゐられる）、御災難と思つて絶念あきらめて下さるやうに。』と
 かへす／＼言ふ。是処こゝは上田の町はづれ、太郎山の麓に迫つて、
 新しく建てられた五棟ばかりの平屋。鋭い目付の犬は五六匹門外
 に集つて来て、頻しきりに二人の臭氣におひを嗅いで見たり、低声うなに つたり
 して、やゝともすれば吠ほえ懸りさうな氣勢けはひを示すのであつた。

持主に導かれて、二人は黒い門を入つた。内に庭を隔へだて、北

は検査室、東が屠殺の小屋である。年の頃五十余のでつぷり肥つた男が人々の指図をして居たが、其老練な、愛嬌のある物の言振で、屠手の頭といふことは知れた。屠手として是処に使役はれて居る壮丁は十人計り、いづれ紛ひの無い新平民——殊に卑賤しい手合と見えて、特色のある皮膚の色が明白と目につく。一人々々の赤ら顔には、烙印が押当てゝあると言つてもよい。中には下層の新平民に克くある愚鈍な目付を為乍ら是方を振返るもあり、中には畏縮た、兢兢とした様子して盗むやうに客を眺めるもある。目鋭い叔父は直に其と見て取つて、一寸右の肘で丑松を小衝いて見た。奈何して丑松も平気で居られよう。叔父の肘が触るか触らないに、其暗号は電気のやうに通じた。幸ひ案じた程

でも無いらしいので、漸やっと安心して、それから二人は他の談話はなしの仲間に入つた。

繋留場には、種牛の外に、二頭の牡牛も繋つないであつて、丁度死刑を宣告された罪人が牢獄ひとやの内に押籠おしこめられたと同じやうに、一刻々と近いいて行く性命いのちの終を翹望まちのぞんで居た。丑松は今、叔父や持主と一緒に、斯この繋留場の柵さくの前に立つたのである。持主の言草ではないが、『畜生の為たこと』と思へば、別に腹が立つの何のといふ其様そんなな心地こころもちには成らないかほりに、可傷いたましい父の最後、牧場の草の上に流れた血潮——堪おもひでへがたい追憶の情は丑松の胸に浮んで来たのである。見れば他のは佐渡牛といふ種類で、一頭は黒く、一頭は赤く、人間の食欲を満すより外には最早も生きなが

らへる価値ねうちも無い程に瘦やせて、其憔悴みすぼらしさ。それに比べると、種牛は体格も大きく、骨組たくまも偉しく、黒毛艶々として美しい雑種。持主は柵の横木を隔て、其鼻面を撫で、見たり、咽喉のどの下を摩さすつてやつたりして、

『わりやなんぢ（汝は）飛んでもねえことを為て呉れたなあ。何も俺だつて、好んで斯こ様な処へ貴様を引張つて来た訳ぢやねえ——是といふのも自業自得じふじとくだ——左様思つて絶念あきらめろよ。』

吾兒に因果でも言含めるやうに搔口説かきくじいて、今更別離わかれを惜むといふ様子。

『それ、こゝに居なさるのが瀬川さんの子息むすこさんだ。御詫おわびをしな。御詫をしな。われ（汝）のやうな畜生だつて、万更たましひ靈魂の無え

ものでも有るめえ。まあ俺の言ふことを好く覚えて置いて、次の生よには一層もつと気の利いたものに生れ變つて来い。』

斯かう言ひ聞かせて、聽やがて持主は牛の来歴を二人に語つた。現に今、多くを飼養して居るが、是これに勝まさる血統ちすぢのものは一頭も無い。父牛は亞米利加アメリカ産、母牛は斯しか々々、悪い癖さへ無くば西にし乃の入いり牧場の名牛とも唄はれたであらうに、と言出して嘆息した。持主は又附加つけたして、斯種この牛の肉の売代うりしろを分けて、亡くなつた牧夫の追善に供へたいから、せめて其で仏の心を慰めて呉れといふことを話した。

其時獣医が入つて来て、烏打帽を冠つた儘、人々に挨拶する。つゞいて、牛肉屋の亭主も入つて来たは、屠つぶされた後の肉を買取

る為であらう。間も無く蓮太郎、弁護士の二人も、叔父や丑松と一緒になつて、庭に立つて眺めたり話したりした。

『むゝ、彼あれが御話のあつた種牛ですね。』と蓮太郎は小声で言つた。人々は用意に取掛かると見え、いづれも白の上うはつぱり被、冷飯草履は脱いで素足に尻端折。笑ふ声、私語さぐやく声は、犬の鳴声に交つて、何となく構内は混雑して来たのである。

いよゝゝ種牛は引出されることになつた。一同の視線は皆な其方へ集つた。今迄沈まりかへつて居た二頭の佐渡牛は、急に騒ぎ初めて、頻と頭を左右に振動かす。一人の屠手は赤い方の鼻面を確乎しつぷかと制おさへて、声こゑを厲はげまして制したり叱つたりした。畜生ながらに本能むしが知らせると見え、逃げようゝと焦り出したのである。黒

い佐渡牛は繋がれたまゝ柱を一廻りした。死地に引かれて行く種牛は寧ろ冷静き澄ましたもので、他の二頭のやうに悪躑を為す^{わるあがき}でも無く、悲しい鳴声を泄らす^もでも無く、僅かに白い鼻息を見せて、悠々と獣医の前へ進んだ。紫色の潤みを帯びた大きな目は傍で観て居る人々を睥睨するかのやう。彼の西乃入の牧場を荒れ廻つて、丑松の父を突殺した程の悪牛では有るが、斯うした^{あば}潔い臨終の光景は、又た人々に哀憐の情を催させた。叔父も、丑松もすくなからず胸を打たれたのである。獣医はあちこちと廻つて歩き乍ら、種牛の皮を撮んで見たり、咽喉を押へて見たり、または角を叩いて見たりして、最後に尻尾を持上たかと思ふと、検査は最早其で済んだ。屠手は総懸りで寄つて群つて、『しツノ

「と声を揚げ乍ら、無理無体に屠殺の小屋の方へ種牛を導入した。屠手の頭は油断を見澄まして、素早く細引を投げ擲む。と音して牛の身体が板敷の上へ横に成つたは、足と足とが引締められたからである。持主は茫然として立つた。丑松も考深い目付をして眺め沈んで居た。やがて、種牛の眉間を目懸けて、一人の屠手が斧（一方に長さ四五寸の管があつて、致命傷を与へるのはこの是管である）を振翳したかと思ふと、もう其が畜生の最後。かすかうめき幽な呻吟を残して置いて、直に息を引取つて了つた——一撃で種牛は倒されたのである。

(四)

日の光は斯この小屋の内へ射入つて、死んで其処に倒れた種牛と、多忙いそがしさうに立働く人々の白い上うはつぱり被びとを照した。屠手の頭は鋭い出刃庖丁を振つて、先づ牛の咽喉のどを割さく。尾を牽ひくものは直に尾を捨て、細引を持つものは細引を捨て、いづれも牛の上に登つた。多勢の壮丁わかものが力に任せ、所嫌はず踏付けるので、血潮は割かれた咽喉を通して紅あかく板敷の上へ流れた。咽喉から腹、腹から足、と次第に黒い毛皮が剥取はぎとられる。膏と血との臭気におひは斯の屠牛場に満ち溢あふれて来た。

他の二頭の佐渡牛が小屋の内へ引入れられて、撃うち殺されたのは間も無くであつた。斯の可傷いたましい光景ありさまを見るにつけても、丑

松の胸に浮ぶは亡くなつた父のことで。丑松は考深い目付を為^{しなが}乍
 ら、父の死を想^{おも}ひつゞけて居ると、臆^{おそ}て種牛の毛皮も悉^{すつかり}皆剥取
 られ、角も撃ち落され、脂肪に包まれた肉身^{なかみ}からは湯気のやうな
 息の蒸^{むし}上^{のぼ}るさまも見えた。屠手の頭は手も庖丁も紅く血潮^{まみ}に交
 れ乍^{あづ}ら、あちこちと小屋の内を廻^{まわ}つて指揮^{さしづ}する。そこには竹^{たけぼう}
 箒^きで牛の膏^{あぶら}を掃いて居るものがあり、こゝには砥石を出して出
 刃^やを磨いで居るものもあつた。赤い佐渡牛は引割と言つて、腰^{こしぼ}
 骨^ねを左右に切開かれ、其骨と骨との間へ横木を入れられて、逆^{さか}
 方^{さま}に高く釣るし上げられることになつた。

『そら、巻くぜ。』と一人の屠手は天井にある滑車^{くるま}を見上げ乍^{あづ}ら
 言つた。

見る／＼小屋の中央まんなかには、巨大な牡牛の肉身からだが釣るされて懸つた。叔父も、蓮太郎も、弁護士も、互に顔を見合せて居た。一人の屠手は鋸のこぎりを取出した、脊髓あばらを二つに引割り始めたのである。
あかう 回向するやうな持主の目は種牛から離れなかつた。種牛は最早足さへも切離された。牧場の草踏散らした双ふたまた又つめの蹄も、今は小屋から土間の方へ投はふりだ出された。灰紫色の膜おほに掩はれた臟腑は、丁度斯う大風呂敷の包のやうに、べろ／＼した儘まで其処に置いてある。三人の屠手は互に庖丁を入れて、骨に添ふて肉を切開くのであつた。

烈おもひでしい追憶は、復た／＼丑松の胸中を往来し始めた。『忘れるな』——あゝ、その熱い臨終の呼吸は、どんなに深い響となつ

て、生残る丑松の骨の髓すゑまでも貫徹しみとほるだらう。其を考へる度に、亡くなつた父が丑松の胸中に復いきかへ活るのである。急に其時、心の底の方で声がして、丑松を呼び警いましめるやうに聞えた。『丑松、貴様は親を捨てる気か。』と其声は自分を責めるやうに聞えた。

『貴様は親を捨てる気か。』

と丑松は自分で自分に繰返して見た。

成程なるほど、自分は變つた。成程、一にも二にも父の言葉に服従し

て、それを器械的に遵じゆんぽう奉するやうな、其様そんな児童こじしもでは無くな

つて来た。成程、自分の胸の底は父ばかり住む世界では無くなつ

て来た。成程、父の厳しい性格を考へる度に、自分は反あべこつて反

対あべな方へ逸出ぬけだして行つて、自由自在に泣いたり笑つたりしたい

やうな、其そん様な思想かんがへを持つやうに成つた。あゝ、世の無情いきじほを憤いる先輩こゝろもちの心地と、世に随へと教へる父の心地と——その二人の相違どんなは奈何であらう。斯う考へて、丑松は自分の行く道路みちに迷つたのである。

気がついて我に歸つた時は、蓮太郎が自分の傍に立つて居た。いつの間にか巡査も入つて来て、獣医と一緒に成つて眺めて居た。見れば種牛は股ももから胴へかけて四つの肉塊かたまりに切断たちきられるところ。右の前足の股の肉は、既に天井から垂たれさが下る細引に釣るされて、海綿を持つた一人の屠手が頻と其血を拭ふのであつた。斯うして巨大な種牛の肉体からだは実に無造作に屠ほふられて了しまつたのである。屠手の頭が印判を取出して、それぞれの肉の上へ押し居るかと思

うちに、一方では引取りに來た牛肉屋の丁稚、編席敷いた箱を車の上に載せて、威勢よく小屋の内へがらくと引きこんだ。

『十二貫五百。』

といふ声は小屋の隅の方に起つた。

『十一貫七百。』

とまた。

屠られた種牛の肉は、今、大きな秤はかりに懸けられるのである、屠手の一人が目方を読み上げる度に、牛肉屋の亭主は鉛筆を舐なめて、其を手帳へ書留めた。

やがて其日の立会も済み、持主にも別れを告げ、人々と一緒に斯の屠牛場から引取らうとした時、もう一度丑松は小屋の方を振

返つて見た。屠手のあるものは残物の臟腑を取片付ける、あるものは手桶てをけに足を突込んで牛の血潮を洗ひ落す、種牛の片股は未だま釣るされた儘で、黄な膏あぶらと白い脂肪とが日の光を帯びて居た。其時は最早あの可傷いたましい回想おもひでの断片といふ感想かんじも起らなかつた。唯大きな牛肉の塊としか見えなかつた。

第拾壹章

(一)

『先づ好かつた。』と叔父は屠牛場の門を出た時、丑松の肩を叩いて言つた。『先づまあ、是で御関所は通り越した。』

『あゝ、叔父さんは声が高い。』と制するやうにして、丑松は何か思出したやうに、先へ行く蓮太郎と弁護士との後姿を眺めた。

『声が高い？』叔父は笑ひ乍ら、『ふゝ、俺のやうな皺枯声が誰に聞えるものかよ。それは左様と、丑松、へえ最早是で安心だ。是処まで漕付けければ、最早大丈夫だ。どのくれえ、まあ、俺も心配したらう。あゝ今夜からは三人で安気に寝られる。』

牛肉を満載した車は二人の傍を通過した。枯々な桑畠の間には、其車の音がからくと響き渡つて、随いて行く犬の叫び声も何となく喜ばしさうに聞える。心の好い叔父は唯訳も無く身を

祝つて、顔の薄痘痕うすあばたも喜悅よろこびの為に埋うまれるかのやう。奈何どういふ思想かんがへが来て今の世の若いもの、胸を騒がせて居るか、其様そのんなことはとんと叔父には解らなかつた。昔者の叔父は、斯この天氣の好いやうに、唯一族が無事でさへあれば好かつた。臆やがて、考深い目付を為て居る丑松うながを促して、昼仕度を為るために急いだのである。

昼食ちゅうじきの後、丑松は叔父と別れて、単独ひとりで弁護士の出張所を訪ねた。そこには蓮太郎が細君と一緒に、丑松の来るのを待受けて居たので。尤もつとも、一同で楽しい談話はなしをするのは三時間しか無かつた。聞いて見ると細君は東京の家へ、蓮太郎と弁護士とは小諸やとやの旅舎まで、其日四時三分の汽車で上田を発つといふ。細君は深く

夫の身の上を案じるかして、一緒に東京の方へ帰つて呉れと言出したが、蓮太郎は聞入れなかつた。もと／＼友人や後進のものを先にして、家のものを後にするのが蓮太郎の主義で、今度信州に踏留まるといふのも、畢竟はつまり弁護士のために尽したいから。其は細君も万々承知。夫の氣象として、左様さういふのは無理もない。しかし斯の山の上で、夫の病気が重りでもしたら。斯ういふ心配は深く細君の顔色に表はれる。『奥様おくさん、其様そんなに御心配無く——猪子君は私が御預りしましたから。』と弁護士が引受顔なので、細君も強ひてとは言へなかつた。

先輩が可懐なつかしければ其細君までも可懐しい。斯う思ふ丑松の情は一層深くなつた。始めて汽車の中で出逢であつた時からして、何と

なく人格の奥床おくゆかしい細君とは思つたが、さて打解けて話して見ると、別に御世辞が有るでも無く、左様さうかと言つて可厭いやに澄まして居るといふ風でも無い——まあ、極ごくく淡泊さつぱりとした、物に拘こうで泥いしない氣象の女と知れた。風俗なりふりなぞには関かまはない人で、是これから汽車に乗るといふのに、其程それほど身のまはりを取とりつくる修しゆふでも無い。男の見て居る前で、僅かに髪なを撫なで付けて、旅の手荷物もそことくとに取とり収まめた。あの『懺悔録』の中に斯この人ひとのことが書いてあつたのを、急に丑松は思出して、兎とも角かくも普通の良い家庭に育つた人が種族の違ふ先輩かたづに嫁まぐ迄までの其二人の歴史を想像して見た。

汽車を待つ二三時間は速すくに経たつた。左右さうかうするうちに、停車場ステーション

さして出掛ける時が来た。流石さすが弁護士は忙せはしい商売柄、一緒に門を出ようと為するところを客に捕とらつて、立つて時計を見乍らの訴訟話。蓮太郎は細君を連れて一ひと歩あし先へ出掛けた。『あゝ何時復た先生に御目に懸れるやら。』斯う独ひとりごと語のやうに言つて、丑松も見送り乍ら随まいて行つた。せめてもの心尽し、手荷物かばんの鞆たもとは提たげさせて貰もらふ。其様そのんなことが丑松の身に取つては、嬉うれ敷しくも、名な残ごり惜をしく敷くも思はれたので。

初冬の光は町の空に満ちて、三人とも羞まぶし明あい位であつた。上田の城跡について、人通りのすくない坂道を下りかけた時、丑松は先輩と細君とが斯はなういふ談話はなしを為るのを聞いた。

『大丈夫だよ、左様さうお前のやうに心配しないで。』と蓮太郎は

叱るやうに。

『その大丈夫が大丈夫で無いから困る。』と細君は歩き乍ら嘆息した。『だつて、貴方は少許ちつとも身体を関はないんですもの。私が随いて居なければ、どんな無理を成さるか知れないんですもの。それに、斯の山の上の陽氣——まあ、私は考へて見たばかりでも怖おそろしい。』

『そりやあ海岸に居るやうな訳にはいかないさ。』と蓮太郎は笑つて、『しかし、今年あたくかは暖和あたくかい。信州こんで斯様こんなことは珍しい。

斯の位の空気を吸ふのは平氣なものだ。御覽な、其証拠には、信州へ来てから風邪一つ引かないぢやないか。』

『でせう。大變よに快おなんく御成おなんなすつたでせう。ですから猶なほ々く大切

にして下さいと言ふんです。折角せつかく快く成りかけて、復たまた逆返ぶりがへ

しでもしたら——』

『ふゝ、左様さう大事を取つて居た日にや、事業しごとも何も出来やしな
い。』

『事業？ 壮健たつしやに成ればいくらでも事業は出来ますわ。あゝ、

一緒に東京へ帰つて下されば好いんですのに。』

『解らないねえ。未だまだ其様そのんなことを言つてる。奈何してまあ女といふものは左様さう解らないだらう。何程どれほど私が市村さんの御世話に成つて居るか、お前だつて其位それくらゐのことは考へさうなものぢやないか。其人の前で、私に帰れなんて——すこし省慮かんがへの有るものなら、彼様あんななことの言へた義理ぢや無からう。彼様あんないふことを言

出されると、折角是方こつちで思つたことも無に成つて了ふ。それに今度は、すこし自分で研究したいことも有る。今胸に浮んで居る思か想んがへを完成まとめて書かうといふには、是非とも自分で斯の山の上を歩いて、田園生活といふものを観察しなくちやならない。それには実にもつて来いといふ機会だ。』と言つて、蓮太郎はすこし氣を変へて、『あゝ、好い天氣だ。全く小春日こはるびより和だ。今度の旅行は余程面白からう——まあ、お前も家うちへ行つて待つて居て呉れ、信州土産はしつかり持つて歸るから。』

二人は暫時しばらく無言で歩いた。丑松は右の手の鞆を左へ持ち變へて、黙つて後から随いて行つた。やがて高い白壁造りの倉庫のあるところへ出て来た。

『あゝ。』と細君は萎しをれ乍ら、『何故なぜ私が歸つて下さいなんて言出したか、其訳を未だ貴方に話さないんですから。』

『ホウ、何か訳が有るのかい。』と蓮太郎は聞咎める。

『外ほかでも無いんですけれど。』と細君は思出したやうに震へて、

『どうもねえ、昨夜の夢見が悪くて——斯う恐しく胸騒ぎがして

——一晚中私は眠られませんでしたよ。何だか私は貴方のことが

心配でならない。だつて、彼様あんな夢を見る筈あが無いんですもの。

だつて、其夢が普通たゞの夢では無いんですもの。』

『つまらないことを言ふなあ。それで一緒に東京へ帰れと言ふのか。はゝゝゝゝ。』と蓮太郎は快活らしく笑つた。

『左様さう貴方のやうに言つたものでも有ませんよ。未来さきの事を夢に

見るといふ話は克く有ますよ。どうも私は氣に成つて仕様が無い。
』

『ちよツ、夢なんぞが宛あてに成るものぢや無し——』

『しかし——奇異きたいなことが有れば有るものだ。まあ、貴方の死んだ夢を見るなんて。』

『へん、御幣ごへい昇かつぎめ。』

(二)

不思議な問答をするとは思つたが、丑松は其を聞いて、格別氣にも懸けなかつた。彼程あれほど淡泊さつぱりとして、快濶さばけた氣象の細君こがねで有

ながら、左様なことを気に為るとは。まあ、あの夢といふ奴は兒童の世界のやうなもので、時と場所の差別も無く、実に途方も無いことを眼前に浮べて見せる。先輩の死——どうして其様な馬鹿らしいことが細君の夢に入つたものであらう。しかし其を気にするところが女だ。と斯う感じ易い異性の情緒を考へて、いつそ可笑しくも思はれた位。『女といふものは、多く彼様したものだ。』と自分で自分に言つて見た時は、思はず彼の迷信深い蓮華寺の奥様を、それからあのお志保を思出すのであつた。

橋を渡つて、停車場近くへ出た。細君はすこし後に成つた。

丑松は左の手に持ち変へた鞆をまたく右の手に移して、蓮太郎と別離の言葉を交し乍ら歩いた。

『そんなら先生は——』と丑松は名残惜しさうに聞いて見る。

『いつ頃まで信州に居らつしやる御積りなんですか。』

『僕ですか。』と蓮太郎は微笑ほゝゑんで答へた。『左様さうですなあ——

すくなくとも市村君の選挙が済むまで。実はね、家内も彼様あゝ言ひますし、一旦は東京へ帰らうかとも思ひましたよ。ナニ、これが普通の選挙の場合なら、黙つて帰りますサ。どうせ僕なぞが居たところで、大した応援も出来ませんからねえ。まあ市村君の身になつて考へて見ると、先生は先生だけの覚悟があつて、候補者として立つのですから、誰を政敵にするのも其味は一つです。はゝゝゝ。しかし、市村君が勝つか、あの高柳利三郎が勝つか、といふことは、僕等の側から考へると、一寸普通の場合とは違ふか

とも思はれる——』

丑松は黙つて隨いて行つた。蓮太郎は何か思出したやうに、後から来る細君の方を振返つて見て、やがて復た歩き初める。

『だつて、君、考へて見て呉れたまへ。あの高柳の行為やりかたを考へて見て呉れたまへ。あゝ、いくら吾儕われが無智な卑賤いやなものだからと言つて、踏付ふみけられるにも程が有る。どうしても彼様あんな男に勝たせたくない。何卒どうかして市村君のものに為て遣りたい。高柳の話などを聞かなければ格別、聞いて、知つて、黙つて帰るといふことは、新平民として余り意気地いくぢが無さ過ぎるからねえ。』

『では、先生は奈何どうなさる御積りなんですか。』

『奈何するとは？』

『黙つて帰ることが出来ないとおつしやと仰ると——』

『十二、君、僅かに打撃を加へる迄までのことさ。はゝゝゝゝ。なにしろ先方さきには六左衛門といふ金主が附いたのだから、いづれ買取も為るだらうし、壮士的な運動も遣やるだらう。そこへ行くと、是方つちは草鞋一足、舌一枚——おもしろい、おもしろい、敵はたゞ金の力より外に頼りに為るものが無いのだからおもしろい。はゝゝゝゝ。はゝゝゝゝ。』

『しかし、うまく行つて呉れると好いですがなあ——』

『はゝゝゝゝ。はゝゝゝゝ。』

斯かういふ談話はなしをして行くうちに、二人は上田停車場ステーションに着いた。

上野行の上り汽車が是処こゝを通る迄には未だ少許間すこしが有つた。多

くの旅客は既に斯の待合室に満ち溢れて居た。細君も直に一緒になつて、三人して弁護士を待受けた。蓮太郎は巻煙草を取出して、丑松に勧め、自分もまた火を点けて、其を燻しく何を言出すかと思ふと、『いや、信州といふところは余程面白いところさ。吾儕のやうなものを斯様に待遇するところは他の国には無いね。』と言ひさして、丑松の顔を眺め、細君の顔を眺め、それから旅客の群をも眺め廻し乍ら、『ねえ瀬川君、僕も御承知の通りな人間でせう。他の場合とは違つて選挙ですから、実は僕なぞの出る幕では無いと思つたのです。万一、選挙人の感情を害するやうなことが有つては、反つて藪蛇だ。左様思ふから、まあ演説は見合せにする考へだつたのです。ところが信州といふところは変

つた国柄で、僕のやうなものに是非談話はなしをして呉れなんて——はあ、今夜は小諸で、市村君と一緒に演説会へ出ること。』と言つて、思出したやうに笑つて、『この上田で僕等が談話をした時には七百人から集りました。その聴衆が実に真面目に好く聞いて呉れましたよ。長野に居た新聞記者の言草では無いが、「信州ほど演説の稽古をするに好い処はない、」——全く其通りです。智識の慾に富んで居るのは、斯の山国の人の特色でせうね。これが他の国であつて見たまへ、まあ僕等のやうなものを相手にして呉れる人はありやしません。それが信州へ来れば「先生」ですからねえ。はゝゝゝゝ。』

細君は苦笑ひをしながら聞いて居た。

臆て、切符を売出した。人々はぞろぞろ動き出した。丁度そこへ弁護士、肥大な体軀からだを動ゆすり乍ら、満面あはれに笑を含んで馳け付けて、挨拶する間も無く蓮太郎夫婦と一緒に埒らちの内へと急いだ。丑松も、入場切符を握つて、随いて入つた。

四番の上りは二十分も後れたので、それを待つ旅客は『プラットホオム』の上むらに群むらつた。細君は大時計の下に腰掛けて茫然ぼうぜんと眺め沈んで居る、弁護士は人々の間をあちこちと歩いて居る、丑松は蓮太郎の傍を離れないで、斯うして別れる最後の時まで自分の真情を通じたいが胸中に満ちちち居た。どうかすると、丑松は自分の日和下駄の齒で、乾いた土の上に何か画かき初める。蓮太郎は柱に倚より凭かり乍ら、何の文字とも象徴しるしとも解らないやうな

ものが土の上に画かれるのを眺め入つて居た。

『大分汽車は後れましたね。』

といふ蓮太郎の言葉に気がついて、丑松は下駄の齒の痕あとを搔消して了しまつた。すこし離れて斯この光景ありさまを眺めて居た中学生もあつたが、やがて他わきを向いて意味も無く笑ふのであつた。

『あ、ちよと、瀬川君、飯山の御住おところ処を伺つて置きませう。』斯う蓮太郎は尋ねた。

『飯山は愛宕町あたごまちの蓮華寺といふところへ引越しました。』と丑松は答へる。

『蓮華寺？』

『下水内郡飯山町蓮華寺方——それで分ります。』

『むゝ、左様さうですか。それから、是これはまあ是これ限りの御話ですが——』と蓮太郎は微笑ほくそんで、『ひよつとすると、僕も君の方まで出掛けて行くかも知れません。』

『飯山へ?』丑松の目は急に輝いた。

『はあ——尤もつとも、佐久小県の地方を廻つて、一旦長野へ引揚げて、それからのことですから、まだ奈何どうなるか解りませんがね、若もし飯山へ出掛けるやうでしたら是非御訪おたづねしませう。』

其時、汽笛の音が起つた。見れば直江津の方角から、長い列車が黒くろけぶり烟を揚げて進んで来た。顔も衣服きものも垢染あかじみ汚れた駅夫の群は忙しさうに駈けて歩く。やがて駅長もあらはれた。汽車はもう人々の前に停つた。多くの乗客はいづれも窓に倚より凭かゝつて眺め

る。細君も、弁護士も、丑松に別離わかれを告げて周章あわただしく乗込んだ。

『それぢや、君、失敬します。』

といふ言葉を残して置いて、蓮太郎も同じ室へ入る、直に駅夫が飛んで来てぴしやんと其戸を閉めて行つた。丑松の側に居た駅長が高く右の手を差上げて、相図の笛を吹鳴らしたかと思ふと、汽車はもう線路を滑り初めた。細君は窓から顔を差出して、もう一度丑松に挨拶したが、たゞさへ悪い其色艶が忘れることの出来ないほど蒼あをかつた。見る見る乗客の姿は動揺して、甲から乙へと影のやうに通過ぎる。丑松は喪心した人のやうになつて、長いこと同じところに樹うゑたやうに立つた。あゝ、先輩は行つて了つた、と思ひ浮べた頃は、もう汽車の形すら見えなかつたのである。後

に残る白い雲のやうな煙の群、その一団一団の集合あつまりが低く地の
 上に這はふかと見て居ると、急に風に乱れて、散り／＼になつて、
 終しまひに初冬の空へ搔消すやうに失くなつて了つた。

(三)

何故なぜ人の真情は斯う思ふやうに言ひ表すことの出来ないもので
 あらう。其日といふ其日こそは、あの先輩に言ひたい／＼と思つ
 て、一度となく二度となく自分で自分を励まして見たが、とう／
 言はずに別れて了しまつた。どんなに丑松は胸の中に戦ふ深い恐怖おそれ
 と苦痛くるしみとを感じたらう。どんなに丑松は寂しい思を抱いだき乍ながら、

もと来た道を根津村の方へと歸つて行つたらう。

初七日も無事に過ぎた。墓参りもし、法事も済み、わざとの振舞は叔母が手料理の精進しやうじんで埒明らちあけて、さて漸やうやく疲労つかれが出た頃は、叔父も叔母も安心の胸を撫下した。独り精神こころの苦闘たゝかひを続けたのは丑松で、蓮太郎が残して行つた新しい刺激は書いたものを読むにも勝る懊惱あうなうを与へたのである。時として丑松は、自分の一生のことを考へる積りで、小ちひさがたがたの傾斜を彷徨さまよつて見た。根津の丘、姫子沢の谷、鳥が啼なく田圃側たんぼわきなどに霜枯れた雑草を踏み乍ら、十一月上旬の野辺に満ちた光を眺めて佇立たゞずんだ時は、今更のやうに胸を流れる活きた血潮の若々しさを感ずる。確たしか実に、自分には力がある。斯かう丑松は考へるのであつた。しかし其力は

内部へくと閉塞とぢふさがつて了つて、衝ついて出て行く道が解らない。丑松はたゞ同じことを同じやうに繰返し乍ら、山の上を歩き廻つた。あゝ、自然は慰めて呉れ、励ましては呉れる。しかし右へ行けども、左へ行けども、そこまでは人に教へなかつた。丑松が尋ねるやうな問には、野も、丘も、谷も答へなかつたのである。

ある日の午後、丑松は二通の手紙を受取つた。二通ともに飯山から。一通は友人の銀之助。例の筆まめ、相変らず長々しく、丁度談話はなしをするやうな調子で、さま／＼なぐさめ慰藉なぐさめを書き籠め、さて飯山の消息には、校長の噂うはさやら、文平の悪口やら、『僕も不幸にして郡視学を叔父に持たなかつた』とかなんとか言ひたい放題なことを書き散らし、普通教育者の身を恨うらみ罵ののし、到底今日の教育界

は心ある青年の踏み留まるべきところでは無いと奮慨してよこした。長野の師範校に居る博物科の講師の周旋で、いよく農科大学の助手として行くことに確定したから、いづれ遠からず植物研究に身を委ねることが出来るであらう——まあ、喜んで呉れ、といふ意味を書いてよこした。

功名を慕ふ情熱は、斯の友人の手紙を見ると同時に、烈しく丑松の心を刺激した。一体、丑松が師範校へ入学したのは、多くの他の学友と同じやうに、衣食の途を^{みち}を得る為で——それは小学教師を志願するやうなものは、誰しも似た境遇に居るのであるから——とはいふものゝ、丑松も無論今の位置に満足しては居なかつた。しかし、銀之助のやうな場合は特別として、高等師範へでも行く

より外に、小学教師の進んで出る途は無い。さも無ければ、長い十年の奉公。其義務年限の間、束縛されて働いて居なければならぬ。だから丑松も高等師範へ——といふことは卒業の当時から考へないでも無い。志願さへすれば最早とつくに選抜されて居たらう。そこがそれ穢多の悲しさには、妙にそちらの方には気が進まなかつたのである。丑松に言はせると、たとへ高等師範を卒業して、中学か師範校かの教員に成つたとしたところで、もしも蓮太郎のやうな目に逢つたら奈何どうする。何処どこまで行つても安心が出来ない。それよりは飯山あたりの田舎あなに隠れて、じつと辛抱して、義務年限の終りを待たう。其間に勉強して他の方面へ出る下地を作らう。素性が素性なら、友達なんぞに置いて行かれる積りは毛

頭無いのだ。斯う嘆息して、丑松は深く銀之助の身の上を羨んだ。他の一通は高等四年生総代としてある。それは省吾の書いたもので、手紙の文句も覺束なく、作文の時間に教へた通りをそつくり其儘の見舞状、『根津にて、瀬川先生——風間省吾より』としてあつた。『猶々なほく』とちひさく隅の方に、『蓮華寺の姉よりもよろしく宜敷』としてあつた。

『姉よりも宜敷。』

と繰返して、丑松は言ふに言はれぬ可なつか懐しさを感じた。やがてお志保のことを考へる為に、裏の方へ出掛けた。

おもひで
追憶

の林檎畠——昔若木であつたのも今は太い幹となつて、

中には僅かに性命いのちを保つて居るやうな虫ばみ朽ちたのもある。見れば木立も枯れ／＼、細く長く垂れ下る枝と枝とは左右に込合つて、思ひ／＼に延びて、いかにも初冬の風趣おもむきを顕あらはして居た。

その裸々とした幹の根元から、芽も籠る枝のわかれ、まだところ

／＼に青み残つた力なげの霜葉まで、日につれて地に映る果樹の姿は丑松の足許あしもとにあつた。そここの樹の下に雄雌をすめすの鶏、

土を浴びて静息じつとして蹲踞はひつくばつて居るのは、大方羽虫を振ふ為

であらう。丁度この林檎畠を隔て、向ふに草葺くさぶきの屋根も見え

る——あゝ、お妻の生家さとだ。克よく遊びに行つた家うちだ。薄煙青々と

其土壁を泄もれて立登るのは、何となく人懐しい思をさせるのであつた。

『姉よりも宜敷よろしく。』

とまた繰返して、丑松は樹と樹の間をあちこちと歩いて見た。

楽しい思想かんがへは来て、いつの間にか、丑松の胸の中に宿つたの

である。昔、昔、少年の丑松があをの幼馴染せきなしみのお妻と一緒に遊ん

だのは爰こゝだ。互に人目を羞はぢらつて、輝く若葉の蔭に隠れたのは

爰だ。互に初恋の私語さしやきを取交したのは爰だ。互に無邪気な情の為

に燃え乍ら、唯もう夢中で彷徨さまよつたのは爰だ。

斯かういふ風に、過去つたことを思ひ浮べて居ると、お妻からお

志保、お志保からお妻と、二人の梯おもかげは往いつたり来たりする。別に

あの二人は似て居るでも無い。年齢としも違ふ、性質も違ふ、容かほかた

貌ちも違ふ。お妻を姉とも言へないし、お志保を妹とも思はれな

い。しかし一方のことを思出すと、きつと又た一方のことをも考へて居るのは不思議で――

あゝ、穢多なげきの悲嘆といふことさへ無くば、是程これほど深く人懐しい

思も起らなかつたであらう。是程深く若い生命いのちを惜むといふ氣に

も成らなかつたであらう。是程深く人の世の歡樂たのしみを慕ひあこが

れて、多くの青年が感ずることを二倍にも三倍にもして感ずるや

うな、其様そんな切なささは知らなかつたであらう。あやしい運命さまたに妨

げられ、ば妨げられる程、余計に丑松の胸は溢あふれるやうに感ぜら

れた。左様さうだ――あのお妻は自分の素性を知らなかつたからこそ、

昔一緒にこの林檎畠を彷徨つて、蜜のやうな言葉を取交しもしたのである。誰が卑賤しい穢多の子と知つて、其朱唇で笑つて見せるものが有らう。もしも自分のことが世に知れたら——斯ういふことは考へて見たばかりでも、実に悲しい、腹立たしい。懐しさは苦しさに交つて、丑松の心を搔乱すやうにした。

思ひ耽つて樹の下を歩いて居ると、急に鶏の声が起つて、森閑とした畠の空気に響き渡つた。

『姉よりも宜敷。』

ともう一度繰返して、それから丑松は斯の場処を出て行つた。

其晩はお志保のことを考へ乍ら寝た。一度有つたことは二度有るもの。翌る晩も其又次の晩も、寝る前には必ず枕の上でお志保

を思出すやうになつた。尤も朝になれば、そんなことは忘れ勝ちで、『奈何どうして働かう、奈何して生活しよう——自分は是から将来き奈何したら好からう』が日々にちく心を悩ますのである。父の忌服きふくは半ば斯ういふ煩悶のうちを過したので、さていよく『奈何する』となつた時は、別に是ぞと言つて新しい途みちの開けるでも無かつた。四五日の間、丑松はうんと考へた積りであつた。しかし、後になつて見ると、唯もう茫然ぼんやりするやうなことばかり。つまり飯山へ歸つて、今迄通りの生活を続けるより外ほかに方法も無かつたのである。あゝ、年は若し、経験は少し、身は貧しく、義務年限には縛られて居る——丑松は暗い前途を思ひやつて、やたらに激昂ふるしたり戦慄ふるへたりした。

第拾弐章

(一)

二七日ふたなぬかが済すむ、直に丑松は姫子沢を発たつことにした。やれ、
 それ、と叔父夫婦は氣を揉もんで、曆を繰もつて日を見るやら、草鞋わらぢ
 の用意をして呉くれるやら、握飯むすびは三つも有れば沢山だといふもの
 を五つも造こしらへて、竹の皮に包んで、別に瓜の味噌漬みそづけを添そへて呉くれ
 た。お妻の父親おやぢもわざわざやつて来て、炉辺ろばたでの昔語すゝ。煤すすけた古

壁に懸かる例の『山猫』を見るにつけても、亡なくなつた老牧夫の
 樽うはきは尽きなかつた。叔母が汲んで出す別離わかれの茶——其色も濃く香
 も好いのを飲下した時は、どんなにか丑松も暖い血縁みうちのなさを
 感じたらう。道祖神の立つ故郷ふるさとの出口迄叔父に見送られて出た。
 其日は灰色の雲が低く集つて、荒くわうれう寥寥とした小ちひさがた 県たにあの谷
 間ひを一層暗鬱あんうつにして見せた。烏帽子ゑぼし一帯の山脈も隠れて見え
 なかつた。父の墓のある西乃入の沢あたりは、あるひは最早雪もが
 来て居たらう。昨日一日の冴こがらしで、急に枯々な木立も目につき、梢こずゑ
 も坊主になり、何となく野山の景色が寂しく冬らしくなつた。長
 い、長い、考へても淹悶うんざりするやうな信州の冬が、到頭たうとうやつて
 来た。人々は最早あのくちなしぞめ染くちなしぞめの真綿帽子を冠り出した。荷をつ

けて通る馬の鼻息の白いのを見ても、いかに斯^{この}山上の氣候の變化が激烈であるかを感じさせる。丑松は冷い空気を呼吸し乍ら、岩石の多い坂路を下りて行つた。荒谷^{あらかや}の村はづれ迄行けば、指^{さき}の頭^{さき}も赤く腫^はれ脹^{ふく}らんで、寒さの為に感覺を失つた位。

田中から直江津行の汽車に乗つて、豊野へ着いたのは丁度正午^{ひる}すこし過。叔母が呉れた握飯^{むすび}は停車場^{ステーション}前の休茶屋で出して食つた。空腹^{すきばら}とは言ひ乍ら五つ迄は。さて残つたのを捨てる訳にもいかず、犬に呉れるは勿^{もつたい}体なし、元の竹の皮に包んで外^{ぐわいたう}套^うの袖袋^{かくし}へ突込んだ。斯うして腹をこしらへた上、川船の出るといふ蟹沢を指して、草鞋^{わらぢ}の紐^{ひも}を^{しめなほ}直して出掛けた。其間^{およ}凡^おそ一里^{ばかり}許^り。尤も往きと帰りとは、同じ一里が近く思はれるもので、北国街

道の平坦たひらな長い道を独りてくくやつて行くうちに、いつの間にか丑松は広濶ひろ／＼とした千曲川ちくまがはの畔ほとりへ出て来た。急いで蟹沢の船場迄行つて、便船びんせんは、と尋ねて見ると、今々飯山へ向けて出たばかりといふ。どうも拠よんどころない。次の便船の出るまでは是処こゝで待つより外は無い。それでもまだ歩いて行くよりは増だ、と考へて、丑松は茶屋の上り端あがはなに休んだ。

霧みぞれが落ちて来た。空はいよく暗澹あんたんとして、一面の灰紫色に掩おほはれて了しまつた。斯うして一時間の余も待つて居るといふことが、既にもう丑松の身にとつては、堪へ難い程の苦痛くるしみであつた。それに、道を急いで来た為に、いやに身体からだは蒸むされるやう。襯衣シャツの背中に着いたところは、びつしより熱い雫しづくになつた。額に手を当

て、見れば、汗に濡れた髪の心地の悪さ。胸のあたりを搔展げ
 て、少許氣息を抜いて、聽て濃い茶に乾いた咽喉を霑して居る内
 に、ポツ／＼舟に乗る客が集つて来る。あるものは奥の炬燵にあ
 たるもあり、あるものは炉辺へ行つて濡れた羽織を乾すもあり、
 中には又茫然と懷手して人の談話を聞いて居るのもあつた。主
 婦は家の内でも手拭を冠り、藍染真綿を亀の甲のやうに着て、
 茶を出すやら、座蒲団を勧めるやら、金米糖は古い皿に入れて
 款待した。

丁度そこへ二台の人力車が停つた。矢張斯の囊を衝いて、便船
 に後れまいと急いで来た客らしい。人々の視線は皆な其方に集つ
 た。車夫はまるで濡鼠、酒代が好いかして威勢よく、先づ雨被

を取除とりはずして、それから手荷物のかずくを茶屋の内へと持運ぶ。つゞいて客もあらはれた。

(二)

丑松が驚いたのは無理もなかつた。それは高柳の一行であつた。往ゆきに一緒に成つて、帰りにも亦また斯この通り一緒に成るとは——しかも、同じ川舟を待合はせるとは。それに往ゆきには高柳一人であつたのが、帰りには若い細君らしい女と二人連。女は、薄うすいろ色縮ちりめん緬めんのお高祖こそを眉深まぶかに冠まつたまゝ、丑松の腰掛けて居る側を通り過ぎた。新しい艶のある吾妻袍衣あづまコートに身を包んだ其嫵娜すわりとした後

姿を見ると、斯この女が誰であるかは直に読める。丑松はあの蓮太郎の話をおもひおこおもひおこして、いよく其が事実であつたのに驚いて了しまつた。

主かみさん婦かみさんに導かれて、二人はずつと奥の座敷へ通つた。そこには炬燵こたつが有つて、先客一人、五十あまりの坊主、直に慣なれ々々しく声を掛けたところを見ると、かねて懇意の仲でも有らう。聴やがて盛んな笑聲が起る。丑松は素知らぬ顔、屋外そとの方へ向いて、物寂ものさみしい雲みぞれの空を眺めて居たが、いつの間にか後の方へ気を取られる。聞くとは無しについ聞耳を立てる。座敷の方では斯こん様な談話はなしをして笑ふのであつた。

『道理で——君は暫しばらく時見えないと思つた。』と言ふは世慣よなれた

坊主の声で、『私は又、選挙の方が忙しくて、其で地方廻りでも為して居るのかと思つた。へえ、左様さうですかい、そんな御目出度おめでたいことゝは少許すこしも知らなかつたねえ。』

『いや、どうも忙しい思おもひを為なして来ましたよ。』斯かう言つて笑ふ声を聞くと、高柳はさも得意で居るらしい。

『それはまあ何よりだつた。失礼ながら、奥様おくさんは？ 矢張やはり東京の方からでも？』

『はあ。』

この『はあ』が丑松を笑はせた。

談話はなしの様子で見ると、高柳夫婦は東京の方へ廻つて、江の島、

鎌倉あたりを見物して来て、是から飯山へ乗込むといふ寸法らし

い。そこは抜目の無い、細工の多い男だから、根津から直に引返すやうなことを為しないで、わざく／＼遠廻りして帰つて来たものに見える。さて、坊主を捕つかまへて、片腹痛いことを吹ふい聴ちやうし始めた。聞いて居る丑松には其心情の偽いつはりが読め過ぎるほど読めて、終しまひには其処に腰掛けても居られないやうになつた。『恐しい世の中だ』

——斯う考へ乍ら、あの夫婦の暗い秘密を自分の身に引比べると、さあ何となく気懸りでならない。やがて、故意わざと無頓着な様子を装つくろつて、ぶらりと休茶屋の外へ出て眺めた。

みぞれ 霽は絶えず降りそゞいで居た。あの越後路から飯山あたりへかけて、毎まい年とし降る大雪の前さき駆ふれが最早やつて来たかと思はせるやうな空模様。灰色の雲は対岸に添さまよひ徘徊まよつた、広ひろ潤／＼とした千

曲川の流域が一層遠く幽かすかに見渡される。上高井の山脈、菅平の高原、其他畳み重なる多くの山々も雪雲に埋没うづもれて了しまつて、僅かに見えつ隠れつして居た。

斯うして茫然ぼうぜんとして、暫時しばらく千曲川の水を眺めて居たが、いつの間にか丑松の心は背後うしろの方へ行つて了つた。幾度か丑松は振返つて二人の様子を見た。見まいくと思ひ乍ら、つい見た。丁度乗船の切符を売出したので、人々は皆な争つて買った。間も無く船も出るといふ。混雑する旅人の群まぎに紛れて、先方さきの二人も亦た時々盗むやうに是方こちらの様子を注意するらしい——まあ、思おもひなの故せみかして、すくなくとも丑松には左様酌さうとれたのである。女の方で丑松を知つて居るか、奈何か、それは克よく解らないが、丑

松の方では確かに知つて居る。髪のかたちこそ新婚の人のそれに結ひ変へては居るが、紛れの無い六左衛門の娘、白いもの花やかに彩色いろどりして恥の面を塗り隠し、野心深い夫に倚より添そひ、崖がけにある坂路をつたつて、舟に乗るべきところへ下りて行つた。『何と思つて居るだらう——あの二人は。』斯う考へ乍ら、丑松も亦た人々の後に随ついて、一緒にその崖を下りた。

(三)

川舟は風変りな屋形造りで、窓を付け、舷ふなべりから下を白く化粧して赤い二本筋を横に表してある。それに、艫ともより寄の半分を板戸で

仕切つて、荷積みの為に區別がしてあるので、客の座るところは細長い座敷を見るやう。立てば頭が支へる程。人々はいづれも狭苦しい屋形の下に膝を突合せて乗つた。

やがて水を撃つ棹さの音がした。舟底は砂の上を滑り始めた。今は二挺櫓ろで漕ぎ離れたのである。丑松は隅の方に両足を投出して、独り寂しさうに巻煙草を燻ふかし乍ながら、深い／＼思に沈んで居た。河の面に映る光線の反射は割合に窓の外を明くして、降りそゞぐ雲の眺めをおもしろく見せる。舷ふなべりに触れて嘯つぶやくやうに動揺する波の音、是方こちらで思つたやうに聞える眠たい櫓のひゞき——あゝ静かな水の上だ。荒くわうれう寥れうとした岸の楊柳やなぎもところ／＼。時としては其冬木の姿を影のやうに見て進み、時としては其枯々な枝の下を

潜るやうにして通り抜けた。是これから将来さきの自分の生涯は畢竟つまり奈何どうなる。斯う丑松は自分で自分に尋ねることもあつた。誰が其を知らう。窓から首を出して飯山の空を眺めると、重く深く閉とぢ塞ふさがつた雪雲の色はうたゝ孤独な穢多の子の心を傷いたましめる。残酷なやうな、可な懐つかしいやうな、名のつけやうの無い心地こころもちは丑松の胸の中を搔かき乱みだした。今——学校の連中は奈何どうして居るだらう。友達の銀之助は奈何して居るだらう。あの不幸な、老朽な敬之進は奈何して居るだらう。蓮華寺の奥様は。お志保は。と不図、省吾から来た手紙の文句などを思出して見ると、逢あひたいと思ふ其人に復また逢はれるといふ楽しみが無いでもない。丑松はあの寺の古壁を思ひやるごとに、空寂なうちにも血の湧くやうな心地こころもちに帰るので

あつた。

『蓮華寺——蓮華寺。』

と水に響く櫓の音も同じやうに調子を合せた。

霏は雪に變つて来た。徒然な舟の中は人々の雑談で持切つ

た。就中、高柳と一緒にわけてもなつた坊主、茶にしたやうな口軽な調

子で、柄に無い政事上の取沙汰、とりぎた 酢の菘、す 蕪、こんやく 蕪のとやり出したの

で、聞く人は皆な笑ひ憎んだ。斯の坊主に言はせると、選挙は一

種の遊戯で、政事家は皆な俳優に過ぎない、吾儕は唯見物して

樂めば好いのだと。斯の言葉を聞いて、また人々が笑へば、そこ

へ弥次馬が飛出す、其尾に随ひいきぶひいきいて、不鬚顧の論が始まる。『い

よく市村も侵入きりこんで来るさうだ。』と一人が言へば、『左様言

ふ君こそ御先棒に使役はれるんぢや無いか。』と攪返すものが
ある。弁護士の名は幾度か繰返された。其を聞く度に、高柳は不
快らしい顔付。ふゝむと鼻の先で笑つて、嘲つたやうに口唇を引
歪めた。

斯ういふ他の談話の間にも、女は高柳の側に倚添つて、耳を澄
まして、夫の機嫌を取り乍ら聞いて居た。見れば、美しい女の数
にも入るべき人で、殊に華麗な新婚の風俗は多くの人の目を引
いた。髪は丸鬘まるまげに結び、てがらは深紅しんくを懸け、桜色の肌理細や
かに肥えあぶらづいて、愛嬌あいけうのある口元を笑ふ度に掩ひかくす
様は、まだ世帯の苦勞などを知らない人である。さすが心の表情
は何処かに読まれるもので——大きな、ぱつちりとした眼のうち

には、何となく不安の色も顕あらはれて、熟じつと物を凝視みつめるやうな沈んだところも有つた。どうかすると、女は高柳の耳の側へ口を寄せ、何か人に知れないやうに私語さしやくことも有つた。どうかすると又、丑松の方を盗むやうに見て、『おや、彼の人は——何処かで見掛けたやうな気がする』と斯う其眼で言ふことも有つた。

同族の哀憐あはれみは、斯の美しい穢多の女を見るにつけても、丑松の胸に浮んで来た。人種さへ変りが無くば、あれ程の容姿きりやうを持ち、あれ程富有ゆたかな家に生れて来たので有るから、無論相当のところへ縁付かれる人だ——彼あ様な野心家の餌えなぞに成らなくても済すむ人だ——可愛さうに。斯う考へると同時に、丁度女も自分と同じ秘密を持つて居るかと思ひやると、どうも其処が気懸りでなら

ない。よしんば先方さきで自分を知つて居るとしたところで、其が奈ど何うした、と丑松は自分で自分に尋ねて見た。根津の人、または姫子沢のもの、と思つて居るなら自分に取つて一向恐れるところは無い。恐れるとすれば、其は反かへつて先方さきのことだ。斯う自分で答へて見た。第一、自分は四五年このかた以来、数へる程しか故郷へ歸らなかつた——卒業した時に一度——それから今度の帰省が足掛三年目——まあ、あの向町なぞは成るべく避よけて通らなかつたし、通つたところで他ひとが左様注意して見る筈も無し、見たところで何処のものだか解らない——大丈夫。斯う用心深く考へても見た。畢竟つまり自分が二人の暗い秘密を聞知つたから、それで斯う気が咎とがめるのであらう。彼様あゝして私語さゝやくのは何でも無いのであらう。避

るやうな素振そぶりは唯人目を羞はぢるのであらう。あの目付も。

とはいふものゝ、何となく不安に思ふ其懸念が絶えず心の底にあつた。丑松は高柳夫婦を見ないやうにと勉つとめた。

(四)

千曲川の瀬に乗つて下ること五里もつと。尤も、其間には、ところ／＼の舟場へも漕ぎ寄せ、洪水のある度に流れるといふ粗造な船橋の下をも潜り抜けなどして、そんなこんなで手間取れた為に、凡およそ三時間は舟旅に費かつた。飯山へ着いたのは五時近い頃。其日は舟の都合で、乗客一同上かみの渡しまで。丑松は人々と一緒に其処

から岸へ上つた。見れば雪は河原にも、船橋の上にも在つた。丁度小降のなかを暮れて、ほのしろ 灰白く雪の町々。そこにも、こゝにも、最早ちらく^{あかり}灯が点く。其時蓮華寺で撞く鐘の音が黄昏たそがれの空に響き渡る——あゝ、庄馬鹿が撞くのだ。相変らず例の鐘楼に上つて冬ひとひの一日の暮れたことを報せるのであらう。と其を聞けば、言ふに言はれぬ可なつか懐しさが湧上つて来る。丑松は久し振りで飯山の地を踏むやうな心地こゝろもちがした。

半月ばかり見ないうちに、家々は最早もとう冬ふゆごもり籠の用意、軒丈ほどの高さまいとしに毎年作りつける粗末よしずな葦簾の雪がこひが悉すつかり皆出来上つて居た。越後路と同じやうな雪国の光景ありさまは丑松の眼前めのまへに展ひらけたのである。

新町の通りへ出ると、一筋暗く踏みつけた町中の雪道を用事ありげな男をとこをんな女をんなが往つたり来たりして居た。いづれも斯この夕暮を急ぐ人々ばかり。丑松は右へ避け、左へ避けして、愛宕町あたごをさして急いで行かうとすると、不図ふと途中で一人の少年に出逢であつた。近いて見ると、それは省吾で、何か斯う酒の罋びんのやうなものを提げて、寒さうに慄ふるへ乍ながらやつて来た。

『あれ、瀬川先生。』と省吾は嬉しさうに馳寄かけよつて、『まあ、魂たま消たまげ——それでも先生の早かつたこと。私はまだく容易に帰かへりなさらないかと思ひやしたよ。』

好く言つて呉れた。斯の無邪気な少年の驚喜した顔付を眺ながめると、丑松は最早もとうあのお志保に逢ふやうな心地こころもちがしたのである。

『君は——お使かね。』

『はあ。』

と省吾は黒ずんだ色の襪を出して見せる。出して見せ乍ら、笑つた。

果して父の為に酒を買つて帰つて行くところであつた。『此こなひ頃は御手紙を難有う。』斯かう丑松は礼を述べて、一寸学校の様子を聞いた。自分が留守の間、毎日誰か代つて教へたと尋ねた。それから敬之進のことを尋ねて見た。

『父さん?』と省吾は寂さみしさうに笑つて、『あの、父さんは家に居りやすよ。』

よくよく言ひ様に窮こまつたと見えて、斯う答へたが、子供心にも

父を憐むといふ情じやうあひ合あひは其顔色に表れるのであつた。見れば省吾は足袋も穿はいて居なかつた。斯うして酒の罎しよんぼりを提げて悄しよんぼり然らとして居る少年の様子を眺めると、あの無職業な敬之進が奈何して日を送つて居るかも大凡おほよそ想像がつく。

『家へ帰つたらねえ、父さんに宜よろしく敷言つて下さい。』

と言はれて、省吾は御辞儀一つして、廳やがてぷいと駈出して行つて了つた。丑松も雪の中を急いだ。

(五)

宵よひの勤おつとめ行も終る頃で、子坊主がかんく鳴らす鉦かねの音を聞き

乍ら、丑松は蓮華寺の山門を入つた。上の渡しからは是処迄来るうちこゝまでに、もう悉すつかり皆雪だらけ。羽織の裾も、袖も真白。其と見た奥様は飛んで出て、吾子が旅からでも帰つて来たかのやうに喜んだ。人々も出て迎へた。下女の袈裟治けさぢは塵はたき払はらを取と出して、背中に附いた雪を払つて呉れる。庄馬鹿すゝぎは洗足の湯を汲んで持つて来る。疲れて、がつかりして、蔵裏くらの上あがりがまちに腰掛こしけ乍ら、雪の草鞋わらぢを解ほどいた後、温暖あたゝかい洗すぎ湯ゆの中へ足を浸した時の其丑松の心地どんなは奈何たであつたらう。唯たゞ——お志保の姿が見えないのは奈何したか。人々の情うれしくを嬉うれしく敷思ふにつけても、丑松は心に斯かう考へて、何となく其人の居いないのが物足りなかつた。

其時、白びやくえ衣えに袈裟けさを着けた一人の僧が奥の方から出て来た。

奥様のひきあはせ紹介で、丑松は始めて蓮華寺の住職を知つた。聞けば、

西京から、丑松の留守中に歸つたといふ。丁度町のだんか檀家に仏事が

有つて、これから出掛けるところとやら。住職は一寸丑松に挨拶

して、寺内の僧を供に連れて出て行つた。

ゆふはん夕飯は蔵裏の下座敷であつた。人々は丑松を取とり囲いて、旅の

つかれ疲労を言慰めたり、帰省の様子を尋ねたりした。煤けた古壁によ

せて、昔からあるといふ衣え桁には若い人の着るものなぞが無造作

に懸けてある。其晩は学校友達の婚礼とかで、お志保も招ばれて

行つたとのこと。なるほどさう成程左様言はれて見ると、其人の平常衣ふだんぎらし

い。きつかふがすり亀甲つ総まの書生羽織に、縞しまの唐たうざん棧せんを重ね、袖だゝみにし

て折り懸け、ながじゆばん長襦袢の色の紅梅を見るやうなは八やつくち口のところ

に美しくあらはれて、朝に晩に肌身に着けるものかと考へると、その壁の模様のやうに動かずにある着物が一層お志保を可懐しく思出させる。のみならず、五分心の洋燈ランプのひかりは香の煙に交る室内の空気を照らして、物の色艶などを奥床しく見せるのであつた。

さま／＼の物語が始まつた。驚き悲しむ人々を前に置いて、丑松は実地自分が歴て来た旅の出来事を語り聞かせた。種牛の為に傷けられた父の最後、番小屋で明した山の上の一夜、牧場の葬式、谷蔭の墓、其他草を食ひ塩を嘗め谷川の水を飲んで烏帽子ヶ嶽だけの麓さまよに彷徨ふ牛の群のことを話した。丑松は又、上田の屠牛場とぎうばのことを話した。其小屋の板敷の上には種牛の血汐が流れた光ありさ

景を話した。唯、蓮太郎夫婦に出逢つたこと、別れたこと、それから飯山へ帰る途中川舟に乗合した高柳夫婦——就中、あの可憐な美しい穢多の女の身の上に就いては、決して一語も口外しなかつた。

斯うして帰省中のいろ／＼を語り聞かせて居るうちに、次第に丑松は一種不思議な感想を起すやうに成つた。それは、丑松の積りでは、対手が自分の話を克く聞いて居て呉れるのだらうと思つて、熱心になつて話して居ると、どうかすると奥様の方では妙な返事をして、飛んでも無いところで『え？』なんて聞き直して、何か斯う話を聞き乍ら別の事でも考へて居るかのやうに——まあ、半分は夢中で応対をして居るのだと感づいた。終には、

が何にも自分の話を聞いて居ないのだといふことを発見みいだした。しばらく丑松は茫然ほんやりとして、穴の開くほど奥様の顔を熟視みまもつたのである。

克く見れば、奥様は両方の眶まぶちを泣腫なきはらして居る。唯さへ気の短い人が余計に感じ易く激し易く成つて居る。言ふに言はれぬ心配なことでも起つたかして、時々深い憂愁うれひの色が其顔に表はれたり隠れたりした。一体、是これは奈何どうしたのであらう。聞いて見れば留守中、別に是ぞと変つた事も無かつた様子。銀之助は親切に尋ねて呉れたといふし、文平は克よく遊びに来て話して行くといふ。それから斯の寺の方から言へば、住職が帰つたといふことより外に、何も新しい出来事は無かつたらしい。それにしても斯の内部なかの様

子の何処となく平素と違ふやうに思はれることは。

廳やがて袈裟治は二階へ上つて行つて、部屋の洋燈ランプを点けて来て呉れた。お志保はまだ歸らなかつた。

『奈何どうしたんだらう、まあ彼の奥様の様子は。』

斯う胸の中で繰返し乍ら、丑松は暗い楼はしごだん梯かへを上つた。

其晩は遅く寝た。過度の疲労に刺激されて、反かへつて能く寝就か
れなかつた。例の癖で、頭を枕につけると、またお志保のことを
思出した。尤も何程心いくらに描いて見ても、明瞭あきらかに其人が浮んだた
めしは無い。どうかすると、お妻と混ごつちや同になつて出て来ること
も有る。幾度か丑松は無駄骨折をして、お志保の梯を捜さうとし
た。瞳を、頬を、髪のかたちを——あゝ、何処を奈何どう捜して見て

も、何となく其処に其人が居るとは思はれ乍ら、それで奈何しても統まとまり一が着かない。時としては彼のあのつつましさに物言ふ声を、時としては彼のくちびるの口唇にあらはれる若々しい微笑を——あゝ、あゝ、記憶ほど漠ほんやり然したものは無い。今、思ひ出す。今、消えて了ふ。丑松は顕はつきり然と其人を思ひ浮べることが出来なかつた。

第拾参章

(一)

『御頼申します。』

蓮華寺の蔵裏へ来て、斯う言ひ入れた一人の紳士がある。それは丑松が帰つた翌朝のこと。階下では最早疾に朝飯を済まして了つたのに、未だ丑松は二階から顔を洗ひに下りて来なかつた。『御頼申します。』と復た呼ぶので、下女の袈裟治は其を聞きつけて、周章て、台処の方から飛んで出て来た。

『一寸伺ひますが、』と紳士は至極丁寧な調子で、『瀬川さんの御宿は是方様でせうか——小学校へ御出なさる瀬川さんの御宿は。』

『左様でやすよ。』と下女は襷を脱し乍ら挨拶した。

『何ですか、御在宿で御座ますか。』

『はあ、居なさりやす。』

『では、是非御目に懸りたいことが有まして、斯ういふものが伺ひましたと、何卒左様仰つて下さい。』

と言つて、紳士は下女に名刺を渡す。下女は其を受取つて、

『一寸、御待ちなすつて』を言捨て乍ら、二階の部屋へと急いだ。

丑松は未だ寢床を離れなかつた。下女が枕頭へ来て喚起

した時は、客の有るといふことを半分夢中で聞いて、苦しきうに

呻吟つたり、手を延ばしたりした。聽て寢惚眼を擦りく名刺

を眺めると、急に驚いたやうに、むつくり跳ね起きた。

『奈何したの、斯人が。』

『貴方を尋ねて来なさりやしたよ。』

暫時しばらくの間、丑松は夢のやうに、手に持った名刺と下女の顔とを見比べて居た。

『斯人は僕のところへ来たんぢや無いんだらう。』
と不審を打つて、幾度か小首を傾かしげる。

『高柳利三郎？』

と復また繰返した。袈裟治は襷たすきを手に持つて、一寸小肥りな身からだ体を動ゆつて、早く返事を、と言つたやうな顔付。

『何か間違ひぢやないか。』到頭丑松は斯う言出した。『どうも、斯こん様な人が僕のところへ尋ねて来る筈はずが無い。』

『だつて、瀬川さんと言つて尋ねて来なすつたもの——小学校へ御出なさる瀬川さんと言つて。』

『妙なことが有ればあるもんだなあ。高柳——高柳利三郎——彼の男が僕のところへ——何の用が有つて来たんだらう。兎も角も逢つて見るか。それぢやあ、御上りなさいツて、左様言つて下さい。』

『それはさうと、御飯は奈何しやせう。』

『御飯?』

『あれ、貴方は起きなすつたばかりぢやごはせんか。階下で食ばなすつたら? 御味噌汁も温めてありやすにサ。』

『廃さう。今朝は食べたく無い。それよりは客を下の座敷へ通して、一寸待たして置いて下さい——今、直に斯部屋を片付けるから。』

袈裟治は下りて行つた。急に丑松は部屋の内を眺め廻した。着物を着更へるやら、寝道具を片付けるやら。そこいらに散乱つたものは皆な押入の内へ。床の間に置並べた書籍の中には、蓮太郎のものも有る。手捷てばしこく其を机の下へ押込んで見たが、また取出して、押入の内の暗い隅の方へ隠蔽かくすやうにした。今は斯この部屋の内にあの先輩の書いたものは一冊も出て居ない。斯う考へて、すこし安心して、さて顔を洗ふつもりで、急いで楼梯はしごだんを下りた。それにしても何の用事があつて、彼あ様な男が尋ねて来たらう。途中で一緒に成つてすら言葉も掛けず、見れば成る可く是方こちらを避けようとした人。其人がわざくやつて来るとは——丑松は客を自分の部屋へ通さない前から、疑心うたがひと恐怖おそれとで慄ふるへたのである。

(一)

『始めまして——私は高柳利三郎です。かねて御名前は承つて居りましたが、つい未だ御尋ねするやうな機会も無かつたものですから。』

『好く御入来下さいました。さあ、何卒まあ是方へ。』

斯ういふ挨拶を蔵裏の下座敷で取交して、やがて丑松は二階の部屋の方へ客を導いて行つた。

突然な斯の来客の底意の程も図りかね、相對に座る前から、もう何となく氣不味かつた。丑松はすこしも油断することが出来

なかつた。とは言ふものゝ、何気ない様子を装つて、自分は座蒲団を敷いて座り、客には白い毛布を四つ畳みにして薦めた。

『まあ、御敷下さい。』と丑松は快濶らしく、『どうも失礼しました。実は昨晩遅かつたものですから、寝過して了ひまして。』

『いや、私こそ——御疲労のところへ。』と高柳は如才ない調子で言つた。『昨日は舟の中で御一緒に成ました時に、何とか御挨拶を申上げようか、申上げなければ済まないが、と斯う存じましたのですが、あんな処で御挨拶しますのも反つて失礼と存じまして——御見懸け申し乍ら、つい御無礼を。』

丁度取引でも為るやうな風に、高柳は話し出した。しかし、愛嬌のある、明白した物の言振は、何処かに人をけるところ

が無いでもない。隆とした其風采なりふりを眺めたばかりでも、いかに斯の新進の政事家が虚栄心の為に燃えて居るかを想おもひ起おこさせる。角帯に纏ひつけた時計の鎖は富豪の身を飾ると同じやうなもの。それに指輪は二つまで嵌はめて、いづれも純金の色に光り輝いた。

『何の為に尋ねて来たのだらう、是男は。』と斯う丑松は心に繰返して、相手の暗い秘密を自分の身に思比べた時は、長く目と目を見合せることも出来ない位。

高柳は膝を進めて、

『承りますれば御不幸が御有なすつたさうですな。さぞ御力落しでいらつしやいませう。』

『はい。』と丑松は自分の手を眺め乍ら答へた。『飛んだ災難に

遭遇であひまして、到頭おやぢ阿爺も亡なくなりました。』

『それは奈何どうも御氣の毒なことを。』と言つて、急に高柳は思ひついたやうに、『むゝ、左様さう々々、此頃こなひだも貴方と豊野の停車ステーション場ヨシで御一緒に成つて、それから私が田中で下りる、貴方も御下りなさる——左様でしたらう、ホラ貴方も田中で御下りなさる。丁度彼の時が御帰省の途中だつたんでせう。して見ると、貴方と私とは、往きも、還りも御一緒——はゝゝゝ。何か斯よう克よくゝの因縁いんねんづくとも、まあ、申して見たいぢや有ませんか。』

丑松は答へなかつた。

『そこです。』と高柳は言葉に力を入れて、『御縁が有ると思へばこそ、斯かうして御話も申上げるのですが——実は、貴方の御心

情に就きましても、御察し申して居ることも有ますし。』

『え?』と丑松は対手あひての言葉を遮さへぎつた。

『そりやあもう御察し申して居ることも有ますし、又、私の方から言ひましても、少許すこしは察して頂きたいと思ひまして、それで御邪魔に出ましたやうな訳なんで。』

『どうも貴方の仰おつしやることは私に能く解りません。』

『まあ、聞いて下さい——』

『ですけれど、どうも貴方の御話の意味が汲取れないんですから。』

『そこを察して頂きたいと言ふのです。』と言つて、高柳は一段声を低くして、『御聞及びでも御座ございませうが、私も——世話して

呉れるものが有まして——家内を迎へました。まあ、世の中には妙なことが有るもので、あの家内の奴が好く貴方を御知り申して居るのです。』

『はゝゝゝ、奥おく様が私を御存じなんですか。』と言つて丑松は少許すこし調子を変へて、『しかし、それが奈何どうしました。』

『ですから私も御話に出ましたやうな訳なんで。』

『と仰ると?』

『まあ、家内なぞの言ふことですから、何が何だか解りませんけれど——實際、女の話といふものは取留の無いやうなものですからなあ——しかし、不思議なことには、彼奴あいつの家の遠い親類うちに当るものとかが、貴方の阿爺おとつさんと昔御懇意であつたとか。』斯かう

言つて、高柳は熱心に丑松の様子を窺ふやうにして見て、『いや、其様なことは、まあ奈何でもいゝと致しまして、家内が貴方を御知り申して居ると言ひましたら、貴方だつても御聞流しには出来ません、私も亦た私で、どうも不安心に思ふことが有るものですから——実は、昨晩は、その事を考へて、一睡も致しませんでした。』

暫時部屋の内には声が無かつた。二人は互ひに搜りを入れるやうな目付して、無言の儘で相對して居たのである。

『噫。』と高柳は投げるやうに嘆息した。『斯様な御話を申し上げるに参るといふのは、克くく〜だと思つて頂きたいのです。貴方より外に吾儕夫婦のことを知つてるものは無し、又、吾儕夫婦より

外に貴方のことを知つてるものは有ません——ですから、そこは御互ひ様に——まあ、瀬川さん左様ぢや有ませんか。』と言つて、すこし調子を変へて、『御承知の通り、選挙も近いてまゐりました。どうしても此際こゝのところでは貴方に助けて頂かなければならぬ。もし私の言ふことを聞いて下さらないとすれば、私は今、こゝで貴方と刺しちがへて死にます——はゝゝゝゝ、まさか貴方の性命いのちを頂くとも申しませんがね、まあ、私は其程の決心で参つたのです。』

(三)

其時、樓梯はしごだんを上つて来る人の足音がしたので、急に高柳は口を噤つぶんで了しまつた。『瀬川先生、御客様おきやくさんでやすよ。』と呼ぶ袈裟治の声を聞きつけて、ついと丑松は座を離れた。唐紙を開けて見ると、もうそこへ友達が微笑み乍ら立つて居たのである。

『おゝ、土屋君か。』

と思はず丑松は溜息を吐いた。

銀之助は一寸高柳に会あひ釈しゃくして、別に左様さやう主客の様子を気に留めるでもなく、何か用事でも有るのだらう位に、例の早合点から独り定めに定めて、

『昨夜君は帰つて来たさうだね。』

と慣なれ々々しい調子で話し出した。相変らず快活なは斯の人。そ

れに遠からず今の勤務を廃めて、農科大学の助手として出掛けるといふ、その希望が胸の中に溢れるかして、血肥りのした顔の面は一層活々と輝いた。妙なもので、短く五分刈にして居る散髪頭が反つて若い学者らしい威厳を加へたやうに見える。友達ながら一段の難有みが出来た。丑松は何となく圧倒れるやうにも感じたのである。

心の底から思ひやる深い真情を外に流露して、銀之助は弔辞を述べた。高柳は煙草を燻しく黙つて二人の談話を聞いて居た。『留守中はいろく難有う。』と丑松は自分で自分を激厲ますやうにして、『学校の方も君がやつて呉れたさうだねえ。』

『あゝ、左にか右にか間に合せて置いた。二級懸持ちといふやつ

は巧くいかないものでねえ。』と言つて、銀之助は恰も心から出たやうに笑つて、『時に、君は奈何する。』

『奈何するとは？』

『親の忌服だもの、四週間位は休ませて貰ふサ。』

『左様もいかない。学校の方だつて都合があらあね。第一、君が迷惑する。』

『なに、僕の方は関はないよ。』

『明日は月曜だねえ。兎に角明日は出掛けよう。それはさうと、土屋君、いよゝ君の希望も達したといふぢやないか。君から彼手紙を貰つた時は、実に嬉しかった。彼様に早く進行らうとは思はなかつた。』

『ふゝ、』と銀之助は思出し笑ひをして、『まあ、御蔭でうまくいった。』

『實際うまくいったよ。』と友達の成功を悦ぶ傍から、丑松は何か思ひついたやうに萎れて、『県庁の方からは最早辞令が下つたかね。』

『いゝや、辞令は未だ。尤も義務年限といふやつが有るんだから、ただ廃めて行く訳にはいかない。そこは県庁でも余程斟酌して呉れてね、百円足らずの金を納めろと言ふのさ。』

『百円足らず?』

『よしんば在学中の費用を皆な出せと言はれたつて仕方が無い。其位のことかんべんで勤免して呉れたのは、実に難有い。早速阿爺おやぢの方

へ請求^{ねだ}つてやつたら、阿爺も君、非常に喜んでね、自身で長野迄出掛けて来るさうだ。いづれ、其内には沙汰があるだらうと思ふよ。まあ、君と斯^かうして飯山に居るのも、今月一ぱい位のものだ。
』

斯う言つて銀之助は今更のやうに丑松の顔を眺めた。丑松は深い溜息を吐^ついて居た。

『別の話だが、』と銀之助は言葉を継^ついで、『君の好きな猪子先生——ホラ、あの先生が信州へ来てるさうだねえ。昨日僕は新聞で読んだ。』

『新聞で?』丑松の頬は燃え輝いたのである。

『あゝ、信毎に出て居た。肺病だといふけれど、熾^{さかん}盛な元気の人

だねえ。』

と蓮太郎の噂うはさが出たので、急に高柳は鋭い眸ひとみを銀之助の方へ注いだ。丑松は無言であつた。

『穢多もなかく馬鹿にならんよ。』と銀之助は頓着なく、『まあ、思想かんがへから言へば、多少病的かも知れないが、しかし進んで戦ふ彼の勇氣には感服する。一体、肺病患者といふものは彼様あいふものか知らん。彼の先生の演説を聞くと、非常に打たれるさうだ。』と言つて気を変へて、『まあ、瀬川君などは聞かない方が可いよ——聞けば復た病氣まが発おこるに極きまつてるから。』

『馬鹿言ひたまへ。』

『あはゝゝゝ。』

と銀之助は反返そりかへつて笑つた。

遽にはかに然丑松は黙つて了つた。丁度、喪心した人のやうに成つた。

丁度、身体中の機関だうぐが一時に動作はたらきを止めて、斯うして生きて居ることすら忘れたかのやうであつた。

『奈何したんだらう、また瀬川君は——相変らず身体の具合でも悪いのかしら。』と斯う銀之助は自分で自分に言つて見た。やゝしばらく三人は無言の儘で相對して居た。『今日は僕は是で失敬する。』と銀之助が言出した時は、丑松も我に歸つて、『まあ、いゝぢやないか』を繰返したのである。

『いや、復また来る。』

銀之助は出て行つて了つた。

(四)

『只今猪子といふ方の御話が出ましたが、』と高柳は巻煙草の灰を落とし乍ら言つた。『あの、何ですか、瀬川さんは彼の方と御懇意でいらつしやるんですか。』

『いゝえ。』と丑松はすこし言淀んで、『別に、懇意でも有ません。』

『では、何か御関係が御有なさるんですか。』

『何も関係は有ません。』

『左様ですか——』

『だつて関係の有やうが無いぢやありませんか、懇意でも何でも無い人に。』

『左様仰れば、まあ、そんなものですけれど。はゝゝゝ。彼の方は市村君と御一緒のやうですから、奈何いふ御縁故か、もし貴方が御存じならば伺つて見たいと思ひまして。』

『知りません、私は。』

『市村といふ弁護士も、あれでなか／＼食へない男なんです。彼様な立派なことを言つて居ましても、畢竟猪子といふ人を抱きこんで、道具に使用ふといふ腹に相違ないんです。彼の男が高尚らしいやうなことを言ふかと思ふと、私は嘔飯したくなる。そりやあもう、政事屋なんてものは皆な穢きたない商売人ですからなあ——ま

あ、其道のもので無ければ、可厭いやな内幕も克よく解りますまいけれど。』

斯う言つて、高柳は嘆息して、

『私とても、斯うして何時まで政界に泳いで居る積りは無いのです。一日も早く足を洗ひたいといふ考へでは有るのです。如何いかんせん、素養は無し、貴方あなたがた等のやうに規則的な教育を享うけたでは無し、それで此の生存競争の社よのなか会に立たうといふのですから、勢ひ常道を踏んでは居られなくなる。あるひは、貴方等の目から御覧に成つたらば、吾儕わたしたちの事業は華麗しごとでせう。成程なるほど、表面うはべは華麗です。しかし、これほど表面が華麗で、裏面うらの悲惨な生しやう涯がいは他に有ませうか。あゝ、非常な財産が有つて、道楽に政事でもや

つて見ようといふ人は格別、吾儕のやうに政事熱に浮かされて、青年時代から其方へ飛込んで了つたものは、今となつて見ると最も早奈何することも出来ません。第一、今日の政事家で政論に衣食するものが幾人ありませう。實際吾儕の内幕は御話にならない。まあ、斯様なことを申上げたら、嘘のやうだと思召すかも知れませんが、正直な御話が——代議士にでもして頂くより外に、さしあたり吾儕の食ふ道は無いのです。はゝゝゝ。何と申したつて、事實は事實ですから情ない。もし私が今度の選挙に失敗すれば、最早につちもさつちもいかなくなる。どうしても此際のところでは出るやうにして頂かなければならない。どうしても貴方に助けて頂かなければならない。それには先づ貴方に御継り申して、家

内のことを世間の人に御話下さらないやうに。そのかはり、私も亦また、貴方のことを——それ、そこは御相談で、御互様に言はないといふやうなことに——何卒どうか、まあ、私を救ふと思おぼしめ召して、是このはなし話を聞いて頂きたいのです。瀬川さん、是は私が一生の御願ひです。』

急に高柳は白い毛布を離れて、畳の上へ手を突いた。丁度哀あはれ憐みをもとめる犬のやうに、丑松の前に平身低頭したのである。

丑松はすこし蒼あをぞめて、

『どうも左様貴方のやうに、独りで物を断きめて了しまつては——』

『いや、是非とも私を助けると思召して。』

『まあ、私の言ふことも聞いて下さい。どうも貴方の御話は私に

合点がてんが行きません。だつて、左様さうぢや有ますまいか。なにも貴あなた方がた等のことを私が世間の人に話す必要も無いぢや有ませんか。

全く、私は貴方等と何の関係も無い人間なんですから。』

『でも御座ごぞいませうが——』

『いえ、其では困ります。何も私は貴方等を御助け申すやうなことは無し、私は亦また、貴方等から助けて頂くやうなことも無いのですから。』

『では?』

『ではとは?』

『畢竟つまりそんなら奈何して下さるといふ御考へなんですか。』

『どうするも斯かうするも無いぢや有ませんか。貴方と私とは全く

無関係——は、は、は、は、御話は其丈それだけです。』

『無関係と仰ると?』

『是迄これまでだつて、私は貴方のことに就いて、何も世間の人に話した覚は無し、是から将来さきだつても矢張りやはり其通り、何も話す必要は有ません。一体、私は左様他人ひとのことを喋舌しゃべるのが嫌ひです——まして、貴方とは今日始めて御目に懸つたばかりで——』

『そりやあ成程、私のことを御話し下さる必要は無いかも知れません。私も貴方のことを他人ひとに言ふ必要は無いのです。必要は無いのですが——どうも其では何となく物足りないやうな心地こころもちが致しまして。折角せつかく私も斯うして出ましたものですから、十分に御意見を伺つた上で、御為に成るものなら成りたいと存じて居りま

すのです。実は——左様した方が、貴方の御為かとも。』

『いや、御親切は誠に難有いですが、其様そんなにして頂く覚は無いのですから。』

『しかし、私が斯うして御話に出ましたら、万まんざら更貴方だつて思当ることが無くも御座いひやいますまい。』

『それが貴方の誤解です。』

『誤解でせうか——誤解と仰ることが出来ませうか。』

『だつて、私は何も知らなんにないんですから。』

『まあ、左様さう仰れば其迄ですが——でも、何とか、そのところは御相談の為やうが有さうなもの。悪いことは申しません。御互ひの身の為です。決して誰の為でも無いのです。瀬川さん——い

づれ復またた私も御邪魔ごじゃまに伺まをひますから、何卒どうか克よくく考かんがへて御置ごしきなす
つて下さい。』

第拾四章

(一)

月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。応接室の側の一間を自分の室と定めて、毎朝授業の始まる前には、必ず其処とちこに閉籠とちこもるのが癖。それは一日の事務の準備したくをする為でもあつたが、又一つ

には職員等たちの不平と煙草の臭気におひとを避ける為で。丁度其朝は丑松も久し振の出勤。校長は丑松に逢つて、忌服中のことを尋ねたり、話したりして、廳てまた例の室に閉籠つた。

この室の戸を叩くものが有る。其音で、直に校長は勝野文平といふことを知つた。いつも斯ういふ風にして、校長は斯この鍾きに愛いりの教員から、さま／＼の秘密な報告を聞くのである。男教員の述懐、女教員の蔭口、其他時間割と月給とに関する五月蠅うるさいほどの嫉ねたみと争ひとは、是処こゝに居て手に取るやうに解るのである。其朝も亦、何か新しい注進もたらを齎して来たのであらう、斯う思ひ乍ら、校長は文平を室の内へ導いたのであつた。

いつの間にか二人は丑松うはさの噂うはさを始めた。

『勝野君。』と校長は声を低くして、『君は今、妙なことを言つたね——何か瀬川君のことに就いて新しい事実を発見したとか言つたね。』

『はあ。』と文平は微笑ほくそんで見せる。

『どうも君の話は解りにくくて困るよ。何時でも遠廻しに匂はせてばかり居るから。』

『だつて、校長先生、人の一生の名誉かに關かはるやうなことを、左様迂濶ううくわつには喋舌しゃべれないぢや有ませんか。』

『ホウ、一生の名誉に？』

『まあ、私の聞いたのが事実だとして、其が斯の町へ知れ渡つたら、恐らく瀬川君は学校に居られなくなるでせうよ。学校に居ら

れないばかりぢや無い、あるひは社会から放逐されて、二度と世に立つことが出来なくなるかも知れません。』

『へえ——学校にも居られなくなる、社会からも放逐される、と言へば君、非常なことだ。それでは宛然死刑を宣告されるも同じだ。』

『先づ左様言つたやうなものでせうよ。尤も、私が直接に突留めたといふ訳でも無いのですが、種々なことを綜めて考へて見ますと——ふふ。』

『ふゝぢや解らないねえ。奈何な新しい事実か、まあ話して聞かせて呉れ給へ。』

『しかし、校長先生、私から其様な話が出たといふことになりま

すと、すこし私も迷惑します。』

『^{なぜ}何故?』

『何故ツて、左様ぢや有ませんか。私が取つて代りたい為に、其様なことを言ひ触らしたと思はれても厭ですから——毛頭私は其様な野心が無いんですから——なにも瀬川君を中傷する為に、御話するのでは無いんですから。』

『解つてますよ、其様なことは。誰が君、其様なことを言ふもんですか。其様な心配が要るもんですか。君だつても他の人から聞いたことなんでせう——それ、見たまへ。』

文平が思はせ振な様子をして、何か意味ありげに微笑めば微笑むほど、余計に校長は聞かずに居られなくなつた。

『では、勝野君、斯ういふことにしたら可いでせう。我輩は其話を君から聞かない分にして置いたら可いでせう。さ、誰も居ませんから、話して聞かせて呉れ給へ。』

斯う言つて、校長は一寸文平に耳を貸した。文平が口を寄せて、何か私語ささやいて聞かせた時は、見る／＼校長も顔色を変へて了しまつた。急に戸を叩く音がする。ついと文平は校長の側を離れて窓の方へ行つた。戸を開けて入つて来たのは丑松で、入るや否や思はず一ひとあしとあしあらずあらずさり歩歩 逡巡逡巡した。

『何を話して居たのだらう、斯この二人は。』と丑松は猜疑うたぐりぶか深い目付をして、二人の様子を怪まずには居られなかつたのである。

『校長先生、』と丑松は何気なく尋ねて見た。『どうでせう、今

日はすこし遅く始めましたら。』

『左様——生徒は未だ集りませんか。』と校長は懐中時計を取出して眺める。

『どうも思ふやうに集りません。何を言つても、是雪ですから。』
 『しかし、最早時間は来ました。生徒の集る、集らないは兎に角、規則といふものが第一です。何卒小使に左様言つて、鈴を鳴らさせて下さい。』

(二)

其朝ほど無思想な状態ありさまで居たことは、今迄丑松の経験にも無

いのであつた。實際其朝は半分眠り乍ら羽織袴を着けて来た。奥様が詰て呉れた弁当を提げて、久し振で学校の方へ雪道を辿つた時も、多くの教員仲間から弔辞くやみを受けた時も、受持の高等四年生とりまに取囲かれて種々なこといろいろを尋ねられた時も、丑松は半分眠り乍ら話した。授業が始つてからも、時々眼前めのまへの事物ことに興味を失つて、器械のやうに読本の講釈をして聞かせたり、生徒の質問に答へたりした。其日は遊戯の時間の監督にあたる日、鈴が鳴つて休みに成る度に、男女の生徒は四方から丑松に取とりすが纏つて、『先生、先生』と呼んだり叫んだりしたが、何を話して何を答へたやら、殆んど其感覚が無かつた位。丑松は夢見る人のやうに歩いて、あちこちと馳せちがふ多くの生徒の監督をした。

銀之助が駈寄つて、

『瀬川君——君は気分でも悪いと見えるね。』

と言つたのは覚えて居るが、其他の話はすべて記憶に残らなかつた。

斯^かういふ中にも、唯一つ、あの省吾に呉れたいと思つて、用意したものを持つて来ることだけは忘れなかつた。昼休みには、高等科から尋常科までの生徒が学校の内で飛んだり跳ねたりして騒いだ。なかには広い運動場に出て、雪投げをして遊ぶものもあつた。丁度高等四年の教室には誰も居なかつたので、そこへ丑松は省吾を連れて行つて、新聞紙に包んだものを取出して見せて、

『君に呈^あげようと思つて斯ういふものを持つて来ました。帳面で

す、内に入つてゐるのは。是は君、家へ歸つてから開けて見るんですよ。いいかね。学校の内で開けて見るんぢや無いんですよ——
ね、是を君に呈げますから。』

と言つて、丑松は自分の前に立つ少年の驚き喜ぶ顔を見たいと思ふのであつた。意外にも省吾は斯の贈物を受けなかつた。唯もう目を円まるくして、丑松の様子と新聞紙の包とを見比べるばかり。奈何どうして斯様こんなものを呉れるのであらう。第一、それからして不思議でならない。と言つたやうな顔付。

『いゝえ、私は沢山です。』

と省吾は幾度か辞退した。

『其様そんな、君のやうな——』と丑松は省吾の顔を眺めて、『人が

呈^あげるツて言ふものは、貰ふもんですよ。』

『はい、難有う。』と復た省吾は辞退した。

『困るぢやないか、君、折^{せつかく}角呈^あげようと思つて斯うして持つて来たものを。』

『でも、母さんに叱られやす。』

『母さんに？ 其様な馬鹿なことが有るもんか。私が呈^あげるツて言ふのに、叱るなんて——私は君の父^{おとつ}上さんとも懇意だし、それに、君の姉さんには種^{いろく}々御世話に成つて居るし、此^{こなひだ}頃から呈^あげようくと思つて居たんです。ホラ、よく西洋綴の帳面で、罫の引いたのが有ませう。あれですよ、斯の内に入つてるのは。まあ、君、其^{そん}様なことを言はないで、是を家へ持つて歸つて、作文でも

何でも君の好きなものを書いて見て呉れたまへ。』

斯う言つて、其を省吾の手に持たして居るところへ、急に窓の方で上草履の音が起る。丑松は省吾を其処に残して置いて、周章あわて、教室を出て了つた。

(三)

東の廊下の突当り、二階へ通ふやうになつて居る階段のところは、あまり生徒もやつて来なかつた。丑松が男女の少年の監督に忙せはしい間に、校長と文平の二人は斯この静かな廊下で話した——並んで灰色の壁に倚より凭かゝり乍ながら話した。

『一体、君は誰から瀬川君のことを聞いて来たのかね。』と校長は尋ねて見た。

『妙な人から聞いて来ました。』と文平は笑つて、『実に妙な人から——』

『どうも我輩には見当がつかない。』

『尤も、人の名誉にも関はることだから、話だけは為るが、名前を出して呉れては困る、と先方さきの人も言ふんです。兎に角かく代議士にでも成らうといふ位の人物ですから、其様な無責任なことを言ふ筈はずも有ません。』

『代議士にでも？』

『ホラ。』

『ぢやあ、あの新しい細君を連れて帰つて来た人ぢや有ませんか。』

『まあ、そこいらです。』

『して見ると——は、あ、あの先生が地方廻りでもして居る間に、何処かで其様な話を聞込んで来たものかしら。悪い事は出来ないものさねえ。いつか一度は露^{あらは}顯れる時が来るから奇体さ。』と言つて、校長は嘆息して、『しかし、驚ろいたねえ。瀬川君が穢多だなどとは、夢にも思はなかつた。』

『實際、私も意外でした。』

『見給へ、彼の容^あ貌^{ようぼう}を。皮膚といひ、骨格といひ、別に其様な賤民らしいところが有るとも思はれないぢやないか。』

『ですから世間の人^{だま}が欺されて居たんでせう。』

『左様ですかねえ。解らないものさねえ。一寸見たところでは、奈何^{どう}しても其様な風に受取れないがねえ。』

『容貌ほど人を欺すものは有ませんさ。そんなら、奈何でせう、彼^あの性質は。』

『性質だつても君、其様な判断は下せない。』

『では、校長先生、彼の君の言ふこと^なが為すことが貴方の眼には不思議にも映りませんか。克^よく注意して、瀬川丑松といふ人を御覧なさい——どうでせう、彼^あの物を視る猜疑^{うたがひぶか}深い目付なぞは。』

『はゝゝゝ、猜疑深いからと言つて、其が穢多の証拠には成らないやね。』

『まあ、聞いて下さい。此頃迄こなひだまで瀬川君は鷹匠たかしやう町の下宿に居ましたらう。彼のあ下宿で穢多の大尽が放逐されましたらう。すると瀬川君は突だしぬけ然に蓮華寺へ引越して了ひましたらう——ホラ、をかしいぢや有ませんか。』

『それさ、それを我輩も思ふのさ。』

『猪子蓮太郎との関係だつても左様さうでせう。彼様あんな病的な思想家ばかり難ありがた有く思はないだつて、他にいくらも有さうなものぢや有ませんか。彼様な穢多の書いたものばかり特に大騒ぎしなくても好きさうなものぢや有ませんか。どうも瀬川君が鼻顧ひいきの仕方は普通の愛読者と少許すこし違ふぢや有ませんか。』

『そこだ。』

『未だ校長先生には御話しませんでしたが、小諸こもろの与良よらといふ町には私の叔父が住んで居ます。其町はづれに蛇堀川じやぼりがはといふ沙すなが河はが有まして、橋を渡ると向町になる——そこが所謂いはゆる穢多町です。叔父の話によりますと、彼処は全町同じ苗字を名乗つて居るといふことでしたツけ。其苗字が、確か瀬川でしたツけ。』

『成程ねえ。』

『今でも向町の手合は苗字を呼びません。普通に新平民といへば名前を呼捨です。おそらく明治になる前は、苗字などは無かつたのでせう。それで、戸籍を作るといふ時になつて、一村いそぞ拳つて瀬川と成つたんぢや有るまいかと思ふんです。』

『一寸待ちたまへ。瀬川君は小諸の人ぢや無いでせう。』

小ちひさ 県がた

の根津の人でせう。』

『それが宛あてになりやしません——兎に角、瀬川とか高橋とかいふ苗字が彼の仲間あに多いといふことは叔父から聞きました。』

『左様言はれて見ると、我輩も思当ることが無いでも無い。しかしねえ、もし其が事実だとすれば、今迄知れずに居る筈も無からうぢやないか。最早疾もに知れて居さうなものだ——師範校もに居る時代に、最早知れて居さうなものだ。』

『でせう——それぞれが瀬川君です。今こんにち日まで人の目を暗くらして来た位の智慧ちゑが有るんですもの、余程狡かうくわつ猾わつの人間で無ければ彼の真似あは出来やしません。』

『あゝ。』と校長は嘆息して了つた。『それにしても、よく知れ

ずに居たものさ、どうも瀬川君の様子がをかしい〜と思つたよ
——唯、訳も無しに、彼様考へ込む筈はずが無いからねえ。』

急に大鈴の音が響き渡つた。二人は壁を離れて、長い廊下を歩
き出した。午後の課業が始まると見え、男女の生徒は上草履鳴ら
して、廊下の向ふのところを急いで通る。丑松も少年の群に交り
乍ら、一寸是方こちらを振向いて見て行つた。

『勝野君。』と校長は丑松の姿を見送つて、『成程なるほど、君の言つ
た通りだ。他の一生ひとの名誉にも関はることだ。まあ、もうすこし
瀬川君の秘密を探つて見ることにし為ようぢやないか。』

『しかし、校長先生。』と文平は力を入れて言つた。『是話ひとが彼
の代議士の候補者から出たといふことだけは決して他に言はない

で置いて下さい——さもないと、私が非常に迷惑しますから。』

『無論さ。』

(四)

時間表によると、其日の最終をばりの課業が唱歌であつた。唱歌の教師は丑松から高等四年の生徒を受取つて、足拍子揃へさして、自分の教室の方へ導いて行つた。二時から三時まで、それだけは丑松も自由であつたので、不図、蓮太郎のことが書いてあつたとかいふ昨日の銀之助の話を思出して、応接室を指して急いで行つた。いつも其机の上には新聞が置いてある。戸を開けて入つて見ると、

信毎は一昨日の分も残つて、まだ綴込みもせずとりちらに散乱した儘。その読みふるしを開けた第二面の下のところに、彼の先輩のことを見つけた時は、奈何どんなに丑松も胸を踊らせて、『むゝ——あつた、あつた』と驚き喜んだらう。

『何処へ行つて是新聞このを読まう。』先づ心に浮んだは斯うである。『斯の応接室で読まうか。人が来ると不可いけない。教室が可か。小使部屋が可か——否、彼処へも人が来ないとは限らない。』と思ひ迷つて、新聞紙を懐に入れて、応接室を出た。『いつそ二階の講堂へ行つて読め。』斯う考へて、丑松は二階へ通ふ階段を一階づゝ音のしないやうに上つた。

そこは天長節の式場に用ひられた大広間、長い腰掛が順序よく

置並べてあるばかり、平素はもう森閑しんかんとしたもので、下手な教室の隅なぞよりは反つて安全な場処のやうに思はれた。とある腰掛えらを扱えらんで、懐から取出して読んで居るうちに、いつの間にか彼の高柳との問答——『懇意でも有ません、関係は有ません、何にも私は知りません』と三度迄も心を偽つて、師とも頼み恩人とも思ふ彼の蓮太郎と自分とは、全く、赤の他人のやうに言消して了つたことを思出した。『先生、許して下さい。』斯かう詫わびるやうに言つて、臆やがて復また新聞を取上げた。

漠然ぼくぜんとした恐怖おそれの情は絶えず丑松の心を刺激して、先輩に就いての記事を読み乍らも、唯もう自分の一生のことばかり考へつゞけたのであつた。其から其へと辿つて反省すると、丑松は今、容

易ならぬ位置に立つて居るといふことを感ずる。さしかゝつた斯の大きな問題を何とか為なければ——左様だ、何とか斯の思想を纏めなければ、一切の他の事は手にも着かないやうに思はれた。『さて——奈何する。』

斯う自分で自分に尋ねた時は、丑松はもう茫然として了つて、其答を考へることが出来なかつた。

『瀬川君、何を君は御読みですか。』

と唐突に背後から声を掛けた人がある。思はず丑松は顔色を変へた。見れば校長で、何か穿鑿を入れるやうな目付して、何時の間にか腰掛のところへ来て佇立んで居た。

『今——新聞を読んで居たところですか。』と丑松は何気ない様子

を取とり装つくろつて言つた。

『新聞を?』と校長は不思議さうに丑松の顔を眺めて、『へえ、何か面白い記事ことでも有ますかね。』

『ナニ、何でも無いんです。』

暫時しばらく二人は無言であつた。校長は窓の方へ行つて、玻璃ガラス越しに空の模様を覗のぞいて見て、

『瀬川君、奈何でせう、斯の御天気は。』

『左様ですなあ——』

斯ういふ言葉を取交し乍ら、二人は一緒に講堂を出た。並んで階段を下りる間にも、何となく丑松は胸騒ぎがして、言ふに言はれぬ不快こころもちな心地こころもちに成るのであつた。

邪推かは知らないが、どうも斯この校長の態度しむけが変つた。妙に冷淡らしく成つた。いや、冷淡しいばかりでは無い、可厭いやに神経質な鼻でもつて、自分の隠して居る秘密を嗅ぐかのやうにも感ぜらるゝ。『や?』と猜疑うたぐりぶか深い心で先方さきの様子を推量して見ると、さあ、丑松は斯の校長と一緒に並んで歩くことすら堪へ難い。どうかすると階段を下りる拍子に、二人の肩と肩とが触合すれあふこともある。冷つめたみふるひい戦慄は丑松の身体を通して流れ下るのであつた。

小使が振鳴らす最終をよりの鈴の音は、其時、校内に響き渡つた。そここの教室の戸を開けて、後から／＼押して出て来る少年の群は、長い廊下に満ち溢あふれた。丑松は校長の側を離れて、急いで斯の少年の群に交つた。

やがて生徒は雪道の中を帰つて行つた。いづれも学問する児童^{こども}らしい顔付の殊勝さ。弁当箱を振廻して行くもあれば、風呂敷包を頭の上に戴^のせて行くもある。十露盤^{そろばん}小脇^かに擁^かへ、上草履提げ、口笛を吹くやら、唱歌を歌ふやら。呼ぶ声、叫ぶ声は、犬の鳴声に交つて、午後^ごの空氣に響いて騒しく聞える、中には下駄の鼻緒を切らして、素足で飛んで行く女の児もあつた。

不安と恐怖との念^{おもひ}を抱き乍ら、丑松も生徒の後に随いて、学校の門を出た。斯^かうしてこの無邪気な少年の群を眺めるといふことが、既にもう丑松の身^みに取つては堪へがたい身の苦痛^{くるしみ}を感じずる媒^なとも成るので有る。

『省吾さん、今御帰り？』

斯う丑松は言葉を掛けた。

『はあ。』と省吾は笑つて、『私も後刻わしあとで蓮華寺へ行きやすよ、

姉さんが来ても可いと言ひやしたから。』

『むゝ——今夜は御説教があるんでしたツけねえ。』

と思出したやうに言つた。暫時しばらく丑松は可懐なつかしさうに、駈出し

て行く省吾の後姿を見送りながら立つた。雪の大路の光景ありさまは、

丁度、眼前めのまへに展ひらけて、用事ありげな人々が往つたり来たりして

居る。急に烈しい眩暈めまひに襲おそはれて、丑松は其処たふへ仆れかゝりさう

に成つた。其時、誰か斯かう背後うしろから追迫つて来て、自分を捕つかへよ

うとして、突然だしぬけに『やい、調里坊てうりつぼう』とでも言ふかのやうに思

はれた。斯う疑へば恐しくなつて、背後を振返つて見ずには居ら

れなかつたのである——あゝ、誰が其様なところに居よう。丑松は自分を嘲あざけつたり励ましたりした。

第拾五章

(一)

酷はげ烈しい、犯し難い社よのなか会の威ちから力は、次第に、丑松の身に迫つて来るやうに思はれた。学校から帰へつて、蓮華寺の二階へ上つた時も、風呂敷包をそこへ投はふりだ出す、羽織袴を脱捨てる、直に丑

松は畳の上に倒れて、放^{ほしいま}肆^まな絶望に埋没^{うづも}れるの外は無かつた。眠るでも無く、考へるでも無く、丁度無感覺な人のやうに成つて、長いこと身動きも為^せずに居たが、聽^{やが}て起直つて部屋の内を眺め廻した。

楽しさうな笑声が、蔵裏^{くくり}の下座敷の方から、とぎれ／＼に聞えた。聞くとともに無しに聞耳を立てると、其日も亦^また文平がやつて来て、人々を笑はせて居るらしい。あの邪気^{あどけ}ない、制^{おさ}へても制へきれないやうな笑声は、と聞くと、省吾は最早^も遊びに来て居るものと見える。時々若い女の声も混つた——あゝ、お志保だ。斯^かう聞き澄まして、丑松は自分の部屋の内を歩いて見た。

『先生。』

と声を掛けて、急に入つて来たのは省吾である。

丁度、階下^{した}では茶を入れたので、丑松にも話しに来ないか、と省吾は言付けられて来た。聞いて見ると、奥様やお志保は下座敷に集つて、そこへ庄馬鹿までやつて来て居る。可笑^{をか}しい話が始つたので、人々は皆な笑ひ転げて、中にはもう泣いたものが有ることのこと。

『あの、勝野先生も来て居なさりやすよ。』

と省吾は添付^{つけた}して言つた。

『左様^{さう}? 勝野君も?』と丑松は微笑み乍ら答へた。遽然^{にはかに}、心の底から閃めいたやうに、憎悪^{にくしみ}の表情が丑松の顔に上つた。尤^{もつと}も直に其は消えて隠れて了つたのである。

『さあ——私と一緒わしに早く来なされ。』

『今直に後から行きますよ。』

とは言つたものゝ、実は丑松は行きたくないものであつた。『早く』を言ひ捨てゝ、ぷいと省吾は出て行つて了つた。

楽しさうな笑声が、復また、起つた。蔵裏の下座敷——それはもう目に見ないでも、斯かうして声を聞いたばかりで、人々の光景ありさまが手に取るやうに解る。何もかも丑松は想像することが出来た。

定めし、奥様は何か心に苦にすることがあつて、其を忘れる為にわざ／＼面白可笑をかしく取做とりなして、それで彼あんな男のやうな声を出して笑ふのであらう。定めし、お志保は部屋を出たり入つたりして、茶の道具を持つて来たり、其を入れて人々に薦すすめたり、又は

奥様の側に倚添よりそひ乍ら談話を聞いて微笑ほゝゑんで居るのであらう。定めし、文平は婦人子供をんなこどもと見て思ひ侮あなどつて、自分独りが男ででも有るかのやうに、可厭いやに容子を売ようすつて居ることであらう。嘸さぞ。そればかりでは無い、必定きつとまた人のことを何とかかんとか——あゝ、あゝ、素性うまれが素性なら、誰が彼様な男なぞの身の上を羨まう。

現世の歡樂を慕ふ心は、今、丑松の胸を衝いてむらゝと湧き上つた。捨てられ、卑いやしめられ、爪弾つまはじきせられ、同じ人間の仲間入すら出来ないやうな、つたない同族の運命を考へれば考へるほど、猶なほ々斯の若い生命いのちが惜まるゝ。

『何故、先生は来なさらないですか。』

斯かう言ひ乍ら、臆やがて復また迎へにやつて来たのは省吾である。

あまり邪あじけ氣ないことを言つて督促せきたてるので、丑松は斯の少年を
 愆そゝ憑かして、いつそ本堂の方へ連れて行かうと考へた。部屋を出
 て、楼はしご梯だんを下りると、蔵裏から本堂へ通ふ廊下は二つに別れ
 る。裏庭に近い方を行けば、是非とも下座敷の側を通らなければ
 ならない。其処には文平が話しこんで居るのだ。丑松は表側の廊
 下を通ることにした。

(二)

古い僧坊は廊下の右側に並んで、障子越しに話声なぞの泄もれて
 聞えるは、下宿する人が有ると見える。是このてら寺の広く複雑こみいつた構た

てかた
造といつたら、何処どこに奈何どういふ人が泊つて居るか、其すら克よくは解らない程。平素ふだんは何の役にも立ちさうも無い、陰気な明間がいくつとなく有る。斯うして省吾と連立つて、細長い廊下を通る間にも、朽ち衰へた精舎しやうじやの気は何となく丑松の胸に迫るのであつた。壁は暗く、柱は煤け、大きな板戸を彩色いろどつた古画の絵具も剥落ちて居た。

斯の廊下が裏側の廊下に接つゞいて、丁度本堂へ曲らうとする角のところ、急に背後うしろの方から人の来る氣勢けはひがした。思はず丑松は振返つた。省吾も。見ればお志保で、何か用事ありげに駈寄つて、未だ物を言はない先からもう顔を真紅まつかにしたのである。

『あの——』とお志保は艶のある清すしい眸ひとみを輝かした。『先程は、

弟が結構なものを頂きましたさうで。』

斯う礼を述べ乍ら、其口唇くちびるで嬉しさうに微笑ほゝゑんで見せた。

其時奥様の呼ぶ声が聞えた。逸いちはや早くお志保は聞きつけて、一

寸耳を澄まして居ると、『あれ、姉さん、呼んでやすよ。』と省

吾も姉の顔を見上げた。復た呼ぶ声が聞える。驚いたやうに引返

して行くお志保の後姿を見送つて、聽て省吾を導いて、丑松は本

堂の扉ひらきを開けて入つた。

あゝ、精舎の静寂しづかさ——丁度其は古蹟の内を歩むと同じやうな

心こゝろもち地ちがする。円まるい塗柱に懸かる時計の針の刻々をきざむより

外には、斯この高く暗い天井の下に、一つとして音のするものは無

かつた。身に沁み入るやうな沈黙は、そこにも、こゝにも、隠れ

潜んで居るかのやう。目に入るものは、何もかも——鏑さびを帯びた
 金こんじき色の仏壇、生気の無い蓮はすの造つくり花ばな、人の空想を誘ふやうな
 天界てんがいの女人にょにんの壁に画かかれた形像かたち、すべてそれらのものは過去すきさ
 つた時代の光華ひかりと衰頹おとろへとを語るものであつた。丑松は省吾と一緒
 に内陣迄も深く上つて、仏壇のかげにある昔の聖僧達の画像の前
 を歩いた。

『省吾さん。』と丑松は少年の横顔を熟視まもり乍ら、『君はねえ、
 家眷うちの人の中で誰が一番好きなんですか——父さんですか、母さ
 んですか。』

省吾は答へなかつた。

『当てゝ見ませうか。』と丑松は笑つて、『父さんでせう？』

『いゝえ。』

『ホウ、父さんぢや無いですか。』

『だつて、父さんはお酒ばかり飲んでゝ——』

『そんなら君、誰が好きなんですか。』

『まあ、私はわし——姉さんでゴはす。』

『姉さん？ 左様かねえ、君は姉さんが一番好いかねえ。』

『私は、姉さんには、何でも話しやすよ、へえ父さんや母さんには話さないやうなことで。』

斯かう言つて、省吾は何の意味もなく笑つた。

北の小座敷には古い涅槃ねはんの図が掛けてあつた。普通の寺によくある斯の宗教画は大抵模倣うつつしの模倣で、戯曲しばゐがりの配くみあはせ置とか、

無意味な彩色いろどりとか、又は熱帯の自然と何の關係も無いやうな背景とか、そんなことより外ほかに是これぞと言つて特色とりえの有るものは鮮少すくない。斯この寺のも矢張同じ型ではあつたが、多少創意のある画家ゑかきの筆に成つたものと見えて、ありふれた図に比べると余程活いき々して居た。まあ、宗教をしへの方の情熱が籠るとは見えない迄も、何となく人の心をひきつける樸実ましめなところがあつた。流石さすが、省吾は未だ子供のことで、其禽とりけもの獸なげきの悲嘆の光景さまを見ても、丁度お伽とぎばなし話を絵で眺めるやうに、別に不思議がるでも無く、驚くでも無い。無邪気な少年はたゞ釈迦しやくかの死を見て笑つた。

『あゝ。』と丑松は深い溜息を吐ついて、『省吾さんなどは未だ死ぬといふことを考へたことが有ますまいねえ。』

『私がでごはすか。』と省吾は丑松の顔を見上げる。

『さうさ——君がサ。』

『はゝゝゝ。ごはせんなあ、其様なことは。』

『左様だらうねえ。君等の時代に其様なことを考へるやうなものは有ますまいねえ。』

『ふゝ。』と省吾は思出したやうに笑つて、『お志保姉さんも克く其様なことを言ひやすよ。』

『姉さんも?』と丑松は熱心な眸を注いだ。

『はあ、あの姉さんは妙なことを言ふ人で、へえもう死んで了ひたいの、誰も居ないやうな処へ行つて大きな声を出して泣いて見たいのツて——まあ、奈何して其様な気になるだらう。』

斯う言つて、省吾は小首を傾^{かし}げて、一寸口笛吹く真似をした。

間も無く省吾は出て行つた。丑松は唯単^{ひとり}独になつた。急に本堂

の内部^{なか}は闇^{しん}として、種^{さま}々の意味ありげな装飾が一層無言のな

かに沈んだやうに見える。深い天井の下に、いつまでも変らずに

ある真^{しん}鍮^{ちゆう}の香炉、花立、燈明皿——そんな性命^{いのち}の無い道具ま

で、何となく斯う寂寞^{じやくまく}な瞑^{めい}想^{さう}に耽^たつて居るやうで、仏壇に立つ

観^{くわん}音^{おん}の彫像は慈悲といふよりは寧^{むし}ろ沈黙^{けしん}の化身^{けしん}のやうに輝い

た。斯ういふ静寂^{しづか}な、世離れたところに立つて、其人のことを想^{おも}

ひ浮べて見ると、丁度古蹟を飾る花草のやうな気がする。丑松は、

血の湧く思を抱き乍ら、円い柱と柱との間を往つたり来たりした。

『お志保さん、お志保さん。』

あてども無く口の中で呼んで見たのである。

いつの間には四壁そこいらは暗くなつて来た。青白い黄昏時たそがれどきの光は薄明く障子に映つて、本堂の正面の方から射しこんだので、柱と柱との影は長く畳の上へ引いた。倦みう、困みくるし、疲れた冬の一日ひとひは次第に暮れて行くのである。其時白衣びやくえを着けた二人の僧が入つて来た。一人は住職、一人は寺内の若僧であつた。灯あかしは奥深く点いて、あそこにも、こゝにも、と見て居るうちに、六挺ばかりの蠟燭らっふそくが順序よく並んで燃とほる。仏壇を斜に、内陣の角のところに座を占めて、金泥きんていの柱の側に掌てを合はせたは、住職。一段低い外陣に引下つて、反対の側にかしこまつたは、若僧。やがて鉦かねの音が莊嚴おごそかに響き渡る。合唱の声は起つた。

『なむからかんのう、とらやあ、やあ——』
宵よひの勤おつとめ行ぎやうが始つたのである。

あゝ、寂しい夕暮もあればあるもの。丑松は北の間の柱よりかに倚より乍はら、目を瞑つぶり、頭あたまをつけて、深く／＼思おもひ沈しづんで居た。

『若もし自分の素性がお志保の耳に入つたら——』其を考へると、
つく／＼穢多いのちの生命いのちの味気なさを感ずる。漠然とした死滅の思
想は、人懐しさの情に混つて、烈しく胸中を往来し始めた。熾盛さかん
な青春ときよの時代ときよに逢あひ乍はら、今迄まで経験あつたことも無ければ翹望のぞんだ
ことも無い世の苦といふものを覚えるやうに成つたか、と考へる
と、左様さういふ思かんが想へを起したとすら既にもう切いたまなく可傷いたしく思
はれるのであつた。冷つめたい空気に交る香の煙のほひは、斯の夕暮

に一層のあはれを添へて、哀かなしいとも、堪へがたいとも、名のつけやうが無い。遽にはかに然、二人の僧の声が絶えたので、心づいて眺めた時は、丁度読経どきやうを終つて仏の名を称となへるところ。間も無く住職は珠数ずゝを手にして柱の側を離れた。若僧は未まだ同じ場処に留つた。丑松は眺め入つた——高らかに節つけて読む高祖の遺訓の終る迄までも——其文章を押頂いて、聽やがて若僧の立上る迄までも——終しまひには、蠟燭の灯が一つく吹消されて、仏前の燈明ばかり仄ほのかに残り照らす迄も。

夕飯の後、蓮華寺では説教の準備したくを為るので多忙いそがしかった。昔からの習慣ならはしとして、定紋つけた大提灯おほぢやうちんがいくつとなく取出された。寺内の若僧、庄馬鹿、子坊主まで聚よつて会たかつて、火ともを点して、其を本堂へと持運ぶ。三人はその為に長い廊下を往つたり来たりした。

説教聞きにところざす人々は次第に本堂へ集つて来た。是寺に附く檀家だんかのものは言ふも更さらなり、其と聞伝へたかぎりは誘ひ合せて詰掛ける。既にもう一生の行程つとめを終つた爺さん婆さんの群ばかりで無く、随分種々さま／＼の繁忙せはしい職業に従ふ人々まで、其を聴かうとして熱心に集ふのを見て、いかに斯の飯山の町が昔風の宗教と信仰との土地であるかを想像させる。聖經おきやうの中にある

有名な文句、たとへ比喩なぞが、普通の人の会話に交るのは珍しくも無い。娘の連はいづれも美しい珠数の袋を懐にして、蓮華寺へと先を争ふのであつた。

それは丑松の身に取つて、最も楽しい、又最も哀しい寺てら住ずみの一夜であつた。どんなに丑松は胸を踊らせて、お志保と一緒に説教聞たのしみく歓たのしみ樂を想像したらう。あゝ、斯ういふ晩にあたつて、自分が穢多であるといふことを考へたほど、切ない思を為たためしは無い。奥様を始め、お志保、省吾などは既に本堂へ上つて、北の間の隅のところをここをんなに集つて居た。見れば中ひとかたまりの間から南の間へかけて、男をここをんな女の信徒、あそこに一団、こゝにも一団、思ひ／＼に挨拶したり話したりする声は、忍んではするものゝ、何とな

く賑に面白く聞える。庄馬鹿が、自慢の羽織を折目正しく着飾つて、是これ見よがしに人々のなかを分けて歩くのも、をかしかつた。其取澄ました様子を見て、奥様も笑へば、お志保も笑つた。丁度丑松の座つたところは、永代読経として寄附の金高と姓名とを張出してある古壁の側、お志保も近くて、髪かみの香が心地よくかゝる。提灯の影は花やかに本堂の夜の空気を照らして、一層その横顔を若々しくして見せた。何といふ親しげな有様だらう、あの省吾を背後うしろから抱いて、すこし微笑ほゝゑんで居る姉らしい姿は。斯う考へて、丑松はお志保の方を熟視みまもる度たびに、言ふに言はれぬ楽しさを覚えるのであつた。

説教の始まるには未だ少許すこし間が有つた。其時文平もやつて来て、

先づ奥様に挨拶し、お志保に挨拶し、省吾に挨拶し、それから丑松に挨拶した。あゝ、嫌な奴が来た、と心に思ふばかりでも、丑松の空想は忽ち搔かきみだ乱されて、慄ぞつとするやうな現実の世界へ歸るさへあるに、加おまけに之、文平が忸なれ々敷い調子で奥様に話しかけたり、お志保や省吾を笑はせたりするのを見ると、丑松はもう腹立たしく成る。斯うした女子供のなかで談話はなしをさせると、実に文平は調子づいて来る男で、一寸したことをいかにもつとも尤もらしく言ひこなして聞かせる。それに、この男の巧者なことには、妙に人懐ひとなつこい、女の心をひきつけるやうなところが有つて、正味自分の価値ねうちよりは其を二倍にも三倍にもして見せた。万事深く蔵つんで居るやうな丑松に比べると、親切は反かへつて文平の方にあるかと思はせる位。

丑松は別に誰の機嫌を取るでも無かつた——いや、省吾の方には優やさしくしても、お志保に対する素振を見ると寧いっそ冷淡つれないとしか受取れなかつたのである。

『瀬川君、奈何どうです、今日の長野新聞は。』

と文平は低声こゝろゑで誘かまをかけるやうに言出した。

『長野新聞？』と丑松は考深い目付をして、『今日は未だ読んで見ません。』

『そいつは不思議だ——君が読まないといふのは不思議だ。』

『何故なぜ？』

『だつて、君のやうに猪子先生を崇拜して居ながら、あの演説の筆記を読まないといふのは不思議だからサ。まあ、是非読んで見

たまへ。それに、あの新聞の評が面白い。猪子先生のことを、

「新平民中の獅子」だなんて——巧いことを言ふ記者が居るぢやあないか。』

斯う口では言ふものゝ、文平の腹の中では何を考へて居るか、と丑松は深く先方さきの様子を疑つた。お志保はまた熱心に耳を傾けて、二人の顔を見比べて居たのである。

『猪子先生の議論は兎とに角かく、あの意気には感服するよ。』と文平は言葉を継いで、『あの演説の筆記を見たら、猪子先生の書いたものを読んで見たくなくなつた。まあ君は審くはしいと思ふから、其で聞くんだが、あの先生の著述では何が一番傑作と言はれるのかね。』
『どうも僕には解らないねえ。』斯う丑松は答へた。

『いや、戯じょうだん語ごぢや無いよ——實際、君、僕は穢多といふものに興味を持つて来た。あの先生のやうな人物が出るんだから、確に研究して見る価値ねうちは有るに相違ない。まあ、君だつても、其で「懺悔録」なぞを読む氣に成つたんだらう。』と文平は嘲あざけるやうな語氣で言つた。

丑松は笑つて答へなかつた。流石さすがにお志保の居る側で、穢多といふ言葉が繰返された時は、丑松はもう顔色を変へて、自分で自分を制へることが出来なかつたのである。怒氣いかりと畏怖おそれとはかはる／＼丑松の口唇くちびるに浮んだ。文平は又、鋭い目付をして、其微細な表情までも見泄みもらすまいとする。『御氣の毒だが——左様君のやうに隠したつても無駄だよ』と斯う文平の目が言ふやうにも

見えた。

『瀬川君、何か君のところには彼の先生のもものが有るだらう。何でも好いから僕に一冊貸して呉れ給へな。』

『無いよ——何にも僕のところには無いよ。』

『無い？ 無いツてことがあるものか。君の許ところに無いツてことがあるものか。なにも左様さう隠さないで、一冊位貸して呉れたつて好ささうなものぢやないか。』

『いや、僕は隠しやしない。無いから無いと言ふんさ。』

遽にはかに然、蓮華寺の住職が説教の座へ上つたので、二人はそれぎり口を噤んで了つた。人々はいづれも座すわり直したり、容かたちを改めたりした。

(四)

住職は奥様とおないどし同年といふ。男のことであるから割合に若々しく、すみぞめ墨染ころもの法衣きんらんに金欄けさの袈裟を掛け、外陣の講座の上に顕はれたところは、さくちひさがたあたり佐久小県辺はるに多い世間的な僧侶に比べると、遙かに高尚な宗教生活を送つて来た人らしい。額広く、鼻隆く、眉すこし迫つて、おもぼせ容貌もなかく立派な上に、温和な、善良な、且つ才智のある性質を好く表して居る。法話の第一部は猿の比喩たとへで始まつた。智識のある猿は世に知らないといふことが無い。よく学び、よく覚え、殊に多くの経文を暗誦して、万人の師匠とも

成るべき程の学問を蓄はへた。畜生の悲しさには、唯だ一つ信ずる力を欠いた。人は、よし是猿ほどの智識が無いにもせよ、信ずる力あつて、はじめて凡夫も仏の境には到り得る。なんと各々位、合点か。人間と生れた宿世すくせのありがたさを考へて、朝夕念仏を怠り給ふな。斯かう住職は説出したのである。

『なむあみだぶ、なむあみだぶ。』

と人々の唱へる声は本堂の広間に満ち溢れた。男も、女も、懐ふところから紙入を取出して、思ひこくに賽さい銭せんを畳の上へ置くのであつた。

法話の第二部は、昔の飯山の城主、松平遠江守の事蹟を材たねに取つた。そもく飯山が仏教の地と成つたは、斯の先祖の時代から

である。火のやうな守かみの宗教心は未だ年若な頃からして燃えた。

丁度江戸表へ参勤の時のこと、日頃鬱積むすぼれて解けない胸中の疑問を人々に尋ね試みたことがある。『人は死んで、畢竟つまりどう奈何なる。』

侍臣も、儒者も、斯問このとひには答へることが出来なかつた。林大だいが

学くの頭かみに尋ねた。大学の頭ですらも。それから守は宗教に志し、

渋谷の僧に就いて道を聞き、領地をば甥をひに譲り、六年目の暁に出

家して、飯山にある仏教の先祖おやと成つたといふ。なんと斯発ほつしん心

の歴史は味あぢはひのある話ではないか。世の多くの学者が答へることの

出来ない、其難問に答へ得るものは、信心あるものより外に無い。

斯う住職は説き進んだのである。

『なむあみだぶ、なむあみだぶ。』

一斉に唱へる声は風のやうに起つた。人々は復た賽銭を取出して並べた。

斯ういふ説教の間にも、時々丑松は我を忘れて、熱心な眸をお志保の横顔に注いだ。流石に人目を憚つて見まい〜と思ひ乍らも、つい見ると、仏壇の方を眺め入つたお志保の目付の若々しさ。不思議なことには、熱い涙が人知れず其顔を流れるといふ様子で、時々啜り上げたり、密と鼻を拭んだりした。尚よく見ると、言ふに言はれぬ恐怖と悲愁とが女らしい愛らしさに交つて、陰影のやうに顕れたり、隠れたりする。何をお志保は考へたのだらう。何を感じたのだらう。何を思出したのだらう。斯う丑松は推量した。今夜の法話が左様若い人の心を動かすとも受取れない。有体に

言へば、住職の説教はもう古い、古い遣方で、明治生れの人間の耳には寧そ異様に響くのである。型に入つた仮白のやうな言廻し、秩序の無い断片的な思想、金色に光り輝く仏壇の背景——丁度それは時代な劇でも観て居るかのやうな感想を与へる。若いものが彼様いふ話を聴いて、其程胸を打たれようとは、奈何しても思はれなかつたのである。

省吾はそろ／＼眠くなつたと見え、姉に倚凭つた儘、首を垂れて了つた。お志保はいろ／＼に取賺して、動つて見たり、私語いて見たりしたが、一向に感覚が無いらしい。

『これ——もうすこし起きておいでなさいよ。他様が見て笑ふぢや有ませんか。』と叱るやうに言つた。奥様は引取つて、

『其処へ寝かして置くが可いやね。ナニ、子供のことだもの。』

『眞ほん実に未まだ児ねん童ねえで仕方が有ありません。』

斯う言つて、お志保は省吾を抱直した。殆んど省吾は何にも知らないらしい。其時丑松が顔を差出したので、お志保も是こ方ちを振向いた。お志保は文平を見て、奥様を見て、それから丑松を見て、あか紅かくなつた。

(五)

法話の第三部は白隠に関する伝説を主にしたものであつた。昔、飯山の正受しやうじゆあん菴あんに恵端けいたん禪師といふ高僧が住んだ。白隠が斯の人

を尋ねて、飯山へやつて来たのは、まだ道を求めて居る頃。参禅して教を聴く積りで、来て見ると、掻集めた木葉このはを背負ひ乍らとぼくくと谷間たにあひを帰つて来る人がある。散切頭ざんぎりあたまに、髯茫茫々ひげぼうぼう。それと見た白隠は切込んで行つた。『そもさん。』斯ういふ熱心は、漸くやうや三回目に、惠端の為に認められたといふ。それから朝夕師として侍かしづいて居たが、さて終しまひには、白隠も問答に究しまして了つた。究するといふよりは、絶望して了つた。あゝ、彼様あんな問を出すのは狂人きちがひだ、と斯う師匠のことを考へるやうに成つて、苦しきのあまりに其処を飛出したのである。思案に暮れ乍ら、白隠は飯山の町はづれを辿つた。丁度収穫とりのいれの頃で、堆高うづだかく積上げた穀物の傍たふに仆たふれて居ると、農夫の打つ槌つちは誤つて斯この求道者を絶息させ

た。夜露が口に入る、目が覚める、蘇いきかへ生ると同時に、白隠は悟つた。一説に、彼は町はづれで油売に衝つき当つて、其油に滑つて、悟つたともいふ。静じやうくわんあん觀庵として今日迄残つて居るのは、この白隠の大悟した場処を記念する為に建てられたものである。

斯の伝説は兔とに角かく若いものゝ知らないことであつた。それから自分の意見を述べて、いよく結末くつまつといふ段になると、毎時住職は同じやうな説教の型に陥る。自力で道に入るといふことは、白隠のやうな人物ですら容易で無い。吾他力宗は單純ひとへに頼むのだ。信ずるのだ。導かれるのだ。凡夫の身をもつて達するのだ。呉々おのれも自己を捨て、阿弥陀如来あみだによらいを頼み奉るの外は無い。斯う住職は説き終つた。

『なむあみだぶ、なむあみだぶ。』

と人々の唱へる声は暫時しばらく止まなかつた。多くの賽銭はまた畳の上を集つた。お志保も殊勝らしく掌てを合せて、奥様と一緒に唱へて居たが、涙は其若い頬を伝つて絶間とめども無く流れ落ちたのである。

やがて聴衆は珠数を提さげて歸つて行つた。奥様も、お志保も、今は座を離れて、円柱の側に佇立たぐずみ乍ら、人々に挨拶したり見送つたりした。雪がまた降つて来たといふので、本堂の入口は酷ひどく雑踏する。女連は多く後になつた。殊に思ひくの風俗して、時の流行はやりに後れまいとする町の娘の有様は、深くくお志保の注意を引くのであつた。お志保は熟じつと眺め入り乍ら、寺住の身と思比

べて居たらしいのである。

『や、どうも今晚の御説教には驚きましたねえ。』と文平は住職に近いて言つた。『実に彼の白隠の歴史には感服して了ひました。まあ、始めてです、彼あ様いふ御話を伺つたことは。あの白隠が惠端ところ禪師の許へ尋ねて行く。あそこのが私は氣に入りました。斯う向ふの方から、掻集めた木葉を背負ひ乍ら、散切頭に髯茫茫といふ姿で、とぼくと谷間を帰つて来る人がある。そこへ白隠が切込んで行つた。「そもさん。」——彼あ様いかなければ不可いませんねえ。』と身振手真似を加へて喋しゃべ舌りたてたので、住職はもとより、其を聞く人々は笑はずに居られなかつた。さうかうする中に、聴衆は最早もうすつかり悉皆歸つて了ふ。急に本堂の内は寂しく成る。

若僧や子坊主は多忙いそがしさうに後片付。庄馬鹿は腰を曲こめ乍ら、畳の上の賽銭を掻集めて歩いた。

其時は最早も丑松の姿が本堂の内に見えなかつた。丑松は省吾を連れて、蔵裏の方へ見送つて行つてやつた。丁度文平が奥様やお志保いたはの側で盛んに火花を散らして居る間に、丑松は黙つて省吾を慰撫いたはつたり、人の知らない面倒を見て遣つたりして居たのである。

第拾六章

(一)

次第に丑松は学校へ出勤するのが苦しく成つて来た。ある日、あまりの堪へがたさに、欠席の届を差出した。其朝は遅くまで寝て居た。八時打ち、九時打ち、臆やがて十時打つても、まだ丑松は寝て居た。窓の障しやうじ子は冬の日をうけて、其光が部屋の内へ射しこんで来たのに、丑松は枕まくらもと頭を照らされても、まだそれでも起きることが出来なかつた。下女の袈裟治は部屋々々の掃除を済すまして、最早もとうとつくに雑巾掛ざふきんがけまで為し了しまつた。幾度か二階へも上つて来て見た。来て見ると、丑松は疲れて、蒼あをざめて、丁度たべす酣あ酔ました人のやうに、寢床の上に倒れて居る。枕頭は取散らした儘ま。あちらの隅に書物、こちらの隅に風呂敷包、すべて斯の部屋

の内に在る道具といへば、各自勝手に乗出して踊つたり跳ねたりした後のやうで、其乱雑な光景は部屋の主人の心の内部を克く想像させる。聽てまた袈裟治が湯沸を提げて入つて来た時、漸く丑松は起上つて、茫然と寢床の上に座つて居た。寢過ぎと衰弱^へとから、恐しい苦痛の色を顔に表して、半分は未だ眠り乍ら其処に座つて居るかのやう。『御飯を持つて来ませうか。』斯う袈裟治が聞いて見ても、丑松は食ふ氣に成らなかつたのである。

『あゝ、氣分が悪くて居なされると見える。』

と独語^{ひとりごと}のやうに言ひ乍ら、袈裟治は出て行つた。

それは北国の冬らしい、寂しい日であつた。ちひさな冬の蠅は斯の部屋の内に残つて、窓の障子をめがけては、あちこちくと

天井の下を飛びちがつて居た。丑松が未だ斯の寺へ引越して来ないで、あの鷹匠町の下宿に居た頃は、煩うるさいほど沢山蠅の群が集つて、何処どこから塵埃ほこりと一緒に舞込んで来たかと思はれるやうに、鴨居だけばかりのところを組くんづ離ほぐれつしたのであつた。思へば秋風を知つて、短い生命いのちを急いだのであらう。今は僅かに生残つたのが斯うして目につく程の季節と成つた。丑松は眺め入つた。眺め入り乍ら、十二月の近いたことを思ひ浮べたのである。

斯かうして、働けば働ける身をもつて、何もなんに為せずに考へて居るといふことは、決して楽では無い。官費の教育を享うけたかはりに、長い義務年限がが纏つ綿き綿まつて、否でも応でも其間嚴重な規則に服従したがはなければならぬ、といふことは——無論、丑松も承知して居る。

承知して居乍ら、働く気が無くなつて了つた。噫、朝寝の床は絶望した人を葬る墓のやうなもので有らう。丑松は復たそこへ倒れて、深い睡眠ねむりに陥入おちいつた。

(一一)

『瀬川先生、御客様でやすよ。』

と喚よびおこ起す袈裟治の声に驚かされて、丑松は銀之助が来たことを知つた。銀之助ばかりでは無い、例の準教員も勤務つとめの儘みなりの服装でやつて来た。其日は、地方を巡回して歩く休職の大尉とやらが軍事思想の普及を計る為、学校の生徒一同に談話はなしをして聞かせる

とかで、午後の課業が休みと成つたから、一寸暇を見て尋ねて来たといふ。丑松は寢床の上に起直つて、半ば夢のやうに友達の顔を眺めた。

『君——寢て居たまへな。』

斯う銀之助は無造作な調子で言つた。眞実丑松をいたはるといふ心が斯友達の顔色このに表れる。丑松は掛蒲団の上にある白い毛布を取つて、丁度襦袢どてらを着たやうな具合に、其を身に纏まとひ乍ら、

『失敬するよ、僕は斯様こんなものを着て居るから。ナニ、君、其様そんなに酷ひどく不良わるくも無いんだから。』

『風邪かぜですか。』と準教員は丑松の顔を熟視みまもる。

『まあ、風邪だらうと思ふんです。昨夜から非常に頭が重くて、

奈何どうしても今朝は起きることが出来ませんでした。』と丑松は準
教員の方へ向いて言つた。

『道理で、顔色が悪い。』と銀之助は引取つて、『インフルエン
ザが流行はやるといふから、気をつけ給へ。何か君、飲んで見たら奈
何だい。焼味噌のすこし黒焦くろこげに成つたやつを茶漬茶椀なんか
に入れて、そこへ熱湯にえゆを注つぎこ込んで、二三杯もやつて見給へ。大抵
の風邪は愈なほつて了しまふよ。』と言つて、すこし気を変へて、『や、
好い物を持つて来て、出すのを忘れた——それ、御土産おみやげだ。』
斯かう言つて、風呂敷包の中から取出したのは、十一月分の月給。
『今日は君が出て来ないから、代理に受取つて置いた。』と銀之
助は言葉を続けた。

『克く改めて見て呉れ給へ——まあ有る積りだがね。』

『それは難有う。』と丑松は袋入りの銀貨取混ぜて受取つて、

『確に。して見ると今日は二十八日かねえ。僕はまた二十七日だ
とばかり思つて居た。』

『はゝゝゝゝ、月給取が日を忘れるやうぢやあ仕様が無い。』と

銀之助は反返そりかへつて笑つた。

『全く、僕は茫然ぼんやりして居た。』と丑松は自分で自分を励ますやう
にして、『今月は君、小だらう。二十九、三十と、十一月も最早もう
二日しか無いね。あゝ今年も僅かに成つたなあ。考へて見ると、
うかくして一年暮して了つた——まあ、僕などは何も為なんになかつ
た。』

『誰だつて左様さうさ。』と銀之助も熱心に。

『君は好いよ。君はこれから農科大学の方へ行つて、自分の好きな研究が自由にやれるんだから。』

『時に、僕の送別会もね、生徒の方から明日にしたいと言出したが——』

『明日に？』

『しかし、君も斯うして寝て居るやうぢやあ——』

『なあに、最早なほ愈つたんだよ。明日は是非出掛ける。』

『はゝゝゝ、瀬川君の病氣は不良わるくなるのも早いし、快よくなるのも早い。まあ大病人のやうに呻吟うなつてるかと思ふと、また虚言うそを言つたやうに愈なほるから不思議さ——そりやあ、もう、毎時いつも御極

りだ。それはさうと、斯うして一緒に馬鹿を言ふのも僅かに成つて来た。其内に御別れだ。』

『左様かねえ、君はもう行つて了ふかねえ。』

斯ういふ言葉を取交して、二人は互に感慨に堪へないといふ様子であつた。其時迄、黙つて二人の談話を聞いて、巻煙草ばかり燻ふかして居た準教員は、唐突だしぬけに斯様こんなことを言出した。

『今日僕は妙なことを聞いて来た。学校の職員の中に一人新平民が隠れて居るなんて、其様そんなことを町の方で噂うはさするものが有るさうだ。』

『誰が其様なことを言出したんだらう。』と銀之助は準教員の方へ向いて言つた。

『誰が言出したか、其は僕も知らないがね。』と準教員はすこし困却こまつたやうな調子で、『要するに、人の噂うわさに過ぎないんだらうと思ふんだ。』

『噂にもよりけりさ。其様なことを言はれちやあ、大に吾儕われが迷惑するねえ。克よく町の人は種々いろくなことを言触ふらす。やれ、女の教員が奈何どうしたの、男の教員が斯様かうしたのツて。何故なぜ、左様さう人の噂うわさが為なたいんだらう。そんなら、君、まあ学校の職員を数へて見給へ。穢多せいたらしいやうな顔付かほづのものが吾儕われの中にあるかい。実に

怪しからんことを言ふぢやないか——ねえ、瀬川君。』

斯う言つて、銀之助は丑松の方を見た。丑松は無言で、白い毛布に身を包んだまゝ。

『はゝゝゝゝ。』と銀之助は笑ひ出した。『校長先生は随分きちや

帳面うめんな方だが、なんぼなんでも新平民とは思はれないし、と言

つて、教員仲間に其様なものは見当りさうも無い。左様さなあ—

—いやに気取つてるのは勝野君だ——まあ、其様な嫌疑のかゝるのは勝野君位のものだ。』

『まさか。』と準教員も一緒になつて笑つた。

『そんなら、君、誰だと思ふ。』と銀之助は戯れるやうに、『さしづめ、君ぢやないか。』

『馬鹿なことを言ひ給へ。』と準教員はすこし憤然とする。

『はゝゝゝゝ、君は直に左様怒るから不可。なにも君だと言つた

訳では無いよ。真箇に、君のやうな人には戯語も言へない

。』

『しかし。』と準教員は真面目に成つて、『是がもし事実だと仮

定すれば——』

『事実？ 到底其様なことは有得べからざる事実だ。』と銀之

助は聞入れなかつた。『何故と言つて見給へ。学校の職員は大抵

出処が極つて居る。君等のやうに講習を済まして来た人か、勝野

君のやうに検定試験から入つて来た人か、または吾儕のやうに

師範出か——是より外には無い。若し吾儕の中に其様な人が有る

とすれば、師範校時代にもう知れて了ふね。卒業する迄も其が知れずに居るなんてことは、寄宿舎生活が許さないさ。検定試験を受けるやうな人は、いづれ長く学校に關係した連中だから、是も知れずに居る筈が無し、君等の方はまた猶なほさら更だらう。それ見給へ。今になつて、突然其様なことを言触らすといふは、すこし可を笑かしいぢやないか。』

『だから——』と準教員は言葉に力を入れて、『僕だつても事実だと言つた訳では無いサ。若もし事実だと仮定すれば、と言つたんサ。』

『若もしかね。はゝゝゝ。君の言ふ若は仮定する必要の無い若だ。』
『左さう様言へばまあ其迄だが、しかし万まん一其そん様なことが有るとすれ

ば、奈何いふ結果に成つて行くものだらう——僕は考へたばかりでも恐しいやうな気がする。』

銀之助は答へなかつた。二人の客はもうそれぎり斯様な話を為なかつた。

臆て二人が言葉を残して出て行かうとした時は、丑松は喪心した人のやうで、其顔色は白い毛布に映つて、一層蒼ざめて見えたのである。『あゝ、瀬川君は未だ快くないんだらう。』斯う銀之助は自分で自分に言ひ乍ら、準教員と一緒に楼梯を下りて行つた。

暫時丑松は茫然として部屋の内を眺め廻して居たが、急に寢床を片付けて、着物を着更へて見た。不図思ひついたやうに、押

入の隅のところこに隠して置いた書物を取出した。それはいづれも蓮太郎を思出させるもので、彼の先輩が心血と精力とを注ぎ尽したといふ『現代の思潮と下層社会』、小冊子には『平凡なる人』、『労働』、『貧しきものゝ慰め』、それから『懺悔録』など。丑松は一々内部なかを好く改めて見て、蔵書の印がはりに捺おして置いた自分の認印みとめを消して了つた。ほかに、床の間に置並べた語学の参考書の中から、五六冊不要なものを抜取つて、塵埃ほこりを払つて、一緒にして風呂敷に包んで居ると、丁度そこへ袈裟治が入つて来た。

『御出掛？』

斯う声を掛ける。丑松はすこし周章あわてたといふ様子して、別に返事もしないのであつた。

『この寒いのに御出掛なさるんですか。』と袈裟治は呆れて、蒼あをざめた丑松の顔を眺めた。『気分が悪くて寝て居なさる人が——
まあ。』

『いや、もう悉すつかり皆快くなつた。』

『ほゝゝゝゝ。それはさうと、御腹おなかが空きやしたらう。何か食べて行きなすつたら——まあ、貴方あなたは今朝なんにから何も食たべなさらぬぢやごはせんか。』

丑松は首を振つて、すこしも腹は空かないと言つた。壁に懸けてある外ぐわいたう套はづを除はずして着たのも、帽子を冠つたのも、着る積りも無く着、冠る積りも無く冠つたので、丁度感覚の無い器械が動くやうに、自分で自分の為することを知らない位であつた。丑松は

また、友達が持つて来て呉れた月給を机の抽匣ひきだしの中へ入れて、其内を紙の袋のまゝ袂へも入れた。尤も幾許いくら置いて、幾許自分の身に着けたか、それすら好くは覚えて居ない。斯うして書物の包を提げて、成るべく外套の袖で隠すやうにして、臆てぶらりと蓮華寺の門を出た。

(四)

雪は往来にも、屋根の上にもあつた。『みの帽子』を冠り、蒲がまの脛穿はゞきを着け、爪掛つまかけを掛けた多くの労働者、または毛布を頭から冠つて深く身を包んで居る旅人の群——其様そんな手合が眼前めのまへを

往つたり来たりする。人や馬の曳く雪橇は幾台か丑松の側を通り過ぎた。

長い廻廊のやうな雪除の『がんぎ』（軒廂）も最早役に立つやうに成つた。往來の真中に堆高く掻集めた白い小山の連接を見ると、今に家々の軒丈よりも高く降り積つて、これが飯山名物の『雪山』と唄はれるかと、冬期の生活の苦痛を今更のやうに堪へがたく思出させる。空の様子はまた雪にでも成るか。薄い日のひかりを眺めたばかりでも、丑松は歩き乍ら慄へたのである。

上町の古本屋には嘗て雑誌の古を引取つて貰つた縁故もあつた。丁度其店頭みせさきに客の居なかつたのを幸さいはひ、ついで丑松は帽子を

脱いで入つて、例の風呂敷包を何気なく取出した。『すこしばかり書籍ほんを持つて来ました——奈何どうでせう、是これを引取つて頂きたいのですが。』と其を言へば、亭主は直に丑松の顔色を讀んで、商あ人きんどらしく笑つて、臆やがて膝を進め乍ら風呂敷包を手前へ引寄せた。

『ナニ、幾許いくらでも好いんですから——』
と丑松は添加つけたして言つた。

亭主は風呂敷包を解ほどいて、一冊々々書物の表紙を調べた揚句、それを二通りに分けて見た。語学の本は本で一通り。兎も角も其それだけ丈は丁寧ななみに内部を開けて見て、それから蓮太郎の著したものは無造作に一方へ積重ねた。

『何程いかほどばかりではは御譲りに成る御積りなんですか。』と亭主は

丑松の顔を眺めて、さも持余したやうに笑つた。

『まあ、貴方の方で思つたところを附けて見て下さい。』

『どうも是節は不景気でして、一向に斯かういふものが捌はけやせん。

御引取り申しても好うごはすが、しかし金高があまり些いさゝか少で。実

は申上げるにしやしても、是方こちらの英語の方だけの御直段おねだんで、新刊

物の方はほんの御愛嬌ごあいけう——』と言つて、亭主は考へて、『こり

や御持歸りに成りやした方が御為かも知れやせん。』

『折せつかく角持つて来たものです——まあ、左様言はずに、引取れる

ものなら引取つて下さい。』

『あまり些いさゝか少ですが、好うごはすか。そんなら、別々に申上げや

せうか。それとも籠こめて申上げやせうか。』

『籠めて言つて見て下さい。』

『奈何いかゞでせう、精一杯なところを申上げて、五十五銭。へへへへ。それで宜よろしかつたら御引取り申して置きやす。』

『五十五銭？』

と丑松は寂しきうに笑つた。

もとより何程いくらでも好いから引取つて貰ふ氣。直に話は纏まとつた。

あゝ書物ばかりは売るもので無いと、予かねて丑松も思はないでは無いが、然しこゝへ持つて来たのは特別の事情がある。やがて自分の宿処と姓名とを先方さきの帳面へ認しためてやつて、五十五銭を受取つた。念の為、蓮太郎の著したもののだけを開けて見て、消して持つて来た瀬川といふ認印みとめのところを確めた。中に一冊、忘れて消し

て無いのがあつた。『あ——ちよつと、筆を貸して呉れませんか。』斯う言つて、借りて、赤々と鮮明あざやかに読まれる自分の認印の上へ、右からも左からも墨黒々と引いた。

『斯うして置きさへすれば大丈夫。』——丑松の積りは斯うであつた。彼の心は暗かつたのである。思ひ迷ふばかりで、実は奈何どうしていか解らなかつたのである。古本屋を出て、自分の為したことを考へ乍ら歩いた時は、もう哭なきたい程の思に歸つた。

『先生、先生——許して下さい。』

と幾度か口の中で繰返した。其時、あの高柳に蓮太郎と自分とは何の関係も無いと言つたことを思出した。鋭い良心の詰責とがめは、身まを衛まもる余儀なさの弁解いひわけと闘つて、胸には刺されるやうな深い

く悲痛いたみを感じる。丑松は羞はぢたり、畏おそれたりしながら、何処へ行くといふ目的めあても無しに歩いた。

(五)

一ぜんめし、御酒肴おんさけさかな、笹屋、としてあるは、かねて敬之進と一緒いっしょに飲んだところ。丑松の足は自然とそちらの方へ向いた。表の障子を開けて入ると、そここゝに二三の客もあつて、飲食のみくひして居る様子。主婦かみさんは流許ながしもとへ行つたり、竈かまどの前に立つたりして、多忙いそがしさうに尻端折しりはしをりで働いて居た。

『主婦かみさん、何か有ますか。』

斯^かう丑松は声を掛けた。主婦は煤^{すす}けた柱の傍に立つて、手を拭^ふき乍^{なが}ら、

『生^{あいにく}憎^{こんち}今日^{なんに}は何も無くて御氣の毒だいなあ。川魚の煮^たいたのに、豆腐の汁^{つゆ}ならごはす。』

『そんなら両方貰ひませう。それで一杯飲まして下さい。』

其時、一人の行商が腰掛けて居^{たる}た樽を離れて、浅黄の手拭で頭を包み乍ら、丑松の方を振返つて見た。雪靴の儘^まで柱に倚^{より}凭^かつて居た百姓も、一寸盗むやうに丑松を見た。主婦^{かみさん}が傾^{かし}げた大徳利の口を玻璃杯^{コップ}に受けて、茶色に氣^{いき}の立つ酒をなみくくと注いで貰ひ、立つて飲み乍ら、上目で丑松を眺める櫛^{そり}曳^{ひき}らしい下等な労働者もあつた。斯ういふ風に、人々の視線が集まつたのは、兎^と

に角毛色の異つた客が入つて来た為、放肆な雑談を妨げられたからで。尤も斯の物見高い沈黙は僅かの間であつた。やがて復た盛んな笑声が起つた。炉の火も燃え上つた。丑松は炉辺に満ち溢れる『ぼや』の烟のほひを嗅ぎ乍ら、そこへ主婦が持出した胡桃足の膳を引寄せて、黙つて飲んだり食つたりして居ると、丁度出て行く行商と摺違ひに釣の道具を持つて入つて来た男がある。

『よう、めづらしい御客様が来てますね。』

と言ひ乍ら、釣竿を柱にたてかけたのは敬之進であつた。

『風間さん、釣ですか。』斯う丑松は声を掛ける。

『いや、どうも、寒いのが寒くないのツて。』と敬之進は丑松と相

しむかひ
 対たいに座を占めて、『到底とても川端で辛棒が出来ないから、廃やめて

歸つて来た。』

『ちつたあ釣れましたかね。』と聞いて見る。

『獲物えもの無しサ。』と敬之進は舌を出して見せて、『朝から寒い思
 をして、一匹も釣れないでは君、遣切やりきれないぢやないか。』

其調子がいかに可笑をかしかつた。盛んな笑声が百姓や櫓そりひき曳の
 間に起つた。

『不取敢とりあはず、一つ差上げませう。』と丑松は盃さかづきの酒を飲乾して薦すく
 める。

『へえ、我輩に呉れるのかね。』と敬之進は目を円まるくして、『こ
 りやあ驚いた。君から盃を貰はうとは思はなかつた——道理で今

日は釣れない訳だよ。』と思はず流れ落ちる涎よだれを拭つたのである。

間も無く酒瓶てうしの熱いのが来た。敬之進は寒さと酒慾とで身を震はせ乍ら、さもくうま甘さうに地酒の香を嗅いで見て、

『しばらく君には逢あはなかつたやうな気がするねえ。我輩も君、学校を休やめてから別これに是これといふ用が無いもんだから、斯こん様な釣なぞを始めて——しかも、抛よんどころなしに。』

『何ですか、斯の雪の中で釣れるんですか。』と丑松は箸を休やめて相手の顔を眺めた。

『素しろうつ人は其だから困る。尤も我輩だつて素人だがね。はゝゝゝ。まあ商売人に言はせると、冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。ナニ、君、風さへ無けりや、左さう様思つた程で

も無いよ。』と言つて、敬之進は一口飲んで、『然し、瀬川君、考へて見て呉れ給へ。何が辛いと言つたつて、用が無くて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。家内やなんかせつせ々と働いて居る側で、自分ばかりふところで懐手して見ても居られずサ。まだそれでも、斯うして釣に出られるやうな日は好いが、屋外そとへも出られないやうな日と来ては、実に我輩は為する事が無くて困る。左様いふ日には、君、他に仕方が無いから、まあ昼寝を為ることに極きめてね——』

至極真面目で、斯こん様なことを言出した。この『昼寝を為ることに極めてね』が酷ひどく丑松の心を動かしたのである。

『時に、瀬川君。』と敬之進は酒さけのみ徒らしい手付をして、盃を取

上げ乍ら、『省吾の奴も長々君の御世話に成つたが、種々家の事情を考へると、どうも我輩の思ふやうにばかりもいかないことがあるんで——まあ、その、学校を退かせようかと思ふのだが、君、奈何だらう。』

(六)

『そりやあもう我輩だつて退校させたくは無いさ。』と敬之進は言葉を続けた。『せめて普通教育位は完全に受けさせたいのが親の情さ。来年の四月には卒業の出来るものを、今茲で廃めさせて、小僧奉公なぞに出して了しまふのは可愛さうだ、とは思ふんだが、実

際止むを得んから情ない。彼あんな様な茫然ぼんやりした奴やつだが、万まんざら更ざら学問が嫌ひでも無いと見えて、学校から帰ると直に机に向つては、何か独りでやつてますよ。どうも数学が出来なくて困る。其かはり作文は得意だと見えて、君から「優」なんて字を貰つて帰つて来ると、それは大おほよろこ悦こころびさ。此こゝ頃ひだも君に帳面を頂いた時などは、先生が作文を書けつて下すつたと言つてね、まあ君どんなに喜びましたらう。その嬉しがりやうと言つたら、大切に本箱の中へ入れて仕舞つて置いて、何度出して見るか解らない位さ。彼のあ晩は寝言にまで言つたよ。それ、左さう様さまいふ風だから、兎とに角かくやる気でも居るんだねえ。其を思ふと廃して了へと言ふのは實際可愛さうでもある。しかし、君、我輩のやうに子供が多勢では左どうにも右かうに

も仕様が無い。一概に子供と言ふけれど、その子供がなか／＼馬鹿にならん。悪戯いたづらなくせに、大飯食おほめしぐらひばかり揃つて居て——は／＼／＼、まあ君だから斯様こんなことまでも御話するんだが、まさか親の身として、其様そんなに食ふな、三杯位にして節ひかへて置け、なんて過あんまり多けち吝く嗇くしたことも言へないぢやないか。』

斯ういふ述懐は丑松を笑はせた。敬之進も亦また寂しさうに笑つて、

『ナニ、それもね、継母まははででも無けりや、またそこにもある。省吾の奴を奉公にでも出して了つたら、と我輩が思ふのは、実は今の家内との折合が付かないから。我輩はお志保や省吾のことを考へる度に、どの位あの二人の不ふし幸あはせを泣いてやるか知れない。

奈何どうして継母といふものは彼様あんな邪推深いだらう。此頃こなひだも此頃で、
 ホラ君の御寺に説教が有ましたらう。彼あの晩ばん、遅くなつて省吾が
 歸つて来た。さあ、家内は火のやうになつて怒つて、其様そんなに姉さ
 んのところへ行きたくば最早も家うちなんぞへ歸らなくても可い。出て行
 つて了へ。必定きつとまた御寺へ行つて余計なことをべら／＼喋しゃべ舌べつた
 らう。必定また姉さんに悪い智慧を付けられたらう。だから私の
 言ふことなどは聞かないんだ。斯う言つて、家内が責める。する
 と彼奴あいつは気が弱いもんだから、黙つて寢床の内へ潜り込んで、し
 く／＼やつて居ましたつけ。其時、我輩も考へた。寧いづそこりや省
 吾を出した方が可い。左様さうすれば、口は減るし、喧嘩けんくわの種は無く
 なるし、あるひは家庭うちが一層もつと面白くやつて行かれるかも知れない。

いや——どうかすると、我輩は彼の省吾を連れて、二人で家を出て了はうか知らん、といふやうな気にも成るのさ。あゝ。我輩の家庭などは離散するより外に最早方法が無くなつて了つた。』

次第に敬之進は愚痴な本性を顕した。酒氣が身体へ廻つたと見えて、頬も、耳も、手までも紅く成つた。丑松は又、一向顔色が変らない。飲めば飲む程、反つて頬は蒼白く成る。

『しかし、風間さん、左様貴方のやうに失望したもので無いでせう。』と丑松は言ひ慰めて、『及ばず乍ら私も力に成つて上げる氣で居るんです。まあ、其盃を乾したら奈何ですか——一つ頂きますせう。』

『え?』と敬之進はちらくした眼付で、不思議さうに相手の顔

を眺めた。『これは驚いた。盃を呉れろと仰るんですか。へえ、君は斯の方もなかくいけるんだね。我輩は又、飲めない人かとばかり思つて居た。』

と言つて盃をさす。丑松は其を受取つて、一息にぐいと飲乾のみほして了つた。

『烈しいねえ。』と敬之進は呆あきれて、『君は今日は奈何どうかしやしないか。左様君のやうに飲んでも可いのか。まあ、好加減にした方が好からう。我輩が飲むのは不思議でも何でも無いが、君が飲むのは何だか心配で仕様が無い。』

『何故なぜ?』

『何故ツて、君、左様ぢやないか。君と我輩とは違ふぢや無いか

』。

『はゝゝゝゝ。』

と丑松は絶望した人のやうに笑つた。

(七)

何か敬之進は言ひたいことが有つて、其を言ひ得ないで、深い溜息を吐くといふ様子。其時はもう百姓も、櫓そりひき曳も出て行つて了つた。余念も無く流ながしもと許なべで鍋を鳴らして居る主婦かみさん、裏口の木戸のところたぐずに佇立たぐずんで居る子供、この人達より外に二人の談話はなしを妨さまたげるものは無かつた。高い天井の下に在るものは、何もかも

暗く煤すすけた色を帯びて、昔の街道の名残なごりを顕あらはして居る。あちらの柱むらぢに草鞋わらぢ、こちらの柱むらぢに干瓢かんべう、壁によせて黄かほちやな南瓜かぼちやいくつか並べてあるは、いかにも町はづれの古い茶屋らしい。土間も広くて、日あたりに眠る小猫もあつた。寒さの為に身を潜すくめ乍ら目を瞑つぶつて居る鶏もあつた。

薄い日の光は明あかりまど窓まどから射して、軒のきから外もへ泄もれる煙の渦を

青白く照した。丑松は茫然と思ひ沈んで、炉ろに燃え上る『ぼや』

の焰ほのほを熟視みめて居た。赤々とした火の色は奈何どんなに人の苦痛を慰め

るものであらう。のみならず、強ひて飲んだ地酒の酔心地から、

やたらに丑松は身を慄ふるはせて、時には人目も関はず泣きたい程の

思おもひに帰つた。あゝ声を揚げて放ほ肆しいまに泣いたなら、と思ふ心は

幾度起るか知れない。しかし涙は頬を霑うるほさなかつた——丑松は鳴す咽ゝりなくかはりに、大きく口を開いて笑つたのである。

『あゝ。』と敬之進は嘆息して、『世の中には、十年も交際つきあつて居て、それで毎時初対面いっでものやうな気のする人も有るし、又、君のやうに、其様そんなに深い懇意な仲で無くても、斯うして何もかも打明けて話したい人が有る。我輩が斯様こんな話をするのは、實際、君より外に無い。まあ、是非君に聞いて貰ひたいと思ふことが有るんでね。』とすこし言淀んで、『実は——此頃こなひだ久し振で娘に逢ひました。』

『お志保さんに？』丑松の胸は何となく踊るのであつた。

『といふのは、君、あの娘この方から逢つて呉れろといふ言伝ことづけがあ

つて——もつと尤も、我輩もね、君の知つてる通り蓮華寺とは彼様あいふ訳だし、それに家内は家内だし、するからして、成るべく彼の娘には逢はないやうにして居る。ところが何か相談したいことが有ると言ふもんだから、まあ、その、久し振で逢つて見た。どうも若いものがずん／＼大きく成るのには驚いて了ふねえ。まるで見違へる位。それで君、何の相談かと思ふと、最早もう々々奈何どうしても蓮華寺には居られない、一日も早く家うちへ歸るやうにして呉れ、頼む、と言ふ。事情を聞いて見ると無理もない。其時我輩も始めて彼の住職の性質を知つたやうな訳サ。』

と言つて、敬之進は一寸徳利を振つて見た。生あいにく憎酒は盃さかづきに満たなかつた。やがて一口飲んで、両手で口の端はたを撫なで廻して、

『斯^かうです。まあ、君、聞いて呉れ給へ。よく世間には立派な人物だと言はれて居ながら、唯^{をんな}女性といふものにかけて、非常に弱い性質^{たち}の男があるものだね。蓮華寺の住職も矢張^{やはり}其だらうと思ふよ。彼^{あれほど}程学問もあり、弁才もあり、何一つ備はらないところの無い好い人で、殊^{こと}に宗教^{をしへ}の方の修行もして居ながら、それでまだ迷が出るといふのは、君、奈何^{どう}いふ訳だらう。我輩は娘から彼^あの住職のことを聞いた時、どうしても其が信じられなかつた。いや、嘘だとしか思はれなかつた。実に人は見かけによらないものさね。ホラ、彼の住職も長いこと西京へ出張して居ましたよ。丁度帰つて来たのは、君が郷里の方へ行つて留守だつた時さ。それからといふものは、まあ娘に言はせると、奈何^{どう}しても養父^{おとつ}さんの態度^{しむけ}と

は思はれないと言ふ。かりそめにも仏の御弟子ではないか。袈裟けさを着つけて教を説く身分ではないか。自分の職業に対しても、もうすこし考へさうなものだと思ふんだ。あまり浅猿あさましい、馬鹿馬鹿しいことで、他に話ひとも出来ないやね。奥様はまた奥様で、彼様あつい性質の女だから、人並勝れて嫉妬しつとぶ深いと来て居る。娘はもう悲いやら恐しいやらで、夜も碌々眠られないと言ふ。呆あきれたねえ、我輩このも是話を聞いた時は。だから、君、娘が家うちへ帰りたいと言ふのは、實際無理もない。我輩だつて、其様なところへ娘を遣やつて置きたくは無い。そりやあもう一日も早く引取りたい。そこがそれ情ないことには、今の家内がもうすこし解つて居て呉れると、奈何どうにでもして親子でやつて行かれないことも有るまいと思ふけ

れど、現に省吾一人にすら持余して居るところへ、またお志保の奴が飛込んで来て見給へ——到底とても今の家内と一緒に居られるもんぢや無い。第一、八人の親子が奈何して食へよう。其や是やを考へると、我輩の口から娘に帰れとは言はれないぢやないか。噫、あゝ辛抱、辛抱——出来ることを辛抱するのは辛抱でも何でも無い、出来ないところを辛抱するのが真ほんたう実の辛抱だ。行け、行け、心を毅しつかり然持て。奥様といふものも附いて居る。その人の傍に居て離れないやうにしたら、よもや無理なことを言懸けられもしまいたとへ先方さきが親らしい行為をしない迄までも、これまで育て、貰つた恩義も有る。一旦蓮華寺の娘と成つた以上は、奈何どんな辛いことがあらうと決して家うちへ帰るな。そこを勤め抜くのが孝行といふもの

だ。とまあ、すか賺したりはげま励したりして、無理やりに娘を追立て、や
つたよ。思へば可愛さうなものさ。あゝ、あゝ、斯ういふ時に先
の家内が生きて居たならば——』

敬之進の顔には真実と苦痛とが表れて、眼は涙の為に濡れ輝い
た。成程、左様言はれて見ると、丑松も思ひ当ることがないでも
ない。あの蓮華寺の内部なかの光景ありさまを考へると、何か斯う暗い雲が
隅のところに蟠わだかまつて、絶えず其が家庭の累わづらひを引起もす原因で、住職
と奥様とは無言の間に闘つて居るかのやう——たと譬へば一方で日が
あたつて、楽しい笑声の聞える時でも、必ず一方には暴風雨あらしが近ちかづ
いて居る。斯ういふ感想かんじは毎日のやうに有つた。唯其は何処の家うち
庭ちにも克よくある角突合つのづきあひ——まあ、住職と奥様とは互ひに仏弟子

のことだから、言はゞ高尚な夫婦喧嘩、と丑松も想像して居たので、よもや其雲のわだかまりがお志保の上にあらうとは思ひ設けなかつたのである。奥様がわざ／＼磊落らいらくらしく装よそほつて、剽軽へうきんなことを言つて、男のやうな声を出して笑ふのも、其為だらう。紅涙なんだよが克よくお志保の顔を流れるのも、其為だらう。どうもをかしくと思つて居たことは、この敬之進の話で悉すつかり皆読めたのである。

長いこと二人は悄しよんぼり然ぼりとして、互ひに無言の儘まで相さしむかひ対かひに成つて居た。

第拾七章

(一)

勘定を済まして笹屋を出る時、始めて丑松は月給のうちを幾許いくくら袂たもとに入れて持つて来たといふことに気が着いた。それは銀貨で五十錢ばかりと、外に五円紙幣さつ一枚あつた。父の存命中は毎月為替かはせで送つて居たが、今は其を為るす必要も無いかはり、帰省の当時大分費つかつた為に斯このか金かねが大切のものに成つて居る、彼かれ是これを考へると左様無暗には費はれない。しかし丑松の心は暗かつた。自分のことよりは敬之進の家族を憐むのが先で、兎とに角省かく吾の卒業する

迄、月謝や何かは助けて遣りたい——斯う考へるのも、畢竟はお志保を思ふからであつた。

酔つて居る敬之進を家まで送り届けることにして、一緒に雪道を歩いて行つた。慄へるやうな冷い風に吹かれて、寒威に抵抗する力が全身に満ち溢れると同時に、丑松はまた精神の内部の方でもすこし勇気を回復した。並んで一緒に歩く敬之進は、と見ると——釣竿を忘れずに昇いで来た程、其様に酷く酔つて居るとも思はれないが、しかし不規則な、覚束ない足許で、彼方へよろ／＼、是方へよろ／＼、どうかすると往来の雪の中へ倒れかゝりさうに成る。『あぶない、あぶない。』と丑松が言へば、敬之進は僅かに身を支へて、『ナニ、雪の中だ？ 雪の中、結構——下

手な畳の上よりも、結句是方このほうが氣樂だからね。』これには丑松も持余しよして了つて、若し是雪このゆきの中で知らずに寝て居たら奈何どうするだらう、斯う思ひやつて身を震はせた。斯の老朽な教育者の末路、彼の不幸なお志保の身の上——まあ、丑松は敬之進親子のことばかり思ひつゞけ乍ら随ついて行つた。

敬之進の住居すまひといふは、どこから見ても古い粗造な農家風の草屋。もとは城側しろわきの広小路といふところに士族屋敷の一つを構へたとか、其はもうずつと旧い話ふるで、下高井の方から歸つて来た時に、今のところへ移住うつりすしたのである。入口の壁の上に貼付けたものは、克よく北信の地方に見かける御札で、烏の群れて居る光景さまを表してある。土壁には大根の乾葉ひば、唐たうがらし辛らしなどを懸け、粗末な

よし
葦簾の雪がこひもしてあつた。丁度其日は年貢ねんぐを納めると見え、
入口の庭むしろに菘むしろを敷きつめ、堆うづだか高く盛上げたもみ糶もみは土間一ぱいに成つ
て居た。丑松は敬之進を助け乍ら、一緒に敷居を跨いで入つた。
裏木戸のところしもべに音作、それと見て駈寄つて、いつまでも昔忘れ
ぬしもべ従僕らしい挨拶。

『今日は御年貢おねんぐを納めるやうにツて、奥様おくさんも仰りおつしややして——は
い、弟の奴も御手伝おんてでんひに連れて参じやした。』

斯ういふ言葉を夢中に聞捨て、敬之進は其処へ倒れて了つた。
奥の方では、怒気いかりを含んだ細君の声と一緒に、叱られて泣く子供
の声も起る。『何したんだ、どういふもんだ——めた(幾度も)
悪戯わるさしちや困るぢやないかい。』といふ細君の声を聞いて、音作

は暫時しばらく耳を澄まして居たが、臆やがて思ひついたやうに、

『まあ、それでも旦那さんの酔ひなすつたことは。』

と旧むかしの主人を憐んで、助け起すやうにして、暗い障子しやうじの蔭へ

押隠した。其時、口笛を吹き乍ら、入つて来たのは省吾である。

『省吾さん。』と音作は声を掛けた。『御願ひでゴはすが、彼の

地ぢやうや親さんなまり（ぢおやの訛なまり、地主の意）になあ、早く来て下さいッ

て、左様言つて来て御呉おくんなんしよや。』

(一一)

間も無く細君も奥の方から出て来て、其処に酔倒れて居る敬之

進が復たく、丑松の厄介に成つたことを知つた。周囲まはりに集る子供等は、いづれも母親の思惑おもはくを憚はげつて、互に顔を見合せたり、慄ふるへたりして居た。流石さすがに丑松の手前もあり、音作兄弟も来て居るので、細君は唯夫を尻目に掛けて、深い溜息を吐くばかりであつた。毎度敬之進が世話に成ること、此頃こゝろはまた省吾が結構なものを頂いたこと、其それや是これやの礼を述べ乍ら、せかくと立つたり座すわつたりして話す。丑松は斯細君このの気の短い、忍耐こゝろへじやう力の無い、愚痴なところも感じ易いところも総すべて外部そとへ露あらはれて居るやうな——まあ、四十女に克よくある性質みを看みて取つた。丁度そこへ来て、座りもせず、御辞儀もせず、恍とほけ顔がほに立つた小娘は、斯細君の二番目の児である。

『これ、お作や。御辞儀しねえかよ。其そん様に他ひと様のさまの前で立つて
るもんぢや無えぞよ。奈何どうして吾家うちの児は斯かう行儀が不良わるいだら
ず——』

といふ細君の言葉などを聞入れるお作では無かつた。見るから
して荒くれた、男の児のやうな小娘。これがお志保の異はらちがひ母の
姉きやうだい妹まいとは、奈何しても受取れない。

『まあ、斯このこ児は兄きやうだい姉ちゆう中ちゆうで一番仕様が無え——もうすこし母
さんの言ふことを聞くやうだと好いけれど。』

と言はれても、お作は知らん顔。何時の間にかぷいと駈出して
行つて了つた。

午後の光は急に射入つて、暗い南窓の小障子も明るく、幾年張

替へずにあるかと思はれる程の紙の色は赤黒く煤すすけて見える。

『あゝ日が照あつて来た、』と音作は喜んで、『先刻迄さつきは雪模様でしたが、こりや好い塩梅あんばいだ。』斯う言ひ乍ら、弟と一緒に年貢ししたくの準備を始めた。薄く黄ばんだ冬の日は斯の屋根の下の貧苦と零落とを照したのである。一度農家を訪れたものは、今丑松が腰掛けて居る板敷の炉辺ろばたを想像することが出来るであらう。其処は家族が食事をする場処でもあれば、客を款待もてなす場処でもある。庭は又、勝手でもあり、物置でもあり、仕事場でもあるので、表から裏口へ通り抜けて、すくなくも斯の草屋の三分の一を土間で占めた。彼方あちらの棚には茶碗、皿小鉢、油燈カンテラ等を置き、是方こちらの壁には鎌を懸け、種物の袋を釣るし、片隅に漬物桶、炭俵。台所の道具

は耕作の器械と一緒にしてごちやく雑然置並べてあつた。高いところに鶏のねぐら埒も作り付けてあつたが、其は空巢も同然で、鳥らしいものが飼はれて居るとは見えなかつたのである。

斯この草屋はお志保の生れた場処で無いまでも、蓮華寺へ貰はれて行く前、敬之進の言葉によれば十三の春まで、斯の土壁の内に育てられたといふことが、酷ひどく丑松の注意を引いた。部屋は三間ばかりも有るらしい。軒の浅い割合に天井の高いのと、外部そとに雪がこひのして有るので、何となく家うちの内が薄暗く見える。壁は粗末な茶色の紙で張つて、年々とし／＼の暦と錦絵とが唯一つの装飾といふことに成つて居た。定めしお志保も斯の古壁の前に立つて、幼い眼に映る絵の中の男をとこ女をんなを自分の友達のやうに眺めたので

あらう。思ひやると、其昔のことも^{おもかげ}倂に描かれて、言ふに言はれぬ可^{なつか}懐しさを添へるのであつた。

其時、草色の真綿帽子を冠り、糸織の綿入羽織を着た、五十余^{あまり}の男が入口のところに^{あらは}顕れた。

『地^{ぢやうや}親さんでやすよ。』

と省吾は呼ばゝり乍ら入つて来た。

(三)

地主といふは町会議員の一人。陰気な、無^{ぶあいそ}愛相な、極^{ごく}くく口
の重い人で、一寸丑松に^{あしやく}会^あ釈^{しやく}した後、黙つて炉の火に身を温め

た。斯かういふ性質たちの男は克く北部の信州人の中にあつて、理わけ由も無しに怒つたやうな顔付をして居るが、其実怒つて居るのも何でも無い。丑松は其を承知して居るから、格別気にも留めないで、年貢したくの準備いそがに多忙しい人々の光景ありさまを眺め入つて居た。いつぞや郊外で細君や音作夫婦が秋の収穫とりのいれに従事したことは、まだ丑松の眼こにあり／＼残つて居る。斯の庭こに盛上げた粃この小山は、實まに一ひと年の労働とせの報酬むくいなので、今その大部分を割いて高い地代を払はうとするのであつた。

十六七ばかりの娘が入つて来て、筵ますの上に一升ます櫛ますを投げて置いて、驢やがてまた駈出やがして行つた。細君は庭の片隅に立つて、腰のところへ左の手をあてがひ乍ら、さも／＼つまらないと言つたやう

な風に眺めた。泣いて屋外そとから入つて来たのは、斯の細君の三番目の児、お末と言つて、五歳いっさいに成る。何か音作に言ひなだめられて、お末は尚なほく々身を慄ふるはせて泣いた。頭から肩、肩から胷まで、泣きじやくりする度に震へ動いて、言ふことも能くは聞取れない。

『今に母さんが好い物を呉れるから泣くなよ。』

と細君は声を掛けた。お末は噉すり上げ乍ら、母親の側へ寄つて、

『手が冷い——』

『手が冷い？ そんなら早く行つて炬燵おこたへあたれ。』

斯かう言つて、凍つた手を握にぎりしめながら、細君はお末を奥の方へ連れて行つた。

其時は地主も炉辺ろべたを離れた。真綿帽子を襟巻がはりにして、袖

口と袖口とを鳥の羽翅はがひのやうに搔合せ、半ば顔を埋めうづ、我と我身を抱き温め乍ら、庭に立つて音作兄弟の仕度するのを待つて居た。
 『奈何どうでござんすなあ、粩もみのこしらへ具合は。』

と音作は地主の顔を眺める。地主の声は低くて、其返事が聞取れない位。聴やがて、白い手を出して粩すくを抄つて見た。一粒口の中へ入れて、掌てのひら上のをも眺め乍ら、

『空穀しひなが有るねえ。』

と冷ひやゝか酷かな調子で言ふ。音作は寂しさうに笑つて、

『空穀でも無いでやす——雀には食はれやしたが、しかし坊主（稲の名）が九分で、目は有りやすよ。まあ、一俵造こしらへて掛けて見やせう。』

六つばかりの新しい俵が其処へ持出された。音作は箕みの中へ粃すくひいを抄入れて、其を大きな円形の一斗いへうつす。地主は『とぼ（丸棒）を取つて糶の上を平に撫なで量はかつた。俵の中へは音作の弟が詰めた。尤も弟は黙つて詰めて居たので、兄の方は焦躁もどかしがつて、『貴様これへ入れろ——声掛けなくちや御年貢のやうで無くて不可いけない。』と自分の手に持つ箕みを弟の方へ投げて遣つた。

『さあ、沢山どつしり入れろ——一わたりよ、二わたりよ。』

と呼ぶ音作の声が起つた。一俵につき大糶で六斗づゝ、外に小糶で——娘が来て投げて置いて行つたので、三升づゝ、都合六斗三升の粃の俵が其処へ並んだ。

『六俵で内取に願ひやせう。』

と音作はさんだはら俵蓋をおほ掩ひ冠せ乍ら言つた。地主は答へなかつた。目を細くして無言で考へて居るは、胸の中にそろばん十露盤を置いて見らしい。何時いつの間にか音作の弟が大きなはかり秤を持つて来た。一俵掛けて、兄弟してうんと力を入れた時は、二人とも顔がまっか真紅に成る。地主ははかり衡の平均になつたのを見澄まして、おもり錘の糸を動かないやうに持添へ乍ら調べた。

『いくら有やす。』と音作はのぞ覗き込んで、『むゝ、ではうでえ出放題あるは——』

『十八貫八百——是はたまげ魂消た。』と弟も調子を合せる。

『十八貫八百あれば、まあ、好い糶です。』と音作は腰を延ばして言つた。

『しかし、俵へうにもある。』と地主はどこまでも不満足らしい顔付。

『左様さようです。俵にも有やすが、其は知れたもんです。』

といふ兄の言葉に附いて、弟はまた独ひとりごと語のやうに、

『俺おらがところは十八貫あれば好いだ。』

『なにしろ、坊主九分交りといふ艱がらですからなあ。』

斯う言つて、音作は愚しい目付をしながら、傲然がうぜんとした地主

の顔色を窺うかがひ澄ましたのである。

(四)

斯この光景ありさまを眺めて居た丑松は、可憐あはれな小作人の境涯きやうがいを思

ひやつて——たとひ仮令音作が正直な百姓かたぎ氣質から、いつまでも昔の恩義を忘れないで、斯うして零落した主人の為に尽すとしても——
なかく細君の瘦腕で斯の家族が養ひきれるものでは無いといふことを感じた。お志保が苦しいから帰りたいと言つたところで、
『第一、八人の親子が奈何どうして食へよう』と敬之進も酒の上で泣いた。噫あゝ、実に左様さうだ。奈何どうして斯様こんなところへ歸つて来られよう。丑松は想像して慄ふるへたのである。

『まあ、御茶一つお上り。』と音作に言はれて、地主は寒さうに炉辺へ急いだ。音作も腰に着けた煙草入を取出して、立つて一服やり乍ら、

『六俵の二斗五升取ですか。』

『二斗五升ツてことが有るもんか。』と地主は嘲あざけつたやうに、

『四斗五升よ。』

『四斗……』

『四斗五升ぢや無いや、四斗七升だ——左様だ。』

『四斗七升?』

斯ういふ二人の問答を、細君は黙つて聞いて居たが、もうく
堪こらへきれないと言つたやうな風に、横合から話を引取つて、

『音さん。四斗七升の何のと言はないで、何卒どうか悉すつかり皆ぢやうや地親さん

の方へ上げて了つて御呉おくんなんしよや——私わしはもう些すこし少も要いりやせ

ん。』

『其そん様な、奥様おくさんのやうな。』と音作は呆あきれて細君の顔を眺める。

思へば小作人の心根も可傷なものである。万事は音作のはからひ、酒の肴には蒟蒻と油揚げの煮付、それに漬物を添へて出す位なもの。聽て音作は盃を薦めて、『冷ですよ、爛ではごはせんよ——地親さんは是方でいらつしやるから。』

と言はれて、始めて地主は微笑を泄したのである。

其時まで、丑松は細君に話したいと思ふことがあつて、其を言ふ機会も無く躊躇して居たのであるが、斯うして酒が始つて見ると、何時是地主が歸つて行くか解らない。御相伴に一つ、と差される盃を辞退して、ついと炉辺を離れた。表の入口のところへ省吾を呼んで、物の蔭に佇立み乍ら、袂から取出したのは例の紙

の袋に入れた金である。丑松は斯う言つた。後刻あとで斯の金を敬之進に渡して呉れ。それから家の事情で退校させるといふ敬之進の話もあつたが、月謝や何かは斯このなか中から出して、是非今迄通りに学校へ通はせて貰ふやうに。『いゝかい、君、解つたかい。』と添加つけたして、それを省吾の手に握らせるのであつた。

『まあ、君は何といふ冷い手をしてゐるだらう。』

斯う言ひ乍ら、丑松は少年の手を堅く握り締めた。熟じつと其の邪あ気どけない顔付を眺めた時は、あのお志保の涙に霑ぬれた清すしい眸ひとみを思出さずに居られなかつたのである。

敬之進の家を出て歸つて行く道すがら、すくなくも丑松はお志保の為に尽したことを考へて、自分で自分を慰めた。蓮華寺の山門に近ちかづいた頃は、灰色の雲が低く垂下つて来て、復またた雪になるらしい空模様であつた。蒼さうぜん然とした暮色は、たゞさへ暗い丑松の心に、一層の寂しさ味気なさを添へる。僅かに天の一方にあたつて、遠く深く紅くれなゐを流したやうなは、沈んで行く夕日の反射したのであらう。

宵の勤おつとめ行の鉦かねの音は一種異様な響を丑松の耳に伝へるやうに成つた。それは最早もとう世離れた精しやうじや舎やの声のやうにも聞えなかつた。今は梵ぼんおん音の難有ありがたさ味も消えて、唯同じ人間世界の情慾の声、

といふ感想かんじしか耳の底に残らない。丑松は彼の敬之進の物語を思ひ浮べた。住職を卑しむ心は、卑しむといふよりは怖れる心が、胸を衝ついて湧上つて来る。しかしお志保は其程香かのある花だ、其程人をひきつける女らしいところが有るのだ、と斯う一方から考へて見て、いよ／＼其人を憐むといふ心地こころもちに成つたのである。

蓮華寺の内部なかの光景ありさま——今は丑松も明に其真相を讀むことが出来た。成程なるほど、左様言はれて見ると、それとない物の端はしにも可い傷たましい事實は顕れて居る。左様言はれて見ると、始めて丑松が斯の寺へ引越して来た時のやうな家庭の温あた、かさ味あじは何時の間にか無くなつて了つた。

二階へ通ふ廊下のところで、丑松はお志保に逢あつた。蒼あをざめて

死んだやうな女の顔付と、悲哀の溢れた黒眸とは——たとひ黄昏時の仄かな光のなかにも——直に丑松の眼に映る。お志保も亦た不思議さうに丑松の顔を眺めて、丁度喪心した人のやうな男の様子を注意して見るらしい。二人は眼と眼を見交したばかりで、黙つて会釈して別れたのである。

自分の部屋へ入つて見ると、最早そこいらは薄暗かつた。しかし丑松は洋燈を点けようとも為なかつた。長いこと茫然として、独りで暗い部屋の内に座つて居た。

(六)

『瀬川さん、御勉強ですか。』

と声を掛けて、奥様が入つて来たのは、それから二時間ばかり経つてのこと。丑松の机の上には、日々にちじくの思想かんがへを記入かきいれる綴たの教案簿たなどが置いてある。黄ばんだ洋燈ランプの光は夜の空気を寂さみしさうに照して、思ひ沈んで居る丑松の影を古い壁の方へ投げた。煙草たばこのけむりも薄く籠こもつて、斯この部屋の内を朦朧もうろうと見せたのである。

『何卒どうぞ私に手紙を一本書いて下さいませんか——濟すみませんが。』

と奥様は、用意して来た巻紙状袋を取出し乍ら、丑松の返事を待つて居る。其様子が何となく普通たゞでは無い、と丑松も看みて取つて、

『手紙を?』と問ひ返して見た。

『長野の寺院てらに居る妹のところへ遣やりたいのですがね、』と奥様は少許言すこしいひよど淀よどんで、『実は自分で書かうと思ひまして、書きかけては見たんです。奈何どうも私共の手紙は、唯長くばかり成つて、肝かんじん心の思ふことが書けないものですから。寧いっそこりや貴方あなたに御願ひ申して、手短く書いて頂きたいと思ひまして——どうして女の手紙といふものは斯う用もちが達らないのでせう。まあ、私は何枚書き損つたか知れないんですよ——いえ、なに、其様そんなに煩むづかしい手紙でも有ません。唯解るやうに書いて頂きさへすれば好いのですから。』

『書きませう。』と丑松は簡短に引受けた。

このこたへ
斯 答

に力を得て、奥様は手紙の意味を丑松に話した。一身
上のことに就いて相談したい——是手紙着次第、是非々々々々
出掛けて来るやうに、と書いて呉れと頼んだ。蟹沢から飯山迄は
便船も発つ、もし舟が嫌なら、途中迄車に乗つて、それから雪橇
に乗替へて来るやうに、と書いて呉れと頼んだ。今度といふ今度
こそは絶念めた、自分はもう離縁する考へで居る、と書いて呉れ
と頼んだ。

『他の人とは違つて、貴方ですから、私も斯様なことを御願ひす
るんです。』と言ふ奥様の眼は涙ぐんで来たのである。『訳を御
話しませんから、不思議だと思つて下さるかも知れませんが——』
『いや。』と丑松は対手の言葉を遮つた。『私も薄々聞きました』

——実は、あの風間さんから。』

『ホウ、左様さうですか。敬之進さんから御聞きでしたか。』と言つて、奥様は考深い目付をした。

『尤もつとも、左様委敷くはしい事は私も知らないんですけれど。』

『あんまり馬鹿々々しいことで、貴方なぞに御話するのも面目ない。』と奥様は深い溜息を吐つき乍ら言つた。『噫あゝ、吾寺うちの和尚さんも彼年齢あのとしに成つて、未まだ今度のやうなことが有るといふは、全く病氣なんですよ。病氣でも無くて、奈何して其様な心地こころもちに成るもんですか。まあ、瀬川さん、左様ぢや有ませんか。和尚さんもね、彼病氣さへ無ければ、実に気分の優しい、好い人物ひとなんです——申分の無い人物なんです——いえ、私は今だつても和尚さ

んを信じて居るんですよ。』

(七)

『奈何して私は斯う物に感じ易いんでせう。』と奥様は啜り上げた。『今度のやうなことが有ると、もう私は何も手に着きません。一体、和尚さんの病氣といふのは、今更始つたことでも無いんです。先住は早く亡くなりまして、和尚さんが其後へ直つたのは、未だ漸く十七の年だつたといふことでした。丁度私が斯寺へ嫁いて来た翌々年、和尚さんは西京へ修業に行くことに成ましてね——まあ、若い時には能く物が出来ると言はれて、諸国から本山

へ集る若手の中でも五本の指に数へられたさうですよ——それで私は、其頃未だ生きて居た先住の匹つれあひ偶と、今寺内に居る坊さんの父親おとつさんと、斯う三人でお寺を預つて、五年ばかり留守居をしたことが有りました。考へて見ると、和尚さんの病氣はもう其頃から起つて居たんですね。相手の女といふは、西京うを たな あぶらの魚の棚、油の小路こうぢといふところにある宿屋の総領娘、といふことが知れたもんですから、さあ、寺内の先せんの坊さんも心配して、早速西京へ出掛けて行きました。其時、私は先住の匹つれあひ偶にも心配させないやうに、檀家だんかの人達の耳へも入れないやうにツて、奈何どんなに独りで氣を揉もみましたか知れません。漸やつとのこと、お金を遣つて、女の方の手を切らせました。そこで和尚さんも真ほんたう実に懲こりなければ成らな

いところす。ところが持つて生れた病は仕方の無いもので、それから三年経つて、今度は東京にある真宗の学校へ勤めることに成ると、復た病気が起りました。』

手紙を書いて貰ひに来た奥様は、用をそつちのけにして、種々並べたり訴へたりし始めた。淡泊したやうでもそこは女の持前で、聞いて貰はずには居られなかつたのである。

『尤も、』と奥様は言葉を続けた。『其時は、和尚さんを独りで遣つては不可といふので——まあ学校の方から月給は取れるし、留守中のことは寺内の坊さんが引受けて居て呉れるし、それに先住の匹偶も東京を見たいと言ふもんですから、私も一緒に随い行つて、三人して高輪のお寺を仕切つて借りました。其処か

ら学校へは何程も無いんです。克く和尚さんは二本榎の道路を通ひました。丁度その二本榎に、若い未亡人の家があつて、斯人は真宗に熱心な、教育のある女でしたから、和尚さんも法話を頼まれて行きくしましたよ。忘れもしません、其女といふは背のすらりとした、白い優しい手をした人で、御墓参りに行くところを私も見掛けたことが有ます。ある時、其未亡人の噂が出ると、和尚さんは鼻の先で笑つて、「む、彼女か——彼様なひねくれた女は仕方が無い」と酷く譏すぢや有ませんか。奈何でせう、瀬川さん、其時は最早和尚さんが関係して居たんです。何時の間にか女は和尚さんの種を宿しました。さあ、和尚さんも蒼く成つて了つて、「実は濟まないことをした」と私の前に手を突いて、

謝罪あやまつたのです。根が正直な、好い性質の人ですから、悪かつたと思ふと直に後悔する。まあ、傍はたで見ても気の毒な位。「頼む」と言はれて見ると、私も放擲うっちゃつては置かれませんかから、手紙で寺内の坊さんを呼寄せました。其時、私の思ふには、「あゝ是これは私に子が無いからだ。若し子供でも有つたら一層和尚さんも真面目な気分おなんに御成なさるだらう。寧いづそ其女の児を引取つて自分の子にして育てようかしら。」と斯う考へたり、ある時は又、「みすく私が傍に附いて居乍ら、其様そんな女に子供迄出来たと言はれては、第一私が世間へ恥かしい。いかに言つても情ないことだ。今度こそは別れよう。」と考へたりしたんです。そこがそれ、女といふものは気の弱いもので、優しい言葉の一つも掛けられる

と、今迄の事は最早もう悉すっかり皆忘れて了ふ。「あゝ、御氣の毒だ——私が居なかつたら、奈何どんなに不自由を成さるだらう。」とまあ私も思ひ直したのですよ。間も無く女は和尚さんの子を産落しました。つきたらず月不足で、おまけ加之に乳が無かつたものですから、まるふたつき満一月とは其児も生きて居なかつたさうです。和尚さんが学校を退ひくことに成つて、飯山へ帰る迄の私の心配は何程どれほどだつたでせう——丁度、今から十年前のことでした。それからといふものは、和尚さんも本気に成ましたよ。月に三度の説教は欠かさず、檀家の命日には必ず御経を上げに行く、近在廻りは泊り掛で出掛ける——さあ、檀家の人達も悉すっかり皆信用して、四年目の秋には本堂の屋根の修繕も立派に出来上りました。彼様あゝいふ調子で、ずっと今迄進んで来た

ら、奈何どんなにか好からうと思ふんですけど、少許すこし羽振が良くなる
 と直すぐに物に飽きるから困る。倦怠あきが来ると、復また病気が起る。そ
 りやあもう和尚さんの癖なんですからね。あゝ、男といふものは
 恐おそしいもので、彼あれほど程平常物の解つた和尚さんで有ながら、病氣
 となると何の判別みさかへも着かなくなる。まあ瀬川さん、考へて見て
 下さい。和尚さんも最早もう五十一ですよ。五十一にも成つて、未だま
 其様そのんな気で居るかと思ふと、実に情ないぢや有ませんか。成程なるほど
 ——今こんにち日飯山あたりの御寺様おてらさんで、女狂ひを為しないやうなもの
 は有やしません。ですけれど、茶屋女を相手に為するとか、妾狂ひ
 を為るとか言へば、またそこにも有る。あのお志保おもひに想おもひを懸ける
 なんて——私は呆あきれて物も言へない。奈何どう考へて見ても、其様な

——そればかりで、私は斯こ様な離縁んなぞを思ひ立つたんですもの。』

(八)

誠まごころ意籠こる奥様の述懐を聞取つて、丑松は望みの通りに手紙の文句を認しためてやつた。幾度か奥様は口の中で仏の名を唱となへ乍ながら、これから将来さきのことを思ひ煩わづらふといふ様子に見えるのであつた。『おやすみ。』

といふ言葉を残して置いて置いて奥様が出て行つた後、丑松は机の側に倒れて考へて居たが、何時の間にかぐつすり寝込んで了つた。

寝ても、寝ても、寝足りないとはいふ風で、斯うして横になれば直に死んだ人のやうに成るのが此頃の丑松の癖である。のみならず、深いところへ陥落おちいるやうな睡眠ねむりで、目が覚めた後は毎時頭いっもが重かつた。其晩も矢張同じやうに、同じやうな仮寝うたゝねから覚めて、暫時しばし茫然ぼらんやりとして居たが、聽やがて我に歸つた頃は、もう遅かつた。雪は屋外そとに降り積ると見え、時々窓の戸にあたつて、はた／＼と物の崩れ落ちる音より外には、寂しんとして声一つしない、それは沈ひつそ静りとした、氣の遠くなるやうな夜——無論人の起きて居る時刻では無かつた。階下したでは皆な寝たらしい。不図ふと、何か斯う忍しのび音ねに泣くやうな若い人の声が細々と耳に入る。どうも何処から聞えるのか、其は能よく解らなかつたが、まあ楼はしごだん梯だんの下あたり、暗

い廊下の辺でももあるか、誰かしら声を呑む様子。尚能く聞くと、
 北の廊下の雨戸でも明けて、屋外を眺めて居るものらしい。あゝ
 ——お志保だ——お志保の鳴咽だ——斯う思ひ附くと同時に、
 言ふに言はれぬ恐怖と哀憐とが身を襲ふやうに感ぜられる。尤
 も、丑松は半分夢中で聞いて居たので、つと立上つて部屋の内を
 歩き初めた時は、もう其声が聞えなかつた。不思議に思ひ乍ら、
 浮足になつて耳を澄ましたり、壁に耳を寄せて聞いたりした。終
 には、自分で自分を疑つて、あるひは聞いたと思つたのが夢で
 もあつたか、と其音の實か虚かすらも判断が着かなくなる。暫
 時、丑松は腕組をして、油の尽きて来た洋燈の火を熟視り乍ら、
 茫然とそこに立つて居た。夜は更ける、心は疲れる、臆て押入か

ら寝道具を取出した時は、自分で自分の為ることを知らなかつた位。急に烈しく睡ねむけ気が襲さして来たので、丑松は半分眠り乍ら寝衣ねまきを着更へて、直に復また感おぼえ覚の無いところへ落ちて行つた。

第拾八章

(一)

毎まいとし年降る大雪が到頭たうとうやつて来た。町々の人家も往來もすべて白く埋没うづもれて了つた。昨夜一晩のうちに四尺余あまりも降積るといふ

勢で、急に飯山は北国の冬らしい光景ありさまと変つたのである。

斯うなると、最早雪もの捨てどころが無いので、往来の真中へ高く積上げて、雪の山を作る。両側は見事に削り落したり、叩き付けたりして、すこし離れて眺めると、丁度長い白壁のやう。上へくと積上げては踏み付け、踏み付けては又た積上げるやうに為るので、軒丈のきだけばかりの高さに成つて、対むかひあふ家と家とは屋根ひさしと廂ひさしとしか見えなくなる。雪の中から掘出された町——譬たとへば飯山の光景ありさまは其であつた。

高柳利三郎と町会議員の一人が本町の往来で出逢であつた時は、盛んに斯雪を片付ける最中で、雪搔ゆきかきを手にした男をとこ女をんなが其処そこ此処ここに群むらり集つて居た。『どうも大降りがいたしました。』といふ

極りの挨拶を交換とりかはした後、廳やがて別れて行かうとする高柳を呼留めて、町會議員は斯う言出した。

『時に、御聞きでしたか、彼の瀬川といふ教員のことを。』

『いゝえ。』と高柳は力を入れて言つた。『私は何も聞きません』

『彼の教員は君、調里てうり（穢多の異名）だつて言ふぢや有ませんか』

『調里？』と高柳は驚いたやうに。

『呆あきれたねえ、是これには。』と町會議員も顔を皺しかめて、『尤もつとも、種いろく々な人の口から伝つたはり伝つた話で、誰が言出したんだか能よく解らない。しかし保証するとまで言ふ人が有るから確たしか実だ。』

『誰ですか、其保証人といふのは——』

『まあ、其は言はずに置かう。名前を出して呉れては困ると先方さきの人も言ふんだから。』

斯う言つて、町會議員は今更のやうに他の秘密ひとを泄もらしたといふ顔付。『君だから、話す——秘密にして置いて呉れなければ困る。』と呉々も念を押しした。高柳はまた口唇を引歪めて、意味ありげな冷あざわらひ笑を浮べるのであつた。

急いで別れて行く高柳を見送つて、反あべこべ対な方角へ一町ばかりも歩いて行つた頃、斯この噂うはさず好きな町會議員は一人の青年に遭であ遇つた。秘密に、と思へば思ふ程、猶なほ々其を私語さぐやかずには居られなかつたのである。

『彼の瀬川といふ教員は、君、是だつて言ひますぜ。』

と指を四本出して見せる。尤も其意味が相手には通じなかつた。『是だつて言つたら、君も解りさうなものぢや無いか。』と町会議員は手を振り乍ら笑つた。

『どうも解りませんね。』と青年は訝しいぶかさうな顔付。

『了解さとりの悪い人だ——それ、調里のことを四足しそくと言ふぢやないか。はゝゝゝ。しかし是は秘密だ。誰にも君、斯様なことは話さずに置いて呉れ給へ。』

念を押して置いて、町会議員は別れて行つた。

丁度、そこへ通りかゝつたのは、学校へ出勤しようとする準教員であつた。それと見た青年は駈寄つて、大雪の挨拶。何時の間

にか二人は丑松の噂を始めたのである。

『是これはまあ極ごくくく秘密なんだが——君だから話すが——』と青年は声を低くして、『君の学校に居る瀬川先生は調里ださうだねえ。』

『其さ——僕もある処で其話を聞いたがね、未だ半信半疑で居る。』と準教員は相手の顔を眺め乍ら言つた。『して見ると、いよ／＼事実かなあ。』

『僕は今、ある人に逢つた。其人が指を四本出して見せて、彼の教員は是だと言ふぢやないか。はてな、とは思つたが、其意味が能く解らない。聞いて見ると、四足といふ意味なんださうだ。』

『四足？ 穢多のことを四足と言ふかねえ。』

『言はあね。四足と言つて解らなければ、「よつあし」と言つたら解るだらう。』

『むゝ——「よつあし」か。』

『しかし、驚いたねえ。狡かうくわつ 猾わつ な人間もあればあるものだ。能よ

く今日いままで隠蔽かくして居たものさ。其そん様な穢けしいものを君等の学校

で教員にして置くなつて——第一怪しからんぢやないか。』

『叱しッ』

と周章あわてゝ制するやうにして、急に準教員は振返つて見た。其

時、丑松は矢張学校へ出勤するところと見え、深く外ぐわいたう 套たうに身

を包んで、向ふの雪の中を夢見る人のやうに通る。何か斯う物を

考へくゝ歩いて行くといふことは、其の沈み勝ちな様子を見ても

知れた。暫時しばらく丑松も佇立たちどまつて、熟じつと是方こちらの二人を眺めて、聽て足早に学校を指して急いで行つた。

(二)

雪に妨げられて、学校へ集る生徒は些すくな少かつた。何時いつまで経たつても授業を始めることが出来ないので、職員のあるものは新聞縦覧所へ、あるものは小使部屋へ、あるものは又た唱歌の教室に在る風琴の周圍まはりへ——いづれも天の与へた休暇やすみとして斯の雪の日を祝ふかのやうに、思ひくゝの園わに集つて話した。

職員室の片隅にも、四五人の教員が大火鉢を圍繞とりまいた。例の準

教員が其中へ割込んで入つた時は、誰が言出すともなく丑松の噂を始めたのであつた。時々盛んな笑聲が起るので、何事かと来て見るものが有る。終しまひには銀之助も、文平も来て、斯はなしの談話の仲間に入つた。

『奈何どうです、土屋君。』と準教員は銀之助の方を見て、『吾われ儕くは今、瀬川君のことに就いて二派に別れたところですよ。君は瀬川君と同窓の友だ。さあ、君の意見を一つ聞かせて呉れ給へ。』

『二派とは？』と銀之助は熱心に。

『外でも無いんですがね、瀬川君は——まあ、近頃世間で噂のあのやうな素性の人に相違ないといふ説と、いや其様な馬鹿なことが有るものかといふ説と、斯う二つに議論が別れたところさ。』

『一寸待つて呉れ給へ。』と薄鬚うすひげのある尋常四年の教師が冷静な調子で言つた。『二派と言ふのは、君、少許すこし穩当で無いだらう。未だ、左様さうだとも、左様では無いとも、断言しない連中が有るのだから。』

『僕は確に其様なことは無いと断言して置く。』と体操の教師が力を入れた。

『まあ、土屋君、斯ういふ訳です。』と準教員は火鉢まはりの周囲に集る人々の顔を眺め廻して、『何故なぜ其様な説が出たかといふに、そこには種々議論も有つたがね、要するに瀬川君の態度が頗る怪しい、といふのがそもく始りさ。吾儕われの中に新平民が居るなんて言触らされて見給へ。誰だつて憤慨するのは至あたりまへ当ぢやない

か。君始め左様だらう。一体、世間で其様なことを言触らすといふのが既にもう吾儕職員を侮辱してるんだ。だからさ、若し瀬川君に疚やましいところが無いものなら、吾儕と一緒に成つて怒りさうなものぢやないか。まあ、何とか言ふべきだ。それも言はないで、彼様あして黙つて居るところを見ると、奈何どうしても隠して居るとしか思はれない。斯う言出したものが有る。すると、また一人が言ふには——』と言ひかけて、臆やがて思付いたやうに、『しかし、まあ、止さう。』

『何だ、言ひかけて止すやつが有るもんか。』と背の高い尋常一年の教師が横よこ鎗やりを入れる。

『やるべし、やるべし。』と冷笑の語氣を帯びて言つたのは、文

平であつた。文平は準教員の背後うしろに立つて、巻煙草を燻ふかし乍ら聞いて居たのである。

『しかし、戯じようだん語ごぢや無いよ。』と言ふ銀之助の眼は輝いて来

た。『僕などは師範校時代から交際つきあつて、能く人物を知つて居る。彼の瀬川君が新平民だなんて、其様そんなことが有つて堪るものか。

一体誰が言出したんだか知らないが、若もし世間に其様な風評が立つやうなら、飽あくまで迄も僕は弁護して遣らなけりやならん。だつて、

君、考へて見給へ。こりや真面目まじめな問題だよ——茶を飲むやうな尋あたりまへ常じょうな事とは些少すこし訳が違ふよ。』

『無論さ。』と準教員は答へた。『だから吾われ儕くも頭を痛めて居るのさ。まあ、聞き給へ。ある人は又た斯ういふことを言出した。

瀬川君に穢多の話を持掛けると、必ず話頭を他へ転して了ふ。い

や、転して了ふばかりぢや無い、直に顔色を変へるから不思議だ

——其顔色と言つたら、迷惑なやうな、周章あわてたやうな、まあ何

ともかとも言ひやうが無い。それそこが可笑をかしいぢやないか。吾

儕と一緒に成つて、「むゝ、調里坊てうりつぼうかあ」とかなんとか言ふや

うだと、誰も何とも思やしないだけだ。』

『そんなら、君、あの瀬川丑松といふ男に何処どこか穢多らしい特色

が有るかい。先づ、其からして聞かう。』と銀之助は肩を動ゆすつた。

『なにしろ近頃非常に沈んで居られるのは事実だ。』と尋常四年

の教師は、腮あごの薄鬚うすひげを搔上げ乍ら言ふ。

『沈んで居る?』と銀之助は聞咎きとがめて、『沈んで居るのは彼あのを

男とこの性質せいしやうさ。それだから新平民だとは無論言はれない。新平民でなくたつて、沈鬱ちんうつな男はいくらかも世間にあるからね。』

『穢多たいたには一種特別な臭氣におひが有ると言ふぢやないか——嗅いで見たら解るだらう。』と尋常一年の教師は混返まぜかへすやうにして笑つた。

『馬鹿なことを言給へ。』と銀之助も笑つて、『僕だつていくらかも新平民を見た。あの皮膚の色からして、普通の人間とは違つて居らあね。そりやあ、もう、新平民か新平民で無いかは容貌かほつきで解る。それに君、社会よのなかから度外のけものにされて居るもんだから、性質が非常に僻ひがんで居るサ。まあ、新平民の中から男らしい毅しつかり然かりした青年なぞの産れやうが無い。どうして彼様あんなな手合が学問といふ

方面に頭を擡もちあげられるものか。其から推おしたつて、瀬川君のことは解りさうなものぢやないか。』

『土屋君、そんなら彼の猪子蓮太郎といふ先生は奈何どうしたものだ。』と文平は嘲あざけるやうに言つた。

『ナニ、猪子蓮太郎？』と銀之助は言淀いひよどんで、『彼の先生は——彼あれは例外さ。』

『それ見給へ。そんなら瀬川君だつても例外だらう——はゝゝゝゝ。はゝゝゝゝ。』

と準教員は手を拍うつて笑つた。聞いて居る教員等たちも一緒になつて笑はずには居られなかつたのである。

其時、斯の職員室の戸を開けて入つて来たのは、丑松であつた。

急に一同口を噤つぐんで了しまつた。人々の視線は皆な丑松の方へ注ぎ集つた。

『瀬川君、奈何どうですか、御病気は——』

と文平は意味ありげに尋ねる。其調子がいかにも皮肉に聞えたので、準教員は傍に居る尋常一年の教師と顔を見合せて、思はず互ほゝゑみに微笑もらを泄もらした。

『難ありがた有う。』と丑松は何気なく、『もうすつかり快よくなりました。』

『風邪かぜですか。』と尋常四年の教師が沈おちつ着き澄あまして言つた。

『はあ——ナニ、差たいしたことも無かつたんです。』と答へて、

丑松は氣を変へて、『時に、勝野君、生あいにく憎にく今日は生徒がが集まら

なくて困つた。斯この様子では土屋君の送別会も出来さうも無い。折角準備したくしたのにツて、出て来た生徒は張合の無いやうな顔してゐる。』

『なにしろ是このゆき雪だからねえ。』と文平は微笑んで、『仕方が無い、延ばすサ。』

斯かういふ話をして居るところへ、小使がやつて来た。銀之助は丑松の方にばかり気を取られて、小使の言ふことも耳へ入らない。それと見た体操の教師は軽く銀之助の肩を叩いて、

『土屋君、土屋君——校長先生が君を呼んでるよ。』

『僕を?』銀之助は始めて気が付いたのである。

(三)

校長は郡視学と二人で応接室に居た。銀之助が戸を開けて入つた時は、二人差向ひに椅子に腰懸けて、何か密議を凝こらして居るところであつた。

『おゝ、土屋君か。』と校長は身を起して、そこに在る椅子を銀之助の方へ押おし薦すすめた。『他ほかの事で君を呼んだのでは無いが、実は近頃世間に妙な風評が立つて——定めし其はもう君も御承知のことだらうけれど——彼様あして町の人とが左ひだりや右みぎ言かふものを、黙つて見ても居られないし、第一斯かういふことが余り世間へ伝播ひろると、終しまには奈何どな結果を来すかも知れない。其に就いて、茲こゝに居られ

る郡視学さんも非常に御心配なすつて、態々斯の雪に尋ねて来て下すつたんです。兎に角、君は瀬川君と師範校時代から御一緒ではあり、日頃親しく往来もして居られるやうだから、君に聞いたら是事は一番好く解るだらう、斯う思ひましてね。』

『いえ、私だつて其様なことは解りません。』と銀之助は笑ひ乍ら答へた。『何とでも言はせて置いたら好いでせう。其様な世間で言ふやうなことを、一々氣にして居たら際限が有ますまい。』
『しかし、左様いふものでは無いよ。』と校長は一寸郡視学の方を向いて見て、臆て銀之助の顔を眺め乍ら、『君等は未だ若いから、其程世間といふものに重きを置かないんだ。幼稚なやうに見えて、馬鹿にならないのは、世間さ。』

『そんなら町の人^{うはさ}が噂するからと言つて、根も葉も無いやうなことを取上げるんですか。』

『それ、それだから、君等は困る。無論我輩だつて其様なことを信じないさ。しかし、君、考へて見給へ。万^{まんざら}更火の気の無いところ^{はず}に煙の揚る筈も無からうぢやないか。いづれ是には何か疑はれるやうな理由が有つたんでせう——土屋君、まあ、君は奈何^{どう}思ひます。』

『奈何しても私には左様思はれません。』

『左様言へば、其迄だが、何かそれでも思ひ当る事が有さうなものだねえ。』と言つて校長は一段声を低くして、『一体瀬川君は近頃非常に考へ込んで居られるやうだが、何が原因^{もと}で彼様^あ憂鬱に

成つたんでせう。以前は克く吾輩の家へもやつて来て呉れたツけが、此節はもう薩張さつぱり寄付かない。まあ吾儕われと一緒に成つて、はな談したり笑つたりするやうだと、御互ひに事情も能く解るんだけれど、彼様あして独りで考へてばかり居られるもんだから——ホラ、訳を知らないものから見ると、何かそこには後暗い事でも有るやうに、つい疑はなくても可い事まで疑ふやうに成るんだらうと思ふのサ。』

『いえ。』と銀之助は校長の言葉を遮さへぎつて、『実は——其には他に深い原因が有るんです。』

『他に?』

『瀬川君は彼様いふ性質たちですから、なか／＼口へ出しては言ひま

せんがね。』

『ホウ、言はない事が奈何して君に知れる？』

『だつて、言葉で知れなくなつて、行為おこなひの方で知れます。私は長く交際つきあつて見て、瀬川君が種々いろくに変つて来た径路みちすぢを多少知つて居ますから、奈何どうして彼様考へ込んで居るか、奈何して彼様憂鬱うゑふに成つて居るか、それはもう彼の君の為することを見ると、自然と私の胸には感じる事が有るんです。』

斯かういふ銀之助の言葉は深く相手の注意を惹いた。校長と郡視学の二人は巻煙草ふかを燻ふかし乍ら、奈何どう銀之助が言出すかと、黙つて其話を待つて居たのである。

銀之助に言はせると、丑松が憂鬱うゑふに沈んで居るのは世間で噂うはさす

るやうなことゝ全く関係の無い——実は、青年の時代には誰しも有勝ちな、其胸の苦痛くるしみに烈しく悩まされて居るからで。意中の人が敬之進の娘といふことは、正に見当が付いて居る。しかし、丑松は彼様いふ気象の男であるから、其を友達に話さないのみか、相手の女にすらも話さないらしい。それそこが性分じつで、熟と黙つて堪こらへて居て、唯敬之進とか省吾とか女の親兄弟に当る人々の為に種々さま／＼なことを為して遣やつて居る——まあ、言はないものは、せめて尽して、それで心を慰めるのであらう。思へば人の知らない悲哀かなしみを胸に湛しみへて居るのに相違ない。尤もも、自分は偶然なことからして、斯ういふ丑松の秘密かみづを感じ得かんいた。しかも其はつい近頃のことと有ると言出した。『といふ訳で、』と銀之助は額へ手

を当てゝ、『そこへ気が付いてから、瀬川君の為ることは悉皆すつかり読めるやうに成ました。どうも可笑しいをか〜と思つて見て居まましたツけ——そりやあもう、辻褄つじつまの合はないやうなことが沢山たくさん有つたものですから。』

『成程なるほどねえ。あるひは左様いふことが有るかも知れない。』
 と言つて、校長は郡視学と顔を見合せた。

(四)

廳やがて銀之助は応接室を出て、復またもとの職員室へ来て見ると、丑松と文平の二人が他の教員に取囲とりまかれ乍しきりら頻しきりに大火鉢の側で言

争つて居る。黙つて聞いて居る人々も、見れば、同じやうに身を入れて、あるものは立つて腕組したり、あるものは机に倚より凭かゝつて頬杖ほづえを突いたり、あるものは又たぐる／＼室内を歩き廻つたりして、いづれも熱心に聞耳を立てゝ居る様子。のみならず、丑松の様子を窺うかがひ澄まして、穿鑿さぐりを入れるやうな眼付したのもあれば、半信半疑らしい顔付の手合もある。銀之助は談話はなしの調子を聞いて、二人が一方ならず激昂して居ることを知つた。

『何を君等は議論してるんだ。』

と銀之助は笑ひ乍ら尋ねた。其時、人々の背後うしろに腰掛け、手帳を繰り繙ひろげ、丑松や文平の肖顔にがほを写生し始めたのは準教員であつた。

『今ね、』と準教員は銀之助の方を振向いて見ながら、『猪子先生のことで、大分やかましく成つて来たところさ。』と言つて、一寸鉛筆の尖端さきを舐なめて、復また微笑ほくそみ乍ら写生に取懸つた。

『なにも其様そんなにやかましいことぢや無いよ。』斯う文平は聞咎きくとがめたのである。『奈何どうして瀬川君は彼の先生あの書いたものを研究する氣に成つたのか、其を僕は聞いて見たばかりだ。』

『しかし、勝野君の言ふことは僕よに能く解らない。』丑松の眼は燃え輝いて居るのであつた。

『だつて君、いづれ何か原因が有るだらうぢやないか。』と文平は飽あく迄までも皮肉に出る。

『原因とは？』丑松は肩を動ゆすり乍ら言つた。

『ぢやあ、斯う言つたら好からう。』と文平は真面目に成つて、
『譬へば——まあ僕は例を引くから聞き給へ。こゝに一人の男が
有るとしたまへ。其男が発狂して居るとしたまへ。普通なみのものが
其様な発狂者を見たつて、それほど深い同情は起らないね。起ら
ない筈はずさ、別に是方こちらに心を傷いためることが無いのだもの。』
『むゝ、面白い。』と銀之助は文平と丑松の顔を見比べた。

『ところが、若しこゝに酷ひどく苦んだり考へたりして居る人があつ
て、其人が今の発狂者を見たとしたまへ。さあ、思ひつめた可傷いたま
しい光景ありさまも目に着くし、絶望の為に瘦せた体格も目に着くし、
日影に悄しよんぼり然として死といふことを考へて居るやうな顔付も目
に着く。といふは外でも無い。発狂者を思ひやる丈だけの苦痛くるしみが矢

張是方こちらにあるからだ。其処だ。瀬川君が人生問題などを考へて、猪子先生の苦んで居る光景ありさまに目が着くといふのは、何か瀬川君の方にも深く心を傷めることが有るからぢや無からうか。』

『無論だ。』と銀之助は引取つて言つた。『其が無ければ、第一読んで見たつて解りやしない。其だあね、僕が以前まへから瀬川君に言つてるのは。尤も瀬川君が其を言へないのは、僕は百も承知だがね。』

『何故なぜ、言へないんだらう。』と文平は意味ありげに尋ねて見る。『そこが持つて生れた性分サ。』と銀之助は何か思出したやうに、『瀬川君といふ人は昔から斯うだ。僕なぞはもうずん／＼暴露さらけだして、蔵しまつて置くといふことは出来ないがなあ。瀬川君の言はな

いのは、何も隠す積りで言はないのぢや無い、性分で言へないのだ。はゝゝゝゝ、御氣の毒な訳さねえ——苦むやうに生れて来たんだから仕方が無い。』

斯う言つたので、聞いて居る人々は意味も無く笑出した。暫しばらく時準く教員も写生の筆を休やめて眺めた。尋常一年の教師は又、丑松の背後うしろへ廻つて、眼を細くして、密そつと臭氣におひを嗅かいで見るやうな真似をした。

『実は——』と文平は巻煙草の灰を落し乍ら、『ある処から猪子先生の書いたものを借りて来て、僕も読んで見た。一体、彼の先あ生は奈何どういふ種類の人だらう。』

『奈何いふ種類とは？』と銀之助は戯れるやうに。

『哲学者でもなし、教育家でもなし、宗教家でもなし——左様かと言つて、普通の文学者とも思はれない。』

『先生は新しい思想家さ。』銀之助の答は斯うであつた。

『思想家？』と文平は嘲つたやうに、『ふゝ、僕に言はせると、空想家だ、夢想家だ——まあ、一種の狂人だ。』

其調子がいかに可笑しかつた。盛んな笑声が復た聞いて居る教師の間に起つた。銀之助も一緒に成つて笑つた。其時、憤慨の情は丑松が全身の血潮に交つて、一時に頭脳の方へ衝きかゝるかのやう。蒼ざめて居た頬は遽然熱して来て、眶も耳も紅く成つた。

(五)

『む、勝野君は巧いことを言つた。』と斯う丑松は言出した。
『彼の猪子先生などは、全く君の言ふ通り、一種の狂人さ。だ
つて、君、左様ぢやないか——世間体の好いやうな、自分で自分
に諂諛ふやうなことばかり並べて、其を自伝と言つて他に吹
聴するといふ今の世の中に、狂人でも無くて誰が冷汗の出
るやうな懺悔なぞを書かう。彼の先生の手から職業を奪取つた
のも、彼様いふ病氣に成る程の苦痛を嘗めさせたのも、畢竟斯
の社会だ。其社会の為に涙を流して、満腔の熱情を注いだ著述
をしたり、演説をしたりして、筆は折れ舌は爛れる迄も思ひ焦れ

て居るなんて——斯こん様な大白痴おほたはけが世の中に有らうか。はゝゝゝ
ゝ。先生の生涯は実に懺悔しやうがいの生涯しやうがい。空想家と言はれたり、
夢想家と言はれたりして、甘んじて其冷笑を受けて居る程の懺悔
の生涯しやうがい。」「奈何どんな苦しい悲しいことが有らうと、其を女々しく
訴へるやうなものは大丈夫と言はれない。世間の人の睨にらむ通りに
睨にらませて置いて、黙つて狼のやうに男らしく死ぬ。」——其が先
生の主義なんだ。見給へ、まあ其主義からして、もう狂人きちがひ染み
てるぢやないか。はゝゝゝ。』

『君は左様激するから不可いかん。』と銀之助は丑松を慰撫なだめるやうに言
つた。

『否いや、僕は決して激しては居ない。』斯かう丑松は答へた。

『しかし。』と文平は冷笑つて、『猪子蓮太郎だなんて言つたつて、高が穢多ぢやないか。』

『それが、君、奈何した。』と丑松は突込んだ。

『彼様な下等人種の中から碌なものゝ出よう筈が無いさ。』

『下等人種？』

『卑劣しい根性を持つて、可厭に癖んだやうなことばかり言ふも

のが、下等人種で無くて君、何だらう。下手に社会へ突出らう

なんて、其様な思想を起すのは、第一大間違さ。獣皮いぢり

もして、神妙に引込んでるのが、丁度彼の先生なぞには適当し

て居るんだ。』

『はゝゝゝゝ。して見ると、勝野君などは開化した高尚な人間で、

猪子先生の方は野蛮な下等人種だと言ふのだね。はゝゝゝゝ。

僕は今迄、君も彼の先生も、同じ人間だとばかり思つて居た。』

『止せ。止せ。』と銀之助は叱るやうにして、『其様な議論を爲たつて、つまらんぢやないか。』

『いや、つまらなかない。』と丑松は聞入れなかつた。『僕は君、^{これ}是でも真面目まじめなんだよ。まあ、聞き給へ——勝野君は今、猪子先生のことを野蛮だ下等だと言はれたが、實際御説の通りだ。こりや僕の方が勘違ひをして居た。左様だ、彼の先生も御説の通りに^{かは}獣皮いぢりでもして、神妙にして引込んで居れば好いのだ。それさへして黙つて居れば、彼様な病氣なぞに^か罹りはしなかつたのだ。その身体のことことも忘れて了つて、一日も休まずに社会と戦つて居

るなんて——何といふ狂^{きちがひ}人の態^{さま}だらう。噫^{あゝ}、開化した高尚な人は、^{あらかじ}予め金牌を胸に掛ける積りで、教育事業などに従事して居る。野蛮な、下等な人種の悲しさ、猪子先生などは其様な成功を夢にも見られない。はじめからもう野末の露と消える覚悟だ。死を決して人生の戦場の上つて居るのだ。その慨然とした心意気は——はゝゝゝ、悲しいぢやないか、勇しいぢやないか。』

と丑松は上歯^{あは}を齧^あして、大きく口を開いて、身を慄^{ふる}はせ乍ら歎^すりな咽^うくやうに笑つた。鬱^う勃^{ぼつ}とした精神は体軀^{からだ}の外部^{そと}へ満ち溢^{あふ}れて、額は光り、頬の肉も震へ、憤怒と苦痛とで紅く成つた時は、其の粗野な沈鬱な容貌^{いづも}が平素^{もつと}よりも一層男性らしく見える。銀之助は不思議さうに友達の顔を眺めて、久し振で若く剛^{つよ}く活々とし

た丑松の内部なかの生命いのちに触れるやうな心地こころもちがした。

対手が黙つて了しまつたので、丑松もそれぎり斯こん様な話をしなかつ

た。文平はまた何時までも心の激昂おきを制おさへきれないといふ様子。

頭かへごなしに罵のゝしらうとして、反かへつて丑松の為に言いひまく敗まられた気味が

有るので、軽けいべつ蔑べつと憎にくしみ悪あくとは猶なほさら更容貌えいぼうの上に表れる。『何だ

——この穢多けいべつめが』とは其の怒いかり気を帯びた眼が言つた。聽きて文平

は尋常一年の教師を窓の方へ連れて行つて、

『奈どう何どうだい、君、今の談話はなしは——瀬川君は最早もう悉すつかり皆みな自分で自分

の秘密ひみつを自白じはくしたぢやないか。』

斯かう私語さぐやいて聞きかせたのである。

丁度準教員は鉛筆写生を終つた。人々はいづれも其周圍まわりへ集つ

た。

第拾九章

(一)

この大雪を衝ついて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、といふ噂うはさは学校に居る丑松の耳にまで入つた。高柳一味の党派は、斯この風説に驚かされて、今更のやうに防ぼうぎよ禦を始めたとやら。有権者の訪問、推薦状の配付、さては秘密の勧誘などが

頻しきりに行はれる。壮士の一ひとむれ群は高柳派の運動を助ける為に、既に町へ入込んだともいふ。選挙の上の争あらしひ鬪は次第に近いて来たのである。

其日は宿直の当番として、丑松銀之助の二人が学校に居残るところに成つた。尤もつとも銀之助は拗よんどころない用事が有ると言つて出て行つて、日暮になつても未だ歸つて来なかつたので、日誌と鍵とは丑松が預つて置いた。丑松は絶えず不安の状ありさま態——暇もださへあれば宿直室の畳の上に倒れて、独りで考へたり悶もだえたりしたのである。冬の一日ひとひは斯ういふ苦しい心づかひのうち過ぎた。入いりあひ相を告げる蓮華寺の鐘の音が宿直室の玻ガラスまど璃窓に響いて聞える頃は、殊ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、何となくお志保の身の上も案じられる。

もし奥様の決心がお志保の方に解りでもしたら——あるひは、最も早解つて居るのかも知れない——左様なると、娘の身として其を黙つて視て居ることが出来ようか。と言つて、奈何して彼の継母のところなぞへ歸つて行かれよう。

『あゝ、お志保さんは死ぬかも知れない。』

と不図斯ういふことを想ひ着いた時は、言ふに言はれぬ哀傷が身を襲ふやうに感ぜられた。

待つても、待つても、銀之助は歸つて来なかつた。長い間丑松は机に倚凭つて、洋燈の下にお志保のことを思浮べて居た。斯うして種々の想像に耽り乍ら、悄然と五分心の火を熟視めて居るうちに、何時の間にか疲労が出た。丑松は机に倚凭つた

儘、思はず知らずそこへ寝て了つたのである。

其時、お志保が入つて来た。

(二)

こゝは学校では無いか。奈何して斯様なところへお志保が尋ねて来たらう。と丑松は不思議に考へないでもなかつた。しかし其疑惑は直に釈けた。お志保は何か言ひたいことが有つて、わざと自分のところへ逢ひに来たのだ、と斯う気が着いた。あの夢見るやうな、柔嫩な眼——其を眺めると、お志保が言はうと思ふことはありくと読まれる。何故、父や弟にばかり親切にして、

自分には左様疎々しいのであらう。何故、同じ屋根の下に住む程の心やすだては有乍ら、優しい言葉の一つも懸けて呉れないのであらう。何故、其口唇は言ひたいことも言はないで、堅く閉ぢ塞つて、恐怖と苦痛とで慄へて居るのであらう。

斯ういふ楽しい問は、とは言へ、長く継かなかつた。何時の間にか文平が入つて来て、用事ありげにお志保を促した。終には羞しがるお志保の手を執つて、無理やりに引立て、行かうとする。『勝野君、まあ待ち給へ。左様君のやうに無理なことを為なくつても好からう。』

と言つて、丑松は制止めるやうにした。其時、文平も丑松の方を振返つて見た。二人の目は電光のやうに出逢つた。

『お志保さん、貴方あなたに好事いゝことを教へてあげる。』

と文平は女の耳の側へ口を寄せて、丑松が隠蔽かくして居る其恐しい秘密を私語さぐやいて聞かせるやうな態度を示した。

『あツ、其様そのんなことを聞かせて奈何どうする。』

と丑松は周章あわて、取縄とりすがらうとして——不凶ふと、眼が覚めたのである。

夢であつた。斯う我に帰ると同時に、苦痛くるしみは身を離れた。しかし夢の裡なかの印象は尚残つて、覚めた後までも恐怖おそれの心が退かない。室内を眺め廻すと、お志保も居なければ、文平も居なかつた。丁度そこへ風呂敷包を擁かへ乍ら、戸を開けて入つて来たのは銀之助であつた。

『や、どうも大変遅くなつた。瀬川君、まだ君は起きて居たのかい——まあ、今夜は寝て話さう。』

斯う声を掛ける。聽やがて銀之助はがたく靴の音をさせ乍ながら、洋服の上衣を脱いで折釘へ懸けるやら、襟カラを取つて机の上に置くやら、または無造作にズボン釣を外すやらして、『あゝ、其内に御別れだ。』と投げるやうに言つた。八畳ばかり畳の敷いてあるは、克く二人の友達が枕を並べて、当番の夜を語り明したところ。今は銀之助も名残惜なごりしいやうな氣に成つて、着た儘の襯衣シャツとズボン下とを寝衣ねまきがはりに、宿直の蒲団の中へ笑ひ乍ら潜り込んだ。『斯かうして君と是部屋に寝るのも、最早もう今夜限りだ。』と銀之助は思出したやうに嘆息した。『僕に取つては是これが最終の宿直だ。』

『左様かなあ、最早御別れかなあ。』と丑松も枕に就き乍ら言つた。

『何となく斯う今夜は師範校の寄宿舎にでも居るやうな気がする。妙に僕は昔を懐おもひだ出した——ホラ、君と一緒に勉強した彼の時代のことなぞを。噫あゝ、昔の友達は皆な奈何して居るかなあ。』と言つて、銀之助はすこし気を変へて、『其は左様と、瀬川君、此こなひ頃だから僕は君に聞いて見たいと思ふことが有るんだが——』

『僕に?』

『まあ、君のやうに左様黙つて居るといふのも損な性分だ。どうも君の様子を見るのに、何か非常に苦しい事が有つて、独りで考へて独りで煩はんもん悶もんして居る、としか思はれない。そりやあもう君

が言はなくなつて知れるよ。實際、僕は君の為に心配して居るんだからね。だからさ、其様に苦しいことが有るものなら、少許打開けて話したらば奈何だい。随分、友達として、力に成るといふことも有らうぢやないか。』

(三)

『何故、君は左様だらう。』と銀之助は同情の深い言葉を続けた。『僕が斯ういふ科学書生で、平素其方の研究にばかり頭を突込んでるものだから、あるひは僕見たやうなものに話したつて解らない、と君は思ふだらう。しかし、君、僕だつて左様冷

い人間ぢや無いよ。他の手疵ひとてきずを負つて苦んで居るのを、傍はたで観て嘲笑わらつてるやうな、其様そんな残酷な人間ぢや無いよ。』

『君はまた妙なことを言ふぢやないか、誰も君のことを残酷だと言つたものは無いのに。』と丑松は臥うつぶし俯ふしになつて答へる。

『そんなら僕にだつて話して聞かせて呉れ給へな。』

『話せとは？』

『何も左様君のやうに蔵つんで居る必要は有るまいと思ふんだ。言はないから、其で君は余計に苦しいんだ。まあ、僕も、一時は研究々々で、あまり解剖的にばかり物事を見過ぎて居たが、此頃に成つて大に悟つたことが有る。それからずつと君の心こころもち情もちも解るやうに成つた。何故君がああ蓮華寺へ引越したか、何故君が其

様に独りで苦んで居るか——僕はもう何もかも察して居る。』

丑松は答へなかつた。銀之助は猶言葉^{なほ}を継いで、

『校長先生なぞに言はせると、斯ういふことは三文の価値^{ねうち}も無いね。何ぞと言ふと、直に今の青年の病氣だ。しかし、君、考へて見給へ。彼先生だつて一度は若い時も有つたらうぢやないか。自分等は鼻唄で通り越して置き乍ら、吾^{われ}儕^{かみしも}にばかり袴を着て歩けなんて——はゝゝゝ、まあ君、左様^{さう}ぢや無いか。だから僕は言つて遣つたよ。今日^{あの}彼先生と郡視学とで僕を呼付けて、「何故^{なぜ}瀬川君は彼様^あ考へ込んで居るんだらう」と斯う聞くから、「其^あは貴方^{なた}等も覚えが有るでせう、誰だつて若い時は同じことです」と言つて遣つたよ。』

『フウ、左様かねえ、郡視学が其様なことを聞いたかねえ。』

『見給へ、君があまり沈んでるもんだから、つまらないことを言はれるんだ——だから君は誤解されるんだ。』

『誤解されるとは？』

『まあ、君のことを新平民だらうなんて——実に途方も無いことを言ふ人も有れば有るものだ。』

『はゝゝゝ。しかし、君、僕が新平民だとしたところで、一向差支は無いちやないか。』

長いこと室の内には声が無かつた。細目に点けて置いた洋燈ランプの光は天井へ射して、円く朦朧もろうろと映つて居る。銀之助は其を熟視みつめ乍ら、種々いろく空想を描いて居たが、あまり丑松が黙つて了つて身動

きも為ないので、終しまひには友達ともは最早眠つたのかとも考へた。

『瀬川君、最早ね睡たのかい。』と声を掛けて見る。

『いゝや——未まだ起きてる。』

丑松は息を殺して寢床の上に慄ふるへて居たのである。

『妙に今夜は眠られない。』と銀之助は両手を懸蒲団の上に載せて、『まあ、君、もうすこし話さうぢやないか。僕は青年時代の

悲かなしみ哀あはれといふことを考へると、毎時いづも君の為に泣きたく成る。愛と

名——あゝ、有為な青年を活すのも其だし、殺すのも其だ。實際、

僕は君の心情を察して居る。君の性分としては左様さうあるべきだと

も思つて居る。君の慕つて居る人に就いても、蔭かげなが乍なら僕は同情

を寄せて居る。其だから今夜は斯様こんなことを言出しもしたんだが、

まあ、僕に言はせると、あまり君は物を六ヶ敷考へ過ぎて居るやうに思はれるね。其処だよ、僕が君に忠告したいと思ふことは。

だつて君、左様ぢや無いか。何も其様に独りで苦んでばかり居なかつても好からう。友達といふものが有つて見れば、そこはそれ相談の仕様によつて、随分道も開けるといふものさ——「土屋、斯う為たら奈何だらう」とか何とか、君の方から切出して呉れると、及ばず乍ら僕だつて自分の力に出来る丈のことは尽すよ。』

『あゝ、左様言つて呉れるのは君ばかりだ。君の志は実に難有い。』と丑松は深い溜息を吐いた。『まあ、打開けて言へば、君の察して呉れるやうなことが有つた。確かに有つた。しかし——』

『ふむ。』

『君はまだ克く事情を知らないから、其で左様言つて呉れるんだらうと思ふんだ。実はねえ——其人は最早死んで了つたんだよ。』
 復た二人は無言に歸つた。やゝしばらくして、銀之助は声を懸けて見たが、其時はもう返事が無いのであつた。

(四)

銀之助の送別会は翌日の午前から午後二時頃迄へ掛けて開
 らかれた。昼を中へ挿んだは、弁当がはりに鮎の折詰を出したか
 らで。教員生徒はかはる／＼立つて別離の言葉を述べた。余興
 も幾組があつた。多くの無邪気な男女の少年は、互ひに悲ん

だり笑つたりして、をさなごころ稚心にも斯の日を忘れまいとするのであつた。

斯かういふ中にも、独り丑松ばかりは気が気で無い。何を見たか、何を聞いたか、ほん殆ど其が記憶にも留らなかつた。唯頭脳あたまの中に残るものは、教員や生徒の騒しい笑声、余興のある度に起る拍手の音、または斯の混雑の中にも時々意味有げな様子して盗むやうに自分の方を見る人々の眼付——まあ、絶えず誰かに附つけ狙ねらはれて居るやうな気がして、其方の心配と屈託おそれと恐怖とで、見たり聞いたりすることには何の興味も好奇心も起らないのであつた。どうかすると丑松は自分の身体ですら自分のものゝやうには思はないで、何もかも忘れて、心一つに父の戒を憶出して見ることもあつ

た。『見給へ、土屋君は必定^{きつと}出世するから。』斯う私語^{さしや}き合ふ教員同志の声が耳に入るにつけても、丑松は自分の暗い未来に思比べて、すくなくも穢多^{せいた}なぞには生れて来なかつた友達の身の上を羨んだ。

送別会が済^すむ、直に丑松は学校を出て、急いで蓮華寺を指して歸つて行つた。蔵裏^{くら}の入口の庭のところ^{ところ}に立つて、奥座敷の方を眺めると、白衣を着けた一人の尼が出たり入つたりして居る。一昨日の晩頼まれて書いた手紙のことを考へると、彼が奥様の妹といふ人であらうか、と斯^かう推測が付く。其時下女の袈裟治が台処の方から駈寄つて、丑松に一枚の名刺を渡した。見れば猪子蓮太郎としてある。袈裟治は言葉を添へて、今朝斯^この客が尋ねて来た

こと、宿は上町の扇屋にとつたとのこと、宜敷よろしくと言置いて出て行つたことなどを話して、まだ外にでつぷり肥つた洋服姿の人も表に立つて居たと話した。『むゝ、必定きつと市村さんだ。』と丑松はひとりご独語ひとりごちた。話の様子では確かに其らしいのである。

『直に、これから尋ねて行つて見ようかしら。』とは続いて起つて来た思想かんがへであつた。人目を憚はげるといふことさへなくば、無論尋ねて行きかけたのである。鳥のやうに飛んで行きかけたのである。『まあ、待て。』と丑松は自分で自分を制おしとゞ止めた。彼の先輩と自分との間には何か深い特別の關係でも有るやうに見られたら、奈何しよう。書いたものを愛読してさへ、既に怪しいと思はれて居るではないか。まして、うっかり尋ねて行つたりなん

かして——もしや——あゝ、待て、待て、日の暮れる迄待て。暗くなつてから、人知れず宿屋へ逢ひに行かう。斯う用心深く考へた。

『それは左様と、お志保さんは奈何したらう。』と其人の身の上を氣遣ひ乍ら、丑松は二階へ上つて行つた。始めて是寺へ引越して来た当時のことは、不図、胸に浮ぶ。見れば何もかも變らずにある。古びた火鉢も、粗末な懸物も、机も、本箱も。其に比べる
と人の境涯きやうがいの頼み難いことは。丑松はあの鷹匠たかしやう町の下宿から放逐された不幸な大日向を思出した。丁度斯の蓮華寺から歸つて行つた時は、提灯ちやうちんの光に宵闇の道を照し乍ら、一挺の籠が昇がれて出るところであつたことを思出した。附添の大男を思

出した。門口で『御機嫌よう』と言つた主婦を思出した。罵つた
 り騒いだりした下宿の人々を思出した。終にはあの『ざまあ見や
 がれ』の一言を思出すと、慄然とする冷い震動が頸窩から
 背骨の髓へかけて流れ下るやうに感ぜられる。今は他事とも思
 はれない。噫、丁度それは自分の運命だ。何故、新平民ばかり其
 様に卑められたり辱められたりするものであらう。何故、新平民ば
 かり普通の人間の仲間入が出来ないのであらう。何故、新平民ば
 かり斯の社会に生きながらへる権利が無いのであらう——人生は
 無慈悲な、残酷なものだ。

斯う考へて、部屋の内を歩いて居ると、唐紙の開く音がした。
 其時奥様が入つて来た。

(五)

いかにも落胆がっかりしたやうな様子し乍ら、奥様は丑松の前に座すわつた。『斯こん様なことになりやしないか、と思つて私も心配して居たんです。』と前置をして、さて奥様は昨宵ゆうべの出来事を丑松に話した。聞いて見ると、お志保は郵便を出すと言つて、日暮頃に門を出たつきり、もう歸つて来ないとのこと。箆たんす筒の上に載せて置いて行つた手紙は奥様へ宛てたもので——それは真心籠めて話をするやうに書いてあつた、ところ／＼涙にじに染んで読めない文字すらもあつたとのこと。其中には、自分一人の為に種さま々々な迷惑

を掛けるやうでは、義理ある両親に申訳が無い。聞けば奥様は縁の決心とやら、何卒其丈（どうかそれだけ）は思ひとまつて呉れるやうに。十三の年から今日迄（こんにちまで）受けた恩愛は一生忘れまい。何時までも自分は奥様の傍に居て親と呼び子と呼ばれたい心は山々。何事も因縁（いんねん）づくと思ひ諦めて呉れ、許して呉れ——『母上様へ、志保より』と書いてあつた、とのこと。

『尤も——』と奥様は襦袢（じゆばん）の袖口で睚（まぶた）を押拭ひ乍ら言つた。

『若いものゝことですから、奈何な不量見を起すまいものでもない、と思ひましてね、昨夜一晚中私は眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させに遣りました。まあ、父親さんの方へ歸つて居るらしい、と言ひますから——』斯う言つて、氣を変へて、『長野

の妹も直に出掛けて来て呉れましたよ。来て見ると、斯ありさま光景でせう。どんなに妹も吃びつくり驚しましたか知れませんが。』奥様はもう啜すゝりあ上げて、不幸な娘の身の上を憐むのであつた。

可愛さうに、住すみな慣れたところを捨て、義理ある人々を捨て、雪を踏んで逃げて行く時の其心地こゝろもちは奈何であつたらう。丑松は奥様の談話はなしを聞いて、斯の寺を脱けて出ようと決心する迄のお志保のくるしみかなしみ、苦痛悲哀を思ひやつた。

『あゝ——和尚さんだつても眼が覚めましたらうよ、今度といふ今度こそは。』と昔むかし氣質かたぎな奥様は独語のやうに言つた。

『なむあみだぶ。』と口の中で繰返し乍ら奥様が出て行つた後、やゝしばらく丑松は古壁に倚よりか凭つて居た。哀憐あはれみと同情おもひやりと

は眼に見ない事こと実じを深い『生』の絵のやうに活して見せる。幾度か丑松はお志保の有様を——斯この寺の方を見かへり／＼急いで行く其有様を胸に描いて見た。あの釣と昼寝と酒より外には働く気のない老朽な父親、泣く喧嘩けんくわする多くの子供、就わけても中継母——まあ、あの家へ歸つて行つたとしたところで、果して是これから将来きど何なるだらう。『あゝ、お志保さんは死ぬかも知れない。』と不図昨夕と同じやうなことを思ひついた時は、言ふに言はれぬ悲こころしい心地もちになつた。

急に丑松は壁を離れた。帽子を冠り、楼はしご梯だんを下り、蔵裏の廊下を通り抜けて、何か用事ありげに蓮華寺の門を出た。

(六)

『自分は一体何処へ行く積りなんだらう。』と丑松は二三町も歩いて来たかと思はれる頃、自分で自分に尋ねて見た。絶望と恐怖とに手を引かれて、目的めあても無しに雪道を彷徨さまよつて行つた時は、半ば夢の心地であつた。往来には町の人々が群り集つて、春迄も消えずにある大雪の仕末で多忙いそがしさう。板いた葺ぶきの屋根の上に降積つたのが搔かき下おろされる度に、それがまた恐しい音して、往来の方へ崩れ落ちる。幾度か丑松は其音の為に驚かされた。そればかりでは無い、四五人集つて何か話して居るのを見ると、直に其を自分のことに取つて、疑はず怪まずには居られなかつたのである。

とある町の角のところ、塩物売る店の横手にあたつて、貼付けはりつけである広告が目についた。大幅な洋紙に墨黒々と書いて、赤い『インキ』で二重に丸なぞが付けてある。其下に立つて物見高く眺めて居る人々もあつた。思はず丑松も立留つた。見ると、市村弁護士の政見を発表する会で、蓮太郎の名前も演題も一緒に書並べてあつた。会場は上町の法福寺、其日午後六時から開会するとある。

して見ると、丁度演説会は家々の夕飯が済む頃から始まるのだ。丑松は其広告を読んだばかりで、聴てまた前と同じ方角を指して歩いて行つた。疑心暗鬼とやら。今は其を明あかるい日光ひかりの中に経験する。種々いろくな恐しい顔、嘲り笑ふ声——およそ人種の憎悪にくしみとい

ふことを表したものは、右からも、左からも、丑松の身をとりま圍繞いた。意地の悪い鳥は可厭いやに軽蔑けいべつしたやうな声を出して、得たり賢しと頭の上を啼ないて通る。あゝ、鳥ですら斯雪の上に倒れる人を待つのであらう。斯う考へると、浅猿あさましく悲しく成つて、すた／＼着さかなまち町の通りを急いだ。

何時の間にか丑松は千曲川ちくまがはの畔ほとりへ出て来た。そこは『下しもの渡し』と言つて、水に添ふ一帯の河原を下瞰みおろすやうな位置にある。渡しとは言ひ乍ら、船橋で、下高井の地方へと交通するところ。一筋暗い色に見える雪の中の道には旅人の群が往つたり来たりして居た。荷を積そりけた櫓も曳かれて通る。遠くつゞく河原かはらは一面の白い大海を見るやうで、蘆荻ろてきも、楊柳も、すべて深く隠れて了しまつ

た。高社、風原、中の沢、其他越後境へ連る多くの山々は言ふも
 更なり、対岸にある村落と杜の梢もりこずゑとすら雪に埋没うづもれて、幽かすかに鷄の
 鳴きかはす声が聞える。千曲川は寂しく其間を流れるのであつた。
 斯ういふ光景ありさまは今丑松の眼前めのまへに展ひらけた。平素ふだんは其程注意を
 引かないやうな物まで一々の印象が強く審くはしく眼に映つて見えた
 り、あるときは又、物の輪郭かたちすら朦朧もうろうとして何もかも同じやうに
 ぐら／＼動いて見えたりする。『自分は是これから将来さき奈何どうしよう—
 —何処へ行つて、何を為よう——一体自分は何の為このよに是世の中へ
 生れて来たんだらう。』思ひ乱れるばかりで、何の結末まとまりもつかな
 かつた。長いこと丑松は千曲川の水を眺め佇立たぐずんで居た。

(七)

一生のことを思ひ煩わづらひ乍ながら、丑松は船橋の方へ下りて行つた。
 誰か斯うしろう背後から追ひ迫つて来るやうな心地こころもちがして——無論そん其様
 なことの有るべき筈が無い、と承知して居乍ら——それで矢張安
 心が出来なかつた。幾度か丑松は背後を振返つて見た。時とする
 と、妙な眩暈めまひごうち心地に成つて、ふらくくと雪の中へ倒れ懸りさうに
 なる。『あゝ、馬鹿、馬鹿——もつと毅しつかり然しないか。』とは自
 分で自分を叱はげり厲ます言葉であつた。河原の砂の上を降り埋めた雪
 の小山を上つたり下りたりして、聽やがて船橋の畔へ出ると、白い両
 岸の光景ありさまが一層ひろ広が潤づと見渡される。目に入るものは何もか

も——そこゝに低く舞ふ餓^うた鳥の群、丁度川舟のよそほひに忙しさうな船頭、又は石油のいれものを提げて村を指して歸つて行く農夫の群、いづれ冬期の^{なりはひ}生活の^{くるしみ}苦痛を感ぜさせるやうな^{ありさま}光景ばかり。河の水は暗緑の色に濁つて、^{あざけ}嘲りつぶやいて、^{おぼ}溺れて死ぬと言はぬばかりの勢を示し乍ら、川上の方から矢のやうに早く流れて来た。

深く考へれば考へるほど、丑松の心は暗くなるばかりで有つた。^{この}斯社会から捨てられるといふことは、いかに言つても情ない。あゝ放逐——何といふ一生の^{はづかしさ}恥辱であらう。もしも左様なつたら、^ど奈何して是^{これ}から^う将来^{さき}生計^{くら}が立つ。何を食つて、何を飲まう。自分はまだ青年だ。望もある、願ひもある、野心もある。あゝ、あゝ、

捨てられたくない、非人あつかひにはされたくない、何時迄も世間の人と同じやうにして生きたい——斯う考へて、同族の受けた種々さま／＼の悲しい恥、世にある不道理な習慣、『番太』といふ乞食の階級よりも一層劣等な人種のやうに卑められた今日迄の穢多の歴史を繰返した。丑松はまた見たり聞いたりした事実を数へて、あるひは追はれたりあるひは自分で隠れたりした人々、父や、叔父や、先輩や、それから彼の下高井の大尽の心地を身に引比べ、終には娼婦あそびめとして秘密に売買されるといふ多くの美しい穢多の娘の運命などを思ひやつた。

其時に成つて、丑松は後悔した。何故、自分は学問して、正しいこと自由なことを慕ふやうな、其様な思想かんがへを持つたのだらう。

同じ人間だといふことを知らなかつたなら、甘んじて世の輕蔑を受けても居られたらうものを。何故なぜ、自分は人らしいものに斯世の中へ生れて来たのだらう。野山を駆け歩く獸の仲間でもあつたなら、一生何の苦痛くるしみも知らずに過されたらうものを。

歡うれし哀かなしい過去の追憶おもひでは丑松の胸の中に浮んで来た。この飯

山へ赴任して以この來かたのことが浮んで来た。師範校時代のことが浮んで来た。故郷ふるさとに居た頃こののことが浮んで来た。それはもう悉すつか

皆り忘れて居て、何年も思出した先蹤ためしの無いやうなことで、つ

い昨日の出来事のやうに、青々と浮んで来た。今は丑松も自分で自分を憐あはれなくには居られなかつたのである。聽やがて、斯ういふ過去の追憶おもひでがごちやく胸の中で一緒に成つて、煙のやうに乱れて

消えて了ふと、唯二つしか是から将来さきに執るべき道は無いといふ
 思想かんがへに落ちて行つた。唯二つ——放逐か、死か。到底丑松は放
 逐されて生きて居る気は無かつた。其よりは寧ろ後あと者の方を択えらん
 だのである。

短い冬の日は何時の間にか暮れかゝつて来た。もう二度と現世このよ
 で見ることは出来ないかのやうな、悲壮な心地に成つて、橋の上
 から遠く眺ながめると、西の空すこし南寄りに一帯の冬雲が浮んで、
 丁度可懐なつかしい故郷の丘を望むやうに思はせる。其は深い焦茶色こげちや
 で、雲端くもべりばかり黄に光り輝くのであつた。帯のやうな水蒸気の
 群も幾条いくすぢか其上いに懸つた。あゝ、日没だ。蕭条せうでうとした兩岸の
 風物はすべて斯この夕暮の照光ひかりと空気とに包まれて了つた。奈何どんなに

丑松は『死』の恐しさを考へ乍ら、動揺する船橋の板縁いたべり近く歩いて行つたらう。

蓮華寺で撞く鐘の音は其時丑松の耳に無限の悲しい思を伝へた。次第に千曲川の水も暮れて、空に浮ぶ冬雲の焦茶色が灰がゝつた紫色に變つた頃は、もう日も遠く沈んだのである。高く懸る水蒸気の群は、ぱつと薄赤い反射を見せて、急に搔消かきけすやうに暗く成つて了つた。

第貳拾章

(一)

せめて彼の先輩だけに自分のことを話さう、と不図、丑松が思ひ着いたのは、其橋の上である。

『噫、それが最後の別離だ。』

とまた自分で自分を憐むやうに叫んだ。

斯ういふ思想を抱いて、馳て以前来た道の方へ引返して行つた頃は、閏六日ばかりの夕月が黄昏の空に懸つた。尤も、丑松は直に其足で蓮太郎の宿屋へ尋ねて行かうとはしなかつた。間も無く演説会の始まることを承知して居た。左様だ、其の済むまで待つより外は無いと考へた。

上の渡し近くに在る一軒の饅飴屋は別に気の置けるやうな人も
 来ないところ。丁度其前を通りかゝると、軒を泄れる夕餐の煙に
 交つて、何か甘さうな物のにほひが屋の外迄も満ち溢れて居た。
 見れば炉の火も赤々と燃え上る。思はず丑松は立留つた。其時は
 最早酷く饑渴を感じて居たので、わざ／＼蓮華寺迄歸るといふ
 気は無かつた。ついと軒を潜つて入ると、炉辺には四五人の船頭、
 まだ他に飲食して居る櫓曳らしい男もあつた。時を待つ丑松
 の身に取つては、飲みたく無い迄も酒を誂へる必要があつたので、
 ほんの申訳ばかりにお調子一本、饅飴はかけにして極熱いところ
 を、斯う注文したのが聴て眼前に並んだ。丑松はやたらに激昂
 して慄へたり、井にある饅飴のにほひを嗅いだりして、黙つて他

の談話はなしを聞き乍ら食つた。

零落——丑松は今その前に面と向つて立つたのである。船頭や、
そりひき櫂 曳や、まあ下等な労働者の口から出る言葉と溜息とは、始
 て其意味が染しみ々々胸に徹こたへるやうな気がした。實際丑松の今の
こころもち心 地は、今日あつて明日を知らない其日暮しの人々と異なる
 ところが無かつたからで。炉の火は好く燃えた。人々は飲んだり
 食つたりして笑つた。丑松も亦また一緒に成つて寂しさうに笑つた
 のである。

斯かうして待つて居る間が実に堪へがたい程の長さであつた。時
 は遅く移り過ぎた。そこに居た櫂曳が出て行つて了ふと、
いれかは交 替りに他の男が入つて来る。聞くとも無しに其話を聞くと、高柳

一派の運動は非常なもので、壮士に掴ませる金ばかりでもちつとやそつとでは有るまいとのこと。何屋とかを借りて、事務所に宛て、料理番は詰切つめきり、酒は飲放題のみほうだい、帰つて来る人、出て行く人——其混雑は一通りで無いと言ふ。それにしても、今夜の演説会が奈何どんなに町の人々を動すであらうか、今頃はあの先輩の男らしい音声おんせいが法福寺の壁に響き渡るであらうか、と斯う想像して、会も終に近くかと思はれる頃、丑松は飲食のみくひしたものの、外に幾干いくぢんかの茶代を置いて斯この饅頭屋を出た。

月は空にあつた。今迄黄ばんだ洋燈ランペの光の内に居て、急に斯かう屋うちの外へ飛出して見ると、何となく勝手の違つたやうな心地がする。薄く弱い月の光は家々の屋根を伝つて、往来の雪の上に落ち

て居た。軒のきびさし 廂の影も地にあつた。夜の靄もやは煙のやうに町々を

籠めて、すべて遠く奥深く物寂しく見えたのである。青白い闇——といふことが言へるものなら、其は斯ういふ月夜の光景ありさまであらう。言ふに言はれぬ恐怖おそれは丑松の胸に這ひ上つて来た。

時とすると、背後うしろの方からやつて来るものが有つた。是方こちらが徐々そろくろく歩けば先方さきも徐々歩き、是方が急げば先方も急いで随ついて来る。振返つて見ようくとは思ひ乍すらも、奈何どうしても其を為することが出来ない。あ、誰か自分を捕つかまへに来た。斯う考へると、何時の間にか自分の背後うしろへ忍び寄つて、突だしぬけ然に襲ひかゝりでも為るやうな気がした。とある町の角のところ、ぱつたり其足音が聞えなくなつた時は、始めて丑松も我に帰つて、ホツと安心の溜息を

吐くのであつた。

前の方からも、亦また。あゝ月明りのおぼつかなさ。其光には何どれほ程どの物の象かたちが見えると言つたら好からう。其陰には何程の色が潜んで居ると言つたら好からう。煙るやうな夜の空気を浴び乍ら、次第に是方こちらへやつて来る人影を認めた時は、丑松はもう身を縮すくめて、危険ちかづの近いたことを思はずには居られなかつたのである。一寸是方を透して視て、臆おそて影は通過とおぎた。

それは割合に氣候けいの緩ゆるんだ晩で、打てば響くかと疑はれるやうな寒夜の趣とは全く別の心地がする。天は遠く濁つて、低いところところに集る雲の群ばかり稍や灰ほのしろ白く、星は隠れて見えない中にも唯一つ姿あはを顕あらしたのがあつた。往来に添ふ家々はもう戸を閉めた。

ところ／＼灯は窓から泄れて居た。何の音とも判らない夜の響にすら胸を踊らせ乍ら、丑松は鬨とした町を通つたのである。

(二)

丁度演説会が終つたところだ。聴衆の群は雪を踏んでぞろ／＼帰つて来る。思ひ／＼のことを言ふ人々に近いて、其となく会の模様を聞いて見ると、いづれも激昂したり、憤慨したりして、一人として高柳を罵らないものは無い。あるものは斯の飯山から彼様な人物を放逐して了へと言ふし、あるものは市村弁護士に投票しろと呼ぶし、あるものは又、世にある多くの政事家に対して激

烈な絶望を泄し乍ら歩くのであつた。

月明りに立留つて話す人々も有る。其一群に言はせると、蓮太郎の演説はあまり上手の側では無いが、然し妙に人をひきつけ有つて、言ふことは一々聴衆の肺腑を貫いた。高柳派の壮士、六七人、頻しきりに妨害を試みようとしたが、終しまひには其も静しづまつて、水を打つたやうに成つた。悲壮な熱情と深刻な思想とは蓮太郎の演説を通しての著しい特色であつた。時とすると其が病的にも聞えた。最後に蓮太郎は、不真面目な政事家が社会を過り人道を侮辱するあやま实例として、烈しく高柳の急所をつ衝ついた。高柳の秘密——六左衛門との関係——すべて其卑しい動機から出た結婚の真相が残るところなく発表された。

また他の一群に言はせると、其演説をして居る間、蓮太郎は幾度か血を吐いた。終つて演壇を下りる頃には、手に持った帕ハンケチ子が紅く染つたとのことである。

兎に角、蓮太郎の演説は深い感動を町の人々に伝へたらしい。

丑松は先輩の大胆な、とは言へをとこ男性らしい行やりかた動に驚いて、何と

なく不安な思を抱かずには居られなかつたのである。それにしても最早宿屋もうの方に帰つて居る時刻。行つて逢あはう。斯う考へて、

夢のやうに歩いた。ぶらりと扇屋の表に立つて、軒行燈の影に身を寄せ乍ら、屋内なかの様子を覗のぞいて見ると、何か斯う取込んだことでも有るかのやうに人々が出たり入つたりして居る。亭主であらう、五十ばかりの男、周章あわたぎしさうに草履を突掛け乍ら、提ちやうちん灯

携げて出て行かうとするのであつた。

呼留めて、蓮太郎のことを尋ねて見て、其時丑松は亭主の口から意外な報知しらせを聞取つた。今々法福寺の門前で先輩が人の為に襲はれたといふことを聞取つた。眞実か、ほん虚言か——もし其が事實だとすれば、無論高柳の復讐ふくしうに相違ない。まあ、丑松は半信半疑。何を考へるといふ暇も無く、たゞ胸を騒がせ乍ら、亭主の後に随ついて法福寺の方へと急いだのである。

あゝ、丑松が駈付けた時は、もう間に合はなかつた。丑松ばかりでは無い、弁護士ですら間に合はなかつたと言ふ。聞いて見ると、蓮太郎は一歩ひとあし先へ帰ると言つて外ぐわいたう套たうを着て出て行く、弁護士は残つて後仕末を為して居たとやら。傷といふは石か何かで

烈しく撃たれたもの。只さへ病弱な身、まして疲れた後——思ふに、何の抵抗も出来なかつたらしい。血は雪の上を流れて居た。

(三)

左も右も検屍の済む迄は、といふので、蓮太郎の身体は外套で掩ふた儘、手を着けずに置いてあつた。思はず丑松は跪いて、先輩の耳の側へ口を寄せた。まだそれでも通じるとかと声を掛けて見る。

『先生——私です、瀬川です。』

何と言つて呼んで見ても、最早聞える気色は無かつたのである。

月の光は青白く落ちて、一層凄愴せいさうとした死の思を添へるのであつた。人々は同じやうに冷い光と夜氣とを浴び乍ら、巡査や医者まぢわの来るのを待侘まちわびて居た。あるものは影のやうに蹲うづくまつて居た。あるものは並んで話し、歩いて居た。弁護士は悄しよんぼり然首を垂れて、腕組みして、物も言はずに突立つて居た。

廳て町の役人が来る、巡査が来る、医者が来る、間も無く死体の検査が始つた。提灯の光に照された先輩の死顔は、と見ると、頬たかの骨隆たかく、鼻尖り、堅く結んだ口唇は血の色も無く変りはてた。男らしい威嚴を帯びた其容貌おもてせのうちには、何処となく暗い苦痛の影もあつて、壮烈な最後の光景ありさまを可傷いたましく想像させる。見る人は皆な心を動された。万事は狭氣せとこぎのある扇屋の亭主の計らひで、

検屍が済む、役人達が帰つて行く、一先づ死体は宿屋の方へ運ばれることに成つた。戸板の上へ載せる為、弁護士は足の方を持つ、丑松は頭の方へ廻つて、両手を深く先輩の脇の下へ差入れた。あゝ、蓮太郎の身体は最早冷かつた。奈何に丑松は名残惜しいやうな氣に成つて、蒼あをざめた先輩の頬へ自分の頬を押し宛て、『先生、先生。』と呼んで見たらう。其時亭主は傍へ寄つて、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せてやつた。斯うして戸板に載せて、其上から外套を懸けて、扇屋を指して出掛けた頃は、月も落ちかゝつて居た。人々は提灯の光に夜道を照し乍ら歩いた。丑松は亦たさく／＼と音のする雪を踏んで、先輩の一生を考へ乍ら随ついて行つた。思当ることが無いでも無い。あの根村の宿屋で

一緒に夕飯ゆふめしを食つた時、頻ひんに先輩は高柳の心を卑いやしで、『是程新平民といふものを侮辱した話は無からう』と憤つたことを思出した。あの上田の停車場ステーションへ行く途中、丁度橋を渡つた時にも、『どうしても彼様あんな男に勝たせたく無い、何卒どうかして斯この選挙は市村君のものにして遣りたい』と言つたことを思出した。『いくら吾儕われが無智な卑賤いやしいものだからと言つて、踏付けられるにも程がある』と言つたことを思出した。『高柳の話なぞを聞かなければ格別、聞いて、知つて、黙つて帰るといふことは、新平民として余り意気地いくぢが無さ過ぎるからねえ』と言つたことを思出した。それから彼の細君あと一緒に東京へ帰つて呉れと言出した時に、先輩は叱はげつたり厲ましたりして、丁度生木なまきを割さくやうに送り返したことを

思出した。彼^{かれ}是^{これ}を思合せて考へると——確かに先輩は人の知らない覚^{かくご}期^こを懐^こにして、斯^この飯山へ来たらしいのである。

斯ういふことゝ知つたら、もうすこし早く自分が同じ新平民の一人であると打明けて話したものを。あるひは其を為たら、自分の心^{こころもち}情^ちが先輩の胸にも深く通じたらうものを。

後悔は何の益^{やく}にも立たなかつた。丑松は恥^ちぢたり悲^ひんだりした。噫^{あゝ}、数時間前には弁護士と一緒に談^{はな}し乍ら扇屋を出た蓮太郎、今は戸板に載せられて其同じ門を潜るのである。不^{とり}取^{あへず}敢^ず、東京に居る細君のところへ、と丑松は引受けて、電報を打つ為に郵便局の方へ出掛けることにした。夜は深かつた。往來を通る人の影も無かつた。是非打たう。局員が寝て居たら、叩^たき起^たしても打たう。

それにしても斯電報を受取る時の細君の心地は。と想像して、さあ何と文句を書いてやつて可か解らない位であつた。暗く寂しい四辻の角のところへ出ると、頻に遠くの方で犬の吠る声が聞える。其時はもう自分で自分を制へることが出来なかつた。堪へ難い悲傷の涙は一時に流れて来た。丑松は声を放つて、歩き乍ら慟どうこ哭くした。

(四)

涙は反つて枯れ萎れた丑松の胸を湿した。電報を打つて帰る道すがら、丑松は蓮太郎の精神を思ひやつて、其を自分の身に引比

べて見た。流石さすがに先輩の生涯しやうがいは男らしい生涯であつた。新平民らしい生涯であつた。有まの儘まに素性を公言して歩いて、それで人にも用ゐられ、万許よろづされて居た。『我は穢多を恥とせず。』——何といふまあさか壯かんんな思想がへだらう。其に比べると自分の今の生涯は——

其時に成つて、始めて丑松も気がついたのである。自分は其を隠蔽かくさう隠蔽さうとして、持つて生れた自然の性質を銷磨すりへらして居たのだ。其為いつときに一いつとき時いつときも自分を忘れることが出来なかつたのだ。思へば今迄の生涯は虚偽いつはりの生涯であつた。自分で自分を欺あざむいて居た。あゝ——何を思ひ、何を煩ふ。『我は穢多なり』と男らしく社会に告白するが好いではないか。斯う蓮太郎の死が丑松に教へ

たのである。

あか
なきはら
紅く泣腫した顔を提げて、

やがて扇屋へ帰つて見ると、奥の座

敷には種々さま／＼な人が集つて後の事を語り合つて居た。座敷の床

の間へ寄せ、北を枕にして、蓮太郎の死体の上には旅行用の茶色

の膝懸ひざかけをかけ、顔は白い帕ハンケチ布おほで掩おほふてあつた。亭主の計らひ

と見えて、其前に小机を置き、土器かはらけの類たぐひも新しいのが載せてあ

る。線香の煙に交る室内の夜の空気の中に、蠟燭ろうそくの燃とほるのを見

るも悲しかつた。

警察署へ行つた弁護士も帰つて来て、蓮太郎のことを丑松に話

した。上田の停車場ステーションで別れてからこのかた以来こもろ、小諸、岩村田、志賀、

野沢、白田、其他到るところに蓮太郎が精くはしい社会研究を發表し

たこと、それから長野へ行き斯の飯山へ来る迄の元氣の熾盛さかんであつたことなぞを話した。『実に我輩も意外だつたね。』と弁護士は思出したやうに、『一緒に斯処こゝの家うちを出て法福寺へ行く迄も、彼様あんな烈しいことを行やらうとは夢にも思はなかつた。毎時いっも演説の前には内容なかにの話が出て、斯様かう言ふ積りだとか、彼様あゝ話す積りだとか、克よく飯をやり乍ら其を我輩に聞かせたものさ。ところが、君今夜に限つては其様そんな話が出なかつたからねえ。』と言つて、嘆息して、『あゝ、不親切な男だと、君始め——まあ奈何どんな人でも、我輩のことを左様思ふだらう。思はれても仕方無い。全く我輩が不親切だつた。猪子君が何と言はうと、細君と一緒に東京へ返しへすれば斯様こんなことは無かつた。御承知の通り、猪子君も彼様あゝ

いふ弱い身体だから、始め一緒に信州を歩くと言出した時に、何どの位くらゐ我輩が止めたか知れない。其時猪子君の言ふには、「僕は僕だけの量見があつて行くのだから、決して止めて呉れ給ふな。君は僕を使役つかふと見てもよし、僕はまた君から助けられると見られても可い——兎とに角かく、君は君で働き、僕は僕で働くのだ。」斯ういふものだから、其程熱心に成つて居るものを強ひて廃よし給へとも言はれんし、折角の厚意を無にしたくないと思つて、それで一緒に歩いたやうな訳さ。今になつて見ると、噫あ、あの細君に合せる顔が無い。「奥おく様、其様に御心配なく、猪子君は確かに御預りしましたから」なんて——まあ我輩は奈何どうして御詫おわびをして可いか解らん。』

斯う言つて、^{しを}萎れて、肥大な弁護士は洋服の儘^{まゝ}でかしまつて居た。其時は最早^{もつ}この扇屋に泊る旅人も皆な寝て了つて、たゞさへ気の遠くなるやうな冬の夜が^{ひとしほ}一層の寂しさを増して来た。日頃新平民と言へば、直に顔を皺^{しか}めるやうな手合にすら、蓮太郎ばかりは痛み惜まれたので、殊に其悲惨な最後が深い同情の念を起させた。『警察だつても黙つて置くもんぢや無い。見給へ、きつと最早^{もつ}高柳の方へ手が廻つて居るから。』と人々は互に言合ふのであつた。

見れば見るほど、聞けば聞くほど、丑松は死んだ先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるやうな心地がした。告白——それは同じ新平民の先輩にすら躊躇^{ちうちよ}したことで、まして社

会の人に自分の素性を暴露さうなぞとは、今日迄思ひもよらなかつた思想かんがへなのである。急に丑松は新しい勇気を掴つかんだ。どうせ最早今迄の自分は死んだものだ。恋も捨てた、名も捨てた——あゝ、多くの青年が寢食を忘れる程にあこがれて居る現世の歡樂、それも穢多の身には何の用が有らう。一新平民——先輩が其だ——自分も亦た其で沢山だ。斯う考へると同時に、熱い涙は若々しい頬を伝つて絶間とめども無く流れ落ちる。実にそれは自分で自分を憐むといふ心から出た生命いのちの汗であつたのである。

いよ／＼明日は、学校へ行つて告白うちあけよう。教員仲間にも、生徒にも、話さう。左様だ、其を為るにしても、後々までの笑草なぞには成らないやうに。成るべく他に迷惑ひとを掛けないやうに。斯

う決心して、生徒に言つて聞かせる言葉、進退伺に書いて出す文句、其他種々なことまでも想像して、一夜を人々と一緒に蓮太郎の遺骸なきがらの前で過したのであつた。彼かれ是これするうちに、鶏が鳴いた。丑松は新しい暁の近いたことを知つた。

第貳拾壹章

(一)

学校へ行く準備したくをする為に、朝早く丑松は蓮華寺へ歸つた。庄

馬鹿を始め、子坊主迄、談話はなしは蓮太郎の最後、高柳の拘引こういんの噂うはさなぞで持切つて居た。昨日の朝丑松の留守へ尋ねて来た客が亡ななつた其人である、と聞いた時は、猶なほ々々一同驚き呆あきれた。丑松はまた奥様から、妹が長野の方へ帰るやうに成つたこと、住職が手を突いて詫わび入いつたこと、それから夫婦別れの話も——まあ、見合せにしたといふことを聞取つた。

『なむあみだぶ。』

と奥様は珠数ずずを爪繰つまぐり乍となら唱へて居た。

丁度十二月朔ついたち日のこと、いつも寺では早く朝飯あさはんを済すますところからして、丑松の部屋へも袈裟治が膳を運んで来た。斯かうして寺の人と同じやうに早く食ふといふことは、近頃無いためし—

一 朝は必ず生なま温あたい飯かに、煮詰きつた汁と極きまつて居たのが、其日にかぎつては、飯も焚きたての氣いきの立つやつで、汁は又、煮立つたばかりの赤味噌のほひが甘うまさうに鼻なの端はへ来るのであつた。小皿には好物の納豆も附いた。其時丑松は膳に向ひ乍ら、兎とも角かくも斯うして生きながらへ来た今日迄こんにちまでを不思議ありがたに難がた有あり考へた。あゝ、卑賤いやしい穢多こぼの子の身であると覚期すれば、飯を食ふにも我知らず涙こぼが零れたのである。

朝飯の後、丑松は机に向つて進退伺を書いた。其時一生の戒を思出した。あの父の言葉を思出した。『たとへいかなる目を見よう、いかなる人に邂めぐりあ逅あはうと、決して其とは自白うちあけるな、一旦の憤怒いかり悲哀かなしみに是このいましめ戒よのなかを忘れたら、其時こそ社よのなか会あから捨て

られたものと思へ。』斯う父は教へたのであつた。『隠せ』——
 其を守る為には今日迄何程の苦心どれほどを重ねたらう。『忘れるな』——
 —其を繰返す度に何程の猜疑うたがひと恐怖おそれを抱いたらう。もし父が
 斯この世に生きながらへて居たら、まあ氣でも狂つたかのやうに自
 分の思想かんがへの変つたことを憤り悲むであらうか、と想像して見た。
 仮令たとひ誰が何と言はうと、今はその戒を破り棄てる氣で居る。

『阿爺おとつさん、堪忍かんにんして下さい。』
 と詫入るやうに繰返した。

冬の朝日が射して来た。丑松は机を離れて窓の方へ行つた。障し
 子やうじを開けて眺めると、例の銀杏いんげいの枯かれ々／＼な梢こずゑを經へて、雪に
 包まれた町々の光景ありさまが見渡される。板葺いたぶきの屋根、軒のきび廂さし、

すべて目に入るかぎりのものは白く埋れて了つて、家と家との間からは青々とした朝餐あさげの煙が静かに立登つた。小学校の建築物たてものも、今、日をうけた。名残惜なごりしいやうな氣に成つて、冷つめたく心地ころもちの好い朝の空氣を呼吸し乍ら、やゝしばらく眺め入つて居たが、不図胸に浮んだは蓮太郎の『懺悔録』、開卷第一章、『我は穢多なり』と書起してあつたのを今更のやうに新しく感じて、丁度この町の人々に告白するやうに、其文句を窓のところところで繰返した。

『我は穢多なり。』

ともう一度繰返して、それから丑松は学校へ行く準備したくにとりかゝつた。

(一一)

破戒——何といふ悲しい、壮しい思想だらう。斯う思ひ乍ら、丑松は蓮華寺の山門を出た。とある町の角のところまで歩いて行くと、向ふの方から巡査に引かれて来る四五人の男に出逢つた。いづれも腰繩を附けられ、蒼ざめた顔付して、人目を憚り乍ら悄悄と通る。中に一人、黒の紋付羽織、白足袋穿、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は直に高柳利三郎と知れた。克く見ると、一緒に引かれて行く怪しげな風体の人々は、高柳の為に使役はれた壮士らしい。流石に心は後へ残るといふ風で、時々立留つては振返つて見る度に、巡査から注意をうけるやうな手合もあ

つた。『あゝ、捕つて行くナ。』と丑松の傍に立つて眺めた一人が言つた。『自業自得さ。』とまた他の一人が言つた。見るく高柳の一行は巡查の言ふなりに町の角を折れて、やが聽て雪山の影に隠れて了つた。

男女の少年は今、小学校を指して急ぐのであつた。近在から通ふこども児童などは、フランネル絨の布片で頭を包んだり、肩掛を冠つたりして、声を揚げ乍ら雪の中を飛んで行く。町の児童は又、思ひくこどもに誘ひ合せて、後になり前になり群を成して行つた。斯うしてあどけ邪気ない生徒等と一緒に、かよ通ひな忸れた道路を歩くといふのも、最早今日限りであるかと考へると、目に触れるものはすべ総て丑松の心にかな哀し可なつか懐しい感想をかんじ起させる。平素はふだん煩うるさいと思ふやうな女の児のおしや喋

舌ぺりまで、其朝にかぎつては、可懐しかった。色の褪さめた海老えび茶袴ばかまを眺めてすら、直に名残惜しさが湧上つたのである。

学校の運動場には雪が山のやうに積上げてあつた。木馬や鉄かなぼ棒うづもは深く埋うづも没れて了しまつて、屋外そとの運動も自由には出来かねると

ころからして、生徒はたゞ学校の内部なかで遊んだ。玄関も、廊下も、

広い体操場も、楽しさうな叫び声で満ち溢あふれて居た。授業の始ま

る迄まで、丑松は最後の監督を為る積りで、あちこちくと廻つて歩

くと、彼処あそこでも瀬川先生、此処こゝでも瀬川先生——まあ、生徒の附つ

纏きまとふのは可愛らしいもので、飛んだり跳はねたりする騒がしさも

名残と思へば寧いづつそいぢらしかつた。廊下のところ立つた二三の

女教師、互にじろくこちら是方を見て、目と目で話したり、くすく

笑つたりして居たが、別に丑松は氣にも留めないものであつた。其朝は三年生の仙太も早く出て来て体操場の隅にしよんぼり悄然として居る。他の生徒を羨ましさうに眺め佇立たゞずんで居るのを見ると、不あひかはらず相変誰も相手にするものは無いらしい。丑松は仙太を背後うしろから抱かぐ《だきしめ》て、誰が見ようと笑はうと其様そんなことに頓着なく、自然おのづと外部そとに表れる深い哀憐あはれみの情緒こころを寄せたのである。この不幸な少年も矢張自分と同じ星の下に生れたことを思ひ浮べた。いつぞやこの少年と一緒に庭球テニスの遊戯あそびをして敗けたことを思ひ浮べた。丁度それは天長節の午後、敬之進を送る茶話会の後であつたことなどを思ひ浮べた、不図、廊下の向ふの方で、尋常一年あつたりの女の生徒であらう、揃つて歌ふ無邪氣な声が起つた。

『桃から生れた桃太郎、

気はやさしくて、力もち——』

その唱歌を聞くと同時に、思はず涙は丑松の顔を流れた。

大鈴の音が響き渡つたのは間も無くであつた。生徒は互ひに上草履鳴して、我^{われがち}勝^{われがち}に体操場へと塵埃^{ほこり}の中を急ぐ。聴^{やが}て男女の教師は受持受持の組を集めた。相図^{ふえ}の笛も鳴つた。次第に順を追つて、教師も生徒も動き始めたのである。高等四年の生徒は丑松の後に随^ついて、足拍子そろへて、一緒に長い廊下を通つた。

(三)

応接室には校長と郡視学とが相さしむかひ対かひに成つて、町會議員の来るのを待受けて居た。それは丑松のことに就いて、集つて相談したい、といふ打合せが有つたからで。尤もつとも、郡視学は約束の時間よりも早く、校長を尋ねてやつて来たのである。

校長に言はせると、何も自分は悪意あつて異分子を排斥するといふ訳では無い。自分はもう旧派の教育者と言はれる一人で、丑松や銀之助なぞとはずつと時代が違つて居る。今日とても矢張自分等の時代で有ると言ひたいが、実は何時いつの間にか世の中が變うつり遷かはつて来た。何が可こ畏はいと言つたつて、新しい時代ほど可こ畏はいものは無い。あゝ、老いたくない、朽くちたたくない、何時いつ迄までも同じ位置と名誉とを保つて居たい、後進の書生輩かぶとなどに兜かぶとを脱いで降

参したくない。それで校長は進取の氣象に富んだ青年教師を遠ざけようとする傾向かたむきを持つのである。

のみならず、丑松や銀之助は彼の文平のやうに自分の意を迎へない。教員会のある度に、意見が克よく衝突する。何かにつけて邪魔まじに成る。彼あ様な喙くちばしの黄色い手合が、校長の自分よりも生徒に慕はれて居るとあつては、第一それが小癩かさに触る。何も悪意こゝろあつて排斥するでは無いが、学校の統一といふ上から言ふと、是これも亦また止むを得ん——斯まう校長は身の衛まもりかたを考へたので。

『町會議員も最早も見えさうなものだ。』と郡視学は懷中時計を取出して眺め乍ら言つた。『時に、瀬川君のこともいよく物に成りさうですかね。』

この『物に』が校長を笑はせた。

『しかし。』と郡視学は言葉を継いで、『是方こつちから其を言出しては面白くない。町の方から言出すやうになつて来なければ面白くない。』

『其です。其を私も思ふんです。』と校長は熱心を顔に表して答へた。

『見給へ。瀬川君が居なくなる、土屋君が居なくなる、左様さうなれば君もう是方こつちのものさ。瀬川君のかはりには彼の甥あをひを使役つかつて頂くとして、手の明いたところへは必ず僕が適当な人物を周旋しますよ。まあ、悉すつかり皆吾党で固めて了はうぢや有ませんか。左様さうして置きさへすれば、君の位置は長く動きませんし、僕も亦また折角

心配した甲斐かひがあるといふもんです——はゝゝゝゝ。』

斯ういふ談話はなしをして居るところへ、小使が戸を開けて入つて来た。続いて三人の町会議員もあらはれた。

『さあ、何卒どうぞ是方へ。』と校長は椅子を離れて丁寧に挨拶する。

『いや、どうも遅なりました、失礼しました。』と金縁の眼鏡を掛けた議員くわいが快濶くわつな調子で言つた。『実は、高柳君も彼様いふやうな訳で、急に選挙の模様が変りましたものですから。』

(四)

其日、長野の師範校の生徒が二十人ばかり、参観と言つて学校

の廊下を往つたり来たりした。丑松が受持の教室へも入つて来た。丁度高等四年では修身の学課を終つて、二時間目の数学に取掛つたところで、生徒は頻しきりに問題を考へて居る最中。參觀人の群が戸を開けてあらはれた時は、一時靴の音で妨げられたが、廳やがて其も静つてもとの通りに成つた。寂しんとした教室の内には、石盤を滑る石筆の音ばかり。丑松は机と机との間を歩いて、名残惜しさうに一同の監督をした。時々參觀人の方を注意して見ると、制服着た連中がずらりと壁に添ふて並んで、いづれも一いっばし廉の批評家らしい顔付。楽しい学生時代の種さま々々、は丑松の眼め前に彷彿ちらついて来た。丁度自分も同級の人達と一緒に、師範校の講師に連れられて、方々へ參觀に出掛けた当時のことを思ひ浮べた。残酷な、とは言

へ罪の無い批評をして、到るところの学校の教師を苦めたことを思ひ浮べた。丑松とても一度は斯の參觀人と同じ制服を着た時代があつたのである。

『出来ましたか——出来たものは手を挙げて御覧なさい。』

といふ丑松の声に応じて、後列の方の級長を始め、すこし覚束ないと思はれるやうな生徒まで、互に争つて手を挙げた。あまり数学の出来る方でない省吾までも、めづらしく勇んで手を挙げた。

『風間さん。』

と指名すると、省吾は直に席を離れて、つかくと黒板の前へ進んだ。

冬の日の光は窓の玻璃ガラスを通して教へ慣なれた教室の内を物寂しく

照して見せる。平素は何の感想をも起させない高い天井から、四辺の白壁まで、すべて新しく丑松の眼に映つた。正面に懸けてある黒板の前に立つて、白墨で解答を書いて居る省吾の後姿は、と見ると、実に今が可愛らしい少年の盛り、肩揚のある筒袖羽織を着て、首すこし傾げ、左の肩を下げ、高いところへ数字を書かうとする度に背延びしては右の手を届かせるのであつた。省吾は克く勉強する質の生徒で、図画とか、習字とか、作文とかは得意だが、毎時理科や数学で失敗つて、丁度十五六番といふところを上つたり下つたりして居る。不思議にも其日は好く出来た。

『是と同じ答の出たものは手を挙げて御覧なさい。』

後列の方の生徒は揃つて手を挙げた。省吾は少許顔を紅くして、

やがて自分の席へ復もどつた。參觀人は互に顔を見合せ乍ら、意味の無い微笑ほくそめみを交換とりかはして居たのである。

斯かういふことを繰返して、問題を出したり、説明して聞かせたりして、数学の時間を送つた。其日に限つては、妙に生徒一同が静粛で、參觀人の居ない最初の時間から悪戯わるふざけなどを為るものは無かつた。極きまりで居眠りを始める生徒や、狐鼠こそ々々机の下で無線電話をかける技師までが、唯もう行儀よくかしまつて居た。噫あゝ、生徒の顔も見納め、教室も見納め、今は最後の稽古しんこをする為に茲こゝに立つて居る、と斯かう考へると、自然おのづと丑松は胸を踊らせて、熱心を顔に表して教へた。

(五)

『無論市村さんは当選に成りませう。』と応接室では白髯しろひげの町会議員が世慣よなれた調子で言出した。『人気といふ奴やつは可畏おそろしいものです。高柳君が彼様あいふことになる、最早誰も振向いて見るものが有ません。多少掴つかませられたやうな連中まで、ずつと市村さんの方へ傾かしいで了ひました。』

『是これといふのも、あの猪子といふ人の死んだ御蔭なんです——余程市村さんは御礼を言つても可い。』と金縁眼鏡の議員が力を入れた。

『して見ると新平民も馬鹿になりませんかね。』と郡視学は胸を

突出して笑つた。

『なりませんとも。』と白髯の議員も笑つて、『どうして、彼あれだ丈けの決心をするといふのは容易ぢや無い。しかし猪子のやうな人物ひとは特別だ。』

『左様さうさ——彼あれは彼、是これは是さ。』

と顔に薄痘痕うすあばたのある商人の出らしい議員が言出した時は、其処たけに居並ぶ人々は皆笑つた。『彼は彼、是は是』と言つた丈で、其意味はもう悉すつかり皆通じたのである。

『はゝゝゝ。只今たゞいま御話の出ました「是」の方の御相談ですが、』と金縁眼鏡の議員は巻煙草を燻ふかし乍ら、『郡視学さんにも一つ御心配を願ひまして、あまり町の方でやかましく成りません内

に——左様、御転任に成るといふものか、乃至は御休職を願ふといふものか、何とかそのところを考へて頂きたいもので。』

『はい。』と郡視学は額へ手を当てた。

『実に瀬川先生には御気の毒ですが、是も拗ない。』と白髯の議

員は嘆息した。『御承知の通りな土地柄で、兎角左様いふことを

嫌ひまして——彼先生は実はこれくくと生徒の父兄に知れ渡つ

て御覧なさい、必定、^{きつと}子供は学校へ出さないなんて言出します。

そりやあもう、眼に見えて居ます。現に、町會議員の中にも、恐しく苦情を持出した人がある。一体学務委員が気が利かないなんて、私共に喰つて懸るといふ仕末ですから。』

『まあ、私共始め、左様いふことを伺つて見ますと、あまり好い

心こころもち地ちは致しませんからなあ。』と薄痘痕うすあはたの議員が笑ひ乍ら言葉を添へる。

『しかし、それでは学校に取りまして非常に残念なことです。』
 と校長は改つて、『瀬川君が好くやつて下さることは、定めし皆さんも御聞きでしたらう——私もまあ片腕程に頼みに思つて居るやうな訳で。学才は有ますし、人物は堅実たしかですし、それに生徒の評判うけは良し、若手の教育者としては得難い人だらうと思ふんです。素性うまれが卑賤いやしいからと言つて、彼様あいふ人を捨てるといふことは——
 実際、聞えません。何卒どうかまあ皆さんの御尽力で、成らうことなら引留めるやうにして頂きたいのですが。』

『いや。』と金縁眼鏡の議員は校長の言葉を遮つた。『御ごもつとも尤

です。只今のやうな校長先生の御意見を伺つて見ますと、私共が
 斯こん様な御相談に参るといふことからして、恥入る次第です。成なるほ
 程ど、学問の上には階級の差別も御座ございますまい。そこがそれ、迷
 信の深い土地柄で。左様いふ美しい思かんが想へを持つた人は鮮すく少ないも
 のですから——』

『どうも未まだそこまでは開けませんのですな。』と薄痘痕の議員
 が言つた。

『ナニ、それも、猪子先生のやうに飛抜けて了へば、また人が許
 しもするんですよ。』と白髯の議員は引取つて、『其証拠には、
 宿屋でも平気で泊めますし、寺てら院でも本堂を貸しますし、演説を
 為するといへば人が聴きにも出掛けます。彼あの先生のは可い厭やに隠かく蔽さ

んから可^い。最初からもう名乗つてかゝるといふ遣方ですから、左様なると人情は妙なもので、むしろ気の毒だといふ心地に成る。

ところが、瀬川先生や高柳君の細君のやうに、其を隠蔽^{かく}さうくとする、余計に世間の方では厳^{やか}ましく言出して来るんです。』

『大きに——』と郡視学は同意を表した。

『どうでせう、御転任といふやうなことにでも願つたら。』と金縁眼鏡の議員は人々の顔を眺め廻した。

『転任ですか。』と郡視学は仔細らしく、『兎角条件附の転任は巧くいきませんよ。それに、斯^かういふことが世間へ知れた以上は、何処^{どこ}の学校だつても嫌がりますさ——先づ休職といふものでせう。』

『奈何なりとも、そこは貴方の御意見通りに。』と白髯の議員は手を擦もみ乍ら言つた。『町会議員の中には、「怪しからん、直に追出して了解へ」なんて、其様な暴論を吐くやうな手合も有るといふ場合ですから——何卒どうかまあ、何分宜敷よろしいやうに、御取計ひを。』

(六)

兎とに角かく其日の授業だけは無事に済した上で、と丑松は湧わきあ上るやうな胸の思おきを制なへ乍ら、三時間目の習字を教へた。手習ひする生徒の背後うしろへ廻つて、手に手を持添へて、漢字の書方などを注意してやつた時は、奈何どんなに其筆先がぶるくと震へたらう。周囲まはりの

生徒はいづれも伸のしかかつて眺ながめて、墨だらけな口を開いて笑ふのであつた。

小使の振鳴す大鈴の音が三時間目の終を知らせる頃には、最早郡視学も、町会議員も歸つて了つた。師範校の生徒は猶なほ残つて午後の授業をも観たいといふ。昼飯ひるの後、生徒の監督を他の教師に任せて置いて、丑松は後仕末をする為に職員室に留つた。其となく返すものは返す、調べるものは調べる、後になつて非難を受けまいと思へば思ふほど、心のあわたゞ惶しさは一通りで無い。職員室の片隅には、手の明いた教員が集つて、寄ると触さはると法福寺の門前にあつた出来事の噂うはさ。蓮太郎の身を捨てた動機に就いても、種々ま／＼な臆測が言ひはやされる。あるものは過度の名誉心が原因もと

だらうと言ひ、あるものは生活くらしに究つまつた揚句だらうと言ひ、あるものは又、精神に異状を来して居たのだらうといふ。まあ、十人が十色のことを言つて、誹けなしたり謗くさしたりする、稀たまに蓮太郎の精神を褒ほめるものが有つても、寧ろ其を肺病の故せみにしてしまつた。聞くとともになしに丑松は人々の噂を聞いて、到底誤解されずに済すむ世の中では無いといふことを思ひ知つた。『黙つて狼のやうに男らしく死ぬ』——あの先輩の言葉を思出した時は、悲しかつた。

午後の課目は地理と国語とであつた。五時間目には、国語の教科書の外かねに、予て生徒から預つて置いた習字の清書、作文の帳面、そんなものを一緒に持つて教室へ入つたので、其と見たものずき好奇な少年はもう眼を円くする。『ホウ、作文が刪正なほつて来た。』とあ

る生徒が言つた。『図画も。』と又。丑松はそれを自分の机の上
 に載せて、例のやうに教科書の方へ取掛つたが、やが聽て平素のいつも半分
 ばかりも講釈したところで本を閉ぢて、其日はもう其で止めにする、
 それから少許すこし話することが有る、と言つて生徒一同の顔を眺め
 渡すと、『先生、御話ですか。』と気の早いものは直に其を聞く
 のであつた。

『御話、御話——』

と請求する声は教室の隅から隅までもひろが拡つた。

丑松の眼は輝いて来た。今は我知らず落ちる涙を止めかねたの
 である。其時、習字やら、図画やら、作文の帳面やらを生徒の手
 に渡した。中には、朱で点を付けたのもあり、優とか佳とかした

のもあつた。または、全く目を通さないのもあつた。丑松は先づ其^{その}詫^{わび}から始めて、刪^{なほ}正^ほして遣^やりたいは遣^やりたいが、最^も早^う其^をを為^する暇が無いといふことを話し、斯うして一緒に稽古を為るのも実は今日限りであるといふことを話し、自分は今別離^{わかれ}を告げる為に是^{こゝ}処^にに立つて居るといふことを話した。

『皆さんも御存じでせう。』と丑松は噛んで含めるやうに言つた。『是^{この}山国に住む人々を分けて見ると、大凡^{おおよそ}五通りに別れて居ます。それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧^{ぼう}侶^{さん}と、それからまだ外に穢多といふ階級があります。御存じでせう、其穢多は今でも町はづれに一^{ひと}団^{かたまり}に成つて居て、皆さんの履^はく麻^{あさ}裏^{うら}を造^{つく}つたり、靴や太鼓や三味線等を製^{こしら}へたり、あるものは又お百姓して

生活くらしを立て、居るといふことを。御存じでせう、其穢多は御出入
 と言つて、稲を一束づゝ持つて、皆さんの父親おとつさんや祖父おぢいさんの
 ところへ一年に一度は必ず御機嫌伺ひに行きましたことを。御存
 じでせう、其穢多が皆さんの御家へ行きますと、土間のところへ
 手を突いて、特別の茶碗で食物くひものなどを頂戴して、決して敷居か
 ら内部なかへは一歩ひとあしも入られなかつたことを。皆さんの方から又、
 用事でもあつて穢多の部落おいでへ御出になりますと、煙草たばこは燐寸マッチで喫
 んで頂いて、御茶は有ありましても決して差上げないのが昔からの習
 慣です。まあ、穢多といふものは、其程卑賤いやしい階級としてある
 のです。もし其穢多が斯この教室へやつて来て、皆さんに国語や地
 理を教へるとしましたら、其時皆さんは奈何思ひますか、皆さん

の父親おとつさんや母親おつかさんは奈何どう思ひませうか——実は、私は其卑賤いやしい穢多しの一人です。』

手も足も烈しく慄ふるへて来た。丑松は立つて居られないといふ風で、そこに在る机に身を支へた。さあ、生徒は驚いたの驚かないのぢやない。いづれも顔を揚げたり、口を開いたりして、熱心な眸ひとみを注いだのである。

『皆さんも最早もう十五六——万更まんざら世情ものごころを知らないといふ年齢としでも有ません。何卒どうぞ私の言ふことを克よく記憶おぼえて置いて下さい。』
と丑松は名残なごり惜をしさうに言葉を継ついだ。

『これから将来さき、五年十年と経つて、稀たまに皆さんが小学校時代のことを考へて御覧なされる時に——あゝ、あの高等四年の教室で、

瀬川といふ教員に習つたことが有つたツけ——あの穢多の教員が
 素性を告白うちあけて、別離わかれを述べて行く時に、正月になれば自分等と
 同じやうに屠蘇とそを祝ひ、天長節が来れば同じやうに君が代を歌つ
 て、蔭ながら自分等の幸福しあはせを、出世を祈ると言つたツけ——斯
 う思出して頂きたいのです。私が今斯かういふことを告白うちあけました
 ら、定めし皆さんは穢けがらしいといふ感想かんじを起すでせう。あゝ、仮令たとひ
 私は卑賤いやしい生れでも、すくなくも皆さんが立派な思想かんがへを御持
 ちなさるやうに、毎日其を心掛けて教へて上げた積りです。せめ
 て其の骨折に免じて、今日迄こんにちまでのことは何卒許どうかして下さい。』
 斯かう言つて、生徒の机のところへ手を突いて、詫入わびいるやうに頭
 を下げた。

『皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、何卒父親さんや母親さんどうぞおとつ おつかに私のことを話して下さい——今迄隠蔽かくして居たのは全く済すまなかつた、と言つて、皆さんの前に手を突いて、斯うして告白うちあけたことを話して下さい——全く、私は穢多すです、調里てうりです、不浄な人間です。』

と斯う添加つけたして言つた。

丑松はまだ詫び足りないと思つたか、二歩ふたあし三歩みあし退あとずさり却かへりして、『許して下さい』を言ひ乍ら板敷の上へ跪ひざまづいた。何事かと、後列の方の生徒は急に立上つた。一人立ち、二人立ちして、伸のしかゝつて眺めるうちに、斯の教室に居る生徒は総立に成つて、あるものは腰掛の上に登る、あるものは席を離れる、あるものは廊下へ

出て声を揚げ乍ら飛んで歩いた。其時大鈴の音が響き渡つた。教室々々の戸が開いた。他の組の生徒も教師も一緒になつて、波濤なみのやうに是方こちらへ押おし溢あふれて来た。

*

*

*

十二月に入つてから銀之助は最早もう客分であつた。其日は午後の一時半頃から、自分の用事で学校へ出て来て居て、丁度職員室で話しこんで居る最中、不図丑松のことを耳に入れた。思はず銀之助はそこを飛出した。玄関を横過よこぎつて、長い廊下を通ると、肩掛むらさきづきんに紫頭巾、帰り仕度の女生徒、あそこにも、こゝにも、丑松の噂を始めて、家路に向ふことを忘れたかのやう。体操場には男はせちの生徒が集つて、話は矢張丑松の噂で持切つて居た。左右に馳

違ふ少年の群を分けて、高等四年の教室へ近いで見ると、廊下
 のところに校長、教師五六人、中に文平も、其他高等科の生徒が
 丑松をとりま圍繞いて、參觀に來た師範校の生徒まであき呆れ顔がほに眺め佇立
 んで居たのである。見れば丑松はすこし逆上とりのぼせた人のやうに、
 同僚の前にひざまづ跪いて、恥の額を板敷の塵埃の中に埋めて居た。深い
 哀憐あはれみの心は、斯この可傷いたましい光景ありさまを見ると同時に、銀之助の胸
 を衝ついて湧上わきあがつた。歩み寄つて、助け起し乍ら、着物の塵埃ほこりを
 払つて遣ると、丑松は最早半分夢中で、『土屋君、許して呉れ給
 へ』をかへすがへす言ふ。告白の涙はどんな奈何に丑松の頬を伝つて流
 れたらう。

『解つた、解つた、君の心地こころもちは好く解つた。』と銀之助は言つた。

『むむ——進退何も用意して来たね。兎に角、後の事は僕に任せるとして、君は直に是から帰り給へ——ね、君は左様し給へ。』

(七)

高等四年の生徒は教室に居残つて、日頃慕つて居る教師の為に相談の会を開いた。未だ初心で、複雑つた社会のことは一向解らないものばかりの集合ではあるが、流石正直な少年の心、鋭い神経に丑松の心情を汲取つて、何とかして引止める工夫をしたいと考へたのである。黙つて視て居る時では無い、一同揃つて校長のところへ歎願に行かう、と斯う十六ばかりの級長が言

出した。賛成の声が起る。

『さあ、行かざあ。』

と農夫の子らしい生徒が叫んだ。

相談は一決した。例の掃除をする為に、当番のものだけを残して置いて、少年の群は一緒に教室を出た。其中には省吾も交つて居た。丁度校長は校長室の椅子いすに倚より凭かつて、文平を相手に話して居るところで、そこへ高等四年の生徒が揃あつて顕あられた時は、直に一同の言はうとすることを看て取つたのである。

『諸君は何か用が有るんですか。』

と、しかし、校長は何気ない様子を装つくろひ乍ながら尋ねた。

級長は卓テーブル子の前に進んだ。校長も、文平も、凝きつと鋭い眸をこ

の生徒の顔面おもてに注いだ。省吾なぞから見ると、ずっと夙慧ませた少年で、言ふことは了然はつきり好く解る。

『実は、御願ひがあつて上りました。』と前置をして、級長は一同の心こゝろもち情いひあらはを表白した。何卒どうかして彼の教員を引留めて呉れるやうに。仮令たとへ穢多であらうと、其様そんなことは厭いとはん。現に生徒として新平民の子も居る。教師としての新平民に何の不都合があらう。是はもう生徒一同の心からの願ひである。頼む。斯う述べて、級長は頭を下げた。

『校長先生、御願ひでゴはす。』

と一同声を揃へて、各自てんでに頭を下げるのであつた。

其時校長は椅子を離れた。立つて一同の顔を見渡し乍ら、『む

、諸君の言ふことは好く解りました。其程熱心に諸君が引留めたいといふ考へなら、そりやあもう我輩だつて出来るだけのことは尽します。しかし物には順序がある。頼みに来るなら、頼みに来るで、相当の手續を踏んで——総代を立てるとか、願書を差出すとかして、規則正しくやつて来るのが礼です。左様どうも諸君のやうに、大勢一緒に押掛けて来て、さあ引留めて呉れなんて——何といふ無作法な行^{やりかた}動^かでせう。』と言はれて、級長は何か弁^{ひわけ}解^しを為^しようとしたが、臆^{やが}て涙ぐんで黙つて了つた。

『まあ、御聞きなさい。』と校長は卓^{テーブル}子の上にある書^{かきつけ}面^{ひろ}を拈^{ひろ}げて見せ乍ら、『是通り瀬川先生からは進退伺が出て居ます。是^{これ}は一応郡視学の方へ廻さなければなりませんし、町の学務委員に

も見せなければなりません。仮令たとひ我輩が瀬川先生を救ひたいと思つて、単独ひとりで焦心あせつて見たところで、町の方で聞いて呉れなければ仕方が無いぢや有ませんか。』と言つて、すこし声を和けて、『然し、我輩一人の力で、奈何どうこれ是を処置するといふ訳にもいかんのですから、そこを諸君も好く考へて下さい。彼様あゝいふ良い教師を失ふといふことは、諸君ばかりぢやない、我輩も残念に思ふ。諸君の言ふことは好く解りました。兎に角、今日は是で歸つて、学課を怠らないやうにして下さい。諸君が斯ういふことに喙くちばしを容れないでも、無論学校の方で悪いやうには取計ひません——諸君は勉強が第一です。』

文平は腕組をして聞いて居た。手持無沙汰に歸つて行く生徒の

後姿を見送つて、冷かに笑つて、廳で校長は戸を閉めて了つた。

第貳拾貳章

(一)

『一寸伺ひますが、瀬川君は是方こちらへ参りませんでしたらうか。』
斯う声を掛けて、敬之進の住居すまひを訪れたのは銀之助である。友
達思ひの銀之助は心配し乍ら、丑松の後を追つて尋ねて来たので
あつた。

『瀬川さん?』とお志保は飛んで出て、『あれ、今御歸りに成ましたよ。』

『今?』と銀之助はお志保の顔を眺めた。なが『それから何の方へ行きましたらう、御存じは有ますまいかしら。』

『よくも伺ひませんでしたけれど、』とお志保は口籠くちごもつて、

『あの、猪子さんの奥おく様が東京から御見えに成るさうですね。

多分その方へ。ホラ市村さんの御宿の方へ尋ねていらしツたんでせうよ——何でも其そん様なやうな瀬川さんの口振でしたから。』

『市村さんの許ところへ? 先づ好かつた。』と銀之助は深い溜息を吐いた。『実は僕も非常に心配しましてね、蓮華寺へ行つて聞いて見ました。御寺で言ふには、未だ瀬川君は学校から歸らんといふ。

それから市村さんの宿へ行つて見ると、彼^{あすこ}処にも居ません。ひよつとすると、こりや貴方^{あなた}の許^{ところ}かも知れない、斯う思つてやつて来たんです。』と言つて、考へて、『むゝ、左様^{さう}ですか、貴方の許へ参りましたか——』

『丁度、行違ひに御成^{おなん}なすつたんでせう。』とお志保は少許^{すこし}顔を紅^{あか}くして、『まあ御上りなすつて下さいませんか、此様^{こん}な見苦し^{ごせ}い処^いで御座^{ござ}いますけれど。』

と言はれて、お志保に導かれて、銀之助は炉辺^{ろべた}へ上つた。

紅^{なきは}く泣腫^なれたお志保の頬には涙^あの痕^{あと}が未だ乾かずにあつた。奈^ど何^ういふことを言つて丑松が別れて行つたか、それはもうお志保の顔付を眺めたばかりで、大凡^{おおよそ}の想像が銀之助の胸に浮ぶ。あの小

学校の廊下のところで、人々の前にひざまづ跪いて、有の儘まに素性を自白するといふやりかた行為から推おして考へても——確かに友達是非常な決心を起したのであらう。其心根は。思へばびんぜん惘然なものだ。斯う銀之助は考へて、何卒どうかして友達を助けたい、と其をお志保にも話さうと思ふのであつた。銀之助は先づお志保の身の上から聞き初めた。

貧し苦しい境遇に居るお志保は、直に、銀之助のたのも頼母しい氣象を看て取つたのである。のみならず、丑松と斯人とは無二の朋友であるといふことも好く承知して居る。ほんたう眞実に自分のこゝろもち心地も解つて、身を入れて話を聞いて呉れるのは斯人だ、と斯うなつか可懐しく思ふにつけても、さて、奈何して父親の許ところへ歸つて居るか、其を

尋ねられた時はもう／＼胸一ぱいに成つて了つた。蓮華寺を脱け
 て出ようと決心する迄のいちぶしじゆう一伍一什——思へば涙の種——まあ、
 何から話して可いものやら、お志保には解らない位であつた。流
すが石娘心の感じ易さ、暗く煤けた土壁の内部のなか光景をも物羞しく
 思ふといふ風で、『ぼや』を折焚べておりく炉の火を盛んにしたり、着
 物の前を搔合せたりして語り聞かせる。お志保に言はせると、い
 よく彼の寺を出ようと思立つたのは、泣いて、泣いて、泣尽し
 た揚句のこと。『仮令たとひ先方が親らしい行おこなひ為をしない迄も、是これま迄
で迄育て、貰つた恩義も有る。一旦蓮華寺の娘となつた以上は、
 奈何な辛いことがあらうと決して家へ帰るな。』——とは堅い父
 の言葉でもあつた。宵闇の空に紛まぎれて迷ひ出たお志保は、だから、

何処へ帰るといふ目的めあても無かつたのである。悲しい夢のやうに歩いて来る途中、不図、雪の上に倒れて居る人に出逢であつた。見ればそのさげよひ其醉漢は父であつた。其時お志保は左様思さうつた。父はもう凍え死んだのかと思つた。丁度通りかかる音作を呼留めて、一緒に助け起して、漸やつとのことで家まで連帰つて見ると、今すこし遅からうものなら既に生命を奪とられるところ。それぎり敬之進は床の上に横に成つた。医者の話によると、身体おとろへの衰弱は一通りで無い。所詮しよせん助かる見込は有るまいとのことである。

そればかりでは無い。不ふしあはせ幸は斯の屋根の下にもお志保を待受けて居た。来て見ると、もう継母も、異はらちがひ母の弟きやうだい妹も居なかつた。尤ももつと、其前の晩、烈しい夫婦喧嘩があつて、継母はお

志保のことや父の酒のことを言つて、奈何して是から将来生計が立つと泣叫んだといふ。いづれ下高井にある生家を指して、三人だけ子供を連れて、父の留守に家出をしたものらしい。それは継母が自分で産んだ子供のうち、三番目のお末を残して、進にお作に、それから留吉と、斯う引連れて行つた。割合に温順しいお末を置いて、あの厄介者のお作を腰に付けたは、流石に後のことをも考へて行つたものと見える。継母が末の児を背負ひ、お作の手を引き、進は見慣れない男に連れられて、後を見かへりく行つたといふことは、近所のかみさんが来ての話で解つた。

斯ういふ中にも、ひとり力に成るのは音作で、毎日夫婦して来て、物を呉れるやら、旧の主人をいたはるやら、お末をば世話す

ると言つて、自分の家の方へ引取つて居るとのこと。貧苦の為に離散した敬之進の家族の光景ありさま——まあ、お志保が銀之助に話して聞かせたことは、ざつと斯うであつた。

『して見ると——今御家にいらつしやるのは、父親おとつさんに、貴方に、それから省吾さんと、斯う三人なんですか。』銀之助は気の毒さうに尋ねたのである。

『はあ。』とお志保は涙ぐんで、垂下る鬢びんの毛を搔上げた。

(二)

丑松のことは聴やがて二人の談話はなしに上つた。友に篤い銀之助の有様

を眺めると、お志保はもう何もかも打明けて話さずには居られなかつたのである。其時、丑松の逢ひに來た様子を話した。顔は蒼あをざめ、眼は悲愁かなしみの色を湛たへ、思ふことはあつても十分に其を言ひ得ないといふ風で——まあ、情が迫つて、別離わかれの言葉もとぎれ／＼であつたことを話した。忘れずに居る程のなさけがあらば、せめて社会よのなかの罪人つみびとと思へ、斯かう言つて、お志保の前に手を突いて、男らしく素性を告白うちあけて行つたことを話した。

『眞実ほんたうに御氣の毒な様子でしたよ。』とお志保は添加つけたした。

『いろ／＼伺つて見たいと思つて居りますうちに、瀬川さんはもう帽子を冠つて、さつさと出て行つてお了ひなさる——後で私はさん／＼泣きました。』

『左様さうですかあ。』と銀之助も嘆息して、『あゝ、僕の想像した通りだつた。定めし貴方あなたも驚いたでせう、瀬川君の素性を始めて御聞きになつた時は。』

『いゝえ。』お志保は力を入れて言ふのであつた。

『ホウ。』と銀之助は目を円まるくする。

『だつて今日始めてでも御座ごいざませんもの——勝野さんが何処どこかで聞いていらしつて、いつぞや其を私に話しましたんですもの。』

この『始めてでも御座ません』が銀之助を驚した。しかし文平が何の為に其様なことをお志保の耳へ入れたのであらう、と聞きかて、

『彼あのをとこ男も饒舌おしやべり家で、真個ほんたうに仕方が無い奴だ。』と独語ひとりごと

のやうに言つた。やがて、銀之助は何か思ひついたやうに、『何ですか、勝野君は其そんな様に御寺へ出掛けたんですか。』

『えゝ——蓮華寺の母が彼あ様いふ話好きな人で、男の方は淡泊さつぱりして居て可いなんて申しますもんですから、克よく勝野さんも遊びにいらつしやいました。』

『何だつてまた彼男は其そんなことを貴方に話したんでせう。』斯かう銀之助は聞いて見るのであつた。

『まあ、妙なことを仰おつしやるんですよ。』とお志保は其を言ひかねて居る。

『妙なとは？』

『親類はこれくだの、今に自分は出世して見せるのツて——』

『今に出世して見せる？』と銀之助は其処あざけに居ない人を嘲つたやうに笑つて、『へえ——其様なことを。』

『それから、あの、』とお志保は考深い眼付をし乍ら、『瀬川さんのことなど、それは酷ひどい悪口を仰いましたよ。其時私は始めて知りました。』

『あゝ、左様さうですか、それで彼あのはなし話を御聞きに成つたんですか。』と言つて銀之助は熱心にお志保の顔を眺ながめた。急に氣を変へて、『ちよツ、彼男も余計なことを喋舌つて歩いたものだ。』

『私もまあ彼様な方だとは思ひませんでした。だつて、あんまり酷いことを仰るんですもの。その悪口が普通たゞの悪口では無いんですもの——私はもう口惜くやしくて、口惜しくて。』

『して見ると、貴方も瀬川君を気の毒だと思つて下さるんですかなあ。』

『でも、左様ぢや御座ませんか——新平民だつて何だつて毅然しつかりした方の方が、彼様あんな口先ばかりの方よりは余程よっぽど好いちや御座ませんか。』

何の気なしに斯ういふことを言出したが、臆やがてお志保は伏目勝に成つて、血肥りのした娘らしい手を眺めたのである。

『あゝ。』と銀之助は嘆息して、『奈何どうして世の中は斯かう思ふやうに成らないものなんでせう。僕は瀬川君のことを考へると、實際な哭なきたいやうな気が起ります。まあ、考へて見て下さい。唯あの男は素性が違ふといふだけでせう。それで職業も捨てなければ

ならん、名誉も捨てなければならん——是程これほど残酷な話が有ませ

うか。』

『しかし、』とお志保は清すゞしい眸ひとみを輝した。『父親おとつさんや母親おつかさんの血統ちすぢが奈何どんなで御座ませうと、それは瀬川さんの知つたことぢや御座ますまい。』

『左様です——確かに左様です——彼男の知つたことでは無いんです。左様貴方が言つて下されば、奈何どんなに僕も心強いかわれません。実は僕は斯う思ひました——彼男の素性を御聞に成つたら、定めし貴方も今迄の瀬川君とは考へて下さるまいかと。』

『何故なぜでせう?』

『だつて、それが普通ですもの。』

『あれ、他は左様かも知れませんが、私は左様は思ひませんわ。』

『真実に？ 真実に貴方は左様考へて下さるんですか——』

『まあ、奈何したら好う御座んせう。私は是でも真面目に御話して居る積りで御座ますのに。』

『ですから、僕が其を伺ひたいと言ふんです。』

『其と仰るのは？』

とお志保は問ひ反して、対手の心を推量し乍ら眺めた。若々しい血潮は思はずお志保の頬に上るのであつた。

力の無い警せきの聲が奥の方で聞えた。急にお志保は耳を澄して心配さうに聞いて居たが、聽やがて一寸会あしやく釈して奥の方へ行つた。銀之助は独り炉ろばた辺に残つて燃え上る『ぼや』の火炎ほのほを眺ながめ乍ら、斯かういふ切ない境遇のなかにも屈せず倒れずに行やる氣で居るお志保の心の若々しきを感じた。烈しい氣候を相手に克よく働く信州北部の女は、いづれも剛健な、快活な氣象に富むのである。苦痛に堪へ得ることは天性に近いと言つてもよい。まあ、お志保も矢張やはり其血を享うけたのだ。優婉やさしいうちにも、どことなく毅然しやんとしたところが有る。斯う銀之助は考へて、奈何どう友達のことを切出したものか、と思ひつゞけて居た。間も無くお志保は奥の方から出て来た。

『奈何ですか、父上さんの御様子は。』と銀之助は同情深く尋ねて見る。

『別に変りましたことも御座ませんけれど、』とお志保は萎れて、
 『今日は何も頂きたくないと言つて、お粥を少許食べましたばかり——まあ、朝から眠りつゞけなんで御座ますよ。彼様に眠るのが奈何でせうかしら。』

『何しろ其は御心配ですなあ。』

『どうせ長保ちは有ますまいでせうよ。』とお志保は溜息を吐いた。『瀬川さんにも種々御世話様には成ましたが、医者ですら見込が無いと言ふ位ですから——』

斯う言つて、癖のやうに鬢の毛を搔上げた。

『実に、人の一生はさま／＼ですなあ。』と銀之助はお志保の境涯きやうがいを思ひやつて、可傷いたましいやうな氣に成つた。『温い家庭の内に育つて、それほど生活の方の苦痛くるしみも知らずに済すむ人もあれば、又、貴方のやうに、若い時から艱難かんなんして、其風波なみかぜに搓もまれて居るなかで、自然と性質を鍛きたへる人もある。まあ、貴方なぞは、苦んで、鬪つて、それで女になるやうに生れて来たんですなあ。左様さういふ人は左様いふ人で、他の知ひとらない悲しい日も有るかはりに、また他の知らない楽しい日も有るだらうと思ふんです。』

『楽しい日?』とお志保は寂しさに微笑ほゝゑみ乍ら、『私そなぞに其様な日が御座ませうかしら。』

『有ますとも。』と銀之助は力を入れて言つた。

『ほゝゝゝゝ——是^{これまで}迄のことを考へて見ましても、其様な日な

ぞは参りさうも御座ません。まあ、私が貰はれて行きさへしませんければ、蓮華寺の母だつても彼^{あん}様な思はずに濟みましたのでせう。彼母を置いて出ます前には、奈何^{どんな}に私も——』

『左様でせうとも。其は御察し申します。』

『いえ——私はもう死^{しま}んで了ひましたも同じことなんで御座ます

——唯^{たゞ}、人様の情を思ひますものですから、其を力に……斯^かうして生きて……』

『あゝ、瀬川君のも苦しい境遇だが、貴方のも苦しい境遇だ。畢^つまり竟貴方が其程苦しい目に御逢^{おあ}ひなすつたから、それで瀬川君の為

にも哭ないて下さるといふものでせう。実は——僕は、あの友達を助けて頂きたいと思つて、斯うして貴方に御話して居るやうな訳ですが——』

『助けると仰ると?』お志保の眸ひとみは急に燃え輝いたのである。

『私の力に出来ますことなら、奈何どんなことでも致しますけれど。』

『無論出来ることなんです。』

『私に?』

暫しばらく時二人は無言であつた。

『いつそ有の儘を御話しませう。』と銀之助は熱心に言出した。

『丁度学校で宿直の晩のことでした。僕が瀬川君の意中を叩いて見たのです。其時僕の言ふには、「君のやうに左様さう独りで苦んで

居ないで、少許^{すこし}打明けて話したら奈何^{どう}だ。あるひは僕見たやうな殺風景なものに話したつて解らない、と君は思ふかも知れない。しかし、僕だつて、其様^{そんな}な冷^{つめた}い人間ぢや無いよ。まあ、僕に言はせると、あまり君は物を煩^{むづか}しく考へ過ぎて居るやうに思はれる。友達といふものも有つて見れば、及ばず乍ら力に成るといふことも有らうぢやないか。「斯^かう言ひました。すると、瀬川君は始めて貴方のことを言出して——「むゝ、君の察して呉れるやうなことがあつた。確かに有つた。しかし其人は最早^{もう}死んで了つたものと思つて呉れたまへ。」斯う言ふぢや有ませんか。噫——瀬川君は自分の素性を考へて、到底及ばない希望^{のぞみ}と絶念^{あきら}めて了^{しま}つたのでせう。今はもう人を可懐^{なつか}しいとも思はん——是程悲しい情愛^{しんあい}が有

ませうか。それで瀬川君は貴方のところへ来て、今迄蔵んで居た素性を自白したのです。そこです——もし貴方に彼の男の真情が解りましたら、一つ助けてやらうといふ思想を持つて下さることは出来すまいか。』

『まあ、何と申上げて可か解りませんが——』とお志保は耳の根元までも紅くなつて、『私はもう其積りで居りますんですよ。』

『一生?』と銀之助はお志保の顔を熟視り乍ら尋ねた。

『はあ。』

このお志保の答は銀之助の心を驚したのである。愛も、涙も、決心も、すべて斯の一息のうちに含まれて居た。

(四)

兎も角も是事を話して友達の心を救はう。市村弁護士の宿へ行つて見た様子で、復た後の使にやつて来よう。斯う約束して、
臆て銀之助は炉辺を離れようとした。

『あの、御願ひで御座ますが——』とお志保は呼留めて、『もし「懺悔録」といふ御本が御座ましたら、貸して頂く訳にはまゐり
ますまいか。まあ、私なぞが拝見したつて、どうせ解りはします
まいけれど。』

『「懺悔録」？』

『ホラ、猪子さんの御書きなすつたとかいふ——』

『むゝ、あれですか。よく貴方は彼様な本を御存じですね。』

『でも、瀬川さんが平素読んでいらつしやいましたもの。』

『承知しました。多分瀬川君の許に有ませうから、行つて話して

見ませう——もし無ければ、何処か捜して見て、是非一冊贈らせ

ることにませう。』

斯う言つて、銀之助は弁護士の宿を指して急いだ。

丁度扇屋では人々が蓮太郎の遺骸の周囲に集つたところ。親

切な亭主の計ひで、焼場の方へ送る前に一応亡くなつた人の霊

魂を弔ひたいといふ。読経は法福寺の老僧が来て勤めた。其

日の午後東京から着いたといふ蓮太郎の妻君——今は未亡人——

を始め、弁護士、丑松もかしまつて居た。旅で死んだといふことを殊ことにあはれに思ふかして、扇屋の家の人もかはる／＼、弔ひに来る。縁もゆかりも無い泊客ですら、其と聞伝へたかぎりは廊下に集つて、寂しい木魚の音に耳を澄すのであつた。

焼香も済み、読経も一きりに成つた頃、銀之助は丑松のひきあは紹

介せで、始めて未亡人に言葉を交した。長野新聞の通信記者なぞ

も混雑とりこみの中へ尋ねて来て、聞き取つたことを手帳に書留める。

『貴方が奥様おくさんでいらつしやいますか。』と記者は職掌柄らしい調子で言つた。

『はい。』と未亡人の返事。

『奥様、誠に御気の毒なことで御座ます。猪子先生の御名前は予かね

て承知いたして居りまして、
 蔭乍ら御慕ひ申して居たのですが

——』

『はい。』

斯ういふ挨拶はすべて追憶おもひでの種であつた。人々の談話はなしは蓮太郎のことで持切つた。聽やがて未亡人は夫と一緒に信州へ来た当時のことを言出して、別れる前の晩に不思議な夢を見たこと、妙に夫の身の上が気に懸つたこと、其を言つて酷ひどく叱なぐられたことなどを話した。彼是を思合せると、彼時あのときにもう夫は覚期かくごして居ることが有つたらしい——信州の小春は好いの、今度の旅行は面白からうの、土産みやげはしつかり持つて帰るから家へ行つて待つて居れの、まあ彼あれが長の別離わかれの言葉に成つて了しまつた。斯う言つて、思ひがけ

ない出来事の為に飛んだ迷惑を人々に懸けた、とかへす／＼
の毒がる。流石さすがに堪へがたい女の情もあらはれて、淡泊さつぱりした未
亡人の言葉は反つて深い同情を引いたのである。

弁護士は銀之助を部屋の片隅へ招いた。相談といふは丑松の身
に關したことであつた。弁護士の言ふには、丑松も今となつては
斯の飯山に居にくい事情も有らうし、未亡人はまた未亡人で是か
ら歸るには男の手を借りたくも有らうし、するからして、あの蓮
太郎の遺骨を護つて、一緒に東京へ行つて貰ひたいが奈何だらう
——選挙を眼めのまへ前にひかへさへしなれば、無論自身で随いて行
くべきでは有るが、それは未亡人が強ひて辞退する。せめて斯の
際選挙の方に尽力して夫の靈たましひ魂を慰めて呉れといふ。聞いて見

れば未亡人の志も、尤^{もつとも}。いつそ是^{これ}は丑松を煩したい——一切の費用は自分の方で持つ——是非。とのことであつた。

『といふ訳で、瀬川さんにも御話したのですが、』と弁護士は銀之助の顔を眺め乍ら言つた。『学校の方の都合は、君、奈何^{どん}なものでせう。』

『学校の方ですか。』と銀之助は受けて、『実は——瀬川君を休職にすると言つて、その下相談が有つたといふ位ですから、無論差支は有ますまいよ。校長の話では、郡視学も其積りで居るさうです。まあ、学校の方のことは僕が引受けて、奈何^{どんな}にでも都合の好いやうに致しませう。一日も早く飯山を発ちました方が瀬川君の為には得策だらうと思ふんです。』

斯かういふ相談をして居るところへ、棺ひつぎが持運ばれた。復また読経の声が始つた。人々は最後の別離わかれを告げる為に其棺の周圍まはりへ集つた。馳かて焼場の方へ送られることに成つた頃は、もう四そこいら辺も薄暗かかつたのである。いよく昇かがれて、『いたや』（北国にある木の名）造りの櫓へ載せられる光景ありさまを見た時は、未亡人はもう其処へ倒れるばかりに泣いた。

(五)

火を入れるところまで見届けて、焼場から歸つた後、丑松は弁護士や銀之助と火鉢を取とり囲まいて、扇屋の奥座敷で話した。無情つれない

運命も、今は丑松の方へ向いて、微し笑つて見せるやうに成つた。あの飯山病院から追はれ、鷹匠町の宿からも追はれた大日向が——実は、放逐の恥辱が非常な奮発心を起させた動機と成つて——亜米利加の『テキサス』で農業に従事しようといふ新しい計画は、意外にも市村弁護士の口を通して、丑松の耳に希望を囁いた。教育のある、確実な青年を一人世話して呉れ、とは予て弁護士が大日向から依頼されて居たことで、丁度丑松とは素性も同じ、定めし是話をしたら先方も悦ばう。望みとあらば周旋してやるが奈何か。『テキサス』あたりへ出掛ける気は無いか。心懸け次第で随分勉強することも出来よう。是話には銀之助も熱心に賛成した。『見給へ——捨てる神あれば、助ける神ありさ。』と

銀之助は其を言ふのであつた。

『明後日の朝、大日向が我輩の宿へ来る約束に成つて居る。むゝ、丁度好い。兎とに角逢かくあつて見ることにしたまへ。』

斯ういふ弁護士の言葉は、枯れ萎れた丑松の心を励はげまして、様子によつては頼んで見よう、働いて見ようといふ氣を起させたのである。

そればかりでは無い。銀之助から聞いたお志保の物語——まあ、あの可憐な決心と涙とは奈何どんなに深い震動を丑松の胸に伝へたらう。敬之進の病氣、継母の家出、そんなこんなが一緒に成つて、ひとし一層ほお志保の心情を可傷いたはしく思はせる。あゝ、絶望し、断念し、素性まで告白して別れた丑松の為に、ひそかに熱い涙をそゝぐ人

が有らうとは。可羞はづかしい、とはいへ心の底から絞しほりだ出した真実まことの懺悔を聞いて、一生を卑賤いやしい穢多の子に寄せる人が有らうとは。『どうして、君、彼の女あはなかくしつかりものだけ。』

と銀之助は添加つけたして言つた。

其翌日、銀之助は友達の為に、学校へも行き、蓮華寺へも行き、お志保の許ところへも行つた。蓮華寺にある丑松の荷物を取纏めて、直に要いるものは要るもの、寺へ預けるものは預けるもので見別みわけをつけたのも、すべて銀之助の骨折であつた。銀之助はまた、お志保のことを未亡人にも話し、弁護士にも話した。女は女に同おもひやり情の深いもの。殊にお志保の不幸な境遇は未亡人の心を動したのであつた。行く／＼は東京へ引取つて一緒に暮したい。丑松の身が

極きまつた暁には自分の妹にして結婚めあはせるやうにしたい。斯かう言出し
た。兎とに角かく、後の事は弁護士も力を添へる、とある。といふ訳で、
万事は弁護士と銀之助とに頼んで置いて、丑松は惶あわ急たゞしく飯山
を発たつことに決めた。

第貳拾參章

(一)

いよく出発の日が来た。弘よあけ暁頃から霰みぞれが降出して、扇屋に集

る人々の胸には寂しい旅の思を添へるのであつた。

一台の櫓そりは朝早く扇屋の前で停つた。下りた客は厚羅紗あつらしやの外套で深く身を包んだ紳士風の人、櫓そり曳ひきに案内させて、弁護士に面会を求める。『おゝ、大日向が来た。』と弁護士は出て迎へた。大日向は約束を違たがへずやつて来たので、薄暗いうちに下高井を発つたといふ。上れと言はれても上りもせず、たゞ上りあが框がまちのところへ腰掛けた儘まゝで、弁護士から法律上の智慧ちゑを借りた。用談を済し、蓮太郎への弔意くやみを述べ、廳やがてそこそこにして行かうとする。其時、弁護士は丑松のことを語り聞きせて、

『まあ、上るさ——猪子君の細君も居るし、それに今話した瀬川君も一緒だから、是非逢つてやつて呉れたまへ。其様そんなところに

腰掛けて居たんぢや、緩々ゆつくり談話も出来ないぢや無いか。』

と強しひるやうに言つた。然し大日向は苦にが笑がわらひするばかり。奈ど何んなに薦すすめられても、決して上らうとはしない。いづれ近い内に東京へ出向くから、猪子の家を尋ねよう。其折丑松にも逢はう。左さ様ういふ氣心の知れた人なら双方の好都合。委敷くはしいことは出京の上で。と飽あく迄までも言ひ張る。

『其そんな様に今日は御急ぎかね。』

『いえ、ナニ、急ぎといふ訳でも有ませんが——』

斯かういふ談話はなしの様子で、弁護士は大日向の顔に表れる片意地な苦痛を看て取つた。

『では、斯うして呉れ給へ。』と弁護士は考へた。上の渡しを渡

ると休茶屋が有る。彼処で一同待合せて、今朝発つ人を送る約束。多分丑松の親友も行つて居る筈。はず一歩先へ出掛けて待つて居て呉れないか。兎に角丑松を紹介したいから。と呉々も言ふ。『むゝ、そんなら御待ち申ませう。』斯う約束して、とうく大日向は上らずに行つて了つた。

『大日向も思出したと見えるなあ。』

と弁護士は独ひとりごと語のやうに言つて、旅の仕度に多忙いそがしい未亡人や丑松に話して笑つた。

蓮華寺の庄馬鹿もやつて来た。奥様からの使と言つて、餞別せんべつのしるしに物なぞを呉れた。別に草鞋わらぢ一足、雪の爪掛一つ、其は庄馬鹿が手製りにしたもので、ほんの志ばかりに納めて呉れとい

ふ。其時丑松は彼の寺住を思出して、何となく斯人このひとにも名残なごりが惜まれたのである。過去すぎきつたことを考へると、一緒に蔵裏の内に居た人の生しやうがい涯がいは皆な變つた。住職も變つた。奥様も變つた。お志保も變つた。自分も亦た變つた。独り變らないのは、馬鹿々々と呼ばれる斯人ばかり。斯う丑松は考へ乍ら、斯の何時迄いつまでも兒童どものやうな、親戚も無ければ妻子も無いといふ鐘樓の番人に長わか離かれを告げた。

省吾も来た。手荷物があれば持たして呉れと言ひ入れる。間も無く一台の櫛の用意も出来た。遺骨を納めた白木造りの箱は、白い布で巻いた上をまた黒で包んで、成るべく人目に着かないやうにした。櫛の上には、斯この遺骨の外に、蓮太郎が形見のかずく、

其他丑松の手荷物などを載せた。世間への遠慮から、未亡人と丑松とは上の渡し迄歩いて、対岸の休茶屋で別に二台の櫓を備ふことにして、臆て一同『御機嫌克う』の声に送られ乍ら扇屋を出た。

霧は蕭々降りそゝいで居た。櫓曳は饅頭笠を冠り、刺子の手袋、盲目縞の股引といふ風俗で、一人は梶棒、一人は後押に成つて、互に呼吸を合せ乍ら曳いた。『ホウ、ヨウ』の掛声も起る。丑松は人々と一緒に、先輩の遺骨の後に随いて、雪の上を滑る櫓の響を聞き乍ら、静かに自分の一生を考へく歩いた。猜疑、恐怖——あゝ、あゝ、二六時中忘れることの出来なかつた。

苦痛は僅かに胸を離れたのである。今は鳥のやうに自由だ。どんなに丑松は冷い十二月の朝の空気を呼吸して、漸く重荷を下し

たやうな其蘇生の思に歸つたであらう。譬^{たと}へば、海上の長旅を終つて、陸^{をか}に上つた時の水夫の心地は、土に接吻^{くちづけ}する程の可懐^{なつか}しさを感じるとやら。丑松の情は丁度其だ。いや、其よりも一層^{もつと}歎^{うれ}しかつた、一層哀しかつた。踏む度にさくくと音のする雪の上は、確^{たしか}実に自分の世界のやうに思はれて来た。

(二)

上の渡しの方へ曲らうとする町の角で、一同はお志保に出逢^{であ}つた。

丁度お志保は音作を連れて、留守は音作の女房に頼んで置いて、

見送りの為に其処に待合せて居たところ。丑松とお志保——実にこの二人の歡会は傍はたで觀る人の心にすら深い／＼感動を与へたのであつた。冠つて居る帽子を無造作に脱いで、お志保の前に黙礼したは、丑松。清すしい、とはいへ涙に霑ぬれた眸ひとみをあげて、丑松の顔を熟視まつたは、お志保。仮令たとひ口唇くちびるにいかなる言葉があつても、其時の互こゝろもちの情緒こゝろもちを表すことは出来なかつたであらう。斯かうして現世このよに生きながらへるといふことすら、既にもう不思議な運命の力としか思はれなかつた。まして、さま／＼な境涯とほりこを通過とほりこして、復また逢ふ迄の長い別離わかれを告げる為に、互なつかに可懐なつかしい顔と顔とを合せることが出来ようとは。

丑松の紹介で、お志保は始めて未亡人と弁護士とを知つた。女

同志は直に一緒に成つて、言葉を交し乍ら歩き初めた。音作も亦また、丑松と弁護士との談話仲間はなしなかまに入つて、敬之進の容体などを語り聞せる。正直な、ぼくとつ樸訥な、農夫らしい調子で、主人思ひの音作が風間の家のことを言出した時は、弁護士も丑松も耳を傾けた。音作の言ふには、もしも病人に万一のことが有つたら一切は自分で引受けよう、そのかはりお志保と省吾の身の上を頼む——まあ、自分も子は無し、主人の許しは有るし、するからして、あのお末を貰受けて、形見と思つてやしな育ふ積りであると話した。

上の渡しの長い船橋を越えて対岸の休茶屋に着いたは間も無くであつた。そこには銀之助が早くから待受けて居た。例の下高井の大尽も出て迎へる。弁護士が丑松に紹介した斯この大日向といふ

人は、見たところ余り価値ねうちの無ささうな——丁度田舎の漢方医者とでも言つたやうな、平凡かほつきな容貌で、これが亜米利加アメリカの『テキサス』あたりへ渡つて新事業を起さうとする人物とは、いかにしても受取れなかつたのである。しかし、言葉を交して居るうちに、次第に丑松は斯このひと人の堅実たしかな、引締つた、どうやら底の知れないところもある性質かんづを感じ得くやうに成つた。大日向は『テキサス』にあるといふ日本村のことを丑松に語り聞せた。北佐久の地方から出て遠く其日本村へ渡つた人々のことを語り聞せた。一人、相應の資産ある家に生れて、東京麻布の中学を卒業した青年も、矢張其渡航者の群に交つたことなぞを語り聞せた。

『へえ、左様さうでしたか。』と大日向は鷹匠町の宿のことを言出し

て笑つた。『貴方も彼^{あすこ}処^この家^{いえ}に泊^とつておいででしたか。いや、彼^{かれ}時は酷^{ひど}い熱湯^{にえゆ}を浴^ゆせかけられましたよ。実は、私も、彼様^{かれさま}いふ目に逢^あはせられたもんですから、其^{その}が深^{もと}因^とで今^{いま}度の事^じ業^{ぎょう}を思^し立^たつたやうな訳^{わけ}なんです。今^{いま}でこそ斯^{ごと}うして笑^{わら}つて御^ご話^わするやうなものゝ、どうして彼^{かれ}時^{とき}は——全く、残^{ざん}念^{ねん}に思^{おも}ひましたからなあ。』

盛^もんな笑^{わら}声^{こゑ}は腰^{こし}掛^かけて居^ゐる人^{ひと}々^々の間^まに起^おつた。其^{その}時^{とき}、大^{おほ}日^ひ向^むは飛^とんだところで述^の懐^{わい}を始^{はじ}めたと心^{こゝろ}付^けいて、苦^く々^々しさうに笑^{わら}つて、丑^{うし}松^{まつ}と一^{いっ}緒^{しょ}にそこへ腰^{こし}掛^かけた。

『かみさん——それでは先^{さつ}刻^ぎのもの^{もの}を茲^{こゝ}へ出^でして下^{くだ}さい。』

と銀^{ぎん}之^の助^{すけ}は指^さ図^ずする。『お見^み立^た』と言^いつて、別^{わか}離^れの酒^{さけ}を斯^{ごと}の江^か畔^はの休^{やす}茶^{ちや}屋^やで酌^{しやく}交^かすのは、送^{おく}る人も、送^{おく}られる人も、共^{とも}に／

長く忘れまいと思つたことであつたらう。銀之助は其朝の亭主役、早くから来てそれ／＼の用意、万事無造作な書生流儀が反つて熱い情を忍ばせたのである。

『いろ／＼君には御世話に成つた。』と丑松は感慨に堪へないといふ調子で言つた。

『それは御互ひサ。』と銀之助は笑つて、『しかし、斯うして君を送らうとは、僕も思ひがけなかつたよ。送別会なぞをして貰つた僕の方が反つて君よりは後に成つた。はゝゝゝ——人の一生といふ奴は實際解らないものさね。』

『いづれ復た東京で逢はう。』と丑松は熱心に友達の顔を眺める。『あゝ、其内に僕も出掛ける。さあ何も無いが一盃飲んで呉れ

給へ。』と言つて、銀之助は振返つて見て、『お志保さん、濟すません、一つ御酌おしやくして下さいませんか。』

お志保は酒瓶てうしを持添へて勧めた。歡喜よろこびと哀傷かなしみとが一緒になつて小な胸の中を往来するといふことは、其白い、優しい手の慄ふるへるのを見ても知れた。

『貴方あなたも一つ御上りなすつて下さい。』と銀之助は可羞はづかしがるお志保の手から無理やりに酒瓶てうしを受取つて、かはりに盃を勧め乍ら、『さあ、僕が御酌おしやくませう。』

『いえ、私は頂けません。』とお志保は盃を押隠すやうにする。『そりや不可いけない。』と大日向は笑ひ乍ら言葉を添へた。『斯かういふ時には召上るものです。真似でもなんでも好う御座んすから、一

つ御受けなすつて下さい。』

『ほんのしるしでサ。』と弁護士も横から。

『何卒、どうぞそれでは、少許頂かせて下さい。』

と言つて、お志保は飲む真似をして、あか紅くなつた。

(三)

次第に高等四年の生徒が集つて来た。其日の出発を聞伝へて、せめて見送りしたいといふ可憐な心根から、いづれも丑松を慕つてやつて来たのである。丑松は頬の紅い少年と少年との間をあちこちと歩いて、わかれ別離の言葉を交換したり、とりかはある時は一つとところに

たちとゞま
佇立つて、是これから将来さきのことを話して聞せたり、ある時は又
たみぞれ雲の降るなかを出て、枯かれ々々岸の柳の下に立つて、船橋を
渡つて来る生徒のひとむれ一群を待ち眺めたりした。

蓮華寺で撞く鐘の音が起つた。第二の鐘はまた冬の日の寂せきぼく寞
を破つて、千曲川の水に響き渡つた。聽て其音が波うつやうに、
次第に拡つて、遠くなつて、終しまひに雲の空に消えて行く頃、更に第
三の音が震動ふるへるやうに起る——第四——第五。あゝ庄馬鹿は今
あの鐘楼に上つて撞き鳴らすのであらう。それは丑松の為に長い
別離わかれを告げるやうにも、白々と明初あけそめた一生のあけぼのを報せる
やうにも聞える。深い、森おこそか嚴な音響に胸を打たれて、思はず丑
松は首を垂れた。

第六——第七。

詞ことばの無い声は聞くものゝ胸から胸つたはへ伝つた。送る人も、送られる人も、暫時しばらく無言の思を取交したのである。

やがて櫓そりの用意も出来たといふ。丑松は根津村に居る叔父夫婦のことを銀之助に話して、嘸さぞあの二人も心配して居るであらう、もし自分の噂うはさが姫子沢へ伝つたら、其為ために叔父夫婦は奈何どんな迷惑かくむを蒙かかるかも知れない、ひよつとしたら彼あのむら村には居られなくなる——奈何どうしたものだらう。斯う言出した。『其時はまた其時さ。』

と銀之助は考へて、『万事大日向さんに頼んで見給へ。もし叔父さんが根津に居られないやうだつたら、下高井の方へでも引越して行くさ。もう斯うなつた以上は、心配したつて仕方が無い——』

なあに、君、どうか方法は着くよ。』

『では、其話をして置いて呉れ給へな。』

『宜^{よろ}しい。』

斯う引受けて貰ひ、それから例の『懺悔録』はいづれ東京へ着いた上、新本を求めて、お志保のところへ送り届けることにしよう、と約束して、廳^{やが}て丑松は未亡人と一緒に見送りの人々へ別離^{わか}を告げた。弁護士、大日向、音作、銀之助、其他生徒の群はいづれも三台の櫓^{そり}の周圍^{まはり}に集つた。お志保は蒼^{あを}ざめて、省吾の肩に取^とりすが、
縋^{すが}り乍ら見送つた。

『さあ、押せ、押せ。』と生徒の一人は手を揚げて言つた。

『先生、そこまで御供しやせう。』とまた一人の生徒は櫓の後押

棒に搦つかつた。

いざ、出掛けようとするところへ、準教員が雲の中を飛んで来て、生徒一同に用が有るといふ。何事かと、未亡人も、丑松も振り返つて見た。蓮太郎の遺骨を載せた櫓を先頭はなに、三台の櫓曳は一且入れた力を復また緩めて、手持無沙汰にそこへ佇た立ずんだのであつた。

(四)

『其それ位くらゐのことは許して呉れたつても好きさうなものぢや無いか。』と銀之助は準教員の前に立つて言つた。『だつて君、考へ

て見給へ。生徒が自分達の先生を慕つて、そこまで見送りに随ついて行かうと言ふんだらう。少年の情としては美しいところぢや無いか。寧むしろ賞めてやつて好いことだ。それを学校の方から止めるなんて——第一、君が間違つてる。其そん様な使に来るのが間違つてる。』

『左さ様君のやうに言つても困るよ。』と準教員は頭を搔き乍ら、
『何も僕が不可いけと言つた訳では有るまいし。』
『それなら何故なぜ学校で不可と言ふのかね。』と銀之助は肩を動ゆつた。

『届けもしないで、無断で休むといふ法は無い。休むなら、休むで、許可ゆるを得て、それから見送りに行け——斯う校長先生が言ふ

のさ。』

『後で届けたら好からう。』

『後で？ 後では届にならないやね。校長先生はもう非常に怒つてゐるんだ。勝野君はまた勝野君で、どうも彼あのみ組の生徒は狡猾ずるくて不可いかん、斯ういふことが度々重ると学校の威信かゝはに関する、生徒として規則を守らないやうなものは休校させろ——まあ斯う言ふのさ。』

『左様器械的に物を考へなくつても好からう。何ぞと言ふと、校長先生や勝野君は、直に規則、規則だ。半日位休ませたつて、何だ——差支は無いちやないか。一体、自分達の方から進んで生徒を許すのが至あたりまへ当だ。まあ勧めるやうにしてよこすのが至当だ。』

兎も角も一緒に仕事をした交誼が有つて見れば、自分達が生徒を連れて見送りに来なけりやならない。ところが自分達は来ない、生徒も不可、無断で見送りに行くものは罰するなんて——其様な無法なことがあるもんか。』

銀之助は事情を知らないのである。昨日校長が生徒一同を講堂に呼集めて、丑松の休職になつた理由を演説したこと、其時丑松の人物を非難したり、平素の行為に就いて烈しい攻撃を加へたりして、寧ろ今度の改革は（校長はわざ／＼改革といふ言葉を用ゐた）学校の将来に取つて非常な好都合であると言つたこと——そんなこんなは銀之助の知らない出来事であつた。あゝ、教育者は教育者を忌む。同僚としての嫉妬、人種としての輕蔑——世

を焼く^{ほのほ}火焰は出発の間際まで丑松の身に追ひ迫つて来たのである。

あまり銀之助が激するので、丑松は一旦^{そり}櫓を下りた。

『まあ、土屋君、好^{い、かげん}加減にしたら好からう。使に来たものだつて困るぢや無いか。』と丑松は宥^{なだ}めるやうに言つた。

『しかし、あんまり解らないからさ。』と銀之助は聞入れる^{けしき}気色も無かつた。『そんなら僕の時を考へて見給へ。あの時の送別会は半日以上かゝつた。僕の為に課業を休んで呉れる位なら、瀬川君の為に休むのは猶^{なほさら}更のことだ。』と言つて、生徒の方へ向いて、『行け、行け——僕が引受けた。それで悪かつたら、僕が後で談判してやる。』』

『行け、行け。』とある生徒は手を振り乍ら叫んだ。

『それでは、君、僕が困るよ。』と丑松は銀之助を押止めて、

『送つて呉れるといふ志は有難いがね、其為に生徒に迷惑を掛けるやうでは、僕だつてあまり心地こころもちが好くない。もう是処こゝで沢山たくさんだ——わざ／＼是処迄まで来て呉れたんだから、それでもう僕には沢山だ。何卒どうか、君、生徒を是処こゝで返して呉れ給へ。』

斯う言つて、名残を惜む生徒にも同じ意味の言葉を繰返して、やがて丑松は櫓に乗らうとした。

『御機嫌よう。』

それが最後にお志保を見た時の丑松の言葉であつた。

蕭条せうでうとした岸の柳の枯枝をへだ経て、飯山の町の眺望ながめは右側にひら展けて居た。対岸に並び接つゞく家々の屋根、ところ／＼に高い寺

院の建築物、今は丘陵のみ残る古城の跡、いづれも雪に包まれて
幽かすかに白く見渡される。天氣の好い日には、斯この岸からも望まれ
る小学校の白壁、蓮華寺の鐘楼、それも曇の空に形を隠した。丑
松は二度も三度も振向いて見て、ホツと深い大溜息を吐ついた時は、
思はず熱い涙が頬を伝つて流れ落ちたのである。櫛そりは雪の上を滑
り始めた。

(明治三十九年三月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系13 島崎藤村集（一）」筑摩書房

1968（昭和43）年10月5日初版第1刷発行

初出：「破戒」緑蔭叢書第壺編、島崎春樹（自費出版）

1906（明治39）年3月25日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：野口英司

校正：伊藤時也

2006年10月22日作成

2007年2月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

破戒

島崎藤村

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>